THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附録號

第廿六年　第四號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

SECTIONAL—BOOKCASE

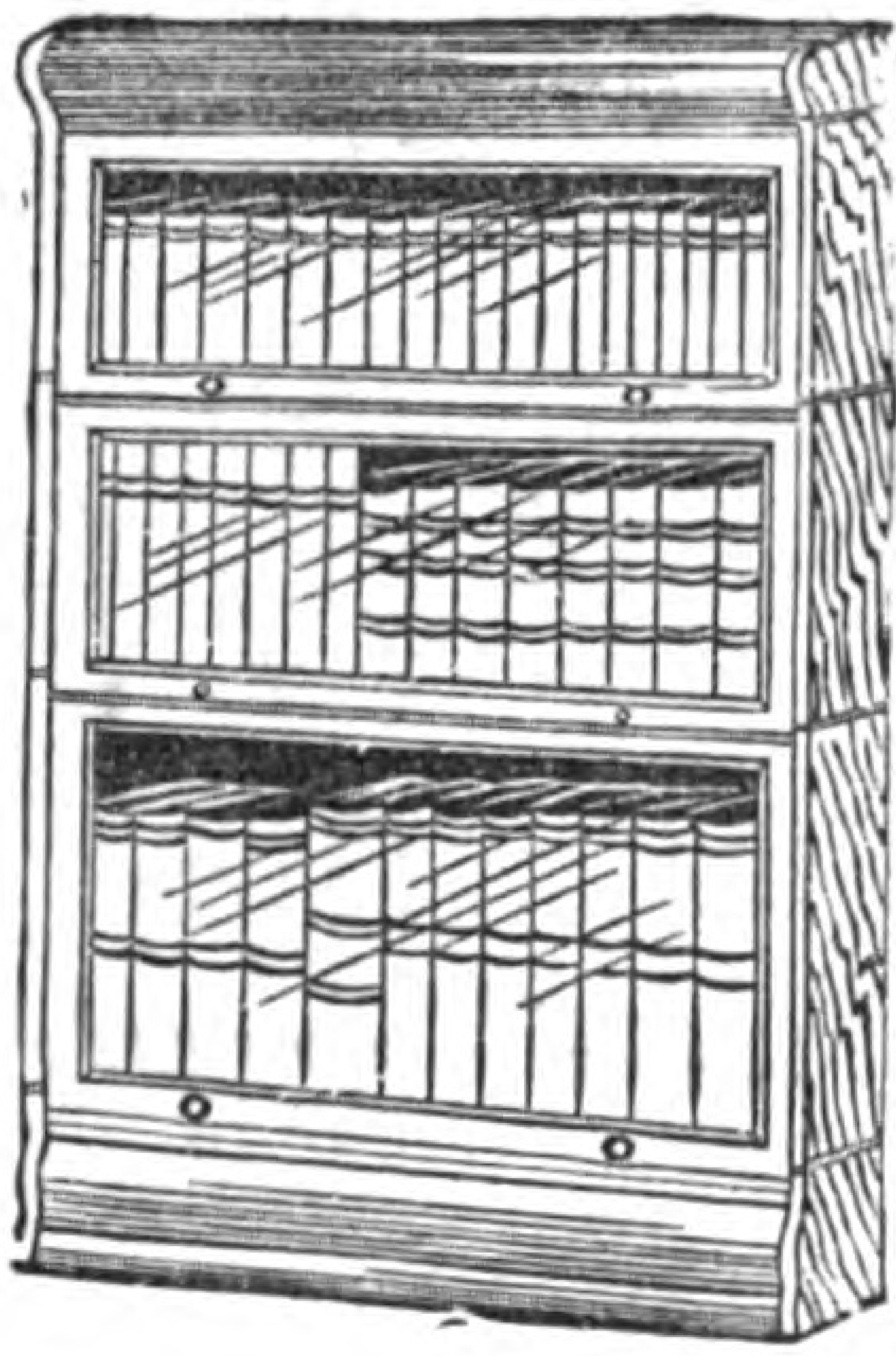
It fits any place

組合せ本箱

◎最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に流行を極め居れり

◎多數の優れたる特徴を有す、其重なるもの左の如し

▲藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし



▲室內の構造に應じて適宜に配置し得べし

▲書物を入れたるまゝ手輕に運搬し得べし

▲硝子戶の開閉に巧妙なる構造を有す

▲書物を分類するに最も

▲適當なる構造を有す

▲形狀優雅色彩美麗シカも堅牢此上なし

▼之れを要するに最善最良の本箱!!

構造を示せる目錄は往復ハガキにて御申越次第進呈

It grows with your library

定價

金二十六圓 檜製

金二十八圓 欅製

金三十圓 櫻製

運賃荷造費御自辨

東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）

新橋堂書店

▲松林伯知一世一代の講演

德川榮華物語

全十冊 各冊定價五十錢 郵稅六錢

◎六ケ年間報知新聞連載……好評嘖々

各卷重なる讀物

松の卷には 大久保彥左衞門、春日局

竹の卷には 天草一揆、由比正雪

梅の卷には 元祿時代、水戶黃門

櫻の卷には 赤穗義士、大岡越前

藤の卷には 白河樂翁、高山彥九郎

菊の卷には 中山公東下り、林子平

椿の卷には 河內山宗俊、鼠小僧

萩の卷には 大鹽平八郎、高野長英

楓の卷には 八代目團十郎、お富與三郎

桐の卷には 水戶家騷動、錢屋五兵衞

▲東京小兒科院長 醫學博士 瀨川昌耆先生著

▲やまと新聞記者 天野誠齋先生著

（五版）

增補訂正 實驗上の育兒

上卷定價六十錢郵稅八錢 下卷定價七十五錢郵稅八錢

七人の愛兒を自身御夫婦にて恙なく育て上げられた育兒實驗家の瀨川醫學博士が叮嚀親切に說明せられました育兒談は即ち此本です。吾兒の健全なる發育を望まるゝ父なり母なる人に是非共御一讀あらん事をお勧め申します。

發行所 東京市銀座大通新橋際 振替貯金東京二〇〇番 新橋堂書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

絢爛櫻花を壓す

文藝倶樂部

四月一日發行 第五號 正價廿五錢 郵税二錢五厘

■小説 備前岡山……江見水蔭

◎帶地と帶留(新流行)……近藤蕉雨

■小説 死後……田村松魚

◎債券賣買の裏面……迎月子

◎三百年來の釜屋……佛魔生

◎淺草公園の寫眞師……清秋庵

◎演藝當座帳……鬼太郎

◎西京の花……花外

◎劇界太平記……孔雀船

■喜劇 嘘……中内蝶二

◎名づけ親(落語)……三遊亭金馬

■北海奇聞 娘清玄(講談)……猫遊軒伯知

東京本町 博文館

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

豫約募集

通俗二十一史

申込 四月廿日限 【見本】申込次第送呈す

體裁 菊版總布製美本・全十二冊總紙數七千頁 五號新活字二段組總假名附◉沿革地圖廿葉入

十二朝軍談
武王軍談（西周軍談）
呉越軍談（春秋列國軍談）
漢楚軍談
西漢紀事
東漢紀事
三國志
續三國志
續後三國志後編
南北朝軍談前編
南北朝軍談後編
隋煬帝外史（隋史軍談）
唐太宗軍談
唐玄宗軍談
五代史軍談
宋史軍談
兩國史（宋金兩國軍談）
宋元軍談
元明軍談
明清軍談（國姓爺忠義傳）

現在の支那を知るには過去の支那を知らざるべからず然るに支那の正史は難澁浩瀚讀む可からず學界の趨勢は興味を以て歷史を知らしめんとせるに拘らず支那の正史は乾燥にして讀み易からず然るに上記の諸書は史中の興味の粹を拔きて之を綴り讀者をして卷を掩ふ能はざらしめ特に義士烈婦の事蹟を述ぶるに方りては滿腔の同情筆端に迸り讀者をして感憤興起せしむるものあり其風教に益するや大なり而かも其書は事實の大體を正史に取り之を潤飾せる者たるを以て小說の如き架空談とは同視すべきに非ず往時は士大夫も之を繙きて支那史を知るの便に供せる者たり是れ豈娛樂の間に支那全史に通ずべき最上の好著に非ずや斯る有益の書の散佚は惜まざる可からず是れ實費に等しき廉價を以て之を頒たんとする所以なり

豫約價
甲種（即納）金拾圓
乙種（十二回分納）金拾貳圓
▲分賣を諾せず▼

送料
東京市内 一回四錢 全部四拾八錢
内地 一回拾貳錢 全部壹圓四拾四錢
清韓樺臺 一回廿五錢 全部參圓
【出來期】五月より毎月一冊

豫約元 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部 取次所 全國各書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中村不折　河合新藏　大下藤次郎　鹿子木孟郎　滿谷國四郎
高村眞夫　吉田博　中川八郎　小杉未醒　石井柏亭　合著

一代の快著

十人寫生旅行



瀨戸内海

箱入裝釘優美
定價金貳圓
郵送料金八錢

特價發賣 五月廿日限り
金壹圓六拾錢

日本有數の畫伯十人を選びて、日本有數の風景に遊ばしむとせば、諸君は直ちに手を拍つて是理想的の大快事なりと云ふ可し、而も此事既に行はれたる也、十人寫生旅行の十畫伯は悉く當代の大家也、瀨戸内海の風光は實に日本第一と稱す、諸君は十人の大畫家と共に日本第一の風光に遊ばんとせば此書を閲せよ、百數十の繪畫十家十樣の特色

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目
振替貯金口座東京一八四四番
興文社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

醫學博士 二木謙三先生序 春秋社編輯部編

先哲 實驗 腹式呼吸篇

附 二木博士腹式呼吸の話

菊版美裝 總かな附 金六拾錢 送料八錢

■醫學の頽廢極りて此の一大事を閑却す

■古今先哲の實驗と

■二木醫學博士の

■及び其方法とを見よ。

生理上の斷案

腹式呼吸は即ち『腹壓增進法』にして、世間普通の所謂『深呼吸』と其の趣を一にせず、是實に人生健康の最根本問題にして、加へて膽力の養成法なり。本書は腹部を以て一の靜脈心臟と斷じて、醫學界を驚したる二木博士の腹式呼吸法（其實驗證明）に、古今先哲の熱心に唱道せる腹式呼吸に關する所說を加へて一書となしたるもの、若夫れ健康の勝利者となりて社會に活動せんと欲する者、須らく此の一本を讀破せざる可らず

▲平田篤胤翁の所說▼

▲櫻寧室主人の所說▼

▲貝原益軒翁の所說▼

▲山本周濟翁の所說▼

▲白隱禪師の内觀法▼

▲道元禪師の内觀法▼

柔道五段 醫學博士 内田良平先生題辭 二木謙三先生序

松村介石先生序

川合春充君著

實驗 簡易强健術

主眼	人體改造
基礎	下腹部の緊張

四大要件

- 筋肉の發達
- 内臟の强健
- 體格の均整
- 動作の敏活

一家虛弱の系統に末子として生れ、死を宣せられたること二回、十八歳にして始めて體育に留意し、あらゆる東西の運動法を研究實行して其缺點を發見し、此に自ら無器械十分間運動法を考案し、上掲の要件を一切具備せしめ、先の亡者の如き體軀を一變して驚くべき强健なる體格の所有者と爲るに至りたる著者の實驗の經驗と其要旨を讀め、而して實行せよ。實行三ヶ月にして諸君の體軀は一變せん。

體育は心理と生理との兩面より來らざる可らず――失望する勿れ人體は四十五歳までは改造せらる

（寫眞十數面說明入）▲四六版全一冊美製本 ▲定價六十錢送料六錢

發兌元 東京市神田區錦町二丁目（振替東京二〇七八九） 春秋社書店

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路（振替東京四一〇九番） 文榮閣書店

信用なき店舖又は猥褻なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御[illegible]

趣味の東京日日新聞

大發展紀念號

（併合大發展を紀念する爲め四月一日より向ふ卅日間連日紀念號の大增刷を行ひ候）

大阪毎日は比較的古い趣味の舊東京日日と比較的新らしい趣味の毎日電報とを一打して新「東京日日」とした、新東京日日は趣味に於て新舊を包んだ廣い、深い、大きなものとなつた、換言すれば趣味の向上とも擴充ともいへやう。

小說では伊藤左千夫子の「分家」が漸く異彩を放たんとする、福本日南子の「黑田如水」は行文痛烈、戰國時代の色彩髣髴として、歴史美の味いが、其一句其一字に滿ちてゐる。

東京日日新聞

日刊八頁

坪内博士其他諸大家の文藝談や小品文は我文藝欄の獨得である、晶子女史の歌、六花子の新傾向俳句、文學その日〳〵、文藝話題皆なそれ〳〵に味はれる、甘く味はれもする、辛く味はれもする。

第一面吉田博、小杉未醒、滿谷國四郎氏等の繪畫も亦た我社の特色だ、目下掲載中の「九州旅行スケッチ」に至つては太平洋畫會諸大家筆を競うて特色更らに一段を加へる。

端午大繪附錄

（これ當代浮世繪の第一人、鏑木清方畫伯が丹青を凝らせるもの艷麗無比、五月五日の端午を以て配布可仕候）

東京市麹町區有樂町一丁目二番地
大阪毎日新聞社東京支店
東京日日新聞發行所（振替貯金口座東京二八〇〇番）

定價一ヶ月金四十錢・地方郵稅共一ヶ月前金四十五錢三ヶ月前金一圓廿錢

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BUMMEI-DO & CO.

ENGLISH, JAPANESE BOOKS & STATIONERIES.

1750 Sutter Street, S. F., Calif., U. S. A.

米國加州桑港サター街一七五〇 須藤文明堂

最近發刊の傑物書籍、文學、宗敎、哲學、小說、通運、鐵道及雜書類

Bisland, E. .... The Japanese Letters of Lafcadio Hearn. $3.30

Hopkins, A.A. ...... Scientific American Cycolopedia of Formulars. $5.50

A.A.P.S.S .... Electric Rail way Transportation. $1.15

Wright, C.W. .... Woll Growing & the Tariff $2.20

Stephenson, G.T. ... Race Distinction in American Law $1.60

Hodich, Thomas. ... The Gates of India $3.57

Jerusalem, W. ...... Introduction to Philosophy. $1.65

Mackenzie, W.D. ... The Final Faith. $1.87

Carver, W.O. .... Mission and Modern Thought. $1.61

Rooselvelt, T. .... The New Nationalism ... $1.60

Halevy, D. .... The Life of F. Nietzsche. $1.65

London, J. .... When God Laughs. $1.65

Angell, N. .... The Gret Illusion. (A Story of the Relation of Military Power in Nations to Their Economic and Social Advantages) $1.65

Gephart, W.F. ...... Transportation and Industrial Development in the Middle West. $2.20

取次店 郁文堂

東京市本郷區森川町大學門前

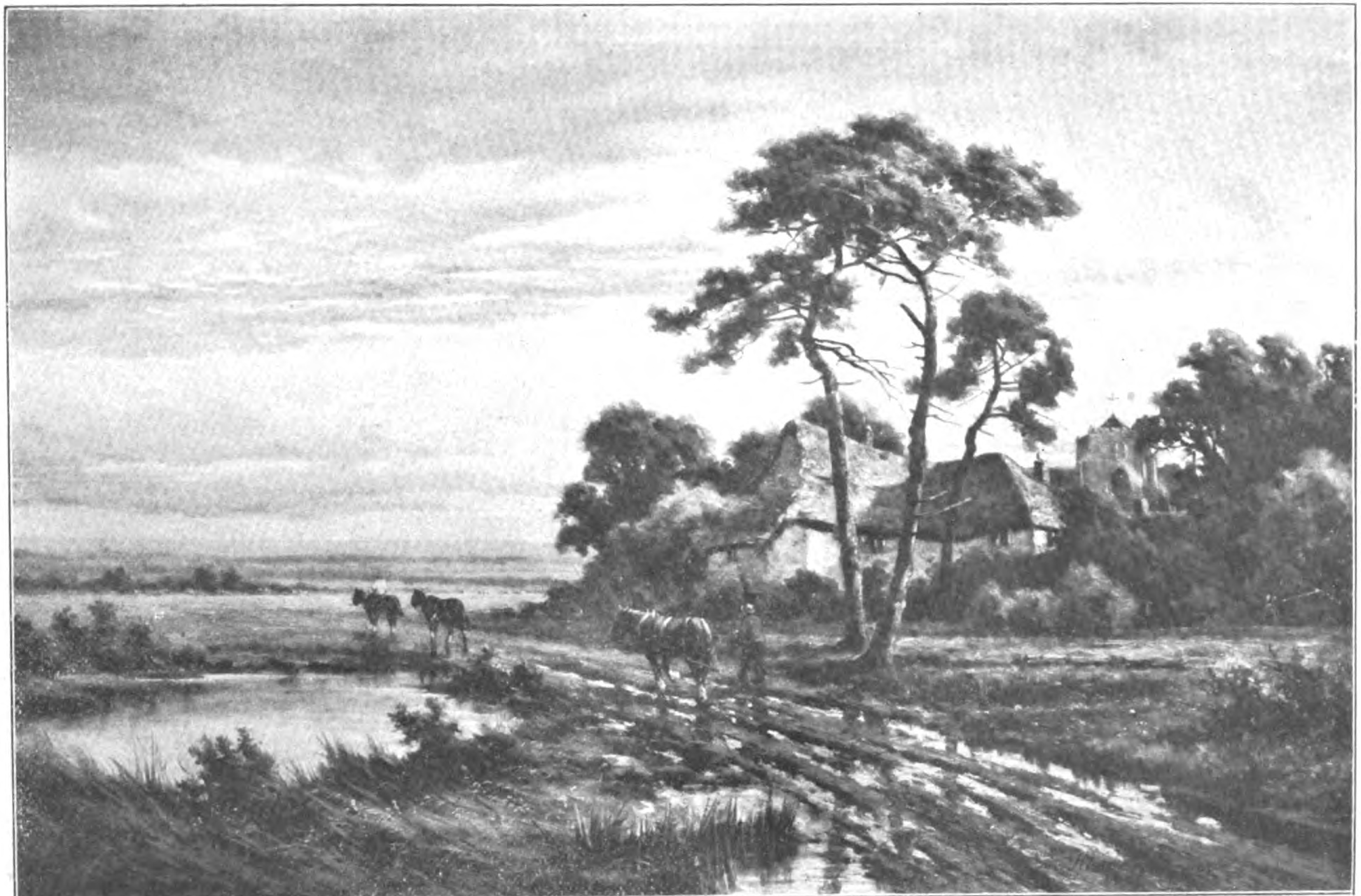
振替貯金口座一四九八一

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第廿六年第四號春期大附録號目次

▲公論

立國論



Henry H. Parker.

中央公論



第二十六年 第四號
春期大附録號
第二百六十五號

注目すべき排米論の勃興

（一）

日米新條約成る、大體に於て舊條約と異らざるも、舊條約第二條但書を削除せるは、蓋し一の進歩と稱して可ならん。

現在の日米條約は、他の多くの列國との條約が本年七月限りにて無效となるに拘らず、獨り來年七月まて效力を存續す、故に理に於て此の條約は最後に成就して可なる筈なれども、事實最先に訂約せらる、以て米國政事家の坦懷を看るべし。

但だ此の改正條約に添ゆるに一の覺書を以てし、我れ自から移民を制限するの現狀を繼續すべきことを

聲明せるは、徒らに名義に於てこそ對等なれ、事實屈辱の甚だしきものなりとして、頗ぶる不滿足を表する論者なきにあらず、蓋し舊條約第二條但書に於て、兩國政府各々一方の勞働者の入國を禁止するの自由を認めたるは、實際米國政府をして日本の移民を拒絕せしむるものにして、日本民族の自負心を損すると少小ならざりき、此の條約に據れば、日本政府も亦米國の勞働者を拒絕する權利あるが故に、條約面に於ては雙務的なれども、事實米國勞働者の日本に來るものあるとなし、即ち此の條約は實際に於て單に米國政府をして日本移民を拒否せしむる結果に止まれり、是れ日本の輿論が舊條約第二條但書の削除を主張して止まざりし所以ならずや。

今や此の第二條但書削除せらる、即ち米國政府は其の權利として日本の移民を拒否すると能はざる也、勿論日本政府自から其の移民を制限するの覺書を添えたるを以て、結果は素より同一なりと雖も、日本政府自から制限して他の拘束を蒙むらざるに於て、名分は即ち明かに立つ、既に名分に於て對等なる以上、姑らく之に滿足するの外あらざるには非ずや。

然り、名分のみに於ても、明らかに對等なるは、名實共に不對等なるに優さるや言を俟たず、改正條約假令完全と稱し得ざるも、舊條約より進步したるとは、之を認めざるを得ざる也。

且つ他年何等かの機會に於て、米人自から我が移民を歡迎するとゝなり、入國拒絕の條文全く不必要を告ぐるに至らば、單に覺書を撤廢して可也、別に條約を改めて其の條項を削除するの面倒なきも、亦新條約の效果ならずや。

然らば則ち我れ自から移民を制限するを以て屈辱とすべき乎、或は屈辱ならん、然れども彼れより拒絶せらるゝの純屈辱たるに比すれば聊か自から慰さむべきものなくんばあらず。

（二）

吾人は心よりして我れ自から移民を制限するとを悦ぶものに非ず、又今の外交當局の如く、滿韓集中と稱して移民を主として滿韓に送るべしと做す者にも非ず、滿洲には我れよりも遙かに低廉なる生活に甘んじ、我れより遙かに低廉なる賃錢に由て勞働する淸人多く、而して朝鮮人も亦淸人の如し、我が移民の之と競爭して入込む能はざるや言を俟たずとす、即ち滿韓集中主義は空言のみ、寧ろ之を利源廣大にして且つ賃錢の高き米國に送るの利なるに如かざる也。

然れども奈何せん、米國の勞働者中には我が移民との競爭を怖れて、其の入國を憎むと甚だしき者あり、殊に我が移民の最先に上陸すべきカリフォルニア其の他太平洋沿岸の諸州に於て最も然り、而して其の結果往々にして政治上の紛爭を來し、日米兩國の國交を阻害するの虞あるとは、識者の最も憂慮する所とす、前外務大臣林董伯は、我が移民が生活の程度高き白人勞働者に伍して其の指彈を受くるをも忍びて、强ひて移民に執着し、區々一千萬圓（米國移民の一箇年收入約一千萬圓に上る）の利益を惜むがために、善隣國との親誼を破るが如きは、斷じて國家の執るべき方針に非ずといへり、吾人は素より全然伯の說を可とする能はざるも、また一半の理あるとを否定する能はず。

我が人口の增加は年々五十萬人と見積らる、此の增加せる人口に對して、單に國內のみにては其の生

活資料を供給し能はざるに至るや論莫しとす、乃ち之を海外未開の肥沃地に出して、一は天與の富源を開拓して以て文明の進歩に貢せしむると共に、一は過剩なる內地の人口を外に出して以て自他の生活を安易ならしむるの外あらず、現に移民によりて國を窮途より救ひ出せるは伊太利にして、獨逸、墺地利、愛耳蘭等も、亦移民に由りて其の勢力と利益とを增進す、日本また之に倣ふを以て最も賢しとす、然れども此がために國交上に紛爭を來し障礙を招くが如きとは、努めて之を避けざる可らず、米國若し之を好まずんば更に墨西哥に至らしむるも可也、秘露も可也、智利も可也、或は遠く伯西、亞爾然丁に至らしむるまた可也、或は別に南洋地方に往かしむるも可也、要は憎み忌まるゝ地を避けて、歡迎せらるゝ場所に就くにあり、我が經世家及び識者は深く玆に心して移民の前路を拓くべく努力するを要す、徒らに滿韓集中の空言に執着し、若くは單に米國のみに拘泥して硜々然相爭ふが如きは、未だ深く思はざるのみ。

(三)

若し夫れ移民制限に平らかならざるが爲めに、進みて排米論を唱ふるに至ては、吾人更らに與みする能はず、彼の國士と稱せられて世間の一部に重きを爲す人々の中、近時動もすれば排米主義を鼓吹せんとするものあるに似たり、是れ雲烟過眼視すべからず。

米國の排日派は、之を大別して略々三種と爲すことを得、其の一は言ふまでもなく勞働派也、殊に太平洋沿岸に於ける勞働者也、彼等は大抵伊太利、獨逸、墺地利、愛耳蘭等より移住して歸化したるもの

本來凶險の性を帶ぶるに、日本の移民が柔順にして且つ生活の程度低く、賃銀低廉にして、動もすれば資本主の愛顧を得んとするを嫉み、百方して之を迫害す、而して彼等の投票を得て當選の冠を戴かんとする政事家中、往々にして彼等の意を迎へて排日策を廻らすものあり、蓋し普通選擧制の米國に在ては殊に資本主の勢力未だ大に伸ぶるに至らざる西部諸州に在ては、少數資本主の意を迎ふるよりも、多數勞働者に媚ぶるを利とする政事家の出づる洵に已む可らず、桑港を主として、カリフォルニヤ其他の太平洋沿岸諸州の現狀は即ち是ならずや。

其の二は言ふまでもなくホブソン佐官の如き主戰論者也、彼等は熱烈なる海軍擴張論者にして、其の背後には少からざる造船業者を含むに似たり、米國は多くの海岸を有する割合に多くの船舶を有せず、隨つて其の壯大なる造船工場は空屋に齊しく、造船業者の苦痛を感ずる極めて切なり、茲に於てか彼等は百方して政府に造艦を促がし、鋭意して海軍擴張論の鼓吹に努む、彼のホブソン佐官は、サンチアゴの海戰に於て略々我が廣瀨中佐の如き驍名を博せしとあり、爾來國會に出てゝも、常に海軍擴張論の急先鋒となり、殊に日本との開戰を避くべからずと絕叫し、一部識者の嗤笑を招くにも拘らず、動もすれば奇を好む俗人に迎へられ、最も造船業者に崇めらる、彼の新聞界の怪傑ハーストも亦之と合槌を打つ一人にして、苟くも機會あれば必らず排日主義を主張せざるとなし。

其の三は猶太人の出なる一部資本家にして、殊に淸國方面に野望を有するもの也、彼等の或るものは露國を目して終天の仇敵と爲し、曾て日本が露國と戰ふや、極力日本に聲援したりき、然るに日本が戰

後露國と握手し、再び協約を結びて相親むに及び、惜露の念延きて日本に及び、日本を看ると蛇蝎に異ならず、殊に其の清國方面に野心を有するもの丶如きは、日本の勢力を忌むと甚だしく、百方之を挫かんとす、日本の勢利を南滿洲より驅逐せんとして、竟に國務卿をして滿洲鐵道中立の提案を爲さしめしが如きは、實に彼等の作略とす。

故に日本を排斥するは、猶太人又は獨逸、墺地利、伊太利、愛爾蘭等の歸化人に過ぎず、ワシントン、リンコーンの正しき血液を享けたる純米國人に至つては、常に日本と親誼を重ね、正義を以て相交はらんとす、此の派を代表するものは實に今の中央政府にして、識慮ある純米國人は皆之を贊す、但し米國本來の國狀として、政府の意思を以て急に歸化人の主張を抑壓する能はず、胡漢併せ現じて各々其の色彩を混ぜしめざるが故に、排日氣勢の如きもまた久しくして拔くに至らざるのみ、近時米國の人口激増するも、多くは歸化移民の激増のみ、純米國人は却つて動もすれば減少の傾向あるに似たり、然かも儼乎として中央政府の政權を有する以上、漸次一般を指導して穩健ならざる排日論を鎭壓し、竟に純米國に同化するに至る日なきを期す可らず、是れ識慮ある彼の國經世家の注意する所にして、吾人もまた實に此の期待を持つて、暫らく耐忍して以て移民制限の全く解くるを望むのみ、今日の處、聰明なる彼の國中央政府の意思に信頼するの外、別に採るべき途なければ也、一部歸化人の排日運動を看て、直ちに全米國人の意思と爲し、由て以て排米論を唱ふるが如きは、寧ろ輕忽を免かれざるのみ、吾人は彼の國士を以て任ずる人々の愛國の至情の純なるを認めて、深く之を尊重す、乃ち尊重すと雖も我も其の排米

論に至つては、敢て之に與みする能はざる也。

（四）

排米論の窮極は開戰にあり、抗論の極は到底掴み合ひの外なければ也。然れども開戰に由て總てを解決し得るや否やは大に考慮せざる可らず、開戰の目的は、第一米國をして移民拒否を全然撤去して、到る處我が移民を容れしむるにあらん、第二米國の利權を淸國殊に滿洲より驅逐して、其の勢力を太平洋以外に萎縮せしむるに在らん、然れども思へ、我れ果して米國に勝ち得るや否やを。

米國は未だ大に外敵と戰へるとあらず、僅かに墨西哥の如き弱小國と戰ふて彼の大なるカリフホルニア州を奪ひ、强努の末魯縞をすら穿つ能はざるが如き西班牙と戰ふて、玖瑪、比律賓を取れり、兵を動かすと未だ十萬に足らず、軍艦を用ゆると廿隻にも至らずして、其の結果は却つて甚だ大也、計算好きなる彼等は、玆に於てか戰ひの容易にして且つ利潤の意外に大なるとを思ひ、殊に日本の貧小なるを侮りて、動もすれば輕々しく戰端を開くを憚からざるも知れず、然れども彼等の艦隊來りて日本を衝くには日本は餘りに遠し、彼等の戰艦は孰れより其の炭水及び軍需糧食を得んとするか、布哇を除けば、彼等の根據地とすべきものあらざるにあらずや、然かも布哇は日本を距る遠きに過ぐ、日本に對する戰略上未だ甚だ價値あらず、或はロゼストヴエンスキー提督の故智に倣ふて、多くの商船に石炭用水軍需等を積載し伴ふべき乎、然らば則ち其の結果もまた對馬水道に於ける全滅のみ。

且つ黄金のために雇はれたる水兵輩が、萬一の場合に役立つべきや否や、先年其の艦隊の東洋に廻航するや、マゼラン海峽を過ぐる時、多くの逃亡水兵を出し、ロスアンゼルス及び桑港に至て益々甚だしく、補充者を雇ふに少からざる苦慮を費したる先例も之あるにあらずや、殊に砲火相撃つて死生の間に出入すといふの時、逃亡者に次ぐに逃亡者を以てするの虞なきや否や、日本との開戰がサンチアゴ、マニラの其れの如く、無造作なるものにあらざるとは、彼の無智の水兵と雖も能く瞭解し居るべき筈也。

假令幸ひに士氣の旺盛を維持して、逃亡水兵を出すとなしとするも、日本の附近に海軍の根據地を有せざるの一事、日本攻撃をして到底不可能ならしむ、旣に日本を攻撃すると能はず、何ぞ勝つとを能くせんや。

米國の陸上防備に至ては、稀薄實にいふに足らざるのみ、我れ苟くも三個師團の兵を上陸せしめば、所在風を望んで我に歸せん、少くもシラネヴタ以西はまた米國の有に非ざる也、唯だ我艦隊また往きて我が陸軍を上陸せしめ能はざるを奈何ともするなきのみ。

我れも亦米國陸岸に近く海軍根據地を有せず、ロゼストヴエンスキー提督の舊策に由るにあらざれば、往きて米國を攻むるに由なし、彼れも來る能はず、我れも往くと能はずんば、勝敗果して何に由て決せんや、往くもの敗るゝは必然にして、猶ほ角觝の仕掛くるものゝ負くるが如し、水入引分の外なき、楽より三尺の童兒と雖も知る。

我れは唯だ比律賓を占領するに止まらん、比律賓を占領するも、米國は眞に痛痒を感ずるものにあら

ず、玆に於てか勢ひ持久戰と爲らざるを得ず。

持久戰となるも勝敗は容易は逆睹すべからず、米兵の比律賓に駐屯するもの毎月三百弗（我が六百圓）の俸給を受く、然かも飲食物の不良を稱して不平の絶えざるや、政府は增俸して四百弗（我が八百圓）と爲したりき、一兵士にして其の俸給我が大臣を凌ぐ、米國の富我れに幾萬倍するも、其の戰費に苦むと何ぞ多く我に讓る可けんや。

我れも亦持久戰を苦痛とす、我が生絲製茶を最大花客たる米國に賣る能はざる一事に視ても、其の一斑を想察すべし、思へ、我が生絲製茶にして滿足に賣行かずんは、農民の苦痛其れ幾許ぞや、是れ日清戰役に於ても、日露戰役に於ても、未だ曾て嘗めたることなき大苦痛ならざらんや。

戰ふも勝敗を決する能はず、持久戰に至つては兩者共に自から苦むのみ、其の結果また幾んど知るべきにあらずや、即ち我れ、米國の勢力を淸國より驅逐すると能はず、況んや太平洋より全く彼を萎縮せしむる如きをや、若し夫れ我が移民を米國に容るゝ一事は至ては、唯だ益々困難を加ふるのみ、何となれば純米國人と雖も日本人と怨みを構ふるに至りて、相共に日本移民を排斥すると言を俟たざればなり、純米國人をも驅つて猶太人、獨逸人、墺地利人、伊太利人の如き歸化人と同一意向ならしむ可ければ也、嗚呼是れ局面を驅つて益々艱苦ならしむるものにあらずや、排米論開戰論の結果の愚なる、玆に至つて炳乎として火を睹るが如し。

米國と太平洋面に於て武を爭ふは愚也、彼れとは寧ろ相親み相提携して利害を均しくするに如かざるのみ。

今日に於て識者の大に意を致すべきは清國の前途にあり、彼れ竟に列國に分割せらるゝとを免かれざるや否や、分割と非分割と相對抗する秋、我れは如何の態度に出づべきや、我れは東洋に於ける主人公也、主人公として大なる責任を負ふと共に、また之に伴ふ利權を獲得すべきと言を俟たず、唯だ此の際に處して謬まらば、百事總て去らん、憂世の國士は寧ろ今より發奮砥礪して、豫じめ國策を大定し置くべき也、之を惟れ努めずして漫りに排米論を唱ふ、本末輕重を過まるもまた甚だしい哉、否、國を謬まるものは斯の如き議論也、深く反省せざる可らず。

新聞紙の革命

新聞紙の汎く世に流布せらるゝと、而して其の品格の下れると、凡そ今日の如きはあらざらん。看よ東京市内に於て、少しく世に知らるゝ新聞紙は、皆拾萬以上を印刷すと稱するにあらずや、如何に小なる新聞紙にても、幾んど世間に存在を認められざるが如き新聞紙と雖も、今や印刷數の一萬以下なるは極めて稀なりといふにあらずや、日清戰役の後、新聞紙の賣行は俄然旺盛となりき、日露大戰役以來殊に然り、新聞紙の多く賣行くは即ち其の勢力の増大に外ならず、政黨が其の多數に由て強力なる

が如く、新聞紙の勢力もまた主として發賣部數の多寡に由る、勿論多く賣るゝ新聞紙必らずしも勢力信用あるに非ずと雖も、拾萬以下なるは微力言ふに足らず。

新聞紙の多く賣行くと共に、見逃すべからざるは其の變化也、變化とは何ぞや、曰く一個の商品として頻りに俗を迎へ世に媚ぶるの傾向あること也、曰く其の價の安きを競ふて幾んど生產費以下に落ちしこと也、其の汎く世に流布せらるゝ所以は全く玆に在り、而して其の品格の下れる所以も亦玆に存す。

（二）

自由民權論の興れる時代に在ては、新聞紙の言論常に萬里の長城たる觀ありき、彼等の侃々諤々たる主張は、政府者をして望みて畏憚せしめ、民間の志士をして宗嶽の屹爾として嚮ふ所を示すが如く信賴せしめたりき、新聞紙の生命は實に其の言論に在りき、故に最も多く賣行けるものと雖も、竟に一萬枚を出づること能はずして、而して其の世上に重んぜらるゝや、今日に十倍し百倍したりき。

今の新聞紙は依然として言論の一欄を設く、然かも實用缺く可らざるものとは做さずして、單に一種の因習的裝飾と視るのみ、之を家屋に例ふれば床の間の如し、之あるも可、之なきも亦可也、唯だ因習的に裏長屋と雖もまた型ばかりの床の間を設くるが如く、幾んど無意識に之を設くるに過ぎず、随つて其の言論の良否巧拙長短には寸分も重きを措くことなく、而して主張もまた多く世に用ゐられず、偶々世を動かすものはといへば、彼の電車燒擊の如き、感情的煽動的暴民的の淺薄なるとのみ、少しく理性に依て判斷する事實に至つては漠焉として與からず。

隨つて其の議論の如きも、二三の信用ある新聞紙を除くの外は、多くは淺薄にして感情に走るのみ、彼の南北朝正閏論の如きに視るも、新聞紙の議論は幾んど俗を迎へ世に媚ぶるに過ぎず、一枚の文筆能く列國の形勢を動かす倫敦タイムスの如き權威に至ては、之を望むも到底得べからざる也。

蓋し今の新聞紙の最大目的は、多く賣らんがために、世に媚び俗を迎ふるにあり、振假名を使るにあらずんば讀むと能はざるが如き低度の讀者をのみ本位として、然かも此の低度の讀者を指導し啓沃する志無く、逆まに其意を迎へ情に阿ねるを主とす、大聲は俚耳に入らず、公正にして識慮ある議論が彼等に取て風馬牛なる素より其の所のみ。

新聞紙既に極めて低度なる讀者の意を迎へ情に阿ねるを主とす、其の力を用ゆる所知るべきのみ、紙面の大部分を費して、特筆大書するものは殺人のみ、強姦のみ、強盜のみ、俗の最も悅ぶ淫靡の事のみ、尋常平凡なる强盜のためには、其の一顰一笑だも漏さざらんとし、一種の色魔を描するためには、其の一擧手一投足は勿論、微に入り細を穿ちて、幾んど到らざる所なし、然かも精確謬らざるものに非ずして唯だ多く記して以て讀者の好奇心を滿すに過ぎず。

玆に於てか極めて低度なる讀者中、新聞紙の記事に由て益々其の好奇心を煽せられて、幾んど常軌を逸するものを生ずるに至る、一の色魔あれば、之に倣ふもの輩出し、一の嗤ふべき千里眼出れば、また十百の千里眼百里眼五十里眼出づ、一の首無し犯人出づれは同じ犯人また次て出づ、近くは其の死體を信州善光寺に輸送せる犯人出てて、新聞紙上世を騷がすや、北陸方面にもまた之に類似する者出てんとしたりき、若し新聞紙にして、其の記事の極めて低度なる讀者を動かすの大なるを知ると共に、苟くも善を勸め惡を懲くするの志あらば、都鄙に渉りて閭里に孝子節婦を求め、公共に盡し慈善に勵み、或は

教育に、或は產業に、總て獻身的に活動する義人を索め出して、其の心術事業を細寫すること、猶ほ彼の强盜殺人强姦犯者を記する如くならば、其の善良なる效果を擧ぐるの明らかなる言を俟たざるべし、而して斯の如き義人の常に都鄙の政廳より褒賞せらるゝを視れば、其の數の少からざるや明かなりとす、然るに新聞紙を擧げて一も之を顧みず、唯だ凶惡なる事實のみを詳報し細說す、これ好んで人生の暗黑面のみを暴露して、其の公明なる部分を掩ふもの也、益々俗を敗り風を薄くする論なし、新聞紙の品格の下れる、實に今日の如きあらんや。

（三）

今の新聞紙は、其の賣行の多きを欲するに急なるがため、其の價を生產費以下とす、凡そ天下に生產費以下を以て販賣せらるゝもの新聞紙の外あらざるべし、是れ實に奇なる現象とす。

米國にコスモポリタン、メトロポリタンなる雜誌あり、其の價十仙、廿仙に過ぎず、而して其の用紙の鮮明なる、印刷の精美なる、挿畫の優麗なる、到底十仙、廿仙にて引合ふの理なし、然かも其の盛んなるは他なし、高き料金を收むる廣告甚だ多ければ也、此の莫大なる廣告料に由て、一切の損失を辨償して尙ほ多くの利益ある也。

我が新聞紙の實價一ヶ月卅七八錢より安きは廿四五錢に至る、之を一日に割れば一錢二三厘より八九厘に過ぎず、其の卸値段に至つては、一錢以下四五厘に過ぎざるや言を俟たざらん、試みに思へ、六頁乃至八頁の新聞紙は、單に紙代のみより見るも、一日四厘以上七八厘を要するにあらずや、之に印刷費編輯費を加へて、到底引合はざるや言を俟たざるのみ、若し普通の考よりいはゞ、發賣部數の多きに隨つて其の損失も亦多し、宜しく競ふて其の發賣數の少きを求むべきの理なり、然るに逆まに其の多きを

競ふ所以は他なし、發賣紙數の多きを利して多くの廣告を集め、多くの廣告料を收めんとするのみ。故に廣告は總ての新聞紙の生命也、廣告の多寡は直ちに新聞紙の盛衰榮枯を表す、而して此の生命を養ふが爲めには飽までも多數の讀者を得ざる可らず、多數の讀者といへば勿論極めて低度なる者也、新聞紙が競ふて俗を迎へ世に媚びるとは洵に已むべからざる乎、其の好奇的煽動的なる處、漸くにしてアメリカナイズする亦必然の勢ひなる乎。

（四）

然れども信用は必らずしも多數の讀者を有するに限らざる也、其の議論穩健にして、而して中外の重要なる記事を漏さゞるもの、漸くにして信用を得て世に重んぜらるゝに至ることは爭ふべからず。

一時或る手段を執り、一種の人氣を迎へて多數の讀者を集めたるものは、沙上に築ける樓閣のみ、議論主張に重きを措かず、中外の重要なる記事の蒐集に力めず、單に俗に阿ねり世に媚びて好奇的煽動的を主とし、卑情をのみ迎へんとするものは、識者に唾棄せられて、竟に漸く世に疎んぜらるべし、信頼すべからざるもの豈久しきを保つ可けんや、吾人は新聞紙の革命の久しからずして到來すべきことを豫想し確信す。

（五）

若し識慮聰明なるものあり、純良なる記者を聘し、資を惜まずして中外の重要なる記事を集め、精確を期して苟くも好奇的ならず、人生の光明を傳へて暗黑を許かず、常に理性に據りて苟くも感情に馳せず、世の中以上の人々のみを相手として經營するあらば、必らずや確然たる成功を視ん、同時に新聞紙界の革命者として不朽ならん、天下の汎き今日豈此の特志家なき乎、吾人は敢て其の奮起を促がす。

樞密院副議長東久世伯題辭
東京文科大學教授服部文學博士序文

支那哲學研究會合註

新刊

和譯新註 白氏文集

▼先づ本書を備へて而して後我が文學を論ぜよ▲

服部博士の序に曰く

我が王朝時代にありて白樂天の名は兒童走卒と雖も之を知らざる者無く白樂天の集は苟くも翰墨の林に遊ぶ者にして之を讀まざるは無かりき我が文學に於ける影響は蓋し頗る大なるものあり而して白氏が國家の秕政を誹り百姓の困乏を愍み人情の機微を諷する所詩人忠愿の心を見るべきもの尠からず徒に文學詞藻を以て之を論ずべからず人能く詩人用意の存する所を知りて之を讀まば文字の世道人心に資するもの豈小なりとせんや(後略)

忽ち再版

本書の特色

一、白氏文集(長慶集)の完本を全部飜刻したるもの分て三巻とす
二、本文の側に假名交り振假名の譯文を附し原文と對照せしむ
三、章句中に顯はるゝ熟語成語故事等には簡明なる註釋を施せり
四、綿密なる注意のもとに異本を校合して精確に校正を施せり
五、本書の唐本は時價二十五圓本書はこれに比し頗る低廉なり
六、紙質は極上を用ひ、印刷は鮮明、裝釘亦頗る美机上の珍本なり

菊半截 全三冊
上巻 凡九百餘頁
定價 壹圓四十錢
特價 壹圓二十錢
郵税 內地十二錢 清朝三十錢

發兌 東京四谷軍事學指針社 振替口座東京三九〇一 菊地屋書店

大賣捌 東京神田 勉強堂 東京神田 東京堂 東京日本橋 六合館 大阪備後町 寶文館

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

一冊 定價五拾錢 郵税金四錢

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとする青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに試驗問題に擬し、別に詳密丁寧なる解釋を附せられたるものにして、問題の數實に七百以上に及べり

されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京本郷區駒込西片町十番地 反省社出版部

(中ノ一ノ一)

最も便利なる作文辭典出づ

簡野道明先生閲　森下松衞先生著

新編 作文辭典

▲三六判紙數七百頁

クロス製全一册

定價七拾錢

小包料八錢

本書の特色

▲己が思想を表はすべき適切なる語句を自在に見出し得ること
▲記寫するに當り己が忘却したる文字を容易に捜索し得ること
▲己が文中に用ゐんとする語句の適否を明確に識別し得ること
▲文字の音訓意義の同異等漢字の用法を詳細に悉知し得ること
▲故事格言等の用例正字俗字等の區別を精密に説明したること

内容見本 御申込次第進呈

袖珍長方形　携帶至便

筆を執り文を綴る、これ何人も必須の常事にして、しかも其の硯に向ふや、或は文字の點畫を忘れ、或は適切の佳語なきに惑ひ、筆端窘束せざるもの、それ幾何かある。本書は實にかゝる不便を救はんとして編纂せられたるもの。方今作文の資料たるべき著書多しと雖も、未だ本書の如く**周到**なる**用意**を以て、**搜索自在**なる辭書體に編纂せられたる者を見ず。誠に本書の如きは此種の辭書の**嚆矢**にして、その編纂の妙、いかに**作文上に裨益**を與ふべきか敢て贅言を要せざるべしと信ず。加ふるに、**一字一句**悉く『故事成語辭典』の著者として名聲高き**簡野**先生の嚴密なる**校閲**を經たれば其の正確なるは論なし。苟も筆を把り文を綴るもの何人も本書を座右に置きて一度筆硯に向はんか**金玉の文**、**金繡**の詞、千言立ろに成ると亦難きにあらざるべし。

加之本書は二萬餘の**熟語**を網羅し、明確に之が讀方と解釋とを施したれば、讀書の際之によりて熟語の意義を探り得べく、又一種の熟語辭典たる便あり。

發行所　東京神田錦町一丁目十番地　振替口座東京四九九一番　**明治書院**

立國論

福田德三
添田壽一
戶田海市
鎌田榮吉
河上肇
澤柳政太郎
神戶正雄
阪谷芳郎
横井時敬
戶水寬人

澁澤榮一
河津暹
大浦兼武
大隈重信
後藤新平
池邊吉太郎
松崎藏之助
鹽澤昌貞
金子堅太郎
田尻稻次郎

公論

立國の大本を何に置く可きか

法學博士　福田德三

立國の大本を何に置く可きかの問題は、現に何に置かれてあるかの問題から解答してかゝらねばならぬ、經濟上に於て立國の大本が何に置かれてあるかの問題は主として國民の職業別によりて解決せらるゝのである、然るに我邦には未だ人口調査も職業調査も施行せられて居ぬから、確實なる數字を以て此問に答ふる道がないのてある、唯推算によつて漠然と答ふる外はない、普通誰人も我國民の大多數は農業に從事する者と認むるに躊躇せないのてあるが、其所謂大多數とは如何程の割合を意味するのてあるか、全人口の過半數即ち五割以上を指すか、又は單に比較的多數を指すか、啻

て我邦に八年間滯在したラートゲン博士は、日本國民中農業者の割合は、普通人の思ふ程多數はあるまいとの疑を述べられたとがあるが、所詮は皆想像說たるに止つて、確乎たる據所はないのてある。試に職業調査の備つて居る文明國に於ける農工商三業の人口分布を見るに實際生産行爲に從事する人口の百分比例は左の通りてある、但し左の農業の中には山林業、漁業を含み、工業の中には鑛山業、商業には運輸交通業を含むのてある、國名の下の數字は調査の年を示す、

	農業	工業	商業
獨逸(一八九五)	三七、五	三七、四	一〇、六

墺太利(一八九〇)	六四、三	二一、九	六、四
洪匈利(一八九一)	五八、六	一二、六	三、三
伊國(一八八一)	五六、七	二七、六	三、九
瑞西(一八八八)	三七、四	四〇、七	一〇、七
佛國(一八九一)	四四、三	三三、六	九、四
伯耳義(一八九〇)	二二、九	三八、二	一一、六
和蘭(一八八九)	三〇、七	三三、七	一七、二
丁抹(一八九〇)	二七、一	二三、九	八、二
瑞典(一八九〇)	五四、〇	一五、〇	五、八
那威(一八九〇)	四九、六	二二、九	一一、七
英國(一八九一)	一五、一	五三、七	一〇、〇
合衆國(一八九〇)	三五、九	二四、一	一六、三

右十三國の中五割以上の農民を有する國は墺、洪、伊、瑞典の四國に過ぎぬ、其餘は佛國の四割四分強那威の四割九分強を除ては皆四割以下であつて、英國の如きは僅かに一割五分强を有するのみてある、若し過半數を以て標準とするときは墺洪伊瑞の四國のみが農業を以て國本としつゝあるもので、其他の國は皆農業立國ならざるものである、之に反して比較的の多數を標準とするときは右四國の外猶佛、丁、那、合の四國と而して僅かの差を示す獨逸も皆農業國と稱す可きてある、併し乍ら此は生産從業者に就ての統計てあつて全人口に就ての統計てはない、即ち全人口が依つて以て衣食する業が農なりや工なりや商なりやの問題は未だ此を以て分明したりと云ひ能はぬのてある、然るに此意味にての全國民の職業別の統計は備はつて居らぬ、其備つて居るは獨逸てある、獨逸の職業調査は單に生産從業者に就いてのみならず其家族其係累者の一切を包含して農工商各業によつて衣食するものゝ全體が如何に分配せられ居るやをも調べてある、而して其割合は生産從業者のみの割合とは、著しく相違を示して居るは注意す可きとてある、即ち千八百九十五年に於て

	農業	工業	商業
全人口百に付衣食を仰ぐもの	三五、七四	三九、一二	一一、五二
生産從業者百に付從業するもの	三七、五	三七、四	一〇、六

（千九百七年の調査にては純粹農業に衣食するもの

は更に百分の二七、四二に減じて居る）の割合を示して居る、言換れば全人口の上に就て見ればエ業に衣食を仰ぐもの最多數であつて、此點から云へば、獨逸は比較數の上に於ても最早農業國ではないのである、而して右二樣の百分比例は更らに注目に値する他の一事實を語るものである、其は外でない、農業は生産者三百七十五人が三百五十七人を養ふに過ぎざるに、工業は生産者三百七十四人で三百九十一人商業は百六人で百十五人を養ふ譯であると是である（分り易き樣極めて大畧に約して置く）、他の國に就いて此くの如き調査があれば甚だ宜いが惜哉其れが得られぬ、さて人口の職業別は此くの如しとて其他に猶考慮す可き點が多々ある、例へば所得の分布の如き又は租税負擔の分布の如き是である、農工商三者の中孰が最も多く所得を形成しつゝありや何れが最も多く國税幷に地方税を負擔しつゝありや是である、是も我邦には調査の材料甚だ備つて居らぬ、又た此と關連して何れの職業が最も多數の壯丁を陸海軍に供給するやも觀察せねばならぬ、今獨逸丈けの例を擧げて見れば、一般所得税を課しつゝある普魯西に於て千九百年に所得税の都市負擔額一億一千九百五十四萬三千九百三十二麻克に對し郡村の負擔額は三千八百八十五萬二千八百四十麻克であつて、納税者一人當は都市に於て所得金額の百分の二、二九、郡村に於て百分の一、六五である、金額にすると都市一人當十一麻一一郡村、一人當二麻〇三である、壯丁に就ては千九百六年十二月一日の調査を擧げて見れば陸軍軍隊にある壯丁の父の職業の百分比例は農業三六、六二其他六〇、一五無職一、四一不詳一、八二であつて、海軍にあつては農業一七、九一其他七八、二七無職一、八不詳二、〇三である、從つて陸海軍を通算すると農業三五、六〇其他六一、一四無職一、四三不詳一、八三となるのである、更らに壯丁自らの職業百分率は陸海軍を通算して農業二五、二一其他七二、二三無職二、五五である、過半數を標準とすれば壯丁供給の上に於て獨逸の農民は到底國本を爲して居らず、比較數の上に於ては三割六分

弱の子を供給し壯丁自らより見れば獨逸の農民は僅かに二割五分强の供給を爲すに止つて居る、然るに猶ほ獨逸にも農業立國論者少からずあるは、立國の大本が何に置かれてあるやの問題と立國の大本を何に置く可きやの問題とを混同するより起ると思ふ、今日の獨逸現在の有樣に就て立國の大本が何に置かれてありやの問題は最早農業に置かれてあらずと答ふるの外はないが、此有樣を變じて再び立國の大本を農業に置く樣にす可しとの議論は亦一個の見識たる可きは勿論である、乍併それは單に一個の主張であり、理想であつて、然せざる可からずと云ふ理由と、又た然するを得可しとの立證は必ず之を要求せねばならぬのである、

さて我邦現在の有樣に於て人口職業別の上より農業が果して立國の大本となり居るか所得形成の上に於て租稅負擔の上に於て將たまた壯丁供給の上に於て如何なり居るやと考ふるに普通の見解に於ては容易に然りと答へ得る如くてあるが事實は之を許容するや如何予は此問に答ふるの資格を有せざるものてある、ラートゲン博士の疑は何の根據を存するや知らざれども人口職業調査の備はらざる今日漫りに推測を下すとは出來ぬのである、故に此點よりは立國の大本を何に置く可きやの問題に對しては何等の答を爲し能はぬのてある、然し考察の方面を轉じて以上に略述した世界經濟上の大體の趨勢から推測して我邦現在の發達の有樣に考へ及ぼすと丈けは出來る、世界文明國の大勢は漸次に農業立國から變じて工商立國に赴きつゝあるとは否認す可からざる事實てある、英國に就て見れば千六百八十八年に於けるグレゴリー、キングの調査以後全人口の農業に衣食するもの丶百分率は實に左の如く變遷して居るのてある。

イングランド

千六百八十八年	七二、七
千八百十一年	三四、七
千八百二十一年	三三、〇
千八百三十一年	二七、二

イングランド及ウエールス

千八百三十一年	三一、六九	（二十歳以上全人口百に付）
千八百四十一年	二五、六五	
千八百五十一年	二一、六二	（十歳以上全人口百に付）
千八百六十一年	一〇、二一	
千八百七十一年	七、二九	
千八百八十一年	五、三二	
千八百九十一年	六、〇六	
千九百一年	七、五二	

即ち英國の如き國に於てすらも十九世紀の初には全人口の三割五分弱は農民であつたのである、十七世紀に於ては七割三分弱が農民であつた、今日世界の商工業國として知られて居る英國既に此くの如くである、農業立國と云ふとは決して或國のみに特有の現象ではない、經濟上の發達の低度なる時代に於ては今日の文明國は皆一度は農業を以て立國の大本と爲して居たものである、而して其反對に十九世紀に入つてからは、第一等國たるものは皆此大本を變じつゝあるので英國は其最たるものであり近來は獨逸も亦其蹤を追ひつゝあるのである、此は議論ではない、事實である、此く成さんとして成れるにあらず、此く成さゞらんとして止むものではない、我邦は由來豐葦原瑞穗國と稱へて云々の議論は此事實を動かすとは出來ぬ、英國も獨逸も此意味に於て皆豐葦原瑞穗國であつた否十七、十八世紀に於て英國は世界最大の農業國であつて、其農產物が最重要の輸出商品であり、其農業技術は歐洲諸國の皆仰で模範とした所である、されば過去に於て農業を立國の大本としたから將來に於ても亦必ず然る可しと云ふ議論は到底立てられず、又我邦のみ特に農を重ず可き天命を有する杯と云ふとは無論考へられぬのである、立國大本云々の解答は此等の論點を離れなければならぬ、即ち我邦天然の有樣が特に農業國たるに甚だ適するものであり我國民の經濟上の特質が殊に農民たるに適し而して世界經濟に於ける我邦の地位が之を要求するものなるを立證したる上でなければ農業立國論は輕々しく許容するとは出來ぬ言換れば農業を立國の大本とするによりて最も多くの國民を最も能く養ひ

并に最も有力なる國家を現實する資料を之によりて供給し得るの確證を必要とするのである、然るに予が僅かに見聞したる事實を以てするも此確證は到底之を得ることが出來ぬ、我邦の耕地面積は國土に比し又た人口の密度に對し甚だ僅少である、農業技術の進歩は收穫を增進す可きは疑なく又た必ず勉めざる可からざる所てはあるが之を以て全國民の過半數を養ふとは殆んど不可能事である、唯養ふとすら不可能である能く養ふとは猶更である、逐年增加する國費の大部分を農業が供給することも不可能である、地租輕減論を唱ふるものは此點を認め居る可き筈である、否米の輸入税を必要とする論者も亦之を認むるものならざるを得ぬ農業立國論なるものは、之を主張するに付て甚だ多くの前提を必要とするのである。

我邦は耕地面積の國土に對する割合の小なることと人口の密度とに於て世界有數の部に屬するは誰も知る所である、伯耳義、和蘭の如き小國を除ては我邦は英國に亞て最多の人口密度を有して獨逸すらも及ばぬのである、千八百九十年乃至千九百年の調査によれば一平方キロメートルに對する人口數は左の如し、

伯耳義	二百二十九人	丁抹	六十四人
和蘭	百五十七人	匈牙利	五十九人
英國	百三十二人	西班牙	三十六人
日本	百十四人	露國(歐)	二十一人
獨逸	百十二人	瑞典	十二人
伊國	百七人	合衆國	八人
墺國	八十五人	那威	七人
瑞西	八十三人		

而してシユモラー氏の説によれば、純粹の農業國にては一平方キロメートルの養ひ得る人口數は七十人を極度とし、工業を兼營する國にては百六人、農業の發達せる國にては百七十七人なるに、歐洲の工業國にては二百六十六人を養ひ得ると云ふ。狹き耕地面積稠密なる人口を有する我邦が其人口を養ひ否能く養ふに農業を以てす可しと主張する人は此事實に非常特別なる例外ある所以を先づ立證せねばならぬのである、海外

へ盛んに移民すれば可なりと答ふるのみでは足らぬ。

之を要するに立國の大本を何に置く可きかの問題に對する經濟上の解答は唯一あり得るのみである曰く之を工業に置くべきである、世には商業立國云々の説もある樣であるが是れは殆んど意味を成さぬ、工業立國は必ず商業の發達を必要とし又た之を伴ふものである、工業なき純商業立國論は歷史の敎訓を全く無視するものである、其等の理由を述ぶるとは敎科書を繰返へこととなるから止める、唯工業を大本とせよと云ひたりとて農業を輕視せよと云ふのではない、殊に朝鮮に於ては農業を盛にして我農業の重點を其處に置くべきである、米の移入税の如きは此點より見て殆んど自殺的政策と云はねばならぬ、朝鮮を得た一事は愈々以て工業立國の大本を確立す可き機運を作つたものである、移入税の存續は韓國合併の價値を著しく減ずるものである。

近頃ヴエーンチヒ博士は日本の將來は美術工業に特に重きを置く可しと論ぜられた、予は固より其説に敬服するものである、併乍ら是と同時に一般の工業の發達を輕視す可からざるとを感ずるのである、否工業と稱する工業は普く之を移植發達せしめねばならぬと思ふ、此點に於て最も倣ふ可きは獨逸であらう、而して其發達を圖るに漫に關税政策に偏するは大に愼む可きである、向後の經濟政策其主眼は生産の保護にあらずして生産力の涵養にある換言すれば經濟政策は先づ社會政策を以つて始めねばならぬ、社會政策の要求を十分諒解する有爲の企業家と生産力旺盛なる勞働階級とが工業立國の大本を建つ可き二大支柱である予はヴエーンチヒ博士の防禦的社會政策の説に服するを得ぬ、積極的にして生産力增進を本領とする社會政策を第一の急務と信ずるのである、此社會政策は健全なる實業敎育就中工業敎育の普及と自然科學の發達と提携せねばならぬ。

以上突嗟の間に意見を徴せられ推敲の遑なく蕪雜の言を陳ねた罪を識者に得る大なるは深く恥づる所である。（三月十三日記す）

凡ての天恵を利用せよ

法學博士　添田壽一

立國の根本政策として農、工、商孰れを取るかと云ふが如き議論は、今日の如く日進月歩、且つ複雜なる經濟組織の下に在つては寧ろ無用なりと云はねはならぬ。何となれは農工商の三者は各長短得失ありて決して其の一のみを以て國家を維持する能はす、互に相持ち相補ひて始めて完備すべければなり。此の三者を兼ね備へ完全に發達せしむるものが最も富强なる國家を成すのてある。今日の米國の如きは即ち此の實例てある。

我日本に於ては古來農は國の本と稱して比較的發達せるに拘はらす、封建の永く行はれたる結果商工は大に後れて居る。爲に我國目下の狀態に於て三者中最も力を注ぐべきは商工業の改善發達にある。又試に之を外國に比較するときは我商工業の程度の劣れること更に著るしきものがある。今之を商業に就て云ふも我國商業者間信用道德の點に遺憾の點少からずして、取引の確實安全を期し難く常に外人の非難を蒙るが如き、資力乏くして商業の規模狹小なるか如き、其の他活動力、觀察力に於ても概して外人に及ばぬ嫌がある。又之を工業方面より見るも工場經營上不備の點多きは云ふまでもなく、我製品の品質脆弱にして破損し易く品種の不揃にして區々に涉るが如き大に改善すべきてある。殊に精巧の器械類製造に至つては其の幼稚なること到底日を同ふして語るべからざる所てある。彼の兵器の獨立の如き各國其の新鋭を競ひ特所を發揮し只後れざらんことを力めつゝある折柄、工業の發達今日の如き程度にありては兵器の獨立すらも期し難く常に外國の後塵を拜するの外はなく實以て寒心の極と云はね

はならぬ。

左れば內、國家經濟の均衡を保つ上より云ふも外、對外政策の上より見るも今日の急務は一層の力を商工業の發達に置き以て農工商三者鼎立の方針を以て我國經濟の基礎を固め國民の所得を增進し國富の增殖を圖らねばならぬ。然らざれば將來增加すべき國家の經費に應ずる能はざるのみならず戰後激增せる大負債、大負擔を償却することも覺束なき次第となる。

今日の軍備は軍備其ものが最終の目的ではなく平和維持の爲め即ち武裝的平和の爲め或る程度までは必要である。而して軍備上巨額の費用を要するは何人も知れる所なり。故に國民所得の增加せざる限り永く武力を支へんことも亦望むべからず。此の爲めにも農と云はず工と云はず將た商と云はず能く三者の調和均衡を以て國家經濟の發達を期すべきである。

況や事實上より觀察するに單純なる農業本位、商工立國策と云ふものが議論通りに行はるゝものにあらず。好し數百歩を讓り實行されたりとせんか、畢竟不具的國家と云はねばならぬ。英國の如き其本土の面積狹小なるよりして商工政策に傾き自然農業を疎んじたる結果、同國の食料問題は一朝有事の日に當りては非常に危險となるべき問題として朝野の心を痛むる所となつて居る。米國の如き農業國でも商工業に力を入れざるを得ざる現況である、現に關稅政策甚しきはモンロー主義即ち對外國是までも變更を來したではないか。

或は我帝國の島國なるを理由として農業上の見込少なきを懸念するものあらん。然し之は帝國が今や大陸國となつて居ることを忘却せるものである。一方充分なる食物と原料の供給を國內又は我勢力範圍にある地域より得て一方外國市場に向つて盛に各種の製作品を輸出する、即ち農工商三業を巧に駢進せしむることが得策なるのみならず、之以外に永久に日本の地位、經濟を保つ途は見出し得られぬのである。殊に帝國は石炭、勞力及び水力に富み、領土も大陸に廣がり、南北に延びて居る故種々の天產物も生じ、加ふるに近く清

國と云ふ大市場を控へて居る以上は、此の天恵を利用し上記の大方針を以て進まざれば所謂天の與ふる所を無にするものである。豈區々たる農、工、商立國策の如き空論に貴重の光陰を費し再び得難き好期を逸し國家百年の經濟策を誤るべけんやである。

農工商武の何れを國本とすべきや

法學博士 戸田海市

一

立國の基本として農工商武の何れを採るべきやの問題に對し、或者は農工商武と云ふが如き有形の事物は何れも枝葉である、眞に國を立つるの根本は之を國民の精神生活の上に求めねばならぬと論ずるであらう。又或者は農工商と武とは全く性質を異にし方面を別にする國民的活動であるから、其間に本來主從の差を立てることは出來ぬと論ずるであらう。併し乍ら經濟の消長が國運の盛衰に至大の影響を與ふる現代に於て、又世界列國の競爭日に益々激烈となりつゝある現代に於て、農商工武何れも國運を支持する重大の要素たることは疑を容れない、從つて國運發展上其の何れに重きを置くべきやの問題も自然に起らざるを得ない。此問題に對する余輩の意見は並立論又は複本論とも名くべき極めて平凡なるものである。武備と經濟との輕重の問題は後に讓り、便宜上先づ經濟の方面に於て農工商の本末輕重の問題から解決を試みやう。

二

農工商の何れを國本とすべきやの問題に對し、進歩主義を懷く人士は概ね商工立國主義に傾き、我國をし

て東洋の英國たらしめざるべからずと主張する。國土狹小にして天然の富源に乏しき我國の經濟は、將來農業の方面に發展するの餘地を多く有しない。自然の發展に任せて置けば當然商工業が盛んとなつて農業は自から次位に下る。然るに若し人爲の保護策を加へて農業主義を實行せんとすれば經濟の進歩が困難となり、其結果國民の生活難は日に加はり、政府の財政は年に窮乏を告げ、遂に國民の元氣が銷磨して人口制限の行はるゝこと佛國の如くになり、今日以上に日本民族の世界に膨脹發展することは多く望まれないと云ふのである。反之保守主義を採る人士の多くは謂らく、經濟の自然の發展に任すときは商工業が盛んとなつて農業の衰微を來たすことは、西洋諸國と同じく我國にも免るべからざる大勢である。然るに斯く商工の發展に伴ふて人口の大部分が都會に集中するに至れば、國民の健康が衰へて人口增殖力が減じ、風紀道德亂れ、家族制度破れて個人主義や快樂主義が跋扈する。都會民の中からは強健な兵士を得ることが出來なくなつて國防の不備を來たすと同時に、商工を主として食物を外國に仰ぐの結果一朝國際の事變起れば忽ち國民を擧て飢餓に陷らしめ、以て益々國家の獨立力を危ふする。又商工業の盛んとなるに從つて貧富の懸隔は益大となり、其結果社會主義の跋扈を來たして忠君愛國の精神も衰へざるを得ない。故に我國は立國の基礎として少くとも農を商工と併立せしむるの主義を採り、人爲の保護奬勵策就中關稅政策に因て農業の衰退を防ぎ、農業人口の維持を計らねばならぬ。斯く經濟の自然の進行を人爲に因て制限するの結果幾分か經濟進歩の速度が遲緩となり、特に國民は食物騰貴の爲めに苦しめらるゝの弊は免れないが、結局此政策が政治上社會上安全であると。

以上兩種の論は共に西洋其儘の直譯である。特に進歩論者も保守論者も共に經濟の自然の發展に放任すれば、我國に於ても亦歐洲諸國の如く商工獨り盛んとなつて農業は大に衰退すべしと云ふことを前提とするものである。成程現今尚ほ農業が第一位に在る我國の經

濟も將來著しき發展を爲す方面は商工業に在ることは疑なき所であるが、余輩の見る所に因れば我國の經濟は自然に放任しても、決して商工に全力を注いで主要の食物を外國に仰ぐと英國の如くなるを得ない特別の事情がある。英國の如き商工立國主義は實行するとが出來ない、從つて又保守家の憂ふるが如く人口の大部分が都會に集中して田舍が非常に衰退することもない。即ち我國は特有の事情に由て自然に農と工商との併立主義となるの運命を有して居り、此併立主義は人爲を以て之を打破し、之を一方又は他方に傾かしめることは甚だ困難である。然らば此の如き併立主義を成立せしむる我國特有の事情とは何てあるかと云ふに、其は吾々が白人種の如く麵麭を食はずして米を食ひ、特に日本特有の日本米を最も嗜好すると云ふ事實である。（「中央農事報」日本農業の地位參照）

蓋し麵麭の普通材料たる小麥は五大洲に亙つて生産せらるゝ世界的商品であつて、各地の生産に多少品質の差異ありとは云へ、齊しく取て以て白人種の食料とすることが出來る。故に世界の交通が開け、特に南北米洲及西比利亞等の開拓せらるゝに從ひ、英國を初め人口稠密にして國内に農業擴張を不利とする歐洲先進諸國に於ては、外國の小麥其他の食料が非常の勢を以て國内に侵入し、小麥の相場の如きは過去半世紀間に於て約二分の一に減じ、其結果自國の農業は到底之れと競爭するに堪へずして衰退すると同時に、此等先進國の特に長所とする商工業に益多く力を注ぐの已むを得ざるに至つた。是れ歐洲諸國に於て經濟の自然の趨勢に從ひ立國の基礎を商工に置くべきや、果た人爲を以て農業の衰退を防ぎ、商工と農を併立せしむべきやの議論の起つた所以であるが、國土最も狹くして而も世界到る所に植民地を有し、且つ其交通を保障するに足るの制海權を有する英國は商工立國主義を採り、此等の事情の齊しからざる大陸の諸強國は何れも相當の農業保護策を立てゝ農工商の併立を國是としたのである。

國民の主要食物の需用供給に關し上に述べたる歐洲

先進國の狀況を以て之を我國に比較すれば其間に非常の差異あることは何人にも明かなる所である、我國の農業の中にも砂糖の如き藍の如きは外國競爭に堪へずして倒れたのであるが、我農業の本體を爲すものは米作である。然るに此日本米なるものは外國より輸入する米即ち俗に謂ふ南京米と異なり、特に日本人の嗜好に適する品質を有して居るから、南京米の價格は多少安くても到底日本米と競爭することは出來ない。成程近年外國米輸入は次第に增加しつゝあるが、是は我國の多大なる人口增加に由て生ずる飯米の不足を補ふ爲めに行はるゝに過ぎない。之を需用する者も主として下級貧民の間に限られて居る。外國米は決して日本米に取つて代ることは出來ない。現に外米輸入の增加に係はらず日本米の價格は一般物價と同程度以上に騰貴しつゝあるのを見れば此事は明白である。但し日本人にして將來麵麭を常食とすることが出來るやうになれば日本の農業は歐洲の如く衰退するであらうが、米食を廢して麵麭に移るの難きは尙ほ日本字が不便たからとて羅馬字を一般に使用するの困難なると多く異ならない。是と同じく將來日本人が南京米を一般に嗜好する樣になつて我農業を衰退せしむることもあるまい。今日已むを得ず南京米を使用する下級民も將來經濟の進步に伴ふて生活程度が高まつて來れば爭ふて日本米を需用する樣になるであらう。而して此日本米なるものは今日の所では獨り內地及朝鮮に產するのみであるから、將來我が人口增加し且つ生活程度が進むに從ひ、日本米を本體とする我農業は益擴張せられざるを得ない。此點より見れば我農業は外國競爭に對して深厚なる天然の保護に浴し、歐洲の農業の如く經濟の進步に從ひ自然に衰退するものとは全く地位を異にして居る。即ち我國に於て農と商工と併立するは自然の約束であつて、人爲に由り之を破ることは決して容易の業でない。

此の如く我國に於ては農と商工との併立は自然の約束であるが、吾々は狹隘なる領土の內に是非とも主要食物を生產せねばならぬとしたならば、人口の增加に

伴ふて食物は益缺乏騰貴し、生活難は益甚しくなつて經濟の進步は妨げられ、遂に國民の元氣阻喪するに至るは明白である。白人種が今日の如く元氣旺盛にして各方面に發展し得る所以の一半は、半世紀以來主要食物の廉價豐富となつた爲めである。若し日本民族にして大に世界に膨脹發展せんとすれば將來益主要食物の供給を豐富にするの計を立てねばならぬ。之が爲めには第一に國內の農業に對して充分の獎勵を施すことを必要とするが、其の獎勵たるや技術の改良金融の整備の如き方法を採るべきである。決して外國より入り來る食物は關稅を課して之を排斥し、以て經濟發達の速度を鈍らしてはならぬ。否な吾人は更に進んで世界到る處に適地を求め、大に日本米の耕作を擴張して行くこと、恰も白人種が世界各地を開拓して其食物たる小麥を耕種し來たつたと同樣の方針を採り、一面には現在後印度諸國に於て多量に生產輸出せられつゝある南京米の品質を改良し、成るべく之を日本人の嗜好に適するものたらしめて廉價に輸入するの計を立てなくてはならぬ。如何に國內の農業を獎勵しても其發展の餘地は甚だ少ないから、出來る限り外部に於ける米作農業の發展を圖らねばならぬ。若し一派の保守論者の主張し、且つ現行關稅法の或程度に實行しつゝあるが如く、國內農業を利するが爲め食物輸入を排斥するの策を續行したならば、到底日本民族は世界に大々的膨脹を爲すことは出來ない。（「日本經濟新報」日本固有產業の發達參照）

以上農と商工との何れを國本とすべきやの問題に對する卑見を要約すれば、現時の我國に於ては其併立が自然の約束であつて之を破ることは容易でないが、出來得る限り農業の發展は將來之を國外に於て有利に行ふべきである。本來農業は氣候地質の支配の下に行はるゝものであるから、我農業の國外發展は頗ぶる困難な事業であつて、僅かに國內農業の不足を補充する從屬的の地位を占むることに止まり、到底も國內の農業が歐洲の如く國外の夫れに壓倒せらるゝやうな盛況を呈する事實は起らないと信ずるが、萬一此事實が起つ

て來たらば玆に初めて我國も幾分の農業保護の人爲策を施こすべきてある。元來商工立國には種々の弊害があり、就中社會的弊害は其の最も甚しきものであるが、余輩は國民經濟の商工業化し、國民生活の都會化し、即ち物質的文明の進歩することに付き、一派の保守論者の如く悲觀するものではない(太陽「物質的文明の前途」參照)國土狹小にして農業發展の餘地少なき我國に於て强て農業立國主義を行はんとすれば、忽ち食物の缺乏を來たして經濟の進歩民族の膨脹を不能ならしめ、其弊害は商工立國の弊害よりも更に甚しい。農本主義に由れは食物の自給自足となり、農民の間から强健從順な兵士が得られるから、國の獨立力が强くなると云ふ說もあるが、極端な農本主義を採れば食物の不足經濟の不振を來たし、其結果人口の增加が止まり財政は窮乏に陷るから、兵士を增すとも軍備を擴張することも出來なくなる。食物缺乏の爲め下級民の生活が特に困難となれば不健全な思想も自然に發生せざるを得ない。要するに經濟上に於ては併立主義が最も健全なものてある。

三

經濟の問題は以上に止め、是れより經濟と武備との關係に付ても余輩の併立即ち複本位主義を採る所以を述べる。議論の順序として先づ此の併立主義の意味に付き一言せねばならぬ。今の世に於て武備本位を採ると云つても、古へ羅馬人が各國を征服し、其貢納に由て國民の生活資料の一大部分を充たし、又は慓悍な遊牧民が近隣の部落を掠奪して生活を立てる樣なことは勿論あり得ない。今日は如何なる國民と雖も大に經濟の發展に力を注がなくては生存するの途はない。又一面には今日列國の關係は武裝に由て僅かに平和を維持して居るのであつて、一派の學者の信ずるが如き世界統一國の成立する迄は、如何なる國と雖ども全く武備を怠ることは出來ぬ、故に今ま國體として經濟と武備の何れかを採ると云ふも畢竟程度の差てあり、國民的勢力就中其富力に對する武備の程度割合に付き列國を比較した上て、或は經濟本位と云ひ、或は武備本位と

名くるのである。而して現在の我國は其の何れに屬するやと云ふに、歐米諸國に比較するは經濟の幼稚にして富力の貧弱なるに對し武備の甚だ强大なることは明白の事實であるから、極端に評すれば武備本位の國民とも云へるであらう。少くとも武備と經濟の併立主義を採つて居るものであり、決して平和なる經濟本位の國民とは云へないのであるが、余輩は將來の國是としても併立主義を主張するものである。之が爲め或は好戰國民と呼ばれ、或は人道に反すると云ふ批難も起るであらうが、此等の世評は敢て觀るを要しない。勿論是までの如き速度を以て將來も軍備の擴張を行ふことは益困難となり、强て之を實行せんとすれば破滅を招くの虞はあるが、兎も角我國は歐米に比すれは富力に對する武備の割合を一層强大にするを要する。從つて我國は併立主義とならねばならぬのである。其理由は二つある。

第一に我國は學藝や經濟の上から見れば世界の三四等國と稱せらるゝものに劣ること少なからざるに係はらず、能く短日月の間に强國の列に進み、先進國が血眼て彈丸黑子の地を爭ふて居る間に莫大なる領土を取得し、以て民族膨脹の根據を擴張し得たる最大原因は、我國民の尙武の氣象が現はれて、歐米との比較上國力不相當に强大の武備を有した爲めであることは爭ふべからざる事實である。此强大なる武備に由て贏ち得たる現在の地位を確保するが爲めには、大に經濟を發展せしむるの必要あるは勿論であるが、一面には少しも武備を緩めることは出來ない。今日の如き過大の武備より起る弊害の多大なるは認めざるを得ないが、我國民の自覺自信の動搖を防ぎ、政治上經濟上の地位を維持し得る所以の一半は此の强大なる武備に存することは明かである。故に國力に對する武備の割合を客觀的に列國と比較すれば、我國は武備を經濟と並べて國本とするが如く見へても、主觀的に我國の立場より見れば、少くとも現在の程度の武備と時勢に伴ふ所の之が適度の擴張とは積極的に我國の地位を向上せしむる爲め必要なのではなく、既得の地位を維持する爲めに必

要なのである。即ち主觀的には現在の武備は從たる手段である。尤も今日の武備に付て陸海軍の權衡を失し、其間に甚しき過不及があるとの批難はあるが、此事は後に至て一言しやう。

第二に余輩は我國運の維持の爲めのみでなく、更に之を發展する積極的の目的を以て武備を充實するの必要を主張する、即ち主觀的にも武備を經濟と相並べて國本とすることを主張するものである。第一の意義に於ける武備に付ては大した異議はないとしても、第二の夫れに付ては獨り外國人の間から殘忍なる非人道主義であるとの批難の起るのみならず、國内に於ても頑冥不靈なる非文明主義であると云ふ强大の反對があることゝ信ずる。故に余輩は先づ我國の立場より此併立主義の必要を論じ、次に世界人類より見て此主義の必しも不當ならざる所以を明にしたい。

先づ我國の立場から見るに、個人と同じく國民も競爭場裏に生存して行くに付ては、各自其長所を利用すべきである。日本人は戰爭に付ては遙かに列國の上に秀てゝ居ると云ふは必しも正當ではあるまい。西洋諸國民も種々の點に於て戰鬪上の長所を有して居るが、總體から見て我國民的勢力は兵力の上に最も著しく現はれて居る。元來西洋各國民は概ね個人主義であるに反し、我國民は國家團體に對して沒我主義であることは、彼我國民性の根本的差異である。而して我國民の沒我主義は如何なる方面に於て最も能く實現せらるゝかと云へば、軍隊を組織して國防に從事する場合である。勿論將來の日本人は議員を選擧するにも、商賣するにも、學問するにも常に公益を本位とするの思想を以てしなくてはならぬが、實際から云へば個人の權利公益の主張や、國家自治體を自己の利益增進の機關と看做して積極的に其政治に參與する自治權の行使は、主我的なる西洋の方に於て能く行はるゝに反し、生命財產を犧牲として團體の爲めに盡すことを必要とする場合、就中國防の事に當る場合には、西洋の主我主義は多大の缺陷を示す。然るに我國の沒我主義は此場合には理想的に實現せらるゝのである。一體に主我的な

西洋では個人の福利を本位として國家團體を客位に立たしむるのは避くべからざる勢であるが、我國に於ては國民性の沒我的なる結果として國家が個人の力を統合結束することが容易であり、從つて個人の能力に比較し國家團體の力は歐米に比し甚だ大となることが出來る。歐米諸國が他國に對して競爭する場合には間接に其國民個人の力に由て競爭せしむることを主とし、國家は之を援助するの地位に立つのであるが、我國は之に反し國家が直接に外國と競爭するの程度を強くすることが得策である。而して戰鬪の勇氣に於て我國民は世界何れの國民にも劣らざるものであるから、國民の競爭方法として歐米よりも武備に重きを置くとが必要である。尙ほ寒冷な氣候の下に生育した西洋人は古來より物質的生活の豐富なることを必要とするから戰爭上多大の不利あるに反し、我國民は將來生活の程度高まるに從つて次第に物質的要求の大となる傾向ありとは云へ、本來溫暖の氣候に生育し來り、淡泊瀟洒の嗜味を有して居るから、西洋人に比すれば大に簡易質朴の生活に堪へることが出來る。此點も武備戰鬪の上に於て我國民の一大長所である。

武備を強大にするには主我主義よりも團體主義の方が利益であるは上述の如くであるが、世人或は我國民の團體的なるは一に文化の幼稚なるが爲めであつて、進步するに從ひ我國民も主我的となり、從つて將來武備を擴張するの政策は益不利益となるべしと云ひ。或は我國民の自治自立の能力少なくして一般文化の歐米に如かざるは、一に從來の團體主義に由り個人の自助の必要を減ずると同時に其自由の發展を妨げた爲めてあつて、將來は此根本方針を一變し、歐米の如き個人主義を採らねばならぬ、假令之が爲め兵力の減退を來たしても患ふべきでないと主張する者もある。然るに彼の主我的にして我の沒我的なるが如き根本的國民性は文明の進步に由て一變するものではない、從つて又人爲に由り我國の根本主義を抛つことも出來ない。將來に於ても西洋は大體個人本位に由るの外なきが如く、我國は團體主義に由るの外はない。勿論今日の如

く國民の元氣旺盛となり、又時勢の變遷急激となれる時代に於て、國家團體の力に由り萬事を支配するのは不能且つ不利である。我國も將來は成るべく個人の自由を認め其人格を尊重して各自獨立の發展を爲さしめ、以て國家社會の進歩を計るを必要とするが、我國に於て此の如く個人の權利自由を認めるのは西洋の如く個人を主として社會を從とするのではなく、國家團體を本位として相對的の個人主義を認めるのである。此の如き相對的の個人主義は將來發展するに相違なく、又其發展を助長することも出來るが、之が爲め國家團體の地位が更に薄弱となり、從つて武備の充實に不都合となるが如き虞はない。現に維新以來根本的の法律制度は殆んど純個人主義となつたけれども、我國民の公共的沒我性な新社會に於て必要となれる新なる態様に於て現はれ來りつゝある。今日の如く忠君愛國の精神の盛なるは古來の歷史に比類なきが如きは其一證てある。

武備を國本の一とするには勿論我國民古來の特質たる尙武の氣象を維持して行かねばならぬ。然るに或論者は尙武を以て殘忍粗野を意味するものとし、未開時代には必要であつても立憲法治の今日には不適當であると反對するてあらう。特に尙武の氣象を盛んにすることは一面政治上武斷主義の跋扈を來たすものとして反對するてあらう。併し乍ら今日尙武の氣象を維持すると云ふことは決して論者の想像するが如き意味を含んで居ない。殘忍酷薄と云ふ點から見れば團體主義の下に發展する尙武的氣象よりも、寧ろ瞬間の休止なき激烈な生存競爭を惹起する個人主義の方が恐るべきである。古來尙武の精神を缺いて居る平和的な猶太人の如きは最も酷薄な性格を有して居る。世界第一の平和的國民と云はるゝ支那人の如きも日本人に比すれば甚だ殘忍なる個人主義者である。要するに尙武の氣象の盛なることは決して個人相互の共同生活に於ける殘忍酷薄を意味するものてない。又論者が尙武と云ふことを以て直ちに武斷主義を聯想するのは、主として武士階級の支配した舊社會を腦裏に畫くが爲めてある。四

民平等なる立憲政治の今日に在ては武備を盛にすることゝ武斷政治とは必然の關係はない。成程尙武主義を採れば軍人に大なる社會的地位を與へねばならぬが、之れと武斷政治の實行とは必しも同一でない。國民が確かりして居れば所謂軍人跋扈の弊を生ずることは出來ない。現に維新以來文官と武官との勢力は一消一長して居るが、大體から云へば我國は常に尙武主義であつた。而も尙ほ外國人から見れば急激に過ぐる程の進歩主義を實行し來つたてはないか。要するに尙武主義に由ればとて必しも論者の憂ふるが如き弊害は生じない。國民の注意に由て之を防ぐことが出來る。而して一面には國民の尙武の氣象を維持することは文明病とも云ふべき文弱の弊を矯正するに必要である。元來我國民の特性は意力よりも智力に秀で、且つ上下に通じて優美なる嗜味を有することであるが、若し此特性のみであつたならば我國民は文弱の弊に陷つて夙に衰亡の運命を免れなかつたであらう。只だ此特性を有すると同時に古來尙武の氣象が盛であつたから、能く文弱の弊を矯めて國民の元氣を維持し、世界最古の國でありながら國民が尙ほ青春の活力を有して居るのである。故に今後も此の尙武の氣象は是非とも維持して行く方法を講じなくてはならぬ。

以上は我國民の立場から武備經濟の並立主義を論じたのであるが、更に世界人類の上から見ても此主義は必しも批難することは出來ない。西洋人は我國民の尙武的なるを見て野蠻と嘲り人道に反すると咎めるのであるが、元來主我的な西洋社會の理窟から云へば、各個人が他人に對し權利々益を主張するのは決して不道德でなく、却つて妄りに權利々益を抛つのは自尊自重の足らざることを示し、又之が爲め世人をして妄りに他人の權利を侵害するの行爲を敢てせしむるの端を開き、社會の規律を紊亂するの原因となると云ふのである。國と國とが對立する場合も亦之れと齊しく、互に其利權を主張することを不道德と云ふことは出來ぬ、各自に自助自衞の途を講ずるが却つて世界平和の爲めに必要であると云へる。或は各國の利權の主張は須ら

く平和手段に由るべく、武力を以てするは不當であるとの說も出るであらう。併し乍ら我國が武備を盛にすることが果して世界の平和を攪亂するものであるか、又は却て平和を保證するものであるかと云へば寧ろ之を保證する場合が多い。我國の既得の利權を保護するに付ても、新たに利權を獲得するに付ても、兵力を强大にした方が不法の侵略を試みしめず無益の反抗を企てしめず、平和に事を行ふ所以となる。貧弱民族の並び立てる東洋に於て、若し日本の武力が弱かつたならば世界の平和は今日よりも更に危險に陷ることゝ信ぜざるを得ない。少くとも實力の小なる後進の我國が尙武主義を採ることを以て平和攪亂の原因となるとの斷言は何人にも出來まい。要するに我國民が生存し發展するに付て我國の長所とする兵力に比較的多く依賴することに付き世界は反對することを得ない。若し之に反對せんとするならば先づ我國民には膨脹發展の權利なきこと、即ち我國の文明の性質は劣等であつて世界に其勢力を張るの價値なしと云ふことを證明しなくてはならぬ。然るに此明の價値の大小に付ては勿論意見の一致を見ることは出來ない問題である。只だ我國民が種々の異文明を調和融合するに付き特別の長所を有するの一事は、我國民の膨脹に大なる人道的價値を與へるものであることを忘れてはならぬ。

四

輓近列國の競爭は日に激烈となりつゝある。這は主として交通の進步した結果各國民の接觸衝突の機會の多くなりしことや、現代文明が著しく物質的方面に向ひ、從つて各國民は有限なる天與の物質に付て互に分け前を爭ふの勢の强くなつたとや、各國に於て文化が下級民衆の間に普及するに從ひ、其特有の民族的感情の勃興し來つたとに原因するものであるが、斯く國際間の競爭の激烈となるに從ひ、本來武備本位にあらざる西洋各國も武備擴張上の競爭を生じ、遂に此勢が持續するときは各國共に破產すべしとの懸念を生ずる者少なからざるに至つた。尤も輓近の軍備擴張は主として海軍の方面に在るの一事は注目を要する。是れ固よ

り各國利權の範圍が擴張せられ、特に海外未開の地に勢力を扶植するに至つたからでもあるが、更に他の一大原因は軍備擴張を國民の尚武の氣象に基て行ふことが六ケしいから、財力や技術の力を以て爭はんとするに至つたからである。個人本位の英國では如何に先覺者が努力しても徴兵制度を實施するの望なく、從つて陸上の防備は極めて多費にして且つ不完全なるに係らず、一面には世界第一の海軍を備へて居る。金と技術があれば軍艦は幾らでも出來る。要するに西洋各國の軍備の競爭は兵力の競爭より轉じて財力の競爭に移るの傾向を示して居る。而して我國は西洋に比し國民的勢力に對する軍備の割合を一層大にすべしと云ふことは、財力競爭の意味を多く含む所の西洋流ゝ軍備擴張を方針を採るべしと云ふことではない。此の如き財力競爭は我國の短所であるから、我が軍備充實には別の方針を採らねばならぬ。勿論今日の戰爭は肉彈のみでは勝たれない。大に財力機械力に依らねばならぬ。又列國の尨大なる海軍に對する權衡を保つ爲めにも、年々海外に擴張せらるゝ經濟上の利益を防禦する爲めにも、今後相當に我海軍の擴張を要するは明かであるが、一派の論者の如く我軍備は將來海軍に全力を傾けて陸軍には大々的縮小を行ふべしと云ふのは、是れ日本特有の尚武主義を拋つものと云はねばならぬ。長所を捨てゝ短所に依らんとするものである。尤も此種の陸軍大縮小の說は朝鮮併合前に平和主義者に由て唱へられたものであつて、朝鮮を併合し半は大陸國となつた今日は、以前の如き陸軍大縮小を主張する者はあるまいが、大體尚武主義に反對する者は海軍本位を主張する傾向がある。是れ獨り陸軍の性質が海軍に比して侵略的であるが爲めのみでなく、兵力の競爭を避けて財力の競爭に轉ぜんとするの意味が自から含まれて居る。余輩の主張に合する軍備充實の方針は人民に租稅の負擔を增すよりも兵役の負擔に重きを置き、又兵器戰艦の分量の增加よりも忠君愛國の精神を盛にし、尚武の氣象を强ふし、戰鬪の技能を練るに重きを置くのである。

（完）

農業は工業の刺戟を得て始て大に發達す

慶應義塾大學校長　鎌田榮吉

私は嘗て外國人に問はれた事がある。日本は昔から農業國である、然るに其既耕地と未耕地との割合が無論山を除いての話だが、外國のに比較しても薩張り進歩して居らぬ、是は如何した譯であらうと、其時私は、日本は農業國なるが故に農業は發達せずといふ妙なパラドックスを以て答へた。

抑々農とは何であるか、農は我々の食料と原料とを生産するものだ、即ち農産物の需用があつて農は生れるので、是のない處には農は生れはせぬ、然るに今迄の日本は如何であるかといふに、農業國であつて工業などは薩張り振はない、それ故其農産物は只其國內丈の食料に供せられ、僅かの製作品の原料とせらるゝに過ぎない、それ以外に澤山作つた所で、實際の需用より超過しては捌きが付かぬから、勢ひ作らなくて濟ますといふ事になる。元來穀物の如きは、徒らに嵩あり目方のあるもので、其儘では運搬に非常の勞力が要る。外へ持出すには困難である。外へ出すには、如何しても容積、重量と共に少く、それで實質に富んで居つて價値の多いといふものでなければならぬ、それ故農産物が農産物の儘ではいけぬ、十分にそれを原料として加工し、容積、重量の少い割合に實質の多いものを作り出さなくてはならぬ、即ち工業なるものが盛でなくてはならぬのだが、惜い事には日本には今迄それが少ない、需要を待つての供給である、農産物の大なる需要があつて、農は初めて大に興るべきであるのだが、前に述べた樣な日本の國情を以てしては農業の振はぬは當然の事だ、一國農をのみ事とすれば農は決して振はない、之を刺戟すべく實に工業を要する、農産物よ

り食料を得て勞働し、原料を得てそれに加工する工業家なるものがあり、其工業が盛に行はれる處に於て初めて農は盛なるべきものである。

此の如く農と工とは相待つものだが、農工獨り盛にして商は振はないといふ譯にはいかぬ、其既成品を外に出し、外より又多くの未成品と既成品を持ち來す、是が即ち商業ではないか、それ故農與り工振ふの國には商も亦大に盛にならなくてはいけぬ、即ち本義としては三業常に鼎立すべきである。

米國の如きは地域廣大にして自ら立派の農業國であるけれども、而かも尙ほ工業に意を用ひ、之に多大の力を注いで居るのは、前に言つた樣に工は實に農の刺戟であり、農のみにて農の盛なるべきでない理由から來て居る、英國の如きは工と商とが並び盛に行はれて、その爲に在來の農業は大に衰へたといはれて居るが、其實左樣ではない、只衰へた樣な外觀を呈して居る丈だ、農民が減じて商工に轉じたといふも、其實農らも減じて居らぬ、其大に減じた樣に見ゆるのは、實際には分業が進んで農民は純粹の農民丈になつたからである、即ち以前には、鍬、鎌、桶といふ樣な農具は、皆農民自身で造るか、左もなくば農村に混じてそれ等を造る工人が居つたもの、所謂る家庭工業なぞものが存在したものであつたが、今は製鐵所も出來、其他の諸工場も出來るに及んで、從來の家庭工業なるものは農民若くは農村と分離して仕舞つて都會に移り、都會からしてそれ等の農具を製作し、遠く田舍に給與する有樣になつた、其結果農民は其手、其村より工業なるものが省け、純粹の農民と成り果てたのだ、それ故農民の數の減じて見ゆるのは決して農業其ものがそれだけ衰頽してはない、唯純化したに止まるのである。亞米利加露西亞の小麥が輸入されるとはいふもの丶、矢張り英國在來の農業で引足りないからの事である。

農工商の關係は此の如きものであるから、三業は當に鼎立てなければならぬけれども日本の現在よりして言へば、差當りは工業を奬勵せなくてはならぬ、何となれば農はそれ自身では到底發達を見るべきでなく、

工業からの刺戟があつて初めて大に振ふべきてあるのに、日本は其方面に於て幼稚てあるのは資本其他の關係もあるが、工業の狀態が是ては、農業も進み樣がない、しかし動力の使用も興り特に今日に於ては電氣工業の漸次の發達に伴ひ、地方にも亦自然の勢、工業の中心が出來る、從つて其處には、農產物を食ひ、原料を得て加工するものが集まるのだから、其附近の農業はそれが爲に促されて大なる發達を見るに相違ない、その結果商業も亦大に勃興すべきてある。

凡そ物は凡て連絡のあるものて、場合によつて農工商中の其一つが一時最も發達するが如き變態を生じても、それは只暫時の現象て、軈て足並が一つになつて共進の形となるものてある。譬へば五體の相待つが如きものだ、一つ身體てあるのに胃のみを獨り強くして心、肺は與らずといふ譯にはいかぬ、一ヶ處悪くなれば他にも影響し、一ヶ處惡くなれば又同じく他に影響する。從つて一つ丈けを進めて他を其儘に置くといふことは出來ぬ、農工商は互に相待つて進むを本義とする。只其短なる者から進めて行かねばならぬ、工業なき國の農業は或る程度以上には如何に保護しても進み得ない。

足食足兵使民信之矣

河上肇

中央公論記者足下。貴問もし農工商武の何れを以て立國の基本とすべきやと云ふに在らば、其の所謂立國の基本なる語の解釋如何に依りて、余は四者何れを以て立國の基本と爲すに足らずと、答へざるを得ぬかと

も思ふ。乍併、もし之を解して、政治の次第その何れを先きにすべきものなるかとの質問とせば、それは既に何千年かの昔に、子貢の孔子に提出せし疑問と同じ事に爲るかと思ふ。

昔は子貢政を孔子に問ふ。子答へて曰く、食を足し、兵を足し、民をして之を信ぜしむ矣と。茲に食を足すとあるは即ち經濟のことにて、兵を足すとあるは即ち武備のこと也。而して記者足下の所謂農工商も亦た經濟のことには外ならざるべければ、これ聽て孔子の足食に當り、又た足下の所謂武は即ち孔子の足兵に當るかと思ふ。されば孔子は、農工商を第一とし、武を第二とする說である。

記者足下。余は茲に余の懷抱する所の經濟的唯物史觀を論述するの餘暇を有せざるを遺憾とする。併し兎も角も余は一種の經濟的唯物史觀論者なり。故に政治の順序は、何事よりも先づ經濟の發展を計ることが第一で、これが基礎と爲り根本となり原動力となつて、其の上に種々の建築も出來れば、枝も榮へ花も開き、凡てが之に伴ふて動き出すものと思ふ。故に余は足下の質問に答へて、先づ農工商を第一にすべきものと云ふ。只だ其の理由を茲に詳述するの機會を有せざることは、余の飽くまでも遺憾とする所である。

之に依つて問題は既に一段落を劃したり。而して第二段の問題は、自ら分れて二と爲るかと思ふ。第一は農工商の何れを主とすべきやの問題で、第二は陸軍海軍の何れを主とすべきやの問題なり。

農工商の三者は決して何れをも偏重すべからず、三者は宜しく併行鼎立して進歩せしむべきものなりと云ふは、余が多年の宿論である。而して其の理由は、嘗て拙者「日本尊農論」に略述した事がある。尤も此の著述は六七年前の舊著で、遺漏と誤謬と固より少からざるものなれば、更に新たなる見地と新たなる材料とを補足して再び同じ主張を試みんとするの念は豫ねてより萌し居れども、平生餘閑に乏しく未だ其の意を達し得ず。乃ち茲にも亦た之を詳述するの餘力なし。足下、願くは余が怠慢を許されよ。

若し夫れ陸軍海軍何れを主とすべきやの論に至つては、余は全くの門外漢である。併し、別項戸田博士の論にもあるが如く、陸軍と海軍とは大に其の性質を異にするや疑なし。陸軍ならば兵何萬と號すといふ方にて、即ち人が主なり、打ち出す彈丸は即ち所謂肉彈である。海軍ならば艦何萬噸と號す方にて、即ち物が主なり、打ち出す彈丸は即ち所謂財彈である。而して今ま之を日本に就いて云へば、其の長所は肉彈の强大にして且つ豊富なる點である。余は前號の本誌に於いて、日本獨特の國家主義に就き、其の觀察の一斑を述べたり。而して若し余の右に述べたる所にして誤ならずんば、日本人程ど國際間の戰爭に當り有力なる肉彈を有する國民は無い筈である。故に若し其の長所に立脚すと云ふが最良の政策ならば、日本の武備は陸軍が主たるべきもので、海軍は縱ひ對等の發達を期するとしても、其の性質は從たることを免れ得ざるものと思ふ。併し長所に立脚すと云ふが果して最良の政策なるや否やは則ち疑はし。蓋し余の見る所に依れば、總じて日本人は物的文明に於いて太く後るゝ所あり。從つて其の長所が人的文明に在るが如く思はるゝは、其の實多くの場合に於いて、物的文明の後れ居る必然の隨伴現象かと思はる。例へば、音樂は如何。三味線と云ふ簡單な物的設備にて梁上の塵を動かすと云ふ其の手腕は、西洋人の或は驚歎する所ならん。乍併、其の手腕(即ち其の人的方面)に於いては、西洋人たる縱ひ遙に我が日本人に劣るとも、其の樂器(即ち其の物的方面)に於いては、西洋人たるもの遙に我が日本人に優るが故に、――而して人的手腕は必ずしも時代を追ふて益々發達する能はずとするも、獨り物的手腕は其の發達殆ど際限なきものなるが故に、――到底日本の音樂は西洋の音樂に叶はぬ事と爲つた。又た例へば、裁縫は如何。針と云ふ簡單至極な物的設備にて樣々の刺繡を爲すと云ふが如き其の手腕は、是れ亦た西洋人の驚歎する所なるべきも、而かも彼等西洋人は、斯かる手腕は兎も角、別に裁縫機械と云ふ巧妙なる物的設備を有するが故に、遂には日本流の裁縫も西洋には叶はぬ事

となり行く也。此の如きは眞に一端を擧げたるに止まれど、若し種々の方面に斯かる見地を擴げ行かば、肉彈主義と財彈主義と畢竟は何れが勝を制するに至るべきか、百年の後の命運自ら明かなることを得るかと思ふ。否な今の陸軍が肉彈主義と云ふも、實は程度のことにて、我國の支那に勝ち露西亞に勝ちたる、所詮は亦た大砲の賜なり。大砲の賜なりとのみ云ひては語弊あらんも、大砲なくては固より叶はざりしことと也。

此の如く論じ來る時は、吾人は容易に肉彈主義の全能を信ずること能はず。而かも財彈主義に依らんとする、是れ即ち軍備の經濟化なり、兵の農工商化なり。故に先きに言はずや、政の次第は先づ食を足すに在りと。足下、論誠に疎なりと雖も、余の今ま信じつゝある所は、大略此の如し。之を以て貴答と爲す、請ふ備はざるを許されんことを。拜復。二月二十八日夜。

偏重すべからず

高等商業學校長　澤柳政太郎

日本の將來の富强を圖るに商工業を盛にすべきは殆んど論はなからうと思ふ、若し商工業にして盛でないならば各國と競爭場裏に立つて行くことは出來ぬ、然らば商工立國主義で行くべきかといふに、見様によつては左様もいへやう、商工といつても細かにいへば更に二つに別け得る、即ち商を主とするかといふ問題と工を主とするかといふ問題との二つが出來る、國によつては商を主とする事もよからうし又工を主とすることもよからう、是れは其國の位置により、又其國民の性質等によつて決する事だと思ふ。

然らば我日本は其位置並に國民の性質等より、何れを適當とするかといへば大に研究を要する、從來商工の盛ならぬ事は明かである、けれども決して從來の歴史が我國には其位置並に國民の性質上商工業は不適當なるべきものなりと證明するものとはいふことが出來ぬ、何となれば今迄は鎖國が久しく續いて來たので、國民は徒らに武陵桃源の夢を貪つて居たのだから、此間に立つて商工の能く發達するを望むは難い、それ故從來の事を以て直に我國の將來の事を定め難い。他の各國ならば隨分過去に顧みてそれによつて將來を定むる事は出來やうが我國に於ては難いのだから、新に國民が思慮を盡して考へなくてはならぬ。

若し日本に於て工業より商業が適當なら商業を主として工業を從として宜く、又その反對に商業より工業が適當せば工業を主として商業を從として宜いけれども、是が甚だ分らぬ、國の位置の四面海を以て環らされて居る點から見れば、商業に或は適當するかと見ゆる、即ち昔の地中海岸に起つた商業、今の英國に起つた商業の如くあるべき樣であるけれども、然らば我國に於ける海運の便は十分かと顧ると、誠に遺憾である、裏日本には殆んど港灣がない、表日本と雖も非常の人工を加へるなら格別、天然の良港灣は無い。

然らば工は如何であるか、其方面で考へて見るに、從來は石炭、鐵の產出といふことが凡ての工業に取つて須要のものであつたけれども、日本には其石炭が餘り潤澤とはいへぬ、鐵の如きも少い、けれどもまだ十分の調査はないが水力は至る處に在る、然るに將來は電氣が石炭に代るといふ說があるから、之を以て見れば人意を强うすることが出來、石炭の餘り豐富でない事は憂うるに足らぬかも知れぬ。

又其工業といつてもウエンチッヒ教授の言つた樣に、日本に於ては將來は美術工藝を盛にすべきである、大規模の機械工業では到底西洋諸國を凌駕することは出來ぬといふ事が事實であり、そして果して能く其美術工藝に於て優秀なる技倆を發揮し、世界を背負つて立ち得る程に至るならば、石炭、水力共に無くとも

くなる、此點に於て今少し精察しなくては工業國と爲り得るともいへぬし、又爲り得ぬともいへぬ、要するに其國の位置、其國民の性質より考へて、日本は商業國たり得ぬともいへねば、又大に發展して他の諸國を凌駕し得るとも言ひ難いと同じく、工業に於ても同樣である。即ちまだ、日本人が何れに於て最も適當し最も成功すべきかといふことは解決されて居らぬ、未定の問題とせなければならぬ。之を研究して見たならば果して何れに重を置くべきかが解決し得るか如何かも分らぬと思ふけれど、兎に角少くとも現在に於ては何人も恐らく斷言し得まい。只信ずる所だけを言へとなら言へもしやう、即ち工業に携はるか若くは工業の學問を修めた人であるなら多分專ら工業を盛にすべしといふであらうし、商業に携はるか若くは商業の學問を修めた人であるならば、又多分專ら商業を盛にすべしといふであらう。けれども之を公平に冷靜に考へるならば、軍配を何れに上げて宜いてあらうか、何れに上ぐるも六ケしかろうと思ふ。兎に角是は問題として大に考ふべきであると信ずる。

立國の大本を何れに置くかといふ事になると之を決定することは大問題である、けれどもそれが容易ならず、即ち少くも現在に於てはそれが決定し居らぬとすれば已むを得ぬ、當分併進を圖るを順序とする、即ち商工の併進といふ事より外はない。此うして商工何れに重きを置くといふ事なしに進み行く中には、それが試驗となつて日本人は兩者の孰れに居所のあるかが發見されやう、即ち遠き將來には其孰れかに主位を定むるとしても、現在に於ては先づ何れにも偏せずに併進を圖るといふ大體の考より外には何もない。具體的に今日政府の考又は識者の考の何れにあるかは知らぬ、政府が果して商工の併進を策し、民間もそれを了解し、教育の方針も亦それに從つて居るか否かといふ樣な事は別問題として、私は只一己の考として、現在に於ては商工併進より外に如何ともし難いと思つて居る。

農は然らば如何といふに、商工に比すれば重きを置かぬ樣に見ゆる、が倘ほ考へて見るに、私は次の樣な

實際で農を必要と思ふ。國民の衣食住、といつても其主なるものは食料、それから衣住の原料であるが、此等の類は商工さへ發達すれば内地に產出せずとも供給を世界から仰ぐことが出來る、卽ち衣食住の資の大部分は内地に產せざる可からずといふ議論は、經濟の世界共通となつた今日に於ては餘り必要ない樣である。けれども異なる見地、卽ち國民の體格の上若くは國民精神の堅實の上からいふと、農工商の中農が重要の要求に叶ふものを出す部分である、場所で分けていふならば商工の中心たる都會の人民は田舍の農民に比ぶれば劣つて居る、農民は實に其體質の强健な點に於て都會の人民に優るのみでなく、其氣質の質實とか誠實とかいふ點に於ても亦大に優つて居る。

農は經濟上の大本とは今日では言へぬかも知れねど、國民の誠に健全なる、そして純潔なるものを出す階級たるを失はぬ、此意味に於て農は餘程國家に取つて大切なものと思ふ、最も見易い所でいへば兵力である、兵力といつても其器械や武器の如きは金さへあれば如何樣にも出來るけれど、是のみでそれが强き所以のものではない、其兵卒の質朴で規律を嚴守し、其上體力も强健である處に於て初めて其强みのあることだと信ずる、之を然りとするなら兵の多數は須らく農民よりして出すべきものと思ふ、然らずして其大部分が萬一都會人士より出るとしたなら、其兵力は必ず甚だ弱からざらを得ぬ。

單にそれのみではない、又都會で商工業に於て成功し發展する人を見ても、何れの時代でも地方より出るものが常に其多數を占めて居る、都會人士は如何しても三四代からして身體も弱くなり、精神も亦之を極端にいふならば墮落して仕舞つて、其父祖の遺傳あるに拘らず、社會に立つ上に十分な資格を備へた優勝者たる事が出來ぬ。現に今日に於て、士族の商法といつて世に笑はれて來ては居るものゝ、其頭角を現はしたものゝ多くは果して何人であるか、其笑はれて居る武士でなければ則ち農民ではないか、父祖傳來のものも絕無ではないけれども極めて少い。則ち商工に於ては二

三代續くと人種が段々に寧ろ退化して行く樣である、斯ういふ點から考へると農は甚だ大切なものである。農それ自身の爲に大切でないとしても商工業の爲に或は善良なる兵卒を得る上に必要である、更に廣くいへば全國民の强健なる體格を維持し行く上に就いても亦大切といふ事がいへると思ふ。

然るに現況は如何といふに、都會は膨脹し農村は衰頽するといふが世界を通じての勢である、そして日本にも此傾が追々に現はれて居る、都市の發達は農村の移住民を待つて成るのだから、つまりそれだけ農村の人口が減少するのだ、が今日の處でいへば東洋に於ける支那の如きは別として、世界で日本が先づ農民の割合の最も多い樣に思はれる、けれども此勢で段々に推し移つて行くならば遂に大害を釀すに至るなきを憂へざるを得ない。

是に於て農業は決して輕視すべきものではないと考へなければならぬ、特に之を政策の上から見るに、農民の負擔が段々に重くなれば、益々此農村は疲弊して仕舞ふ事になる。具體的に考へて、何故農村から都會に移るかといふに、農村では發達の望がなく、又生活が次第に困難となつて、日々齷齪と働いても食ふものも碌なものが食へず、衣るものも碌なものが衣られず、極めて粗末なもので我慢をする、樂とては殆んどないといふ樣な事情から、思ひ切つて鄕里を棄てて都會に出て、仕事を探して幸福を求め樣とすることがその動機となるのだ、それを今全然農に重きを置かぬとなると、其都會に移住民を集中する勢は益々長ぜられる。

今日の政事では少くも參政權といへば、國會縣會は勿論の事、農民の利害を代表するものが多く議員に擧げられて居る、それで都市では常に商工の利害を代表するものの少いのを歎じて居るから、農民は樂して商工が獨り苦むかといふに左樣ではない、農民は隨分誅求に苦んで居つて內情を知れば頗る同情に値するものがある、それ故今商工を本位として保護し農民を其犧牲とするに至ると、農民或は農村に取つて重大なる關係を生じて來るだらうと思ふ、だから大に商工を進め

なければならぬといつても、又農業を顧みずして宜いとはいへぬ、或る點からして農は甚だ大切である。鎖國時代に農を立國の大本としたのは、農より外に衣食住の資を得ない、農のみ獨りそれを供給するからてあることは明白な譯だ、今日ては其意味てはない、前に言つた樣に異なる意味からして農業の必要といふことが起ると思ふ。斯樣に說いて來ると立國の大本は農工商の三に待たなければならぬこととなる。則ち何れを特に重んずるといへぬ事となる。

從來政府が此等の問題に對して答ふる所は、三者とも重んずべしといふか如く、其意見は、一見甚だ平凡らしく又曖昧な樣てはあるけれど、此中に大なる眞理が存在するんてはなかろうか、況んや今日の如くに、經濟は世界共通となつて來たとはいふ條、國家主義は益々發達して來る、更に帝國主義といふ考も出て來る、イッ何時平和が破れるかも不祥の事ながら期せられぬといふ時に當つて、假令一時なりとも鎖國時代に立至ることのあるも知れぬ、此場合も豫め考へ置くべき事である。農工商何れも共に發達を圖れといふ說は、何れの事業にも至つて都合の宜い說といふのみてはなく、眞正の理窟から推して考へても如何も左樣いふものてはなからうか、甚だ旗幟の鮮明ならぬ意見の樣てはあるけれども、如何も私には左樣いふ樣に思はれる。

今日の農工商の實況を通觀すれば、無論商工業は農業に比して其進步最も後れて居るといつて宜い、其生產する所の價額に就いて見ても、何といつても日本ては農が最大てある、商業も極めて少く、工業も亦今日に於ては極めて少い。それ故目下其進步を圖る點からいへば最も不振なる商工業に最も多く力を籠めなければならぬ、左樣てなくては三業が略ぼ調子を合はせて行くことも出來ぬ。といつて農業を犧牲にしても其進步を圖るべしとはいひ得ぬ、それは今も特に言つた如く農村の衰へ行く今日てあるから其點も大に考へなくてはいけぬ。

扨て然らば、更に如何にせば商工業を盛にし得るかといふに、それは國家の施設に待つ所も多く、民間の

經營に依る所も多い譯だけれども、結局は商工業の發達は教育の力に依る外はないと思ふ。商工業の發達に於て最も成功し居る獨逸の有樣を見ると最も能く證明し得る。然るに日本ては如何かといふに、實業家の有力者或は實業界の有識者の如きても、此に重きを置いて居る人は極めて少い、其多くは只直接に如何にして資本を集むるかといふ樣な事にのみ汲々して居る、是は甚だ遠い慮のないものと思ふ、特に又教育といへば、日本に於ては、就中實業界よりいふと、實業教育の必要といふ事だけは一應認める、それは元より必要てあるが、併し獨逸の實業の發展に考へるに、それ等專門の教育以外、純粹の學問、則ち純粹の理學化學等の發達に力を注いだことが、其進歩を促すに於て與つて大に力あるのだ。然るに日本には此點に迂濶なる考を持つものが甚だ多い、特に實業に關する學問の方のみを關係あるものの如くに考へ、其他の純粹の學者のやり居る方の學問は毫も關係ないものの樣に思つて居るのは甚だ遺憾の事と思ふ。商工業の發達を期すべく特に此方面に於て猛省を望む。

立國論

法學博士　神戸正雄

日本が其國民の最得意とする所のものを採つて立國の基礎と爲すべしとせば、日本は或は武を以て立國の基礎と爲すべきものなるやも知れず。然し今日の時世に於て果して武に偏することによりて國を立つることを得るや。經濟上の後援なくして果して能く武威を振ふことを得るや。特に時勢の變遷は果して日本人をし

て永く武人として恰好なる資質を保持せしむるや。偏武の日本にして果して永く世界の同情を受くることを得るや。怪しみ且つ疑はざるを得ず。現在の日本の國策は或は此方面を取りつゝあるやうなるも、吾人は窃かに其運命の憐れむべきものなるを想ふ。

若又日本が其地位の形勝を利用することに重きを置きて立國の基礎を定むべしとせば、或は日本は商業交通を立國の本とするが可なるも知るべからず。日本は實に東亞の門戸に位し、亞太陸鐵道の完成、巴奈馬運河の開鑿は益々日本の商業交通上の地位を高めつゝあり。斯くて日本は亞細亞に於ける英國の地位を占むとも稱せらる。併し之につきては第一に疑問となるは、日本人の性格が果して商業に適當せりやなり。少くとも從來の成績に依れば、商業は農工よりも日本人には不適當なるが如し。交通業の方面は兎に角、商業の方は覺束なし。然るに强て之を立國の本とするの果して得策なりや否や。特に商業は元來農工業の附隨として發達すべきものにして、一國農工業の基礎なき商業は洵に心細きものなり。國際取次商業によりて活動し得べきが如くなれども、競爭の烈しき此舞臺に立つて柄にもなき日本人が果して成功すべきや否や掛念の至なり。

日本の氣候風土と日本人の性質とによりて判斷せば、農業も亦必ずしも立國の大本となり得ざることはなきが如し。特に日本には古來農は國の本なりといふ信條もあり。此信條は開けざる世の遺物といへば其れ迄なるも、現にも偏農主義は仲々に勢力あり。又海外特に亞米利加、布哇などに於ける經驗によるも、日本人は農業者としては成績惡しからず。例を外に求めずとも、内地にても農業は割合に良く行きつゝあり。然し日本が農を本とし居りては國富の增殖の覺束なきことを覺悟せざるべからず。文明の進歩にも後るゝことを承知せざるべからず。特に小なる日本に甘じて、大なる日本を實現する能はざることを期待せざるべからず。斯の如きもの果して進み行く外界に對して我同胞の甘受するを得るものなりや。進みたる教育を受けた

る日本の才幹の爲めに果して用ゐらるゝの所の供せらるゝものにや。夫の現に見る所、人の田舍より都會に出て行く風潮の如きは、世の進むと共に抑制せんとしても抑止すべからざるものなり。

予輩は農商武孰れに偏するの策をも排す。予輩は工業立國を主張するものなり。何が故ぞ。

先づ日本が工業立國を採り得る所以の第一は日本の地位が工業國たるの資格を具ふることなり。前に日本が商業交通上に優良なる地位を占めつゝありといふは、軈がて工業國にも適當なる地位たるなり。此地位に據るに於て原料は實に各方面より意の儘に蒐集し得るなり。其產物を歐米に對して送り得ることは、尙ほ暫らく多きを望むべからずとするも、亞細亞、南洋、濠洲等には尙廣大なる販路を有するを得べし。固より行く々々は歐米にも其販路を擴張するを得べし。

第二には日本には幸にして工業の助成品及動力が豐富なり。石炭及水力が豐富なり。以て盛に工業を營むに足る。鐵の如き重要材料の乏しきは最遺憾なるも、英國などにても原料の鐵鑛を外國より輸入するの實例もあれば、他の方面にて補ふことにて滿足し得べし。

第三には日本人の性格が工業に不適當ならず。勿論目下の處は日本の技術甚だ後れ、日本の職工には思はしからざる所あれど、其は立國の大本とする以上、今後奮勵努力以て之が進步改善を計るべきのみ。日本人は元來怜悧にして又溫良なる所もあれば、訓練の如何によりては此方面にも成功を擧げしむることを得べし。

而して日本が將來工業を立國の本とせざるべからざる理由の第一は實に增進止むことなき人口を吸收する最良の場所が工業なることなり。增殖人口は米國等への移住によりて吸收せしむることを得るが如きも、此には他國の發展を助くることゝなりて躊躇すべき點もあり。朝鮮等自國の新領域への移住といふも、此も際限あることとなるのみならず、隨分困難事なり。此困難も或度までは打勝つて行く必要もあれども、兎も角、母國に於ける工業を進むることは、增殖人口を吸收せ

しむる一の有利なる方法にして、而も前者に比しては困難の少きものなり。

第二は國民の才能を利用して之を浪費せず、凡べて其所を得せしむるものは工業の發達の外なきことなり。元來工業の發達は國民の職業を多様ならしむる傾あるものにして、職業の多様なることは取も直さず國民の間に存する種々の才能に適當なる場所を得せしむることゝなるものなり。殊に農業國にては到底人才を吸收するの餘地乏しく、教育を受けたる人才をして其才を用ゆるの處なきに苦ましむべし。斷じて人才を利用する所以に非ず。

第三には國の經濟上政治上の地位を高むるは工業の發達せるものあるを要件とすることとなり。一國の國富を增加するには工業が最肝要なり。農業などにては特に狹き日本にては廣き米國に追付く富を作り得べからず。近頃は一國の政治上又は軍事上の地位も結局は其國の經濟力の大小によりて左右せらるゝものにして、工業の進まず經濟力の乏しき以上は、到底此等の競爭場裡に優者たる能はず。

第四には一國の文明特に技術上の進歩は工業の發達に依らざるべからず。偏農商武國にては文明の發達が工業國に後るゝことを免れず。

而して更に工業が立國の基礎となることは、農商の爲めにも、武の爲めにも不都合ならず。或點に於て有益なり。第一農業は之によりて其產物の販路を擴張するを得べく、工產物を安く購入することを得べし。其人民に都會に於ける仕事の機會を增加して其收益の一部を故郷の農業に注入することゝなり、工業の發達したるが爲め、一國の租税負擔は多く工業に懸ることゝなりて隨て農業の負擔を輕減することゝなる傾あり。其他工業は農業上有利なる肥料道具器具機械等の改進を齎らし、運搬交通を改善して益々農業を有利とするなり。

第二に商業も亦工業の發達によりて原料及製品の交易に與かること多くなり、益々其活動範圍を擴張することとなる。交通運輸の進められ、安き工產物を供給

せらるゝの利益もあり。

第三に武も亦工業の發達によりて利益す。軍備國防の必要とする資本は工業の最良く供給し得る所なり。彼が必要とする機械は工業の進むに非れば發展する能はざる所なり。其必要とする運輸交通の機關も亦工業の改善擴張する所なり。近頃の戰爭には特に此等のものゝ重要は著しくなれり。兵卒も亦工業の發達するときは、其發達せざるに比して多人數なることを得、假令體力氣力沈着等に於て劣るとも、敏捷熟達愼慮等の特質を具へたる兵士を供せらるゝを得るなり。

要するに余輩は我國に於ては工業を立國の大本と爲し、國策として之が發達の爲めに大努力を要するものと認む。然れども同時に其他のものを等閑視して可なりといふには非ず。皆な相伴つて相當に發達を遂げしめざるべからず。又我國が工業を進むるといふには非常なる努力を要することを豫め看過すべからず。鐵といへる重要材料の足らざることは最遺憾なれど、此は致方なしとして、技術の發達、職工の訓練は最力を用ゐざるべからず。然し此は奮勵努力の如何によりては大に改善し得ることなれば、此方面に於ける施設計畫着々實行すべきなり。若夫れ斯くて生ずる一國農產物の缺乏の如きは他より特に勢力範圍地よりの輸入によりて補充するの外なく、又之にて差支あらざるものなり。

須らく商工立國たるべし

男爵 阪谷芳郎

今年の正月の大阪朝日に、求めに應じて「商工立國論」を述べて置きました、昔は日本は農業立國て、農は

國の本なりといふ事は學者も政治家も共に之を說き之を信じ之を行つたのでありますが、それは昔の事て、今日の樣に經濟關係の世界的になつて居る時に、何も內地に產したもののみを食ひ、內地に產した原料のみを使はねばならぬといふ譯はない。我國には早や耕地も段々不足である、農をのみ賴んでは將來發達の餘地が不足である、すれば何とかして別に方法を考へねばならぬ、私は之を工業に求めるより良策は他に無いと信ずる、其原料の如きは廣く之を世界に求め、安いものでさへあつたら何處からなりと輸入するが宜い、例せば南米の智利の硝石が安かつたらそれを入れる、更に亞弗利加の方が一層安かつたらそれを入れるの類てある。安い原料をドシ／＼取つて加工して、立派な製造品として更に洽く海外に向つて輸出することをせねばならぬ。それにしては國家が無爲て居てはいけぬ、農工商の何れかを今日最も其國運の發展上必要であると見るならば、それを主位に置いて主力を注がなくてはいけぬ、國家としては其手心が要る、それは單に必要を言へば農業も必要に相違ない、矢張り共に發展を圖らねばならぬに相違ない、が物は其短長を比較し其利害を精究して、少しても一方に長があり利があると見る時には、其一方に主力を注いて暫く發展を促さなければならぬ、それてなくては物の進步などいふ事は有り樣がない、私はそれ故今大に進めるべき必要のある工業を以て暫く我立國の大本と定めたいと思ふ。て此樣の意見を右の朝日に述べたのてある。

が工業の事に於ては邦人の注意が甚だ淺く、また左程に重きを置いて居らぬ、早い話が工場法案の如きても分る、昨年の議會にも今年の議會にも現はれたが、法案其ものの是非善惡は別として、一向國民が重きを置いて居らぬ樣てある。また必須的法案とはなつて居らぬ。國民の注意の疎なる所は即ち工業の發達のまだ甚だ幼稚なることを證するもので、我邦の工業は他のものに比すれば一番後れて居る、農業は兎にも角にも長い間我立國の大本と定められて來たものだから、未耕地も多くは殘されず、發展の餘地とては甚だ乏しい、

勿論農事としては改良すべき點が元より多くあらう、耕區を整理するとか、肥料を改め、安いものを取るとか、害蟲を驅除するとか、農具を改善するとか、水産の如きも從來の方法ではいかぬ、進歩した方法を採れば大なる收穫を得るといふ樣な事はあるに相違ないが、併しそれにしても之を工業に比べると發展の範圍が狹いといはねばならぬ、工業は明治になつて漸く動き始めた位のものだから何もかも後れて居る、殆んどまだ手が着いて居らぬといつても宜い程である。即ち之を農業に比べると發展の範圍は茫漠として廣い。然らば今國家として其國力を伸ぶるに如何なものを取らねばならぬかといへば、勿論其發展の範圍の狹いものを棄てて廣いものに就かねばなるまい。それ故私は工業を以て立國の大本と定めたいと思ふ。

此譯て私は國勢調査を主張し、十年毎に戸口の調査を全國に行ふの議を立てましたら、是は世間から熱心に受けられ、遂に委員會が出來て私は其副會長に推される樣の有樣、漸く政治上の問題と爲り掛けました。

日本の人口は毎年五十萬六十萬と殖えて居る、是は民力の發展上至極宜いことである、センサスを取つて見て人口が減るなら我民力の發展上甚だ憂ふべきだが、幸ひ日本では反對に非常な率を以て增して居る、佛蘭西などでは年々人口が減ずるばかりなので、政治家は之を心配して色々畫策して居るが、それを思ふと我國の如きは甚だ喜ぶべき現象といはねばならぬ、願はくは此人口の增殖率を保ち、此伸長力を續けて行きたいのだが、併し此伸長力を續けて持つには方法手段を要する。人口が殖えればそれだけ生活費が加はる此生活費の準備の無い所に獨り人口の增殖を望むことは無理だ、假に人間一人に百圓生活費が要るとすれば一年に五千萬圓六千萬圓宛生産が餘計にならなければならぬ、即ち國家として年々それ丈の富の增加を要する、此富の增加を悉く農に求めたら如何であらう。從來人口の稀薄の所であるならば、例へば本島でも奥羽の地方や、外ならば北海道などであるならば富を增すことは覿面であらう、けれども既に人口の稠密な所であ

ると、到底農村に居て富を増すといふことは出來ない。今國よりいへば前に擧げた北海道、奥羽等はまだ人口を加ふべき所がある、けれども是も今より二十年三十年の昔と比較すれば甚しく濃密になつて居る、此樣に考へて來ると將來益々増加すべき人口を盡く限有る土地にのみ依賴して行からといふのは、既に餘地も狹ければ甚だ薄弱なものと思ふ。如何しても將來は工業てある。

一例を引けば昨年英吉利へドレッドノート型の軍艦一隻を我國から注文したが、其價を假に二千五百萬圓もかゝるとすると如何てあらう。其金て以て一日一圓の勞働者二千五百萬人を養ふ事が出來る、更に其勞働者の家族を平均五人宛と見積り、それ丈が一日一圓の賃銀によつて暮すものとすると、即ち一億二千五百萬人分の麵麭の代と見做すことが出來る。軍艦を造るに勞働の力のみてはない、何れ鐵の材料を要する事だけれども、それとても勞働の結果て出來るのだから、概算して先づ此の如く見るも差支あるまい、即ち二千五百萬圓てある。此軍艦を外國へ注文せずに、日本の內て製造する事が出來るとすれば、優にそれだけの人員即ち一億二千五百萬の人口を養ひ得るのだ、勿論英吉利へ注文したのにはそればかりでなく色々の必要が他にまだあるのてあらうから、其得失を論ずるの要は玆にはないが、只工業が內に發達して外より輸入を仰がなくなれば、如何程の利益があり、影響があるかを語る好證左にだけはなると思ふ。日本に取つてはそれだけの金を英國に取られて仕舞ふといふ事は其生活上に渉て重大な關係のある事此の如きものである。それ故如何しても今後の我經濟の大本は工業を擴張する上に進かなくてはならぬ。

之を然りとすれば國家が工業に對する從來の方針の上に於て、苟も其發達に害のあるものは盡く變へて行くべきてある、先づ稅法中にも、其發達に害のあるものはあらうからそれ等を改めなければならぬ、既に租稅といへば如何なる種類のものても皆其力を殺ぐことになる、幾分其發達力を犧牲に供することは免れない。

といつて國家を組織し維持する上からは、其國費を給すべく租税は到底取らずには居れぬが、同じく力を殺ぐにしても、其租税編制當時に於ける根本的の思想の上から自ら相違がなくてはならぬ、即ち工業を我産業の主位に定めてあるか否かによつて、等しく工業に課税するに於ても其發達に就いての利害に大差違が生じて來る、例へば自働車一つにしても、國家が其製造を奨勵するとなれば、啻にそれに便宜を與へるのみではなく、それに課する税の如きも輕くすべきであるといつた樣な譯で、廣くいふなら凡て工業を發達せしむる樣にしなければならぬ、工業の進步が他のものに比して甚だ後れて居る丈、それ丈餘地が廣く、將來に望があるとすれば、勉めて道に横はる邪魔者を拂つて行かなければならぬ、それ故只税法のみとは言はぬ、他にもまだ排すべく改むべき邪魔者は多くあらう。關税の如きに於ても左樣である、無暗に原料に課税してそれが爲に製造品を高くし、又其工人の食料を高くする結果を招く樣な事は、皆工業を發展せしむる所以のものでないから、左樣の税は安くしなければならぬ、が又それは農業者にも關係があるから、輕減するに就いては無雜作にはいかぬ、大に其思慮を愼重にすべきは勿論である、けれども前からして言ふ通り、何分にも農業は其發展の餘地が幅狹く、之に反して工業は幅が廣いとするならば、其處に自ら取捨の道がある、即ち農業を助けて國力を進むる幅と、工業を助けて國力を進むる幅とを比較したならば、假令少しく土地の開墾が減るとしても、工業を助けて大に其發達を促すことに勉めなくてはならぬ、前者に失ふ所があつても後者に於て收入が多く、それによつて將來益々增加し行く人口を養ひ、尙ほ愈よ其繁殖を見得る事となれば、即ち國家永遠の國是の上には後者の工業そのものの奨勵を決行せなくてはいけぬ。

境土を接し居る國々と比較して論じて見たら如何であらう。比較するといへば先づ支那である、他はまだ左樣して論ずべき場合に行つて居らぬ。支那と丈は其必要がある。支那から世界に出す貨物中、其重なるも

のは何かといふに生絲と茶である、然らば我國では如何かといふに矢張り生絲と茶だ。其外のものでは支那の輸出品は色々あるが呉蓙もあれば陶器もある。此の如く支那と日本とは重なる輸出品が相似て居つて、而かも其分量からいへば、彼は大に我より多い。唯貨幣制度が亂れて居る爲に物價に甚だ高低がある、又日本程に敎育が進んで居らぬから、理化學工藝等が甚だ幼稚である、就中政治組織が最も後れて居るので、貨物交換の機關が少しも整うて居らぬ、その爲に今日未だ大に振ふことが出來ずに居る。日本の品は隨分粗製濫造が多く、非難の聲頻々聞こえる、此點は大に慨嘆すべき事に相違ないが、併しその粗製濫造の非難の聲の聞こゆるのは即ちそれを自覺して改良せんとの聲の聞こゆるのであるから甚だ喜ぶべきである。そして其貨幣の制度、理化學工藝の進歩と、物產集散の機關と、並に其他の機關と、共に皆支那より進んで居る有樣である。現狀は正に此樣であるから聊か意を安んずべき樣だが、併し問題は是が何時迄進むかといふ事である。

日本は僅に四十餘年の間、歩武を歐米に接し樣と勉めて來た結果、兎に角今日迄になつた、まだ十分彼に追着いたとはいへぬけれども、將に追ひ着かうとはして居る、然らば支那も亦一度び覺醒して政治なり敎育なり、其他諸般の事の改革をしたならば、それが日本程に行かぬといふ道理はない、只今日の處から見れば甚だ行惱みである、餘程まだ困難の樣で何時實現出來る事やら容易に豫言はならぬけれども、さればとて敢て泰山を挾んで北海を超えるといふ樣な事ではないから決して不可能とは斷じ難い、特に利に敏きは支那人である、此等の改革は利益の大なるものが有る事だから、一旦覺醒するに至つたならば宛も水の低きに就くが如く滔々としてそれに向ふであらうと思ふ。其曉には支那の物產は量に於て遙に日本より多いから、日本は遂に壓倒を免かれぬであらう、現に廣東の花呉蓙の如き、我邦の花呉蓙が爲に大に壓倒され居るとは能く聞く處である。又是は其種類に於て話が少し違うけれども、石炭も支那に撫順炭や開平炭が出た爲、東洋諸港

に於ける日本炭の需要が減じ、追々に其跡を絶つに至る現狀である、若し支那の石炭業にして是より文明的に進歩するならば、日本の石炭は香港其他の大陸沿岸から遠からず殆んど驅逐されるであらう、最も日本の石炭の運命は左程長くはないと學者は言ふから、今より貯蓄せねばならぬかも知れぬが、併しそれは兎も角として單に貿易上の運命から言へば右の通りである。石炭は素より工藝品ではないけれど、支那と日本との國力の比較にはなると思ふから敢て玆に話すのだ。

此の如く支那は日本に取つて大に注意すべき競爭者であるから我々は今の中に大に日本の工業に力を盡し支那よりも早く進めて置かなくてはならぬ、左もなくば到底十分に驥足を世界に伸ばすことは出來ぬ。文明の進歩は何人も力を以て拘束出來るものでない、されば支那の文明は我等同胞としては無論歡迎すべきことであるが、同時に日本の工業も一大發展を得しめて其製作品を廣く各國の市場に供給し、以て世界人類の幸福に貢献する一方に、之を以て國家の富强を加へ、盛に繁殖しつゝある人口を十分に養ひ得て益す其伸長力を助成する樣にせなくてはならぬ。此議論には何人も異論のない事と思ふ。私は此所以を以て敢て商工立國を主張する。

農は國の本也

農學博士　橫井時敬

旣に立國といへば、先づ國家は何を理想とし何を目的とするかより考へざるべからず、予の考ふる所にては、そは只富み且つ强さの一事なるべしと信ず、富は幸福を意味す、幸福は獨り富によりてのみ得らるべし

とは限らざれども、兎に角國家富みて初めて幸福は得らるべきなり。富まざる可からず。而して富みには國家の富あり、人民の富ありと雖も、そは並び行かざるべからず、民の富むは即ち國の富むなればなり、其人民の富といふも、亦一方に偏したる富ならざるべくして適當に分配されたる富なるを要すべきなり、さらば强は如何、國家の强さは即ち個人の强さなるなり、如何にも近代の戰爭は愈よ器械的と爲り來れるも、而かも其最後の勝利は遂に人間に賴らざるべからざるに在らずや、今や飛行器の類空に駕す、若し其將來盛ならん日はいざ知らず、少くも今日に於ては如何に軍艦大に兵數多く、且つ兵器鋭しとするも人にして强からずば所詮爲すなきのみ。此の如く考へ來らば立國の大本の那邊に定まらざるべからざるかは自ら明瞭なるものあるべし。

　世には往々にして富は商工に在りと言はる、而して國家の富を計るに屢次輸出入の多寡を以てして其度を語ることあり、曰く此國は彼國より輸出入の額多きが故に富めり、曰く此國は彼國より輸出入の額少きが故に貧しと、されど此の如きは甚だ謂はれなし、例へば好し茲に二つの國あり、其一方が假に四億圓の輸出入あるに對して他の一方が十億圓ありとせんも、之を以て直に後者は前者より富めりとは斷ずべからず、更に之を內に見て後者の國內貿易額が二億圓なるに對し前者が假に十億圓ありとせんか。事實に於ては十二億圓に對する十四億圓。前者は正に却つて後者より大に富めりと斷ぜざるべからず。故に輸出入計較主義にて國家の貧富をいふは妄なり、そは何となれば只外國貿易のみの利益ありて、內國貿易は利益なしとするものにて甚だ謂なき事なればなり。從つて富は決して只商工の發育のみにて期し得らるといふべきに非ず、勿論商工の發達が甚だ望ましきとなるは更にも云はず、將た時と場所とによりては其農に比して一日の長あることも亦認めざるべからざる事ながら、少くも農を以ては到底國を富ます能はずといふの思想は大に誤れるものなるを信ず。

試に佛國に就いて一考せん。此國は農業國にて、商工業國としては英吉利獨逸には頗る劣れり、左れど事實に於て最も多く金を外國に貸すものは此佛蘭西を推す、佛蘭西が實に金力を以て歐羅巴に一勢力を爲すは爭ふべからず、此頃英國の一雜誌に說いて曰ふ、歐羅巴には近頃五大勢力の外に尙ほ一大勢力發見せらる、そは佛國の金力是なりと。夫の日露戰役に當り、露西亞が奉天役後敢て旗を卷いて再擧を圖らざりし事は、吾人の多少其間に疑惑なき事を得ざりし所なるが、右の雜誌の語る所によれば、當時背後の佛蘭西が露國に對して其金主たるを辭したる爲巳むを得ざりし者なりとなり、今こそ露國は稍々其威力を減じたりとするも、而かも尙ほ實際兵力を以て覇を歐州に稱するは畢竟佛國の金力の然らしむる所のみ。佛國の金力たるや到底侮るべからず、或る人によりては其富力能く英國を凌ぐとも稱せらる。そは兎もあれ少くも獨逸の下に在らざることは疑なきが如し、而して此佛國は何國なりやといへば前にも言へる如く實に農業國にはあらざるか。されば農は富を圖る所以に非ずとは言ふべからず。曾て普佛戰爭に於て敗衂を蒙り、獨逸に對して佛蘭西より五十億法の償金を拂ひしや、そは鷄卵を以てせりと稱せらる、即ちそは小農業家の貯蓄より得たるを意味するものなるを思へ、農何くんぞ容易に侮るを得べけん。

特に我日本の如き、輕々しく手を農業より引かば遂に如何すべき、如何ともすべからざるべし。明治維新の大業は元勳諸公の力に待てりと稱せらるゝも、如何に大久保公あればとて如何に伊藤公あればとて、根柢に横はりて盤石の勢を爲す此農業の力に依らずして何をか爲さん。是なくしては其絕大の技倆も畢竟徒爲に終るべかりしなり。世人は兎角耳目の表面に現はれて聲威赫々たるもののみを知り、常に背後の勢力なる水呑百姓を忘却し去るも、此の如きは宛も家屋の柱梁のみを見て、最も大切なる釘の存在を看過するに異ならず、實は妄なり。

近來頗る商工業の發達を見るも、猶ほ其農業に及ば

ざるや遠し、十五億以上の生産力あるもの今日我國に於て農を外にしては何處にかある。立國の大本を何に置くか置かぬも、此の如きは既に定まれり。何處にか定まる、曰く農業是のみ。

都會には商工業家多し。筆を執るもの多し。而して商工業の勢力あるらしく書き、又事實に於て都會にては商工業の勢力は多きが故に、是よりして往々又商工を以て一國勢力の歸着する所かの如くに考ふるものあれども夫は誤れり、其實力は到底農業に及ばざるを斷じて憚らず、されど現在は然るも向後は如何といふに、今日の如く農業のみにて獨り國家を背負ふは堪え難し、今日は農家の負擔する所諸税諸掛りは其所得の三分の一乃至二分の一に及ぶ、是の如きは農民の耐え得ざる所なれば何とかして商工業を今少しく發達せしめ、斯かる現下の偏頗なる負擔より農民を免かれしめんと欲す。而かのみならず商工の發達も亦大に國家を富ますに足るや勿論なれども、單に之れによりて富を致さば兵力の衰ふるを如何せんや。

既に言ひたる如く兵力は第一に人の力なり。力といふも只腕力のみを意味するに非ず、戰時に起る所の甚しき不良なる衞生狀態に對して大なる抵抗力を有せざるべからず而して此抵抗力は獨り農民に於て最も大なりとす寒暑の激變、安眠の不足、過度の勞力、食物の寡少不良、此等諸種の狀態に對して敢て抵抗し得るものは農民を措いて外に求むべからず、されば農業ならでは國を强くし得ざるは何人と雖も實際の經驗者は容易に信じて疑はざる所となす。

只それ徒に口舌を勞するものは出任せにいふ。例へば、農民は體力あるも腦力なき故駄目なりといふが如き是のみ、左れど今日に於ては如何に腦力ありとも實戰に臨みて體力足らざるものは爲すなきなり。且つ柔順に且つ眞面目に、規律を能く遵奉するものなくては爲すなきなり、而してこは偏に農民に待つ。我國の如き近く數度の戰役を經たる所には其經驗より得來る所之を證して餘あり。中には或は獨逸若くは瑞西の例を引き、都會のもの必ずしも田舎のものに劣らず、否、

却つて優るを見るといふものあるも、そは即ち調査の不行届より來るものなり。都會にて徴兵檢査を受くるものゝ凡てが悉く都會のものなりとする誤より來るものなり、仔細に別たば多からんも大凡都會人をば三種と爲すべし、一に曰く純都會人、即ち兩親共に都會に生れたるもの。二に曰く半都會人、即ち兩親の中何れか一方が都會に生れ、他の一方は田舍に生れたるもの。三に曰く純田舍漢即ち純粹に田舍より上り來れる子弟是なり。此等三種中常に徴兵檢査に臨みて好成績を得るものは此最後のもののみ。要するに其田舍より都會に出づるものの年齢は、十五歳頃よりして二十歳前後に最も多く是を以て徴兵合格者の數次第に都會に增加するを見るなり。大凡此の如し、故に善き兵士と爲るものは田舍に生れて田舍に人と爲りしものに限る、田舍ならずば即ち絶好の兵士は得べからざるなり。

されど又說を爲すものあり、そは數の問題なり、數多き中には良兵卒も得らるべし。故に商工業者にして多からば敢て田舍のものを恐るゝの事あるべからずと、されど其數なり。如何せん事實に於て田舍の人の繁殖力は多く都會の人は少し、此世が都會の人のみならば其人類繁殖の數は著しく減少するを免れざるべし。何れの國にて調査したる所に據るも即ち都會の生殖力は甚しく田舍に劣るを示す。而して田舍に人と爲りしものは獨り好き繁殖者たるのみならず、其生ぜる所の結果も品質に於て亦善良なるものなるが故に、都會は常に人間の數を得ることと、而して良品を得ることとに於て常に田舍に向つて謝せざるを得ざるものあり、畢竟國家の富は最も人口の多きと其品質の良きとに頼まざるべからざるものなるが、田舍は實に此國家の要求に應じてそれ等を生産し供給しつゝあるものなり。

尚ほ考ふべきは食物の供給とす。食物にして能く自國内に産せず専ら之を外國に需むるが如きとあらんか、戰時に於ては非常の弱みたるなり。試に想へ、夫のロジエストウエンスキーが十幾隻の艨艟を率ゐて我に來るや、其敢て對島海峽に迫りて東郷大將に挫折せ

らるゝを休め、印度洋上に遊弋して我商船を監視し、而して當時我國にて國民の食料が自由に産せず、其大部分を印度邊に仰ぐものとせんか、如何。必ずや其穀物の乏しきと且つ其價の暴騰との爲に困弊し、戰はずして先づ斃れ、東鄕大將の神策妙算も全く施すに所なくして已まんこと必せり。而して此食料を自國内にて得るの道は獨り之を農業に待たざるべからざるは論なし。

徐に佛國の成敗に鑑み、更に和蘭の國勢に就いて考うるに、如何にするも農は國の本なり、農は國家に大功あるものなり、獨り國を富まし若くは單に國を強くすといふに止まらばさてしもあれ、一國は元氣を以て興り、其缺くるを以て衰ふ、而して此元氣や獨り農民に於て優かに天賦を受くるものなるを思はざるべからず。和蘭の如きは農必ずしも顧られずとはせず、牧畜の如き、園藝の如き甚だ盛ならずとせず。されど國是を才取業即ち商業に置き、百事を悉く富にのみ重を置きたる結果其國勢不振今日に至れり豈に鑑みざるべけんや。

戰なるものは畢竟蠻勇的のもの故、商工業の如きハイカラ的のものにては所詮釣合はざる事なり、即ち農業に從事するものゝ如き、一見馬鹿にして才鈍きものなり、而して之を以て國家は安全に維持せらるゝなり、才優れ擧止敏捷なる商工業者の却つて國を保ち難しといはんには怪訝の念もあるべけれど、所謂「萬能足りて一身定まらず」の眞理其妙諦を語るべし、一國も馬鹿なる農民によりて初めて强を成すの事實は努め〳〵忘るべからざるなり。

故に國家が相當に富み且つ強くなるの要素として商工業を盛ならしめざる可からずといはんか、吾人は之を是認せん、商や工や國家としては畢竟缺くべからざるのものなればなり、されど唯國是を何に定めんかとの問題に觸着せんか、予が其農學に關係あるの身なるを以ての故に、獨り贔負目に考ふるものにはあらず、實に上來縷述し來れる幾多の理由により、明に之を農業の上に本づけざるべからずと斷ず。而して敢て商工

を立國の大本とするを避くるには尙ほ一の理由あり、そは過去の狀勢よりして、我商工業の發達は極めて後れたるものなれども今日には之を放却するも必ず自ら發達するの傾向を有す、然るに農や然らず、動もすれば衰頽するの傾向を有す。殷鑑遠からず近く英國に在り。英の農業や今日痛く衰運に臨めるに於て、彼の之を悔ゆる甚しきものありと雖も、遂に能く救ふの術なし、吾人は故を以て農業立國の國是を定めて茲に富且强の事實を永遠に傳へんと欲するなり。

牧羊の如し

法學博士　戸水寛人

今、擧げられた、立國の基礎としての農、工、商、武、此の選擇に關して、吾儕は先づ何れを輕し何れを重しと爲す事の、現在吾邦の狀勢にあつて全く不可能なるを言はねばならぬ。凡てが尊い。凡てが捨て難い。日本はもと農業國である。之れ已に捨つ可からざるものだ。工業亦然り。太平洋を中心とせる吾邦の商業力、共に輕しとする事が出來ぬ。

更に、商工業が如何に隆盛を極めても、武にして弱ければ、他と何等の異る所がない。遮莫、四周を護るに何の力を以てするか。

私に言はせると、他を侵すも敢てかまわない。敢て遠慮するには及ばないのである。他を侵すといふ事は、國際法から見れば、言ふまでもなく不法である。しかし、之は法だ。侵略を行つて了つた後には、國際法は之を認めるのである。國を奪るといふ事は否定されて居るけれども、奪つて了へば自分のものである。少くも軍備縮少は、話にならぬ。

さて、之等の見地からして、概論する時、農工商武は孰れも重いのである。捨て難いのである。先後を附

與する事が出來ないのである。つまり、之等は平均して政策を立て、時の宜しきに應じて行はねばならぬ。

日本よりも早く世界に立つた英國の如きに見ても、さうである。

英國の農業といへば、非常な發達をしたもので、到底日本の農業などの及ぶ所ではない。英國に生ずる農産物にして、吾人が見て感服せぬものは恐らく一ツもあるまい。例へば、英國産の胡瓜である。日本の胡瓜の短かくて太く、核の多いのに反して、英國のそれは、長くてスラリとして居る。核も少いから、食べて見て非常に美味い。大變な違である。而も此の好果は天然よりも寧ろ人工の賜なのである。殊にその園藝の發達は、日本とは到底比較にならぬ。

元來、英國人は、果實の栽培には餘程苦心をする。てあるから、收穫された果實にしても、凡てが日本のに比べて優れて居る。

日本でも近來は、大に歐米各國を模倣する事に長じて來て、現に林檎などは中にも好成績を擧げて來た。が、それには英米その他の國々が日本のお手本であつた事を忘れてはならぬ。

又、英國の工業が歐洲各國のそれ等を壓倒して居る事は、誰しも否まぬ所である。何故であらうか。一言にしていへば堅實である。英國の工藝品に格別に廉いといふものはない、が唯堅實である。例へば、彼の國の時計製造業だ。

時計といへば、人々は先づ、瑞西、亞米利加に指を屈する。英國の時計製造高は、成程之等の國に比べると尠い。が、その構造の堅牢と精巧なるに於ては、決して劣らないのである。英人にして瑞、米の時計を持つものは少ない。彼等は自ら造つて自ら用ふるのである。

又ナイフ其他鐵物を鍊えるにも、羅紗を織るにも、英人の工夫を凝らす事は非常である。

更にその商業を見ると、英國に店舗を持つてゐる日本の商人が、英人と取引する場合には非常に安心であるが、伊、葡等の人と取引をする場合には、とても安心が出來ぬといつて居るのを見ても解る事で、――要するに英國は、農工商の孰れも、世界に冠絶して居ると言はなければならないのである。

英人は陸軍にはさして重きを置かぬけれど、海軍は、一方に於て英國の商業を保護する道具として、重大視されてゐる一つである。

英人はその各洋に散在する領土に分居して、盛大に、殖民地と本國との物産を交換する。本國は更に之を諸外國に輸出する。此の特殊なる海上交通には奈何しても強大な海軍を要するのだ。

近頃まて、英國は、二ヶ國の海軍を標準とする方法を採つて居たが、お隣の獨逸が漸く海軍を擴張するに從つて、所謂、二國標準は破るゝの觀が無いてはないが、その艦數に於ても、噸數に於ても、操縦する技術に於ても、英國は到底凡てに勝るのてある。

英人がその農工商武の孰れをも輕しとせず、凡てに心を凝らして居る事は、直ちに採つて大に日本の學ぶべきところである。

地勢から見れば、吾日本は太平洋の一隅を占めて居る。そして此の大海洋が、他日世界貿易の中心となる事は言ふまでもあるまい。

昔の歐洲人は地中海とバルティック海とを、商業の中心とした。彼のコロンブスが米大陸を發見して此方、商權を爭ふ處は俄かに、太西洋に移つた。近代交通機關の發達は、更に轉じて、太平洋上に新しい競爭場を作る事を暗示して居るのてある。

此の新競爭場に覇を稱せんとする日本が、一層永く武に重きを置くべきは、當然の事てある。

要するに、偏するのが一番惡い、吾等今日の最良政策は、恰も牧羊の如きてある。牧場に逐る羊の群の、遅るゝ羊は牧人の鞭に打たれる。農工商武は、とりもなほさず羊群てある。

遅れたるを鞭打して、凡てに平均を得やうとするのが、現下の要務てある。(完)

農工商鼎立を可とす

男爵 澁澤榮一

農工商の何れか一つを立國の本位に定めるといふ事は談甚だ容易てない、私も明治六年から野に下つて實業に從事して來ましたが、其間農とか工とか若くは商とか、國家百年の長計は必ず是てなければならぬと一

つに定めてやつて來ては居らぬ、私のみてはなく誰も皆それて來て居ると思ふが、元來之を其何れに定めるといふ樣な事は容易に決せらるべきてはないと思ふ。

外國貿易に於ても保護主義、自由主義の二つがあつて容易に決せぬ。輸入品に課税してそれて自國の產業を助ける目的から保護主義を主張するに對して、それは徒に物價を高くし消費者を苦むるの惡結果を招く以外大した効果はないからとて自由主義を唱へるものがある、海外貿易に於ける此兩主義は仲々議論が一定せぬ、保護政策を採ることが强ち國家の爲めの美擧だ上策だともいへぬ、さればとて全然自由政策を採るといふことも出來ぬ、要するに今日に於ては之に對する明快なる論斷とてはない、學者としては如何いふ人が如何いふ事を言つて居るか詳かには知らぬ、故田口卯吉氏は純然たる自由貿易說てあつた、惜か早稻田派も左樣の樣だ、が實業界に居るものに自由主義を唱へるものは尠い、先づ皆半保護を主張して居る。

貿易上に於ける自由、保護の兩政策の、一言の下に論斷し難いと同樣に、立國の大本を農工商の何れかに限るといふ論斷も、亦甚だ六かしい事と思ふ。

之を廣い處から見ていふならば、商賣の繁昌が一番宜かろうと思ふ、農も工も皆此商を中心としてそれに集まらなくては繁昌せぬ、倫敦、紐育皆貨物の一大集散場として榮えて居り、國家は之によつて富を爲して居る。而かも倫敦の如き、其處に取扱はるゝ貨物は、農產物にせよ、製作品にせよ、皆英國の產する物てはない、英國人は只商賣によつて富を得それによつて衣食住の資を外より致し、裕に生活して居る、それ故其形からすれば商業本位て宜いと思ふ。

併し又地を變へて、貿易上から考へて見ると、原料品を輸出し、製造品を買ひ込む國は必ず貧しい弱い國だ、それに反して製造品をドン／＼外に向つて輸出し寧ろ原料品を外から買ひ込むといふ國が富める强い國だ、して見ると工業が最も富を作る肝要な道てあるから工業本位といはなければならぬ。工なる哉てある。

けれども右の商工業の頗る烈しく行はれる亞米利加

に在つても、ジェームス、ヒル氏の如きは農業本位を唱へて居る、氏には合衆國の將來といふ樣な著述がある、私は先年親しく此人に逢ひ、又其演說筆記を得、それを飜譯したものも見た。大北鐵道會社の社長で頗る學者的の人、彼のモルガン、ハリマンなどの樣な辣腕家ではなく、至極質實な人物だ、日本に對する說も公平である、所謂立派な君子人と欽慕して居る、此人は農を主張して、農業を疎略にすれば、國内に產する所を以て十分に自國の民を養ふことが出來ず、それより受くる損失は容易でない、亞米利加は非常の率を以て人口の增加を來して居る、今の處八千三百何十萬であるけれども、千九百五十年には殆んど二億三千萬にならうと思ふ、亞米利加の農業にして現狀の儘で行くならば到底國民を給養する事が出來ぬと思ふ。今有る鑛物や、工藝等によつて生活の基礎を永久に保たうとするのは危險である、それ等に賴む生活は眞の生活ではない、如何しても農を以て國本と爲さねばならぬ、が今の如き微々たる收穫を以て永く一國の人口を支へるのは困難だといふ意見である、亞米利加人の農本論は甚だ意外の感がある、而かも此人によつて此說を聞いたのは近く一昨年の事である。

が之に反對の說を有するものにシチー、ナショナール、バンクのプレシデントにバンデリップといふ人がある、數年前亞米利加の大藏次官ともなつた人だが、此人はヒル氏とは違つて工業本位を主張する、工業を十分に進むるが宜い、工業にして十分に進めば從つて工賃も進む、すれば人間が殖えて逼迫を感ずるとしても、技術の進むに伴ひ十分にそれて生活を補ふことが出來る、つまり機械を以て他の缺を補ふことが出來る是に主力を注ぐことが割合に合ふのだ、試に英、佛、露、獨の諸國を見よ、各國を巡歷して具さに其國情を察するに、概括的に言へば英吉利が一番力ある國、古い國である、之に次いで獨逸は學術上の新進國である、佛蘭西は今の處先づ現狀維持である、それから露西亞であるが、此露西亞は米國に比して加工費が頗る高い、二弗が八弗といふ割合である、が工賃そのものが高い

譯ではなく、働が鈍い爲だ、亞米利加の鐵道なり器械の凡ての働も未だ以て滿足とは言はれぬ、此に着目して今より鋭意其發展改良に盡さなくてはいけぬ、技術を進めて工藝を盛にすれば國家の富は期して待つべしだ、人口の繁殖敢て憂ふるに足らずといつて居る、是は數年前、即ち明治三十五年に私が米國へ渡航した時に聞知した氏の所論中の意味を簡單に言つたに過ぎぬが、亞米利加の有力な人物の中にも斯く工業本位の說も見える。

彼の國に在つても此樣に其所說はまち〱である、然るに我國に於ては果して是が一定し得られやうか、私は甚だ疑つて居る、私は此の如き事を問題として其答を促すといふ事を駁擊するではないが、唯之を實に難事と思ふ、日本の現狀では、今日の處農業を進めなければならぬ、が又工業にも最も力を注がなければならぬ、商業は內國に於てさへ甚だ不完全であつて見れば、況して外國に於ては尙更駄目である、上海は東洋の自由貿易港であるが、日本には其設備が整つて居ない。斯ういふ次第で、何もかも幼稚、どれもこれも皆手を引いて發達進歩を奬勵しなければならぬ、農工商其何れを以て立國の基礎とするかといふ樣なことは或る學說からは論斷し得るも知れぬが、今日の我經濟界からは言ひ得ぬものである。斯ういつたらそれに又非難も有るか知らぬけれど、是が實際である、英吉利は商業が一番に盛だといはれるけれども、其今日に至るは一朝一夕でない、日本の現在は如何である、海陸の連絡もなければ自由港もない、自國內丈でも駄目なのであるから更に海外貿易となつては前途甚だ遼遠である。而かも其終局の論として言ふならば、商は他の凡ての實業の繋がる處、是にして振はずば物資の捌き口がつかぬから農も工も同時に盛なるを得ない、此點からでは商が先づ大に繁昌せなければならんともいへる。

是が經濟上でなくて單に道德とかいふなら大本といふ事はいへる。儒教では孝悌は仁を爲すの本といつて忠孝本位と爲つて居る、是は一定不變萬古不易の道と

してある。即ち孟子にも、楊子は自ら爲にす是れ君無きなり、墨子は兼ね愛す、是れ父無きなり、父無く君無きは是れ禽獸なり、公明儀曰く云々、楊墨の道息まざれば孔子の道著はれず、是れ邪說民を誣ひ仁義を充塞するなり、仁義充塞すれば獸を率ゐて人を食ましめ人將に相食まんとす、吾此が爲に懼れ、先聖の道を閑り楊墨を距ぎ、淫辭を放ち邪說の者作るを得ざらしめんとすといひ、聖人復た起るも我言を易へずともいつて居る、即ち忠孝本位である、智とか禮とか慈とか色々あつても先づ之を以て大本と定めるといふ樣に、德敎の上では本位が明かに定められる、が一國經濟の上となつては容易にはいへぬ、先づ前にも言つた通り、結果からいへば商業であるが、併しそれの盛になるには農工と相待たなければならぬのだから何れに偏倚するといふ事は宜くない。

私も大藏省を罷めてから以來十四五年の間は、頻に工業本位を唱へたものであつた。何故ならば農產物を其儘加工せないで原料として賣り、他から製作品のみ買ふ國は常に貧乏な弱國であつて、その反對の十分加工して製作品として後、外へ賣出す國は常に富裕な強國だからだ、當時の眼中には英國を見て居るので、我國も是非彼の樣にならなくてはならんと思ひ、それて明治四五年頃から自分自らも、紡績とか、生絲とか、麻とか紙とか、麥酒とか硝子とか、諸種の工業をやり、資本を入るゝか、左もなくば世話をするといふ樣な事をして來て、殆んど數十年の間專ら其方に心身を勞し、諸種の事業を始め諸種の會社を設けた。それて大阪三重杯の紡績の事業も成立ち相應の會社となつた。が今倩ら考へて見るに、工業に偏し之を保護するとなると無茶に關稅をのみ上げ、それよりして行く末頗る國民に不利益を與へるといふ事も出來て來る。

日本も今は臺灣を併せ朝鮮をも一つにしたから耕すべき地域は廣くなつて居る、特に農といつても狹いものではなく、例せば臺灣に於ける砂糖とか棉とかいふものは直に工業と繋がるもので、工業的農業ともいふべきである。此等に着目して其進歩改良を圖ることは

當然必要である、朝鮮の如きも荒廢の地が多いから是にも着手して國利を起さねばならぬが、今の處では急速に行けぬ、自ら經營して朝鮮の農業を改良し工業會社を起して見ても、短氣にして苦んで掛かれば却つて損をする有樣である、寧ろ今迄通りにして其土地は地方の住民に貸與して小作料を取る方が算盤が立つといふ現況である、會社を建てるにしても無配當の株式會社は成立つべきものでないから、口で言つても行はれはせぬ。斯ういふ事情もあるけれど、廣く見ていふならば農も甚だ留意せなければならぬ、が是は敢て農本位でなければ駄目といふ主張とは自ら違ふと思ふ。要するに是から賢人出て智者達人現はれて考へるならば萬古不易の本位といふものが我國の經濟政策上に定まるかも知れぬ、否、長短を較し緩急を考へたならば自らそれも定まるべきであらうが、差當り百事共に不進の現今に於ては三業併立であつて何れにも偏すべきでないと信ずる。

重きを商工に置け

法學博士　河津暹

一

我國經濟を發達せしむるは農業に重きを置く可きか、將又商工業に重きを置くべきかゞ蓋し本問題の眼目なるべし。一國の經濟を進歩せしむるには此農業も必要なり、商工業も亦必要なり、其他有ゆる生産業が必要なればたとひ農業を經濟の大本とするにせよ、商工業は之を省みる必要なしといふものもあらざるべく、商工業を經濟の大本とするにもせよ、農業の如きは毫も省みる必要なしと論ずるものあらざるべし、要は我國經濟を發達せしむるに當りては何れに比較的重

きを置く可きかといふに歸着すべし。この問題に對して予輩は商工業に比較的重きを置かざる可からずと答へんと欲す。請ふ試みに之を説かん。

二

予輩が商工業に重きを置かざる可からずとなす第一の理由は、我國人口は既に多く之を養ふには商工業に由らざる可らずとなすにあり。世に工業國農業國と稱するものあり、工業國とは其國工業は既に發達し、其工業品を海外諸國に輸出し、其代りに海外諸國より農産物を輸入する國の謂にして、農業國とは其農産物を輸出して工業品を輸入する國を意味す、我國は工業國なりや農業國なりやといへば、人口は既に甚だ多く我國の農産物にては之れを養ふこと能はざる狀況にあり、例へば米穀にては我國生産額は我國消費額の十分の九を充すに過ぎず、小麥は我國の生産額は消費の四分の三を充すに足らず、其不足額は之れを外國より輸入せざる可らず、この點よりいへば工業國に類せり、然れども農民は我國民の六割五分に上り、其輸出するものも原料又は原料製品が其主要なる部分を占む、この點よりいへば工業國に非ずして寧ろ農業國なり、即ち我國は經濟が發達して工業國の實を擧ぐること能はずして而も我農産物は我國人口を養ふこと能はざる狀態にあり、故に我國は農業を振作して我生産する所を以て我國人口を養ふの道を計るか、或は商工業を振作して工業國となるか二者其一を選ばざる可らず。この點につきては予輩は後者の行ひ易きを信ぜんとするものなり、我國農業の集約の程度は比較的高度にあり、從て之を振作して我國の消費を滿足せしむること決して容易ならざる也。例を米穀にとりていはんに、我國の米穀の生産額は平均四千五六百萬石なり、當局の調査によれば、或は可耕地を耕し、肥料を改良し、耕地を整理し、農法を改良する等農業振作の道を講ずる時は、生産額を增加して六千六百萬石となすことを得べしといふ、之は内地についての計數なり、この計數にして太過なしとするも、予輩は之を以て樂觀すること能はず、何となればたとひこの計數の如く米穀の收穫を增加するを得

るとするも、我國人口增加率にして改まることなく一人當米穀の消費量が改まることなしとすれば、明治七十年には約七千萬石の消費を見べしといふ、即ち內地の生產額にては到底之を滿足すること能はず臺灣朝鮮等の米穀を以て之を補はざる可らず。我國米作を奬勵し今日我等が知れる範圍に於て十分之を發達せしめても、猶二三十年ならずして我國人口を養ふこと能はざるなり。人口の增加は益々昌なるべく、民度の向上するに伴ひ一人當米穀の消費量は益々多かるべきが故に、我國の生產を以ては我國の消費を滿足すること能はざるは蓋し避く可からざる勢なり。こは例を米穀にとりて說明したるものなれども、其他の原料品粗成食料品に於ても亦之と類似の勢あり。故に我國の農業を奬勵して我國の自然の生產要素を十分に利用することにつきて之に反對するものに非ずと雖も、我國に生產する所を以て我國の消費を滿足せんと勉むるは蓋し難きなり。寧ろ我國は尙發達の餘地甚だ多き商工業を振作して所謂工業國となり、我國に生產する工業品を輸出して以て不足の農產物を輸入せんとするの易きを選ぶべきなり。我國の商工業の進步は之を先進工業國と比較すれば實に幼稚の域にありといはざるを得ず、近時稍見るべきの進步をなしたりと雖も、其進步の稍見るべきものあるは我國が以て誇となすことを得るものには非ずして、寧ろ我進步の遙に後るゝことを示すなり、故に我國が先進國の跡を追蹤して工業國とならんとするには重きを商工業に置き、官民一致して其發達を期せざる可らざるなり。是れ予輩の商工業に重きを置くべしとなす理由の一なり。

三

予輩の商工業に重きを置くべしとなす理由の第二は我國の國際貿易上の位置に關するものなり。我國は南北に長く從て多くの種類の產物ありと雖も領土甚だ廣からず、從て其食料は人口を養ふに足らず、其原料は稍大なる工業を維持するに足らざるなり。從て其の不足する所は之を外國に仰がざる可らず。加ふるに我國市場は至つて狹隘なるが故に、稍規模の大なる工業は

到底我國市場のみを目的として成立すると能はざるなり。故に我國は北米合衆國の如く內國市場を守ると能はざるのみならず、よし之を守るとを得るにもせよ決して得策にはあらざるなり。我國經濟にとりて外國貿易の必要なるは多くいはずして明なりとす。我國が外國貿易上活動せんとせば工業品を以て爭はざる可らざるなり、我國外國貿易を概觀するに、歐米先進國に對すると東洋諸國に對するとは全く趣を異にするものあり。即ち我國は歐米先進國に對しては、主として原料及び原料製品を輸出して全製品を輸入す、而して其の輸出する原料製品は寧ろ其國民生活に必要なる貨物の原料にはあらずして奢侈工業の原料となるものなり。反之我國に輸入するものは國民の生活に必要なるもの比較的に多し。奢侈の欲望を目的とするものは流行の變遷に伴ひ販路の伸縮甚しきものなれば、我國が世界の流行を支配するまでに進むとを得れば知らず、然らざる限りは遠隔の地にありてよく世界の流行に連れて奢侈工業品を製造して之を輸出し以て奢侈工業品の原料に代はらしむるは甚だ困難なり、故に我國はこれ等の國に對しては尙久しく原料製品を輸出するの位置にあるべし、勿論我國工業の發達するに從ひ、原料を輸出したるものが原料製品を、原料製品を輸出したるものは全製品を輸出するに至るべしと雖も、大體に於てこれ等歐米先進國に對しては原料又は原料製品を輸出するの位置にあるべきを信ず、故に我國はこれ等先進國との貿易關係に於ては、輸入貿易の方面に於て比較的多くの變化を見るなるべし。即ち我國の經濟の進步するに從ひて從來歐米先進國より輸入したる貨物の一部分を我國自ら之を生産して我國の消費を滿足するに至るべきなり、我國が活躍するはこれ等先進國との貿易方面に非ずして寧ろ東洋諸國との貿易方面なるべし。現今に於てもこれ等東洋諸國に對しては我國は工業品を輸出して原料又は食料等を輸入するの位置に立てり。東洋諸國の經濟が發達し其購買力が增進するに從ひては、我國工業品を需要すると益々多かるべし。獨り支那市場につきて之を見るも、我國輸出貿易の大

に伸長すべきは疑を容れざる所なり。勿論東洋市場は先進國の最も注目する所にして種々の籌策によりて、其利益を多く占めんとせざるものなし、從て我國が東洋市場に於て活躍せんとするに當りては、夥多の困難と戰はざる可らず。然れども我國が東洋市場に於て諸國と競爭するには比較的利便を有するなり。支那市場につきて見るも、㈠距離は近く風俗慣習は比較的類似し思想其他に於て甚しく異らざる等、我國が該市場に於て販路を擴張するに當りては他國の企及し難きものあり、故によく之を利用し之と同時に我國が東洋市場に於て活躍するに不利益なるものは力を致して之を芟除する時は、我輸出貿易を増進せしむること蓋し難きに非るべし。我國が工業を以て國際市場に立つことを得るの望あるに拘らず、上に陳ぶる如く我國工業は尚未だ幼稚の域にあり、從て我國が享くる天與の利便を十分に活用すること能ず、故に我國にして國際貿易上活躍せんとせば最も重きを工業に置かざる可らざるなり。

四

我國は幸に經濟の進歩に伴ひ殆んど無限の購買力を有する市場を控へ、幸に一日の長あるが故に、若し我國にして奮勵努力する時は工業を以てこれ等市場に於て地歩を造ること必しも困難ならざる可しと信ず。或はいはん、現今に於ては我國は幸に早く歐米先進國の技術を輸入したるが爲め、これ等東洋諸國に比し一日の長ありと雖も、これ等諸國にして漸く其國經濟を發達せしむるに至らば、自ら工業を興し其消費する所は自ら生産するに至るべきを以て、我國工業は永くこれ等の市場に於て其販路を維持すること難かるべし、其の原料を得る上に於て、其の賃銀の低廉なる上に於て、我國は到底これ等諸國とを匹敵すること難かるべしと。この點につきては予輩は寧ろ之を樂觀するものなり。㈡種々の原因よりこれ等諸國が自ら之を生産するに及び我國貨物の輸入は爲に杜絶するに至るものあるべしと雖もこれ等諸國の經濟が進歩し國民の購買力が著しく增進するに於ては、我國貨物も現今に比し遙に多くの購買者を得ること蓋し難きに非るべし、換言せば我國は

これ等東洋諸國と分業をなして一方にはこれ等諸國の貨物を需要すると同時に、一方には之等諸國も亦我國の貨物を需要すべし。このことは泰西諸國が距離甚だ近く其生産要素の配合も甚しく相違なく、技術の進歩も亦著しく懸隔なきに拘らず、互に國際分業を營み彼我利益するの事實に徵するも之を推斷するに難からざるなり。我國當業者はよくこれ等市場の趨勢を按じ、當然收むるを得べき利益を其手に收めざる可らざるなり。由來我國人は他國の長を採つて之を消化するの力に富む。この能力を利用するを得ば我國に適當する工業を興し得ざるの理ある可らず。否我國は他國の工業を輸入し、之を同化し大成するを以てのみ滿足す可きものにあらず。大に我國科學の發達を促し東洋諸國の生産要素に適應する工業を興すを勉めざる可らず。世人數々いふ我國は美術國なりと、予輩も之を信ず、我國にして美術を以て諸國に誇ることを得べきものなりとせば、我國は美術工業を振興して工業界に活歩するを得ざる理ある可らず。予輩は美術工業を振興すべきことを提唱せり、奢侈工業を振興すべしとはいはず、美術工業を振ふべしといふは其貨物は富豪少數の奢侈的欲望を滿足するを目的とするものに非ずして、汎く一般社會の必要若くは其地位に本く欲望を滿足するものなれども、其形容に於て意匠に於て風雅にして我等の美術心を滿足すべきものに重きを置くべしといふ義也。少數富豪を樂ましむるものゝ如きは其需要の範圍自ら狹隘にして、而も其需要の伸縮恆なきが故に。我國美術工業の基礎を爰に置く可らざるなり、このこと予輩數々論述したることあり、詳論せず、以上は我國工業は現時に於ては尙幼稚の域を脫すること能はざるにもせよ將來甚だ有望なることを略述したるに止り、予輩は我國工業は獨り美術工業の範圍に於てのみ發達するものなりといひたるにはあらず、要するに我國は天惠の地利と國民の長技とを利用して誤らざるに於ては、工業國として國際市場に雄飛すること全く望なきに非るなり。如何なる工業が我國に適すべきか、又如何にせばこれ等の工業を振興すべきかは甚だ趣味ある問題なりと雖も、是工

商何れに重きを置くべきかの問題とは自ら範圍を異にすべきが故に、他日機會を見て之を論述して讀者の敎を乞ふことし、玆には暫く之に論及せざらんと欲す。

五

予輩は我國は到底農業を以ては國際市場に立つと能はず、工業に重きを置かざる可らざると及び工業は今日尚甚だ幼稚なりと雖も、有望なることを略述したり。最後に予輩は我國の農業につきて一言し置くの必要あるを信ずるものなり。前にも述べたる如く我國は工業に重きを置くべしといふは、同時に農業は不必要なり之が荒廢の如きは毫も留意するに足らずとの意味を含むものにあらず。我國は農業敎育の改良に農具肥料の改良に、農法の改良に、將又農產物の商業の改良に今後なさゞる可らざるもの多し、故にこれ等の方面に留意して其進歩發達を計るは徇に望ましきことなれども、既に我國は商工業を以て國際市場に臨まざる可らず、從てこの方面に於て諸國と激烈なる競爭をなさゞる可らざるが故に、これ等商工業の利益を害して以て農業を保護するの必要あらざるなり、一は能動的にして一は受動的なり。我國の經濟上の戰鬪力を害してまで農業を振作するは決して利益にあらざるなり一例をとりていへば農法の改良等によりて農業を振作するは其れ自身商工業の發展に害を及すべきものに非るが故に、予輩は之に對して異議を抱くと能はずと雖も、穀物關稅によりて外國の穀物の輸入を妨げ、內國の穀價を高め之に由りて農業を振作せんとするが如きは、正しく商工業の發展を阻害するものなり、何となれば之に由りて勞働者の賃金は著しく增加し、工業の生產費を增加すればなり。これ等商工業の發展を害すべき手段に由りて農業の振作を期圖するは實に本末を顚倒するものといはざる可らざるなり。

以上陳ぶる所は本問に對する私見の概要なり。之を證明するるには統計其他を以て之に裏書をなさゞる可らずと雖も、事甚だ煩はしければ之を省略せり。讀者幸に之れを諒せよ。

中農立國論

農商務大臣　男爵　大浦兼武

歐洲某々國の如く、一國の壯丁を都會に集中せしめて職工たらしむることは、工業旺盛の地には免るべからざる趨勢ならんも、立國上頗ぶる考慮を要することなり。

我が帝國が古來農を以て立國の大本と爲し、殊に中農を基礎とするを以て最善の方針と謂ふべし、蓋し中農は體質强健にして、氣風淳樸、且つ剛毅にして最も奉公の念に敦きが故なり、國家は宜しく之を保護して以て其の剛健なる元氣を支持し作興せしむるを要す、政府が低利資金貸附の便法を設け、肥料農具種子の改良等を計るに鋭意する、また總て此の方針に外ならず、斯くして農業の發達を圖り、然る後推して工に及ぼし商に至るを當然の順序とせずや。

强兵の基は剛健なる壯丁に在り、剛健なる壯丁は主として中農より出づ、現に中農衰へて其の國の兵種尫弱を致すは、歷史の證明する所にして。又經世家の常に憂慮する所なり、商工の輕んず可らざる素より多言を要せざるも、先づ主として農、殊に中農を保護するを最要最急とす。

經濟の要は言ふまでもなく土地資本勞力を調和し利用して最善の效果を擧ぐるに在るも、殊に勞力に重きを措かざるべからず、勞力の原は壯丁にあり、而して剛健にして最良なる勞力は重もに中農にあり、中農が一國富强の根本たる、亦論を須ひずして明らか也。

更に此の機會に於て一言を添ゆべきことあり、西洋文明の基は基督教にあり、彼等は君父の上に別に神ありと爲し、基督を君父以上に崇む、我が國に至ては、肇國以來天子を最尊最貴とし、神武以後　今上陛下ま

て百二十一代の列聖常に國民絕對の崇仰を享けて、國家社會組織の中心とならせ給ふ、故に忠孝を以て倫彝の大本とす、上に萬世一系の帝室を奉戴し、下に忠勇義烈一に君國のために奉ずるを以て理想とする國民あり、國の遂に富みて而して强かるべきことは、立國の基礎實に玆に存するがため也、維新以來西洋科學の輸入と共に、我が國民の思想上にも知らず識らず變化を來し、國民の信念確乎たる基礎を有せず、古來國民の思想を支配し行爲を律したりし宗敎的信念漸く薄く、而して尊皇愛國の大義、深く青年の腦裡に浸染するの機少く、動もすれば却つて文明の外形に眩惑せられて其の大本を解せざるが如き風儀を馴致するあるは、深く憂慮すべき所とす、蓋し思想過度の時代に處しては、經世家大に思ひを玆に致し、敎育も經濟も政治も、總て尊皇愛國主義を大本として割出さゞる可らず、敎育勅語及び戊申の大詔は、實に此の大本を宣明し給へる國民の信條にして、我が國民の歸向する所自から昭々として、一毫の惑を容さず、農と雖も、商工と雖も、皆此の精神を體して其の業に勵むを要す、先づ其の順序として益々中農を保護し發達せしめて、其の剛健なる元氣を作興し、殊に忠君愛國の精神を旺んならしめて、以て國民の範と爲らしむることは、蓋し官民の擧げて盡すべき方途ならずや。

道德的征服

伯爵　大隈重信

昔梁の惠王が孟子に問うて「天下惡くにか定らん」といった。此問は誠に漠然である。孟子は之に答へて

「一に定まらん」といつた。すると又惠王は「誰か能く之を一にする」といふ、孟子は「人を殺すを嗜まざるもの能く之を一にする」といふ。此論法を我輩が又用ふると、此答には、國の本は人であると言はねばならぬ、けれども、如何に人が多くても愚ではいかぬ、賢くなくてはいかぬ、此に於て國の本は人であるが人の本は智慧といふ事になる。併し智慧が如何に有つても其人が狡猾く、自己の爲には智を出すが人の爲に出さんとなると其國は盛にならぬ、此に於て又智慧のみでは駄目といふ事になる。すると孟子の語に少し近よるけれども其本は仁である。仁といふと如何にも漠然たる事であるが、人が己を利するのみならず又他をも利する。即ち仁は社會的の者である、旣に仁とは二人と書く、己のみではいけぬといふ事を示すものだ。到頭國の本は人、人の本は智、智の本は仁となつた、が又如何に人の爲に働く才があつても、斷じて行ふには勇がなくてはならぬ、此に於てか勇を要する、此勇そのものは意志の力に屬するものである。慈悲の心あつて善惡の判斷さへ着けばそれで善が出來るかといふに、更にそれに堅固な意志の力が添はなくてはいけぬ、惡を去る事が出來ぬ、不善と知りながら改むる事が出來ぬ、それ故義を見てせざるは勇なきなりといふ。義を見て知つても行へぬのは勇がないからである、故に又勇を要する。生存競爭の世の中には特に勇を要する。國は勇を以て起り智を以て亡ぶ、換言すれば貧困が起り富豪が亡びる、武强を以て國を興し文弱に陷つて國を亡ぼす、是迄の社會の歷史は皆是である。して見れば勇である、實際的競爭は勇である。今日は機械の戰爭であるといふけれども機械のみではいけぬ、根本は人々の勇氣である。是を以て互に武を學ぶのである。併し如何に人多くして武が盛であるからとて、武のみでは又倒れる。人に對するには是非とも仁を要する。同情がなくてはならぬ、同情のないものは盛にならぬ。それよりして犧牲の精神、愛國の精神なるものが起る、國家、民人に對しては常に此精神が必要である。此等が全く備はれば初めて、生存競爭の場裡に雄を稱する

事が出來る。此道理は有らゆる個々の生存競爭の上に就いても同樣に言ふ事が出來る。

國家の基礎は農、工、商の凡ての上に築くべきである、立國の大本を工業商業の上に置くと國は富むも知れぬが、如何も銘々懷勘定のみ強く、そして得た金をば自分の慾望のみに消費せ樣とする。即ち利己主義快樂主義に流れて人間は墮落する、昔日の精神、愛國、犧牲の精神も次第に薄弱になり、遂に希臘、羅馬の如き廣大なる國も亡びて仕舞ふ。工業立國、商業立國皆いかん。といつて農業立國も亦行はるべきでない。つまる所並存である。時と場合とによつて農、工、商が各々偏して盛なこともある。が如何に國勢が變化したからといつて農、工、商は常に並存する。又並存すべきてあつて決して偏癈すべきてない。國は富みさへすれば宜いといふものてない、富みさへすれば宜いなら商工は或は其目的に合するでもあらうが、其弊は利の爲に相爭ふに至つて却つて苦むことが出來る。矢張り孟子の語が當つて居る、抽象的てはあるが眞理てある。國の本は人なり、人の本は智なり、智の本は仁なり、仁の本は勇なり。私の答は甚だ漠然たるものてあるけれども此中に動かすべからざる眞理を含んて居る。

併し物は比較して見るべきてある、そして其最も進步の後れた低いものを助けて高むるを要する。然らば現下の我國情ては何てあるか、それは科學てある、之を應用して働く工業が缺けて居る。而かもそれ等の工業そのものゝ中て一番缺けて居るのはメカニックてある、機械工業てある、諸種の物を造る機械の製造が最も缺けて居る、紡績、織物を作るにせよ皆機械を使用するが、それを自國て製造出來ずに居る、物を造る機械の製造が今日一番幼稚てあつて又一番肝腎てある。是が進めば其他の工業も從つて進む諸工業の進む結果は他の産業も亦段々並行して進む、即ち農業の如き、製造より導かるゝ原料の需要からして促進される。又其土地の生産ても方法に改良をさへ加へ最新の機械を用ひ最新の肥料を用ふるといふ樣な事をすれば、今日の倍以上の增加を見る事も困難てはなからうと思ふ。

それには何を要するか、矢張り根柢には科學を要する。天然の力を利用するには科學を要する。同じ面積でも今日では僅か一人を養ふだけの者を能く二人を養ふ樣にするには矢張り科學の力である。

日本は五千萬の人口を有する、仲々盛なものだが惜い事には知識が一番缺乏して居る、科學の發達が幼稚である、若し之が十分進歩して其力を應用する事が出來れば、人口增殖率の多い位は憂ふるに足らぬ、優に今の二倍の人口を養ひ得て雄を世界に稱する事が出來る。科學中にもケミストリー、即ち化學。是が又大切なものである。空中に遊離する炭素、窒素を取つて肥料とする事も其力に因つて出來る、すれば從來の樣に原料の輸入を要する事なく、我等の呼吸する所のものを取つて直にそれに代ふる事となる。又大根、米、麥色々のものから形を變へて樣々なものを作る事も出來る、噴火山が多くて硫黃の如きものも澤山ある、化學的工業を起して國利を圖る事は亦甚だ必要と思ふ。が此も現在ではメカニック同樣甚だ幼稚である。此等が共に進めば日本も獨逸、亞米利加と競爭が出來ることゝもならう。つまり智が必要である。が前にも言つた通り其智は正しき智でなければならぬから仁が必要である。それには斷が要るから勇が又必要である、が仁者は必ず勇なりで。是が根本である。そこで孟子は「人を殺すを嗜まざるもの能く之を一にする」といつた。他日我國民の力が大に發展して全世界を統一するも宜い。けれどもそれは蠻勇ではいかぬ、仁と結び合はなくてはいけぬ。所謂道德的征服でなくてはいかぬ。

立國は偏す可らず

遞信大臣男爵　後藤新平

國を立つる基礎如何、余は曰ふ、國家も亦一の生物也、生物の原則に由つて立つべきのみ、或る動物は自衞の必要より毒牙を有し、又毒爪を有するもあり、然かも相當の營養は總てを通じて必要也。

或は文、或は武、孰れか最も必要と問ふものあらば、其の間や既に根本に於て謬れり、陳龍川も曾て論ぜりと覺ゆ、文武孰れも偏重偏輕す可らざるのみ。

更らに農工商孰れかと問はゞ、稍々實際に近き問題となる、凡そ世界孰れの國に通じても立國の基礎を同一にすべき理由はあらず、唯だ其の國狀如何と視て之を定むべきのみ、我が國の現狀よりいはゞ、農は人口數に於て正さしく過半數を占む、故に農を等閑にす可らざるや多言を要せず、農は今日の實際に於て實に立國の基礎たるべし、然れども將來の趨勢に鑑み、殊に人口增殖の狀勢より推考するに、我が農產のみに由て國民の生活を維持し能はざるに至るべきや明白なるを以て、勢ひ食物其の他生活資料の供給を外國に仰がざるを得ざるべく、隨つて商工の發達を要するまた冗說を須ひざるべし、思へ、我が米麥稗豆のみにては、將來繁殖する國民を養ふに足らざるにあらずや、必須生活品の外少しく目覺しと看らるゝものは、悲い哉、僅かに生絲を有するに過ぎざるに非ずや、故に國民の向上と國家の發達とを求めんには、勢ひ汎く農產品に加工し、且つ世界と有無相通じて汎く國外の物資をも吸集せざる可らず、乃ち適切にいへば農商工もまた偏輕偏重す可らざる也、而して是れまた生物の原則適者生存の理法に於て已むべからざる結果とす。

余は又我が帝國の地位に徵して、海事の最も忽せにす可らざるとを主張せんとす、生產を盛んならしむるの必要なる言を俟たざるが、殊に海事生產に重きを措かざる可らず、所謂海事生產とは、單に水產業の如きに止まらず、水產業素より必要なるも、我が帝國の地位として、且つ國民自から海國男兒と稱する以上、船舶航海に力を注ぎ、世界の運輸を獨占するの意氣あるを要す、船舶航海は今や最も重要なる地位に立ちて、貿易を左右する力あり、我が輸出入の平均の如きも、

船舶によりて支持せらるゝ形迹あり、余は去る第二十五回の議會に協贊を得て、造船航海の奬勵費中より約百五十萬圓を減額し得たるも、斯の如きは單に無要の保護を減ぜしに過ぎず、毫も誇りとすべきに非ず、寧ろ船舶の改良を奬勵し、且つ航海を進歩せしむるがため、更に大に保護の要あるを感ず、國家の大發達を期せんには、素より然かするを以て最良とすれば也、現に造船航海を奬勵し保護するがため、國家は年々損失するも、彼等航海業者は國家より享くる保護奬勵費を幾倍し幾十倍して國益を擧げつゝあり、更らに大に進んで制海權を握り、世界の運輸を獨占するを要す、余の所謂制海權と呼ぶは、海軍の力を以て海上を支配せんとするには非ず、海軍の貿易を保護し、船舶を保護するがためには素より缺くべからざるも、單に軍艦のみに由て國家の繁榮を期待すべきにはあらず、唯だ主として益々善良なる船舶を製造して海上に雄飛せしむべきのみ。

海は全世界の三分の二を占む、洋中にある島嶼として、海國男兒と稱するもの、如何ぞ海事、殊に海事生産を忽せにす可んや、將來益々國運を發展し、其の繁榮を圖らんには、主として海上に向はざるを得ず、所謂立國の要道なるもの亦知るべきのみ。

司法行政立法また孰れにも偏すべからず、偏重偏輕は國家の進運を阻礙す、文武は勿論農工商また偏すべからず、唯だ時の必要に應じて能く鹽梅し行くべきのみ、然らば則ち偏輕偏重を明かにすべき衡量は何ぞ、余はまた曰はん。同じく生物の原則に由るべき也、國家も亦生物也、生物の優勝劣敗、適者生存の理法はまた國家にも行はる。

或は生物に道德なく、秩序なしと做すものあるも誤まれり、唯だ從來研究足らずして之を知ると能はざりしのみ、彼の蜂の如き、膃肭獸の如き、ペストの病原たるタルバカンの如きすら、井然たる秩序を有すると明白となれり、生物の理法を無視して國家の事豈解す可けんや。（文責在記者）

國家は建物の如し

池邊吉太郎

餘程大きな問題であると同時に又餘り漠然たる問題かと私は思ふ。第一國といふものがそんな單純な一つか二つの基礎の上に立つ事が出來るか疑問と思ふ。一つか二つ、其樣な事ではいけぬ、一番強い國は一番澤山な複雜な基礎の上に立つものと思ふ。國家は猶ほ建物の樣なもので、一本の柱、一つの礎では駄目である大きな家になればなる程澤山の柱と澤山の礎が要る。澤山の柱と澤山の礎があればこそ大きな建物が載るのだ、輪奐の美を增せば增す程上道具が大きくなり重くなるから益々其柱や礎の數は殖えねばならず、そして十分それに堪へる程堅牢なものでなければならぬ。

國家としては勿論農なり工なり商なりが繁昌せなければならぬが、それのみではいかぬ、其外に其國民の精神能力等に於て幾らも重要なものがある、例へば戰爭には命を棄てゝ惜まぬとか、同時に研究心が強くて哲學なり、文學なりに深く廣く正しい事を知るとか、新しいサイエンスに就いて他國を眞似るのみではなく自分の國でも發明し出すとか色々の事が必要であらう。又國民道德に極、健全なものを得るといふ事も必要であるに相違ない。強い國偉らい國であるならばそれ等が皆備らなくてはいけぬ、一つ缺ければ不健全である、更に二つも三つも缺けては不完全な弱い國でなくてはならぬ、礎は何れが一つ缺けても困るが、缺けなくても或る處が高く或る處が低ければ駄目だ、平一面に敷く力といふものが大切である。

農業立國、商工業立國などの說は、國の位置、形勢等から起つたものと信ずる。一寸國防の論にしても、陸海軍孰れに基礎を置くべきかといふに。國防は國土

を防禦するのであるから足を國土に着けるものでなければならぬ、すれば言ふ迄もなく陸軍である。けれども日本は海の中だから海軍擴張の必要な事はいはずとも知れて居る。それなら陸軍を無視してもよいかといふに、左樣ではない。國土の上に足を着けたものでなくてはならぬともいへる。が私はどちらも輕く見る事出來ぬと思ふ。つまり天然の地位、形勢から言ひ得べき陸海軍の樣なものですら權衡を要するのだから、他のものになると尚更言ひ惜からうと信ずる。

商工業立國といつても國が町人と百姓とのみで持てる理窟のあるものでない。それと同時に、日本は兵隊が强いので國が興つたと思ふのは大間違だ。或は農業が基礎と斯ういふ。是も如何ですかね。經濟の狀態がプリミチヴになつていけない。如何しても商人も製造人も居なければならん。强ひて輕重をするのは無理だと思ふ。それが旨くいかず、澤山の基礎が不平らになつて一つは高く一つは低いといふ時に、其低い方を高める爲商工業立國といふ立論のあるのはよいか知れぬ、けれども只商人と職工とのみで國を立て樣とするなら馬鹿な話で、國が持てるものでない。

それなら今何が一番日本で缺けて居るかといへば、私は此節では無論國民の道德などが低過ぎはせぬかと思ふ、今迄の思想が權威を失つて動搖しつゝある處へ、又外から動搖し居るまゝの西洋思想が入つて來て、一つになりて動搖の度を高めて居る、それで道德の信念も甚だ危殆に感ぜらるゝ、さればといつて道德さへ高まれば國が持てると思へば是も亦間違である。要するに私は何れに偏しても惡いと思ふ。國を跛にしては甚だ不道理である、方便論は別である。

重きを國民の精神、氣力、道德、知識に置け

法學博士　松崎藏之助

立國の大本を何に置くべきか。私の此問を聞いて直に感じたのは偉い六かしい問題だといふ事である、一體何が最初に私の頭に閃いたかといふに、その問題は經濟上の觀察點よりは寧ろ一般に、政治上道德上社會上の觀察點よりするものとしてであつた。單に立國の大本として解釋するなら寧ろ經濟上の問題と見るよりは、汎く大體上の問題と見る方が至當と思ふ。がそれは兎もあれ經濟上の問題としてのみでなく一口にいへば立國の大本は國民の知識精神及び道德心に在りといはざるを得ぬ。

何國の歷史を見ても、既往の事實丈に徵すれば大事業を爲した國民又は國家なるものは常に其點に於て他とは異なる所のありしを見る。即ち大事業といふは能く一國民人の福利を增進し、進んでは世界の文明に貢獻したといふ樣な事、斯樣な事をした國家又は國民は其知識豐富、精神甚だ旺盛て、道德心及び品性の常に高尚なものであつた。言ひ換へれば斯かる國家又は國民であつてこそ初めて大事業は出來るのである。が國民の發展が頂點に達するとか、或は又他の原因若くは影響等より此國勢は萎靡して振はざるやうになるも、道德、品性共に低下するのである。

夫の支那の戰國時代に楚國の使が何國かへ往つた事があつたが、其國の朝廷では色々の寶物を並べて、斯樣なるものもあれば彼樣のものもあるといふ風に澤山見せた上、扨て貴國にも何ぞ寶があるかと問はれた時に、何もありません、只一民人があるばかりてすと答へた、成る程其通り民人も慥に寶に相違ない、けれども其寶とする所は民人の有する豐富なる知識、旺盛な

る精神、道德、品性等の點である。從來經濟上の進步と國民精神との關係をば、殆んど無いものの樣に解釋して居るが、凡ての學者の見解であつたけれども、是は必ずしも正鵠を得て居ると思はれぬ、經濟上其財貨を生產し、資本及び其富を作るには、無論其國民の智識及び性能の力に依るに相違ないが、それよりも更に、其精神道德品性の必要な事は、斯くして得たる富を如何樣に利用するかの問題に關するからである。即ち其處に國家及び國民の、政治上に於ても道德上に於ても、宗教上に於ても、將た經濟上に於ても、その爲す一切の事業の性質、効果等が發揮されるのであるから、最も此點が大切な處だ、近頃の樣に人の考が凡て物質的になり、只資本さへ殖し富さへ增せば善いとするのでは、如何も先が心配になる。それ故立國の大本といへば、無論國家の生命を永遠無窮に期し、そして其國家を富强にし、能く宇內萬邦に冠たらしめんとの意味を持つのであらうから、從つて此問題に接すると直に私には常に考へて居つた斯方面の事が眞先に胸に浮かんで來るのである。

が問ふ者の心はそれでなく、立國の大本を經濟上より見て何に置くべきかといふ限定があるのだから、玆には農工商の何れに立國の大本を置くべきかといふ問題として更に考へねばならぬ、それにも亦色々の解釋が有らうと思ふ。先づ根本的の解釋として二つあらう。一は通常學者又は世人の考ふる如く、農工商は何れが最も富を作り出すか、そして國民の慾望をば最も圓滿に充足すると同時に、政治上及物質的に他國に比して勢力を持つことが出來るかといふ事である。けれども右の問題は只此解釋のみで盡きるものではない。生產上の關係をのみ見ずして、矢張り配分及消費の點からも尙ほ解釋すべきものだ。配分、消費と生產とは勿論關係がある、それ故前の解釋法と必ずしも無關係のものではないけれども、併し民人の幸福なる問題は、只財貨を澤山作りさへすればそれて宜いと定められるものではない、假令生產の量は少くても若し孟軻の言つた如く、頒白のもの道路に負戴せず、七十の者帛を衣、

肉を食ひ、黎民飢ゑず寒えず、然り而して王たらざるものは未だ之あらざるなりで。一般に不足なく衣食住の資の供給を受けて滿足する事が出來ればそれも亦人生の一目的てあるから、須らく政治家の留意すべきものてあらう。果して然りとすれば、立國の大本を何に置くべきかの問題は、總て農工商中何れか最も一般國民に給するに衣食住を得るの道を以てするかの問題となる。

農工商中何れが最も多く國民に給するに衣食住の道を以てするかといふに、英國の如き國柄は例外として其他の國々を見ると、農業がそれてある事は統計の事實に徵して明白てある。それに就いて注意すべきは農業なるものは種類が分れて居らぬ、盡く同一の職業てあるが、工商となると種々に分れて居り、就中工業の如きは現今殆んど一萬餘種もあるといふから、之を盡く同一職業と見るのは如何かと思ふ程てある。隨つて利害關係も一致せぬものが多いが、農業は之に反して利害關係が相悖らない。それ故此關係からして見れば、絕對的とは決して私は言はぬけれど、先づ比較的に農業が最も國家を組織する上に大切なものて、一國の人口を保持し且つ養ふ點に於ては商工よりも一日の長があるかと思はれる。が是は只一つの觀察方法てあつて、別に前に述べた今一つの解釋即ち生産の方面からの考も亦缺くべからざるものてあるを忘れてはならぬ。

時に現今の資本組織。世界經濟の世の中に在つては、實に重きを生産にも置かなくてはならぬ、生産が多額てあれば其國も榮え、生産が少額てあれば其國も亦勢力微弱な事を免れぬ、加之、是は只生産が多額てあるか或は少額なるかの問題てはなくて、詳にいへば其生産物が外國へ多く輸出されるかされぬかの問題てある、國內に供給し餘つて外國へ多く輸出されれば國力は次第に充實するし、之に反して國內に供給し足りなく、却つて外國から多く輸入される樣ては經濟上又は政治上に於ける一國の地位並に勢力も下り弱められざるを得ないから、一國の國是又は政策の大方針を定めるに當つては、此方面の觀察も決して度外視してはならぬ

てあらう。何故に目下の狀況を以てしては、商工の盛な國は富み國力も充實し、之に反して商工の進步後れ、若くは甚だ振はざる國は右の如くなるを得ぬもの多きかといふに、言ふ迄もなく商工が盛てなくては輸出入の貿易額も少いからてある、加之、輸出入の貿易額の少いのは其國及び國民の資本を處分し、以て經濟上の勢力を振ふ能力の少い事を意味するからてある。此點からして考を及ぼせば商工業が農業に比して立國の大本と認めらるべきだと結論せざるを得ぬ、果して然りとすれば兩面の觀察鏡に掛たた結果としてどちらも重い、即ちどちらも輕くはないのである。

其處て私は常に思ふ、從來經濟學者のみならず、更に政治家、操觚者流が或は農業國と稱し或は商工業國と稱し、それに關聯して或は農業を立國の基礎とすべし、或は商工業を立國の基礎とすべしといふのは、唯一面を見、事物の一端のみを捉へて爲す皮想の觀察に過ぎぬ、私の折々斷へていふ事だが、社會も亦有機體てあるからには之を人の身體に比べて宜からう。人の身體は滿遍なく凡ての部分に發達を見なかつたなら、決して完全無缺の人間とはいへぬてあらう、即ち精神に於ても更に其肉身に於ても。手といひ足といひ、胴といひ頭といひ、凡てによく釣合の取れた圓滿に發達したものが眞美人てある、譬喩は可笑しいが力士を見ても分る。以前橫綱を張つた大砲の如きを御覽なさい。膂力の强いことは誰も許す所だが、扨て今の常陸山と四股を踏んて土俵の上に立つと、競力上て動もすると敗を取つた、今の梅ケ谷も左樣てある。常陸山の身體は實に圓滿なもので手の先、足の先迄も釣合が能く取れて居る、それだからいつも無理な角觝を取るけれども能く敗を轉じて勝とする。是が彼の强いそもくの原因だ、今日は稍々老ひ込んだけれども、猶ほ他の力士の老込み方に比べては强い。プラトーンがハルミデースに就て說きし所は決して吾人を欺かない。

一國の成立も亦同然と思ふ。一方に偏したのは或は一時功を收むるに早いこともあらうけれども永續きは六かしい、五年十年は一國の生命にすれば剎那の機な

ものゝ百年二百年三百年、五百年千年の長い生命を考へ、それよりして土臺を築く事にならねばならぬ。一時盛なのは所謂槿花一朝の榮て、一時を過せば早速凋落する事は生理學の原理だから言ふ迄もない。即ち經濟上から國家の成立を觀れば、農も工も商も盡く必要てある、それ等が相依り相扶けて共に國家の組織に基礎を與へるのてある。

　商業を立國の基礎とした政策を採つた英國が農業を抑へるを敢てしたのは事實だ、そして是が一時能く完全に衣食住の供給を國民に與へたとも事實だ。けれども斯樣な事は之を當時の英國に望むべくして、現時の他國民には望むべきことてない、何となれば當時の英國は實に唯一の先進國て、政治上經濟上共に比肩すべきものがなかつた、が現時に於ては如何なる國と雖も亦當年の英國の如きものはない、列强互に競爭の世の中だから自力の强いものゝ勝つは必然の結果と思ふ。能く言ふ事だが「經濟上に國境なし又國民なし」との語がある。如何にも全世界の人類が只利をのみ追ふものであるなら左樣もあろう。けれども奇態な事には世の中の人は只利のみを追ふて動いては居ぬ。已に國があり、そして又人種の別があると、之に伴ふて歷史、民性、風俗、習慣、宗敎等各特殊のものがあるから、それ等によつて牽制され、只利のみて動く者は必しも多くはない。それ故或る學者の言つた樣に「經濟上に國境なし又國民なし」などとは言へぬ。數百年の後には變化の時期が來るも知れぬが、來たらそれは其時の事實であるから仕方はない、が現在の各國の狀態よりして、互に經濟上に鎬を削つて覇を爭ふことは、將來にも倘ほ盛に行はれることと思ふ。

　此に於て最初に述べた事と少し關係して來るが、近來の商工業の進歩をザッといふなら直に經濟の進歩と言つて宜からう、何となれば亞米利加の樣な新開國を除けば農業は其勢力に於て經濟上の進歩に與つて居らぬ、設令なつて居ても輸出物品を生産せずして皆內國に於て喰ふて仕舞ふ故ならぬ樣に見へる。故に表面上與つて居るのは獨り商工業てあるといつて宜しい。そ

して一般の學者は、經濟上の進歩なるものは實は生産の三大要素たる天然、資本、勞力の三者の作用により て增減し消長すると認めるのだけれど、實はより大切なのは技術工藝の進歩である。即ち茲に言ふ如き現時の經濟の主要素たる工業に於ては殆んど技術工藝に左右されて居り、生産の三要素として數へられた物の如きは却つて附屬物の觀なしとせぬ。尤も企業家にせよ事業家にせよ技術工藝と關係ないとはせぬけれども、就中工業が最も人を離れて大に技術工藝に重きを置くものと思ふ。即ち初に言つた如く、立國の大本なるものは經濟上から見ても其國民の知識、精神と一方ならぬ關係のあることを證明する。

以上が問に對する私の大體の議論だから、農工商中何れが立國の基礎となると、唯一つを擧ぐる事は出來ぬけれども、是が或る時代或る國に於て何が最も重んずべきかといふ政策上の問題と爲れば即ちその時と場合と所とによつて定むべき所なしとはいへぬ。我國の如き國柄で世界の競爭場裡に立ち、進んで霸を爭ふの氣慨があるとすれば、目下の處先づ第一に技術工藝に重きを置かなくてはならぬ。斯くて商工の發達を圖ると共に退いて國民が立脚の基本とすべく農業をも衰頽させぬ樣にすべきだと思ふ。我帝國の現狀でも進歩發達すべきは商工業である、農業も進歩が難いとはせぬけれど、商工業に比ぶれば只維持保存を圖るべきものといふが適當と信ずる。

右に就いて尙ほ終に臨んで一言して置く事は、英國の如く農業をば敢て商工業の爲に犧牲に供するの不可なる事である。是は商工を立國の基礎と定めた諸國の歷史に徵して明瞭な事實だ。農は奇態なもので、戰爭等の爲に其國が破られ、他國の軍兵の爲に荒される事があつても、何時か又芽を吹き出して盛になり得るものだけれど、商工業は之に反して、一度偉らい目に會はされると復た芽を吹くことが困難である。昔から海軍國といはれた雄國でも、一度戰爭の爲に海軍力を破碎されたが最後、永久にヘタバッて仕舞ふ。カーセージ、スペインがそれである、和蘭がそれである。幾多

の歴史の例は頻々として之を證する。それ故立國の大本を論ずる上に於て常に此一事を考慮中に存せなければならぬと信ずる。

廣狹二義の國本

法學博士 鹽澤昌貞

立國の大本といへば、問題は頗る廣く且つ深からざるべからざるもので、單に國民生活の各部分に付き其一部を以て基礎とする事は六かしかろう、即ち此問題は、國民生活の基礎如何といふ問題と爲ると思ふ、本邦に應用していへば日本の國民生活の基礎は何かといふ問題である、要するに日本國家としての存在の根本問題に觸れなくては、所謂大本なるものは解釋し得まいと思ふ。

斯う見れば先づ國家としての存在の目的如何を考へねばならぬ、其目的によつて國家の達すべき方向が決定せられるのであらう、此目的を達すべき方針に就ては古來所謂文武孰れを主とするかといふ如き問題がある、日本は昔から所謂る尚武の國である、細矛千足の國ともいひ、神武以來の尚武の國である。支那の如きは何れかといへば文を尊ぶ國として、見られて居つた、が、今日の時代では最早や文とか武とか相離して言ひ得べくはない。國家として又國民の發達より見れば、兩者一を重んじ一を輕ずると云ふ譯には行くいまい、古い事の樣だが私の鄕里の水戸には往時の弘道館なる學校があり、今でも弘道館記の碑が立て居る其中に、「忠孝無二、文武不岐、學問事業、不殊其效」といふ語があるが、是が教育の本旨であつた。矢張り文武は分ち難

きものと思ふ。が、玆に立國の大本といふに於ては國家國民の理想と國狀とより論ずべきことゝて當然道義上より行かねばなるまい、而して此理想は矢張り日本國家として又國民として正義人道に依り世界人類の進歩を裨補し又指導するの覺悟に基づかねばなるまい、是に就ては先づ國家進運の基礎を鞏固にする爲め特殊の國體と國民性を發揮し一方に於ては忠君愛國の義を厚ふし又國民相互個人間の道德を進め、一方に於ては更に之を世界的思想と調和して國家共同生活の發展を期すると云ふ精神が第一義であらう、甚だ漠然たる言ひ樣だが、立國の大本は矢張り此處に置くべきだと思ふ。此理想と精神が國民として人生の活動の各方面に現はれ、各種の政策をも指導すべきであらう、然しながら是等の問題は頗る大問題で詳細に討究せなければなるまいが、別に論ずべき適當の人があろう、が、今日本に於ける國民生活の實際的方面から見るならば、一種々なる見方もあると思ふ。即ち政治上なり、法律上なり、敎育上なり、若くは宗敎上なりそれ〳〵に見た立國の大本なるものがあらう。

それ等と同じく又經濟上から論じ得らるゝ問題である、が只限定せられた一面の問題に過ぎぬのである。此方面から觀るに、從來農工商といふ産業の重なるものに就いて、日本では何れを主として發達せしむべきかは久しく論ぜられて來たらしい、或は農業立國或は商工立國と隨分議論のあつた樣である。歷史的に見れば日本の農業本位の國であつた事は日本歷史を繰り返せば明瞭であるが、獨り日本のみでなく農本論は東洋の經濟思想で、(西洋でも昔は同樣だが)支那人の經濟に關する議論を見ても皆農を本、工商を末とすることは一致して居る、日本の封建時代の學者の論じたものを見ても多くは皆此支那思想が根柢になつて勸農論を唱へて居る、けれども明治以後になつて我邦に於ける重なる産業の種類の相互關係に大分異動を生じて來た、是は世界の大勢に動かされて來た結果であるが、此に於て農工商何れを國本とすべきかの問題が實際に生じて來た。が是も何れを取つて何れを棄てるといふ

意味ならば無意味て問題とはならぬ。

勿論日本目下の產業上の狀態からいへば、何が主てあり又何が進み居るかといふと、事實上過去が農業てあつた如く現在も矢張り農業てある。日本人の食物の基礎はといへば米てある。此米が皆日本て出來る。近年は人口增殖の結果、少々外國米の輸入もあるけれども兎に角大部分は日本て作つて居る。其他米以外にも大抵の副食物は大部分日本て作つて居る。又外國への輸出品等を見ても言ふ迄もなく生絲茶等が重なるものてある、此等には工業の働きも幾分加はつて居るけれど先づ主たる部分は農業てある、從つて財政上日本の歲入を見ても農業が最も大なる租稅の負擔者てある。即ち現狀から見れば農業が主てある、けれども日本が今後經濟上て世界の强國と並立し、相當の地步を占むるに此儘て推して行けるものてあらうか、世界の日本としては政治上或は軍事上等種々複雜な關係があり、只、一筋てはいかぬけれど、而かも最も主要なるものは經濟上の發展てある、今日は外交にせよ凡ての國際上の關係は皆經濟競爭の餘波として起つて居るといつて差支ない。此點から考へて日本は果して農業によつて此目的を果し得るや、列强の間に鑣を並べて能く追逐し得るや否やを考へねばならぬが、我國土の關係並に人口の關係からして是は甚だ疑はしい。第一日本人の食ふ食物すらも最早不足を告げて居るてはないか、或は農業の改善若くは未開地の開拓によつて、尙發達すべき餘地はあらうが、兎に角邦人を養ふ以上に海外にも輸出して貿易上の勢力を爲し得やうかといふに、見込甚だ乏しといふて宜からうと思ふ。既に今日ても外國から米の輸入を仰ぎ居る有樣だから、如何しても農業をば、積極的に國際間に於ける經濟活動の基礎として依賴する譯にはいかぬと思ふ。即ち只消極的に日本國民の食物を主とし其生存維持の基礎を與ふるといふ事以上に餘り望を屬しがたくはないかと思ふ、此日本國民の生命を維持するといふ消極的の意味ては農は甚だ大切てあるけれども、外部に對する發展策としては何等か別に求むる所あるべきてある、然らば如何に

せば可ならんといふに、當然の結論として商工の他には得られぬてあらう。

今日商業及工業は日本に於て漸次發達して來たといふけれども、先進諸國に比較し見ると頗る幼稚の境涯を脱して居らぬ、私は平生日本の今日は之を商工業の方面より見ると創業時代であるといふ、發達などいふは餘りに鳴呼がましい、少くも我々の側より見れば斯う言はねばならぬ、只從來頗る幼稚な舊式のものが、幾分新式の方法を採用し、又或る點に於て大規模の企業が增加したのを見て、工業が非常に發達したなどいふのは、言ふものの眼界が狹い爲である、事實は只是迄無かつたものが出來たに止まる、之を進んだ國から見れば甚だ幼稚極まるものだ、併し幼稚なものこそ發展の餘地の十分に存するものだから如何しても着眼は此に於てせねばならぬ。

前にも言つた如く、日本が有力なる位置を占むべく海外に發展することは必要だが、それには外に向つて活動する方針を取るより他はない、即ち積極的經濟運動を爲すの道を講ぜねばならぬが、それには又現在最も幼稚なものに一層力を注ぐ必要があるから商工業の發達を是より大に圖らねばならぬ。特に今日世界の經濟上の競爭關係を見ると、列强の眼は盡く東洋に集注して居る、少くも先づ支那を中心とし亞細亞に向つて居るといつてよい。勿論世界中にまだ列强の手を伸ばす場所は南米なり、濠洲なり、亞弗利加なり、種々の方面に多くはあるが、就中經濟上からいへば、支那を中心とする亞細亞の如きは十分開拓されて居ぬから、先進諸國は目下最も此方面に手を伸ばすべく躍起となつて競爭して居る、日本では此際に處して如何にすべきか、經濟上積極的に進むには如何しても最も餘地ある方面に向はねばならぬ、而かも土地の位置よりすれば、先づ東亞に經濟競爭の位置を作る必要がある、是には何を持つて行くか、農產物を以てするか將た天產物を以てするか、是も或る程度迄は今日も已に實行し居り、今後とてもまだ實行を續くるべきものは幾分ある、譬へば海產物の如き若くは林產物の如き、大分支

い、けれども是丈では到底高の知れたものだ、矢張りもつと有利な又規模の大なるものを他に求めなくてはいけぬ、農産物は前にも述べた通り國内に供給するにさへ足らぬのだから、矢張り工産物の他はない、今日でも紡績マッチの類は幾分外國にも出て競爭する力が熟し居るけれど、尚ほ互に各種の製造工業方面に力を注ぎ、東洋を初として歐米諸國にも輸出する丈の源を養ふべきである。是には或は純然たる國産物、即ち美術的の性質を有する日本特有の工藝品などがあらう、是は需要に投合する適當の道を講ずるならば、歐米其他世界の各國に輸出する丈の販路はあらうから、此種の特有國産物を適當に發展させるは言ふ迄もないが、更に普通の工業産物、即ち歐米で既に發達した工業産物にしても日本で出來るものは多い、紡績の如きは其著しい例である、之を發達させて而かも歐米諸國の市場で爭ふのは困難かも知れぬが、東亞に試みるなら十分競爭が出來ると思ふ、又左樣せなければならぬと思ふ。それ故此方面の觀察、即ち日本の經濟上の積極的活動の方面からいへば、工業を進歩させ商業を擴張し、其力を借りて大に活用しなければならぬ。

つまり今日では農業は日本の國狀に應じて相當の進歩をして居る、新式の學理を應用して改良を加へ或は新農産物を移植すべき餘地は幾分かあらうが。兎に角相當の進歩は爲し居るのである。是に比して工業はまだ幼稚である丈に發展の餘地が十分ある、比較的にいふなら即ち無限にある、併し左樣いふからとて將來工業發達の方向を取り敢て農業を捨てるといふ意味ではない。英國が從來蹈んで來た軌道を日本も亦辿り得るやは疑問である、英國も昔は無論農業國であつたのが今日では純然たる商工業國となり、農業は衰微し盡して居る。けれどもそれは英國の如き國情であればこそそれで宜いのだ、英國は早くから大に殖民地の擴張を圖つた爲、今では廣漠たる地を世界に有し、食料其他の原料を十分母國に供給して尚ほ餘りある程の農業地たる大國土を領内に持つて居るから、本國では專ら商

工業に勉めても毛頭憂ふべきでない、それに航海業と海軍は十分に發達して海上の權力を占有して居るから、本國に農産物がなくとも國民は枕を高うし得ゐ、若し英國に殖民地がなく只英本國のみであるのに、尙且つ今日の樣な經濟の方針を取り居るとせば、隨分危い事と思ふ。若し四面環海の英國が今日周圍の國との交通全く杜絶される事あるとすると。英國民は僅少の間しか生活は出來ぬのである。けれども實際上英國の世界に於ける國勢の上から毫も憂ふべきものはなく、濠洲なり印度なり、加拿太なり又亞弗利加なりがあるから優に立つて行ける。

が日本の國情は丸で違う、到底今日本國人民の食物を供給して餘りある程の領土が存在して居ぬ、加之日本人の生活には米が重要の食料品である、今日外國で支那なり、印度なり、暹羅なり、安南なり、亞細亞地方に大分米を産するけれども、それを大部分外國より供給を仰ぐ事となつては隨分危險である、去れば如何しても商工業を主とする爲め農を放任して顧みないといふことは間違つた話だ、食物丈は如何しても日本國内に、切めて其大部分丈でも日本國内に作らねばならぬ、それ故商工業を進むるといつても到底英國と同じかるべしとはいへぬ。

商工業を進むるに、海上の勢力擴張はそれに附帶した條件である、積極的發展策を採れば日本國内に潜むべきでないから從つて海上の權力が必要となる。といつて强ちそれは海軍即ち軍事上の勢力のみを意味するものでない、兎に角航海業を出來る丈盛にし、船に乘つて海外貿易其他の事に當るのである、今日はパナマ運河の開通も近づきつゝあるから今後東洋に於ける世界航通の關係は一層頻繁になつて來るは疑ひない。而かも其曉日本は東洋に於ける世界航通の中樞に當り、最も重要な位置を占むるは何人も言ふ所である。此場合此機運を利用するには大に航海業を進め日本人の盛に海上に働き海外に自由自在に交通する氣勢を促すことは缺くべからざる事である、此方面に向つて大に努力する事が今日及今後に於ける我國民商工業發展に附

帶せる要件である。

何うしても經濟の基礎を固め其發達を期するには、つまる所は人に在る、人の能力にある、國民の知識技能並に德性等が根本である。人の能力が消極的では到底大事業を成す大國民とはなれぬ。即ちインタープライジング、スピリットの起る事が必要である。例へば彼の佛蘭西人の如きを見ても、概していへば彼等は勤儉の國民で、從つて財力は十分に充ちて居る、世界に對しても債權國となつて居る、が經濟上より見て海外の活動に至ると到底英獨等の對手ではない。航海殖民業に就いては政府が保護を與へ奬勵するけれども、而かも實行の上には比較的効がない。是は本づく所インタープライジング、スピリットの乏しきに因る、即ち消極的であつて積極的の能力の貧しいによる。勤儉貯蓄は敢てする、從つて財力は十分にあるけれど、之を自分の手で他に向けて大に活用させる能力が缺けて居る樣である。日本にはまだ財力、資本の乏しい事はいふ迄もない、併し是は人間が能力を備へ信用のある上は何處からでも集め得る。財力、資本の少いのは毫も憂ふべきではないけれども、只知識ある活動力を具ふると共に品性の高潔な、眞面目な道德的精神なるものが、我經濟界の人間に普く備はることが必要である。それでなくては如何に政府が鋭意奬勵しても實行は出來ぬ。即ち單に積極的方針として工業を進むるといふ限局された方面から見ても國民の知識と共に品性の陶冶に重きを置くことは急務である。それ故此立國の大本も、根本としては國民としての人生の道義的使命に本づかねばならぬのである。經濟上の立國の大本といふが如きは僅かに右の使命の上に現はれた一面の具體的表現に過ぎぬと思ふ。（筆記校閲濟）

工業立國論

子爵 金子堅太郎

立國の大本に就いては數年來考へた事もあり、それを今だに確信して居る、即ち我國では工業立國の外はないと信ずる。その理由として、第一には我國の地理上より、第二には邦人の技倆より、第三には世界の先進諸國の歴史に鑑みて論ずる。之を仔細に分析すると、第一地理から見れば亞細亞大陸に對する我國の位置は歐羅巴大陸に對する英國と同一と思ふ。彼の歐羅巴の廣大な面積、多大な人民に對して英國は僅かの面積僅かの人口を持つのだから農業で競爭は出來ぬ、即ち農産物では露西亞、獨逸、佛蘭西に及ばぬ、それ故外國の原料を自國に寄し、狹い面積に工場を建てゝ加工し、製造品として輸出する、斯くて國内の多數の人民に賃錢を與へ、又國内の資本を集めて工場の原動力とする事となる、そして輸出品から其原料輸入の原價と加工費其他の加はつた輸出の時價との差が富と爲つて國に殘る事となる。是が工業である、小さい面積に多數の人民の住む國では、如何しても此工業立國より外に經濟策として採るべきものはない、

日本の地位は英國と偶然にも相同じい。只英國は大陸の北に、日本は南に在るといふ丈の違である、一方は英吉利海峽に一方は釜山海峽に隔てられるといふ丈の違である、土地も大凡そ同じく人口も大差はない、それ故農産物は支那、印度、濠太剌利亞、亞米利加、加拿太には及ばぬ、面積少く土地が狹いから及ばぬのが當然である、けれども原料は運輸交通の便の開けて居る今だから、低廉な運賃で海外の各國から我海岸に盡く引寄せる事が出來る、それを輸入して加工し製造品とすれば宜い。資本は英國に及ばぬは固より、其他歐

米の先進國に比して及ばぬことも已むを得ぬが、其代り、割合に僅の工賃で巧妙な物を作り出す點に長所がある。又地理から見ると、日本は南北を縦に貫いて中央に高山があるから急流が多い、此各處の急流並に湖水を利用して水力電氣を起せば電氣工業は容易く起る、加之石炭も北は樺太北海道より南は九州迄も豐富に有るから之を原料として工業を起す事も電氣と相待つて出來る。

第二に人民の技倆如何と見るに、亞細亞の人民中其眼力其指力の鋭敏なことは一番である、それに文明の教育を受けて大都は勿論、各地方迄も工業思想は至らぬ隈なく普及して居るから、此人民を用ひて大に工業立國の大方針を立つべきである、けれども何時東洋の獨逸若くは英吉利となるかは時の問題だから、何時と判然言ふ事は出來ぬ。或は容易にそれ等の國の如くにはなれぬとしても、兎に角遂には頡頏し得べき人種だと思ふ。

加之工業を立國の大本とする以上は一日も速に着手して貰ひたいと思ふ。何故なれば工業を立國の大本とする以上は只内地の需用に應じて製造品を供給するに止まるべきではない、大本といふ意味は斯樣に貧小なものではない。勿論國内に供給するを順序として第一にするであらう、が是の第一になるのは只最初の時だけである、言ひ換ゆれば他よりの輸入の止まる迄である、苟も大本とする以上には普く四周の外國に販路を求めて貿易を擴張し、國富を殖すことてなければならぬ、されば今では朝鮮、支那、南洋諸島等に歐米諸國て專心手を着けて居るけれども、如何せん國土の相去る遠き爲と、又人種の差異がある爲に、十分内地の需要と並に其文化の程度、發達の區域等を詳にせぬから其地の住民の趣味、嗜好に投ずる事が出來ぬ、出來ぬ中が花である。彼等が異日全速力を以て買込むといふ方針を採らぬ中に逸早く我國より手を廻し、支那、南洋諸島等莫大な人民の需要しつゝある全額の切めて其半ば丈でも占領するがよい、今の中に工業家も商業家も共にそれ等の地方を跋渉し視察して、まだ是丈が發

達の望あり、是丈が輸入の成算ある等を取調べた上、此方から製造品を持ち行き、彼方から原料を持ち戻る、それに又加工して持ち行く樣にする、すれば行き戻り我商船に荷積して其船賃は同胞間に拂ふからそれだけ我國益になり、又從つて彼我の交通の便も並に開ける、非常に我國が富むことになる。今後將來十年間は着々此方針で實施しなければ、現在支那に賣り込まうと專心し居る獨逸、亞米利加に市場を占有され、我國は却つて此兩國の人後に落ちなければならぬ事とならう。僅か我國とは一衣帶水を隔つる支那に對して一萬何千哩を渡り來る獨逸、亞米利加に賣り込まれ、地理上の利便ある我國が空しく手を懷にして立つとなつては、我經濟上には非常の損失といはなければならぬ。抑世界的貿易には國境なしといはれ、只熱心と勉強との二つによつて成敗の定まるのであるから、我國民は大に覺悟する所なくては叶はぬ。只日本は一等國の列に入つたといひ、陸海軍の勢力によつて僅に得たるそれを喜び、甘んじて軍國の民として誇つて居るんでは、[illegible]軍事によつて折角得た所の利益をも、之を貿易方面に於て失ふ事ともなるであらう。

更に日本が歐米諸國に對して工業立國の基礎を立てるとなれば、今一つ南洋諸島亞細亞諸國に賣込める好都合がある、それは朝鮮支那、南洋諸島等へ獨逸を初め其他の歐米人の賣り込む品は餘り好過ぎる爲に却つて客足が遠い。日本が歐米諸國より化學的原料又は機械を輸入して、製造した商品を以て直ちに歐米の製造品と競爭することは難い、何ぜなれば其製造品の物質としても、又其仕上げとしても、將た外形としても到底彼等の製造品とは競爭し難い、然るに朝鮮、支那、南洋諸島等はまだ文明の度が低く、歐米の上等品を買ひ込む位置には達して居らぬから、日本人民が歐米に倣つて製作し始めたる未熟品が丁度彼等の需要に適して居る、粗雜品は褒めた事ではないけれども、今それ等の諸國に賣り込む時には粗雜品が却て値段の安い點で旨く歐米の品物と競爭出來る都合になつて居る、それに彼等は未だ精巧なる製造品を使用する迄に生活の程

度が發達して居らぬから我國の製造品の缺點が左迄貿易に差障らず、却て我練習中の製作品が彼等に向く。此處が日本品の現下に有する長所である、が今より十年の後には彼等の文化の度も進み、知識も增して、歐米の精巧品でなくては買はぬ樣になるも知れぬ、それ迄には日本も勉强して十分歐米の製作品を壓倒し得る程に行かねばならぬが、然るに現今の情勢に依ればその練習中の作品は丁度彼等の生活の程度に比して賣れるといふ利便がある。

歐米人が彼是れ日本を評するのを聞くに、亞細亞の市場を日本に取られ、彼等の賣込まんとする所を皆日本人に賣込まれるとて嫉むて居る。日本を恐れると甚しいので、今ては日本の技師、製造家等が歐米諸國へ行くと、何處の國ても同じ事、決して其工場を見せぬそれを見せるのは恰も敵に糧を假す樣に心得て居る、それ故日本の工藝家は其目的て外國に渡航して從前の如く研究することが出來ないから、今後は專ら內地て自國の學者技術家に就いて十分に研究するより外ない、斯くして我工業の發達を計るべきだと信ずる。

それから工業を立國の基礎と定めた上には、第一に着手すべきは日本の技師をして空理に走る事なく實地に適した考を以てやらす事である、今迄の日本の技師は學者としては力があらうけれど實際家てはない、自己の造る品は何處に販路を求むる積なのか、其原料を何處から取るがよいか。といふ樣な凡て經濟的の考の素要を持たず、全くの學者的て金に構はず、よい品を作ろうとのみ着目するから勘定には合はぬ、能く經濟的思想を基礎として掛る技術家は誠に少い。各地方の事業の衰微し發達せぬのは全く技師其人を得ぬが爲てある。只化學的原則は心得て居るから、何と何と何を合はせれば何といふ品物が出來るといふ事だけを知つて居るのではいけぬ、其他に原料を何處から取寄せれば最も安くつくか、又何處へ之を賣り込む事にしやうといふ樣な事を考へ、十分勘定に引合ふ樣にと勉めねばならぬ、此事は技師並に工場主に於て深く注意すべきてある。

第二には職工である、今迄の樣に職工には只賃銀さへ拂へば濟むといふ考ではいけぬ、一つ所に雇ひ入れた職工なら、年數と伎倆の積り熟するにつれて伍長と爲し、什人長となし百人長となし、他の職工を監督し支配するといふ樣な組織にして、銘々實地の上から發達する工夫を用ひて使用し訓練するが必要である。

第三には是迄日本の工場を巡檢するに、一の製造品を出すべく工場を建つるに、技師も工場主も同樣只その品物を作る丈で宜しとの考で居る、歐米諸國では左樣ではない、主產物を造るを第一とするは勿論だけれど、その主產物を造るに當つては色々の廢物が出る、それを利用して更に副產物を造ることが何處の工場を廻つても行はれて居る、然るに日本では副產物は皆見棄てられて居る、昨今漸く技師並に工場主にも此廢物利用、副產物製造に就いて見込を立てるものが出來て來たが、尙ほ一層此點に注目し、主副兩產物相待つて工業經濟を建てる事にしたい。

第四に、工場を監督するには、專務又は技師長自ら每朝職工と共に工場に行き職工と共に家に歸るんでなくては其工業は發達せぬ、日本の有樣を見るに職工は朝早くから出掛け夕方遲く戾るのに、專務若くは技師長などは日が中天に上つて行き、日が西山に傾かぬ中に歸る、その爲職工等は自分等が何の爲に獨り働くのか分らず厭氣を生ずる、自ら怠る、それよりして受ける經濟上の損失は何れ程か知らぬ、從つて事業不振の基となる。それは皆專務並に技師長等の責である。何としても工場に働く人は、實踐躬行、一身を以て衆を率ゐなくては駄目である。如何に研究して宜いものを造つても如何に勞力を多くしても誰も見て呉れ手がなければ厭やになるのが人情の自然だからである。

余が先年米國の工業を視察して感心したのは亞米利加のニユージヤーセー州のオレンヂといふ町で、エヂソン氏の招待を受けて其電氣工場を見た時である、私の宿屋にエヂソン夫人が迎に來て、立派な馬車を廻し、良人が來べきであるけれども工場へ出て居つて參れぬから、貴方で御待受する事にする、それで私が代つて

參つたといひ、先導して私を其工場に連れて行つた、それから案内者によつて一棟〳〵見廻つたが、如何樣な事でも私の質問には皆其案内者が明瞭に立ろに答へて吳れる、服裝はと見れば職工服。それは穢ないヅボンに淺黃のジャケットを襟なしのフランネルのシャツの上に着て居る、頭には帽も冠らず、髮も梳らず、顏には垢のある人である、聽て最初の室に戻ると案内者はッと立つた、て私は十分感謝の意を述べ、尙ほ主人エヂソン氏に能く禮意を云つて貰ひたい、併し會はずに戻るのは遺憾だから居られるなら一寸會ひたいものだといつたら、其粗服の案内者は微笑して、エヂソンは足下の前に居るといつた、初めてハッと氣付いて、ては足下がエヂソン氏かと言つたら左樣ですといふ、實に驚いた、其富は何千萬と號し、居宅は王侯も三舍を避くる程の立派な處で、私を迎へに廻した馬車を見ても、貴族にも乘れ相もない華麗なものであるのに、工場に居る彼はといへば此姿である。私は其處で今迄エヂソン氏なるを知らずに話して來た事を詫びたが、尙氏自らの語る所を聞くに、毎朝八時出勤て五時迄は居り、晝は職工と同じパンを食つて同じ生活をする、身を以て先んじて衆を率ゐるから、氏の工場には未だ曾てストライキはない、賃銀を上げよと强請するものもない、亦他から職工を誘拐して連れて行く者もないとの事である、私は此一言に全く感心して、我國の工業會社の專務や技師長の正に大に學ぶべき所として歸つて來た。

要するに私は我國の地理上及び我人民の技倆から考へ又歐米先進國の工業の歷史に鑑み、我日本は是非共工業立國てなければならぬ、左なくては到底我國家經濟の發達は望み難いとの意見を有して居る。

現況に觀て將來を計れ

法學博士 田尻稻次郎

一、經濟の目的

元來經濟の目的は最小の勞費を以て最大の結果を得るに在る、此外に出ないのです、そこで先以て國家を成しますには衣食の問題より解決して行かんければならんといふことになる、御承知の通り昔聖人の教を布かれたのもそれより外ならぬので「政は民を養ふにあり。」誠に其要を得て居ります、然し民を養ふといふは固より意味の深いことです、昔漢の世に鼂錯と云ふ人がありまして、「論貴粟」といふ論文を著はして居ります、其冒頭に、「聖王上に在つて民の凍餒せざるものは能く耕して之に食せしめ、織つて而して之に衣せしむるに非ず、爲に其資財の道を開けばなり」といふてある、民を養ふことは則ち「其資財の道を開く」といふ、意味に外ならぬのです、又國には貯蓄がなくてはなりません、則ち古の聖賢は「國九年の蓄なくんば不足と云ひ、六年の蓄なくんば急といひ、三年の蓄なくんば國其國に非ず」といつて居られる、此通である、又之を民の働の上より見て、「夫れ天地の大計三年耕して而して一年の食を餘し、率ね九年にして而して三年の蓄あり、十八年にして而して六年の積あり、二十七年にして而して九年の儲あり冷旱災害の殃ありと雖も民困窮流亡すること莫き也」といつて居られる、我々後學は此處をやらうといふのです、ところが今日の狀態果して如何、東北に一年の飢饉があると直ぐ救助騷ぎが起る、古人は三年の蓄なくんば國其國に非ずと言ふて居るが是ては相濟まぬ、然し今日は開けた世の中である。又世界的の世の中であるから何も藏の中に九年分の米を蓄へて置くべしといふことてはなく、稼いで以

て國が債權者になりさへすればそれで宜い、英國などては御承知の通りそれてある。自分の國て作る麥は全國需用高の僅かに二割二分半位しかない、けれども商工業が盛てありますから餘程富が增加しまして、今日海外に貸付けて居る金の利子だけても十二億圓餘り一年々這入つて來る國柄てある、而して是れが年々增して行きつゝある故に九年の蓄どころか百年の備がある。それ故今日ては今も申す如く、何も藏に積んで置く用はない、國に餘力さへあればそれて宜しい、此餘力を作るといふ事が、即ち今日我國の必要とする所てあります

二、米、豆、麥、砂糖、石油の現狀

然るに實況如何といふと御承知の通り米麥が足らぬ、豆も砂糖も皆足らないてす、少しく事實を申上げて見ますなら、米ても先づ明治三十二年を起程と致して（なぜ起程とするかといふに、此年が今度改訂になつたといふ稍々文明的の條約の行はれた翌年て、是から輸出入の計算が今日の樣になりました次第、其以前は輸出入の計算の基礎が違つて居たのてす。又明治卅年前には貨幣迄も違つて居る、それに又さう僅い所迄遡るにも及びませぬから、過去十ヶ年の經驗て國家經營の基礎を立てて宜かろうとの考からてある）それより四十一年迄の間に、米の輸入の最大額は三十八年に於て五千九百七十九萬圓餘になつて居る、最小額は三十二年て五百九十餘萬圓、四十一年は二千二百二十六萬八千圓餘、十年の平均は二千八百四十萬圓餘になつて居る、日本は農國といひつゝ自分の食物が足らずに是だけを輸入せなければならん現狀になつて居る、味噌醬油も輸入して居る道理になつて居る、即ち豆をいくら輸入するかといふに一番多いのが三十九年と四十一年て、各々約千萬圓一番少かつたのが三十三年て約四百四萬圓てす。肥料に使ふ豆糟も中々馬鹿にならぬ、之が年々殖えて（是は殖えるも宜い、內地て出來れば尙ほ宜い、）四十一年などは二千四百四十八萬圓餘になつて居る、麥も近頃は御承知の通りに米利堅粉が大層這入ります、麥と麥粉とを合せて一番多かつたのは三

十七年で約千百十六萬圓でありました、一番少かつたのが三十二年で四十九萬圓普通は約五百萬圓乃至九百萬圓であります。次に砂糖は如何是も昨年は臺灣の御陰で大に減じましたが、一昨年は千二百萬餘圓を輸入し平均約二千萬圓のものを毎年輸入して居ました、まあ是れは大に減じませう、それから石油は如何、是も千三百萬圓の平均になつて居り、其の最大は三十七年の千八百餘萬圓最小は三十二年の約八百萬圓であります

さて此日本に米が元來幾ら出來るかといふに、先づ平年作では四千二百萬乃至五百万石、凶年には度はないが先づ三千八百萬石以下は凶年として宜かろう。前にも申した通り米の輸入も中々心配なもの、斯ういふことが國家の經濟に著々關係して居るから輕々に看過することが出來ない。それから麥は一寸二千萬石、豆は三百五十萬石ばかりのものが出來るので、足らぬ分は輸入して居るのです、此足らぬ譯は直ぐ分るのですが、併し只分つた丈ではいかぬから如何かせなければならん

日本の人口は朝鮮臺灣を別として五千五百餘萬人あります、そこで人間が米を幾ら食ふかといふと、昔から男が一年玄米一石八斗、女が一石六斗といつたものです、我々の胃袋の大きさから計算して見るとさうなる、胃袋に米を毎日三遍づゝ詰込まなければならん、然るに米では酒も造る、酒は避けべしなどと言ひますけれども飲まずには居られぬ、是に四百萬石から潰す、さうすると平年作で三千七八百萬石しか殘らない、陸軍では米六合を一日の兵食として居る、六合となると一人一年約二石二斗弱の割合になつて來る、六合に三百六十五を乘ずると即ち二石一斗九升になる、左樣すれば米が足らない筈です。御負けに一升飯を平げる者もある、數は少いが角力取などは中々食ふ。すれば如何したら宜からう。何とかして此情態を救はなくてはならん、英獨等も成程食料が足らぬが商工の道で盛に働いて居るのでそれで行けば宜い、英吉利は寢て居つて貸金の利子のみで前申す如く一年に十二億圓もヒヨ

ロリと這入つて來る。獨逸も債權國です。處が日本は債務國である、そうして輸入は何時でも超過して居る、近年の實况は三十九年は少々超過したが、それもたつた約五百萬圓而して四十二年は千八百九十餘万圓の輸入超過があつた其他は皆輸入超過であつて三十八年は一億六千七百萬圓、四十年は六千二百萬圓四十一年は五千八百萬圓の輸入超過です、それで債務國だから此儘では逆もやり切れない。英吉利は前申す通り利子も澤山取るが船の運賃で八億圓から取つて居る、尤も其の大部分は船の費用に使用しなければならんけれども兎に角英吉利人の收入がそれが爲に殖える、餘程盛なものである

日本が開け過して最早農業改良の餘地がなく又未開墾地も無いなら仕方がないが實は倘ほ餘地が澤山ある、固より未來永劫迄も農は國の本なりといふことは出來ぬ、同じ大根を同じ所に二本植ゑることは出來ない、知れ切つた話である、學説で申す收穫遞減點といふものが在るのです。即ち一人の力で以て精一杯最も有効に耕し得る丈の地面が殘つて居る間は人を增す程得である。人の增すと正比例に農産物が餘計に出來る、例へば一町歩の所を一人で最も有利に耕し得るとせば、一町歩に二人入つた所でどうしても前より收穫を倍に增す事は出來ぬ、精々二割方も增す位のものである。處が食ふものは倍になる、そこで土地人口の割合が或る處迄進むとどうしても農は國の本なりと言つた所でそれは「ノー〳〵」である。

そこで日本は如何かといふにまだ約五百萬町歩耕し得る地面がある、丁度今の田畑の開けて居るのが五百萬町歩、即ち田が二百八十萬町歩、畑が二百二十萬町歩、尤も此中には畑と田と重複計算になつて居る所もある、それは二毛作の所でありますが、麥を作る爲に田が一時畑に變ずる所がある。けれども兎に角畑が二百二十萬町歩ある、まだ國中に其位耕し得る地面が殘つて居る、學術上で利益的に耕し得る地面は十五度傾斜の處迄でありまして、其處までは棚を付けないで結構耕せる。其の樣な處が五百萬町歩殘つて居る。左樣し

て見ると是等を能くしたならば我國の農業は尚ほ中々發達の餘地があるのです

處がまだ驚きますのは唯今耕してある地面です、即ち五百萬町歩の墾地になつて居るもの……之に十分に改良整理を加へると未だ米を約千七百萬石、麥を千萬石增收する見込があるのです。即ち米麥種子の鹽水選で米の種子の儉約が二十四萬石、增收が二百四十萬石麥の種子の儉約が三十萬石、增收が百萬石、正條植で米が百八十萬石、通し苗代の廢止で三十五萬石の增收がある、其他害蟲驅除で四百萬石、水田に二毛作をすると麥の增收が八百六十萬石、尚ほ苜蓿、紫雲英、綠肥用大豆の間作で四千四百萬圓は出來る。實に驚くべきてあります、(是れは五六年前の調てありますが其より農事の改良に多少見るべきものがあつて少しは進みましたが先づ大體は斯んなものです)

尚一つ餘り世の中に普く知れて居らぬ事で比較的新しい事を一寸御話致します。それは今申した害蟲四百萬石の外に、藏に入つてから蟲が食ふ米も少くない、其害蟲を征伐しなければならんです。是が近頃の發明です、尤も昔から多少はありましたが餘り有効ではなかつた。元來米を害する蟲は極通例の奴は穀蛾、穀象、附胸穀盜、鋸穀盜などと申して中々澤山ある。是等の蟲が梅雨期前後に米に喰着いて堪らない、梅雨期は蟲の發生期で中々油斷はならぬ、就中其明け際が最も注意を要する時期です。あれが倉の米の二割以上を食ふことがあるのです。是はどうも養育した子供を殺す樣なもので無殘なものである。驅除の方法は藏を密閉して一種の硫化水素より發する二硫炭素と稱する稀薄な瓦斯を倉中に放散するのです。是は大に物を通す力のある瓦斯だから、俵の中に其瓦斯が入り込みまして蟲が死にます。倉に節穴が澤山あるといけませぬから目張りをせなくてはならん、さうするとすつかり害蟲共は死にます。併し一回てはいけませぬ、何故なれば其瓦斯も卵を殺す事は出來ぬからてある、それ故卵の發生する頃に又やらなくてはいけぬ、處で此瓦斯は非常に引火質のものてありますから素人がやると危險て

す、矢張り專門家の消毒屋を賴んで、二三遍試驗して貰つて練習せんといけぬ。それから今一つある驅除法は藏の窓を皆締切つて床の處に硝子で細長い引窓を作り、是處のみ明るくして置いて其處に適宜の容器に毒水を盛つて置く、毒水といふと學者めくが、水に少し石油を交ぜても又は白水でもよい、さうすると蟲は皆光を慕うて來て水に落ち込んで死んで仕舞う。是れは大變宜い、是で二百萬石位は喰はれないで濟み相である

米の事は是丈にして砂糖の事を御話する、砂糖といふものは甘いもので俗に甘いものを砂糖の樣だといふ。人間は一度砂糖を甜めると甜めずに居れない。酒飮みは酒が旨いといふが漸つと勉强して飮み習ふのです、生れた儘の酒好きはない、若しあるならそれは人間でなくて正覺坊位なものです。元來酒、煙草は原始的嗜好物でない、が砂糖は原始的嗜好物で、女、子供、爺々婆々皆好くのです。如何しても日本人の舌の上に三十六萬噸を載せないと甘味を感ぜぬ、それは其筈です、昔から三寸の舌と言ひまして人の舌の長さは先づ三寸であります。今三寸に五千二百萬をかけると一億五百六十萬寸即ち千五百六十萬尺の舌が出來る、幅は鳥渡一寸、其中に長廣舌といふのがあるから堪りませぬ、長さを一寸と見た所で五千二百萬寸、即ち五百二十萬尺はある。夫で三十六万噸を甜るといふと、一寸ビックリするが實は何でもない話です。處で此砂糖は矢張り輸入して居る、是が國內で十分に出來ぬものなら仕方ない、然るに我國では二十七八年後のお土產で臺灣といふものが出來た、此臺灣が天下の砂糖處である、東海道の江尻の邊を通ると芒見た樣にショボショボ〱と見える、あれが甘蔗とは情ない、元來砂糖は如何いふ處がよいかといふと赤道直下の南北十度以內の處が一番宜い、けれども晝夜平分線以內なれば宜い甘蔗は氣候の變化を嫌ふ植物であるが臺灣は臺南の少し北の處で二十三度半の北半球の晝夜平分線が通つて居る、あれからずつと南の恆春邊は呼んで恆春と稱へる通りにいつも春である、又灌漑にも大に便利である

左樣いふ樣な事で臺灣は天下の砂糖處であるから少し慾張つて見ますと五十萬噸の砂糖が出來るのです。然るに今日はまだやつと十萬噸ばかりしか出來ない、臺灣に往つて居る人は大變に砂糖が出來るなどといつて居るが、是は一向サトらぬ話てある、そんな事ては困る、前にも話した樣に大きな舌の上に十萬噸位載せた處が、我々一人の舌の上に砂糖一粒載せた丈の甘味も感ずるものてない

元來砂糖を作るに適當な方法があるのてすからそれをやらんといかぬ、方今砂糖を造る方法としては、「プランテーション、システム」と唱ふる即ち砂糖村を造るのてす、一區七千町歩、少くて三千歩町位の地面を悉く砂糖畑にしてやる、さうして灌漑の便をつけまして二千人ばかりの人を用ひ、一年七八萬噸位の砂糖の出來る機械を据付ける、すると甘蔗が一緒に出來ますから便利てす、今の流儀は彼處より五十本此處より百本といふ樣に集めてやるのてすから、漸つと十萬噸ばかりのものしか出來ない、其上生産費が餘計掛つて迚も世界の競爭場裡に立つことは出來ぬ、布哇が一番好い例てあります、彼處では悉く「プランテーション、システム」、即ち糖村制度といふものてやつて居る、それてなくては如何しても競爭が出來ない、そこて布哇を開きまして十年經つと三十六萬噸は出來るやうになつた、處て布哇は御承知の通り島が小さい、すつかり布哇の群島を合せました所て面積は八千萬餘哩てすが、臺灣は殆んど其倍ある、おまけに布哇は島が小さいから灌漑が不便てある、といふのは傾斜が強くて水を取るに困難てある。臺灣は御承知の通りに灌漑が非常に便利てある、島の眞ん中に一萬尺以上の山が七つもある、山がなくては水は取れませぬ。それから傾斜は島が大きいからして極緩である故少し人工を加へて水にこつちへお出てなさいと言へば直ぐ來るのてす、其方から大變便利てある、すれば充分砂糖は出來るのだけれども今のやり方ては甘くいかぬ、どういふ具合にやつて居るかといふと悉く勸業主義てやつて居る、或は苗を作つて見せるとか或は模範砂糖畠を作つて見

せるとかいふ流義てやつて居る、今日の糖政のやり方は砂糖村主義を妨げる、それ故如何しても各國と競爭する事が出來ない、當世向てないから渡世にならぬかも知れぬ、そんな事て己の道を盡さずしていや砂糖が高くなる樣に保護して異れとか何とかいつては砂糖を甜める人は大變迷惑をする。

それから石油てす。平均千三百五十四萬石外から這入つて居る、越後ては昔から七不思議と言つて居るが、今は寶田會社とか日本石油會社とか何とか言つて少しは緒に就いた樣てすが、尙ほ摺つた揉んだて十分にない、あれてはいかぬ、是は「スタンダルト」式の大仕掛にせんといかぬ、左樣さへすれば出來る、初は政府の手に取つてやつても宜いと思ふ、大仕掛て模範的に拵へる、それから然るべき資本家があれば遣つても宜い、個人的にやるから同士喧嘩が始まつて仕方がない、石油問題も所謂能はざるに非ず爲さゞるなりに陷つて居る。是等のものに手を着けると總締か約七千七百三十萬圓になつて、是等が內國に出來ればちやんと國家經濟の基礎が定まるのてす。是等が出來ると輸出入の不平均を矯め外債の元利支拂の財源にも困らぬのてす、然るにそれをせずに居るのは我々の怠慢てある

そこて天下の模樣は如何かと言ひますと、どうも全國に涉つて工產て立ち行く所のもの、即ち工產が農業よりも發達して居る所は、東京は暫く別として大阪、京都、福井(追付け石川も左樣になるか知れん、同縣には羽二重が大分發達して來ましたから)て、外は皆農產國てある、農業の中ても生絲て最も盛になつた信州、上州、福島縣のやうな所がある、生絲などは學術上ては農產物てある、直に人間の日常の需用を充たす譯に行かぬ所の原料品てあつて、農產品に持つて行くより外仕方がない、而かもそれも左程多くはない、左樣いふ譯て兎角我國に於ては農產物が主產物てある、そして其主產物が足りないといふ譯てある。そこて之を極手近にいふと我々は月入以上の生活をして其上アイスに引つ掛つて居る、どうしても唯今の通りの有樣てグツ〳〵して居て宜いといふ譯にはいかぬ、それぢや如

何するかといふと、前にお話した樣な事に手を着けさへすれば裕々と行ける、之を爲し得ぬといふのは我々の怠慢である。

今度は豆は如何かといふに朝鮮は天下の豆國である、北海道も豆に宜しい。然るに是迄はやり方が不味く放つカッてある‥‥夫れてホッカイ道といふのかも知れぬが石狩平原の豆などは實に見事なもので幹の高さが人間の丈位もある、氣候は滿洲朝鮮に似て居る、是は確に豆國である、此處に豆を作るが宜い、北海道をホッカイて置いて寒いとか何とか言つて居る弱蟲なら日本には必要はない、須く印度か墨西其か暑い所に養子に行くが宜い、そこてドウいふ工合かといふと彼處は臺灣、九州、四國を合はせた位の大きな國である、それに人口が四十年かゝつて漸く百四十五萬人餘りといへば情ない。あの國は斯う碁盤形に割つてある、さうして其一目が一萬五千坪て、其一つの碁盤の目の後の方に家を一軒造つて前を耕地にせよといふ事になつて居る、それては部落が出來ぬ事になるのである、元來新開の地には部落を作らんと仕方ない、四十三年も掛つてあの位しか開けない、あれを石狩の川縁を開きつゝ進み、川口に港を築けば何でもない事じや、川に沿ふて耕して上つて行くといふ事は島國を開くの原則である、先づよい加減に川に沿ふて場所を見立て部落を作り、水運に依り豆を集め、川口より敦賀に聯絡をつける、無理に函館から鶴の首の樣な函樽鐵道を敷いて居るが、それでは勘定に損が立つ。それてカンソンと言ふかも知れぬ、だから中々開けない、えんやらやつと四十年で百四五十萬人だ、又石狩の水も治めなくてはいかん、其は神居シコタンを切り擴げて川上の水を落し、之を受ける爲に川の屈曲と放水路的及船路的に矯めるのだ。左樣いふ樣な工合にやつて行けば容易く開ける、四十年といふ年期は隨分長い、四十年になれば人間も屈強な男になるが北海道はまだ小供た、それは如何といふと新開の地に部落の發達を妨げるやうな組織にしてあるからだ、其結果は御承知の通り長さ十八里の村などがある、學校を建てやうにも郵便を配るに

ぬ仕樣がない、今の一萬五千坪のぼつ〳〵流儀でやると村が齒拔け爺々になつて隣友呼べども答へず、部落どころか纔かに出來た家が野中の一軒屋になり、冬はぴつたり雪が降る、熊がのそ〳〵來るといふ有樣だ、堪つたものでない。豆の問題は此處に解決が出來るのにまだやらずに居る、それが出來ると輸入がなくなります。前にお話した通りに七八百萬圓餘りのものが浮いて來る。又豆糟の輸入が大變ある。是は肥料の輸入て、只今では之を輸入せんと所謂一文惜みの百知らずになり仕方がないが、是も中々馬鹿にはならぬ、一昨年などは二千四百四十餘萬圓を輸入して居ります。處が北海道で豆が澤山出來れば、此方で豆糟を造ることは譯はない農產國は肥料に注意をせなくてはいけません、農業に肥料を惜むは子供の敎育費を惜む樣なものていけない、日本で需要するのは是だけではありませぬ、兵器、彈藥、船舶の材料等まだ中々ありますが是等は追々出來て來ますから、先づ食料の給供を充分にするのが第一であります

三、生絲、綿絲、漁業の現狀

次は衣の問題になつて來る、衣の問題は今日は略ぼ解決が出來て居る、けれどもまだ決して其餘力を以て食の問題を解決するには至らぬ、故にもつとうんと働いて物產を增さなくてはいけぬ、併し今も隨分働いて居る、此上働くのはいやじやと言ふものがあれば仕方がない、是非共といふ譯にはいかぬ、處が前に話した事實と數字とは決して私の隨意に作つたものではない、斯ういふ事は學術上の言葉で骸骨的事實といふ、毫も飾のない有の儘といふ意味です。人間は御承知の通り體に肉がくつ付いて居る、いろ〳〵物がくつ付いて斯んな銘々の形體になる、中にはハイカラまで付ける人もある、が事實は事實で仕方がない、之を常識で見ると實に一日も此儘にしては置けぬ、日本は學術的には國を爲して居ない、只食物のない餓鬼共ががや〳〵して居る地獄である、おまけに其餓鬼共が借錢をして多くは己れの罪障を知らずに平氣でハイカラを掛けて居るから始末にをへぬ、苟も佛心あるものは是非とも此

餓鬼を解脱せしめねばならん。衣の問題は先づ如何やら其自らは、解決が出來て居るが、まだ中々其餘裕を以て食の不足を補ふ丈に進んで居ませぬ。

其譯はといふと先づ我々は生絲を輸出してさうして棉花を買うて居る、是れも貧乏國の眞相を顯はして居るが、併し兎も角先づ衣其自らは出入相償うて少し出の方が勝つて居る、が近年の實況は生絲の出が一億千萬圓で棉花の入は約九千萬圓だから（絹織物が四五千萬あるけれど輸入もあるし殊に數も少いから暫く論外に置く）まだ中々食の不足の補には物足らぬのである。是から更に織物の發達を圖り原料より製造品を外國へ出して國富の增進を計りたいものです、幸に近頃は工業は發達して行きつゝある、輸出入の有様を見ると、年々原料品の輸入は增して製造品の輸出が增して行きます、是は經濟事情の健全なる變化で誠に喜ばしい事だ、一例を擧ぐれば是迄殆んど輸入しなかつた羊毛も近年は平均千萬圓以上の輸入がある、棉花の輸入も中々殖えました、其他曰く何、曰く何、殆んど數ふるに遑がない、それは有觸れた統計で御分りの事だから改めて申す必要はない。日本も最早や純農では迚もいかないが、農産の發達にはまだ中々餘地がある、千萬圓といふ纏まつた輸出品を工業で造らうといつた所で中々六かしい、海内有名な信州諏訪の工場でも生絲は二千萬圓のものしか出來ぬ。處が全國で改良すれば農業で千萬圓位のものは直ぐ出來る。如何です國民の集合力は偉らいものではありませんか、米のみで千七百萬石實に大したものです。然るにまだ〳〵農工業に學術の適用が十分でない。桑、かいこ蟲、眞綿、生絲といふものは農業に屬するが、其製絲のみは實際上より製造品と見て差支ない、現に製造所を建てて工女を澤山遣ひ機械を据え付けてやつて居る、是は工業の發達と見て差支ない、農のみでは迚もいけませぬから工業も大に努めねばならん。

次は棉花の輸入、是も如何かして輸入を防ぐ工夫をしたい、此棉花といふものは日本內地では如何しても六かしい、日本で今需要しますするだけの棉花を此方で

作るといふ事は如何骨折つて見てもいけない、といふのは御承知の通り棉花は白露の季節が大切てす、即ち舊暦の十五夜頃、此時棉が白い花を吹く、あの時秋の颶風が起るのてす、八朔、二百十日、二百二十日、あの颶風を受ける所の國はどうしてもいけない、何も天の許さぬ所て作るには及ばぬ。天下何れの處か靑山なからん哉てある、幸に新領土朝鮮は棉花の耕作には適當して居る、朝鮮の綿花は纎維が長くて殆んど印度棉花に匹敵する、日本内地の棉花は綿にするに向かない、特色は只染付の好いのと彈力の强いのとて、或はハイカラ蒲團の心には好いか知れぬがハイカラなどは如何ても宜い、依て只染み付きの爲め少し他國の棉花と交ぜて用ゆるのみてある。加之二百十日前後の嵐に困る、なぜ朝鮮は棉花が良いかといふと秋の颶風がかゝらない、釜山一帶の地方を除いて忠淸道以北から黃海の方に向つた所はさつぱり秋の嵐かがゝらない、日本へやつて來る颶風は臺灣の沖からブゥ〳〵出掛ると東北に方向を取り、四國の眞中を突拔け中國に入り岡山兵庫の間を拔けて北海に出るのが通例てす。故にあの邊が一番偉いのてす、米も是てやられます、それから少し西の方に寄りました時には馬關邊を通ります、其時には筑後川の洪水といふ事になる、西の方に行くと長崎の鼻をこすつて行く、其時には鹿兒島、熊本邊が洪水といふ事になる。是は併し稀な事てある、其時は釜山の鼻に少し掛ります、けれども、なあにフザンケルなといふ位て濟みます、一番災の大きいのは東に寄り紀州の汐岬から上る所の颶風だ、さうすると殆んど全國に擴がる、近年此一番偉らかつたのが明治廿二年の有名なる十津川洪水て、十津川を流して了うて其結果住民の移住となり、北海道に新十津川が起りました、此時は彥根岐阜邊が中心となり、仙臺の名取迄洪水になりました、それだから棉花耕作は内地ては如何してもいけぬ、然るに是迄棉花の耕作を研究するものが氣候の事ばかり調査して一向に氣象を研究しない、元來農業に氣候の關係は極必要てありますけれどもそれと同時に氣象即ち風雨空氣の乾濕等の事を考へなければフーッとや

られて飛んでしまう、昔の人を言ふのてはりあません が、佐藤信淵などの調といふものは氣候ばかりて赤道を中心とし世界を二十八番の氣候て劃るといふ流義てす、此やり方は餘りシンエンてはないてす。氣象臺の報告を見ますと斯ういふ事が能く分る、元來秋の嵐は我國の一大厄もので國の形が横はつて居ますから、まだしも災が一部分に止まりますが、若し之が伸立て居て其衝に當つては全國は皆無茶苦茶てす。是は昔から暦の中段に書いてある二百十日とか二百二十日とか八朔とかいふ厄日と唱へ來つたもので、多少其前後に何處にか暴風雨がかゝつて來るのは我國の氣象の御極りてす、處がそれは朝鮮にはないのてす。それて朝鮮は棉花の耕作に適し其側では天惠を得て居る譯だ、それに奇妙な事には丁度内地て需要する位出來る地面があるので特に御誂向きの好都合と思ふ、或る專門家の調によると、二億六千四百萬斤は出來るといふ事てす、朝鮮で内地に伴ふだけの棉花が出來るなら朝鮮の經濟は殆んど純農だから双方の爲に好い。すると今の様に亞米利加、印度、支那から棉花を買ふには及ばぬことになる、從つて日本の紡績事業は大變な利益を得る、是には十分手を着けて國家の爲を圖らねばならん、それをするには前に砂糖の處て話をした「プランテーション、システム」、即ちカットン、プランテーション、システムて手廣くやるのてす。それには適當な地を相し、棉花を作り、大に泰西流の學術を適用し、棉花を低廉に得る工夫をするのが肝要と思ひます、此「カットン、プランテーション、システム」は、紡績家が一大同盟を組織し、自己使用の原料は自己の畑から之を得て棉花商人が中に入り儲ける丈を省いて仕舞へば、世界の競爭場裡に立つて勝算は歴々てす。御承知の通り今日棉絲の競爭は實に劇甚なもので、秋毫の差を爭ふて居ますから此利益は日本の紡績業者に取つて實に大したものてす。

方今製鐵、製糖、石油の如き大事業は同業及類似事業中に廣く同盟を組み利害を共通し成るべく仲人を省くを旨とする、米國のトラスト、獨逸のカルテル等皆

左樣でないものはない。就中製鐵の如きは鐵坑は勿論石炭山、地鐵製造、半成品、仕上げ品等を皆一手に收め大仕掛に經營せなくては迚も市場に立つ能はざる實況である、而も外國の紡績業にして自ら棉花畑を有する者はない、是は外國では當初から棉花耕作と紡績業者などの利害が判然別れて居るからだが我國は創業時代だからそんな區別はない、紡績業者が組合ふて新領土の朝鮮でやれば、世界無雙の利益を得て競爭場裏の同業者をして顏色なからしむるのは實に我が掌中に在る、誠に將來の爲に賀すべき運命が開けて來た次第である、併し幾ら開けて來ても人が運命に乘らなくてはいけない。何もしないで保護とか補給とか騷ぐのは甚だ見つともない、右の如き歷々たる勝算のあることは大に進んでやるべしである、成功は御請合だ、斯うなれば我國の衣の問題は立派に解決が出來る。

尙ほ爰に一つ申上たいのは我國の輸出は甚だ危殆な地位に居るといふ事です、日本將來の貿易は絹で持つ杯と太平樂をいふ人があるけれども是は頗る先の見えぬ話だと私は考へる。此絹の事業も少し危ない、永久に今日の位置が持てるか否か、今五六年若くは七八年は大丈夫ですが、併し乍ら國は御承知の通り不滅體であるから百年の謀を思はなくてはいけぬ、實は北米合衆國が大に氣に掛るのです。そんな弱い事ではいけない、ヤンキーなどは何でもないといふと偉い樣だけれど數字と事實とが許さない、經濟上の大勢から觀察すると早晚此ヤンキー奴が絹を始め相に思はれる、それは米國は桑樹の生長には適當して居て、養蠶は天が米國に許して居る、只目下之をやらぬのは資本勢力の關係が未だ圓熟せん爲で氣候が惡い、國土が足らぬといふのではない、方今人口は九千餘萬で國の大さは合衆國本土丈で約三百萬英方哩です、そして同國の今迄の農業の歷史を見ると先づ棉花から始めて麥に移り、人口漸く增加して麥作に手が餘ると今度は麥から米に移つて既に米國の米作は四海の耳目を惹く樣になつた、南北戰爭は麥もサウ盛ではなかつた南の方で棉花を作り其初期は一年で資本を取返すといふ位偉い儲りでした。

其が人口が殖えて來て棉花の耕作のみで人口が溢れ出すといふ時期に爲ると西北の諸州で盛んに麥を作り出し、今では合衆國は四海の第一の麥所となつて居ます、所が近頃迄は米は實に微々たるものであつて、米國どころではなく棉麥國であつたが、段々人口多くなるに從ひ米國になつたのは實に近年の事です、處でテキサス州などは三百八十萬エーカー（一エーカーは四段餘）位米作に適當な地面を持て居る、隣州のルイジヤナ、南北ヂョーヂヤ二州などは合衆國の米所である、依つて次は何かといふ問題は先覺者中には必ず起らなくてはならん、今之を過去の經歷に徵し將來の進運を推すにどうも此次は絹の樣に思はれる、氣候は御承知の通りフロリダの端からメインの端に行く迄如何樣な氣候でもある、メインの端は年中氷で埋つて居る、フロリダは冬でも蚊が居つて而かも猛烈で菅帽子の上から刺通すといふ話がある程だ、そんな處だからしてニユーヨーク近邊などの人の庭などに桑の木が生えて居る、此處で絹をやり出したなら日本は閉口する・なぜかといふと米國は有名な保護國だから絹絲一線でも出來たが最後直ぐ慣用の保護政策で日本をいぢめ出すに極まつて居る、併しそんな事をすると鐵砲で以てブンなぐるぞといふそんな無鐵砲な事は出來ぬ、米國が人口一億といふ聲がかゝる時が極大事な時でないかと察せられる、處が今より五年を出でずして人口は一億に達する豫定である、合衆國の人口が只今では約九千百萬でありますけれども裕に二億の人口が農業で養はれる、三百萬方哩であるから中々大きな國である、露西亞の樣な非常に大きな國もあらうけれども是は如何も十分の七八は殆んど氷が占領して居るから格別な事はない、世界中清國を除いては合衆國程良い處はない、獨逸は大國だとドイツもこいつも言ふけれど漸く廿萬九千餘方哩でヤンキー國に比較しては話にならぬ、佛蘭西も其位である

日本は北の方雖の尾及朝鮮を入れて陸地凡そ二十六萬方哩しかない、併し海の富といふものは到底他の國の及ぶ所でない、日本では昔より海の幸、山の幸といふ

事があつて漁利は實に夥多しい、序ながら少しく漁業の事を御話しやう、日本普通の漁業法では一番良い漁場は先づ百尋以内の海の深さの處です、其他潮流、灣形、海底、海草、魚付き森等種々の關係がありますが先づ大體からいふと百尋以内の所が一番宜いです、今は四百尋の所迄出掛けて居ます、東京では赤目鯛とか何とか大きな口をして大きな目を持つて居る奴が魚屋にある、あれなどは四百尋位な處から釣上げる、今本島の周圍の百尋以内の海を測量すると、是が約十萬海哩四方ある、之に四十三萬艘といふ漁船が毎日出て稼いで居る、此富が盛なものだ、それで先づ日本の國は如何しても三十萬方哩以上の實力は持つて居る國だ

左様いふ處だから隨分大きいものですが、ヤンキーの三百萬方哩には決して及ばぬ、土地人口の關係は實に大事なもので、詰り之が國を爲すの根本なのです。併し是は固より智慧は同等と見て言ふので、智慧がなければ仕方ない、智慧の話をするとそれは實に恐いものて印度は御承知の通のあゝいふ廣い國でありますが、あそこに土人が三億餘萬人居つて英人は七萬位しか居ぬ、然るに此の七萬の白ん坊が三億の黒ん坊を支配して居るから偉いものだ、智慧が同等であるならば如何しても國土人口の大きな處には勝てない。智慧が同等と見なければ論が立たない

左様いふ工合だから絹を永久に頼にするのも甚だ危ない、絹のヤンキー市場を失ふと大變な事になる、萬一此儘に進んで行きまして三四十年の後に不幸にして合衆國が言ふ如く發達して來たならば我外國貿易は大打撃を蒙る、國産は絹ばかりでない、又絹の需用者は米國のみでないからさう心配せなくとも宜いぢやないかといふ人も有りましやうけれども、絹の一億五六千萬圓の輸出先は重に亞米利加で、同國とは特に棉花の關係もあるから中々心配です、依て前に御話をした朝鮮の棉花が甚だ肝要です、さうせんと依然亞米利加から買はなければならん、然るに絹が向て出來ると買ふものだけて賣るものがなくなるからてある。元來貿易品には階級が三つある第一が絶對的獨占品、第二が相

對的獨占品、第三が自由競爭品てす。若し自國の主要輸出品が主として絶對的獨占品なら心配するに足らぬ然るに我國の主要輸出物なる生絲は絶對的獨占品てなく、相對的獨占品て、清國、印度、伊太利といふ競爭國がある、然る上は競爭國の經濟狀況を詳にせねに於ては今てすら既に六かしい、況んやもう一つ三百萬方哩の國土を持つて居て二億の人口を容れることの出來るあの合衆國にあの氣力あの資本てやられた日には我々は甚だ苦しい。是は豫め心に期して置くが宜からうと思ふ。なぜならば豫め期して置いたことは起つても其困難に堪へられぬ事はないが、不意打にお面と一本喰つてはまご付いて仕舞ふ。

四、獨逸の現狀と日本の運命

國の困難も獨逸の樣になつて來ると實に困るのてす、日本の困難の如きは我々が働かなくての困難て、働きさへすれば困難はせぬのてす。處が獨逸の樣になるともう幾ら働かうと思つても彼れ以上は出來ないのてす、獨逸は國內て最早働き盡して居る。智慧のある丈は絞つて居る、土地人口の割合は中々困難だ、二十萬八千餘方哩の國に六千三百萬人程住んて居る、そこて食料は丁度一年は百日分即ち約三個月分ばかり足らぬ、それ丈は輸入せなくばならん、其輸入の商業工業の發達て以て如何か斯うかやつて居るが農工商もうあの上に發達するといふ事は出來ぬ、是は土地と人民と相副はぬから左樣なつて居る、日本はまだ北海道も臺灣もあの通り、樺太もまだ中々餘地がある、況んや朝鮮に向つては大和民族發展の餘地は綽々餘裕あり、幾らでもまだ發達することが出來る、然るに獨逸は既に人口が有り餘る上にまだ非常に殖える、一年一分五厘の割合て殖える（日本は約一分）、鼠の子算て積つて見ると百年經てば獨逸の人口は二億になる、二億の人口が二十萬八千餘方哩に居るとすると甚だ窮屈てす、そこて獨逸は如何しても殖民か出稼かしなければ今日の困難の解決は出來ぬ。處が獨逸は諸强國から取卷かれて居て地續きに廣がることが出來ぬ、良い殖民地は大抵他の國が既に占領して居る、出稼は餘程獎勵して

見ましたが數十年の經驗はその損失といふことが分つた、何故かといふと、例へば亞米利加に獨逸人が出掛けて行くと亞米利加の歸化人になつて仕舞ふ、獨逸で以てすつかり敎育を仕上げた人民が行つて仕舞ふ、是が四十億圓位の損になつて居る、建國以來丁度七百萬人位のものが外國に出て損が立たつといふ事が分つた。そこで殖民政略に取掛つて見た所が、まうすつかり良い所は他國から取られて居る、仕樣がないからして近頃亞弗利加の南方に東西に分れて殖民地を作つた、處が是が大變困難である、本國を隔てて赤道直下を跨り、五、六千海浬を隔つて居る、而して英佛の殖民地が近所に在る故に海軍の力を以て防禦せなければならん、左樣せぬと獨逸人に旨くやらして置いて佛蘭西、英吉利が甜めて仕舞う、如何しても殖民地を良くするには强力なる海軍を養はなくてはならん、獨逸が陸國でありながら近年頻に海軍〳〵と稱へるのでも分る、獨逸人は譯は分らぬといふ人があるが譯は能く分つて居る。處で內は如何かといふと陸國で强國に取卷かれて居る故に陸軍も緩める事が出來ぬ、左樣いふ譯て非常に金がかゝる。他の國は左樣いふ事はない。獨逸は露、英、佛との勢力の對抗上陸海軍に支出する金が大變に掛るので非常な困難に陷り、年々歲入不足て六千萬圓八千萬圓位の歲入不足は普通の事、本年度の製艦費は七千八百八十餘萬圓である、明年度から尙ほ增す、處て財政困難は帝國のみでない、各列國でも殆んど同樣である、他の各國の事情は左樣迫つて居らぬ、佛は容易にアルジリー方面に擴がる事が出來る、一葦帶水の地中海を隔つた所に、第二の佛蘭西を作る事が出來る、露西亞は西比利亞の方へ擴がり、英吉利は殖民地を天下到る處に持つて居る、既に第二、第三、第四の英國が出來て居る、其結果は過般の南阿戰爭で大に顯はれて四海の耳目を驚かし世の中に中々英吉利は手剛いといふ事が分つて來た。何故かといふと本國の兵を起すと印度からも濠州からも加那太からも立派な兵隊が出來て來る、軍馬などは濠州から來なかつたなら大に困る所であつた、其上目下濠州ては母國に軍艦を

遣つて上げませうと云つて騷いて居る、獨逸では亞米利加へ人民をやつたがそれが重に理髮店、靴直し、洗濯屋、小農等に成つて全く米人と成り濟まして居る、今日强國中、國勢及び經營の最も困難なのは獨逸である、殖民政策をやるより外仕樣がないが、其れには中々費用が掛る、ビスマークが着手してから四十年近くになるが、亞弗利加に行つて居る獨逸人は五千人に屆かない、凡七千ばかり白いのが行つて居るが其中獨逸人はまだ五千人に屆かない、其他南洋諸島の方は粒々碁石見た樣な土地である、殆んど何の役にも立たぬ、時には却つて邪魔者にも爲り相だ、其中にトーゴー島といふ島が收支相償ふ丈で外は皆損です。

右の如く各國には御定まりの運命がくつ付いて居る、然らば日本は如何かといふと中々後世の望は洋々として居る、運は開けて居る、唯只今日はまだ過渡の時代で、天下の形勢を審にせず依依武陵桃源の夢が覺めずに居る、少しは世界的になつたけれど中々これで甘んじて居られる譯のものではない、船も御承知の通り太平洋の方の船はまだ惡いけれど太西洋の船などはド偉いものです紐育からリバプール迄四日十三時四十一秒(從前は九日)間で着いた事がある。「モーリシャス」などは三萬噸以上の船である、それでそんなに早い、世界がすつかり狹くなつて仕舞つた、今日は日本に居つて机の側に坐つて居て外國から來る船毎に見切れぬ程ずん〱材料がやつて來る、それによると斯ういふ事が皆知れる、今日は腰を据ゑて居ればちやんと分る、借錢などして向ふへ行くには及ばぬ、又鐵道の速力も普通が一時間四十哩で急行は五十哩、ステーション拔て六十三哩が通例です。日本の鐵道などはまだまだほんの玩具です、左樣いふ世の中になりましたから日本も如何しても現在の儘ではいけぬ、世人も困つたものぢやといふことに氣が付いた樣だが、それなら手段、方法、所謂經綸の道は如何、經營の策は如何と問ふて見ると國民を滿足せしむるものは更にない、が其實國家の經綸は前申した僅々五六の點に纏まるのです。今日は多方面に餘程力を擴げて居る。甚しきに至

つては權衡工事などと稱し、至極不急な事に資本を勞費して居る、是がいけぬ、今日の急務は此等の不急な施設行動を止めて專ら力を前申した五六項の最要務に集中し緩急順序を質して行くことが必要である、是が則ち最小の勞働を以て最大の効果を得る方便、即ち經國濟民の術である、他に力を勞費して精を分つは甚だ不經濟である、同じ雨量でも旱魃の時しよぼ〳〵全國に渉つて降つたなら何にもならぬ、然し其雨量を纒めて苗代に降らしたら將に枯れんとする苗も忽ち生氣を發して靑々と生長し、それて全國の田が植ゑ付けらるゝ、此方法を採らんと國家の進運が甚だ鈍る、三年て出來るものが五年も十年もかゝる、日本の國家は進む國家には相違ない、何故かといふと人民が進步的て國家社會の要素となる新しい事業をずん〳〵する。やり方は甚だ感服せぬ事もあるが、兎に角やりはやる、是によつて之を觀れば我日本は東洋ては唯一の泰西的文明國て他とは全く違つて居る、貧乏てはあるが進むには相違ない、市街鐵道、水道、航海事業、鐵道、金融、保險、教育等の公共事業個人會社又は國家公共團體て着々行はれて行く、誠に賴母しい、文明的の進步に必要なる機關が國家が世話を燒かずにどし〳〵出來て來る、之を見ると人民は中々進步的てあると判斷するに難からぬ、お隣の淸國などの事實とは丸て違ふ、尤も支那人中には個人的に立派な良い人間尊ぶべき人間は少くない、が人民に國家的公共的事業を企圖する者は日本程はない、何でも物の判斷は事物の要素を捉へて之を數字的に分析して一旦骸骨にして見る、左樣すると斯樣な國家は健全て斯樣な國家は病的てあるといふ事が直ぐ分る、數字的に分析してその分析に堪へるものならば其物は良い。色々名論卓說が出て來るが、其名論も名の字が米に走を掛け、おまけに御の字ならぬ誤の字を加へた誤迷論と來ては堪つたものでない。其樣なものは一切相手にせぬがよい。何でも人の言ふ事は捨てる事は出來ぬがそれを二一天作の五、「プラス、マイナス」で當つて見る是が我輩の流義である、左樣せぬ人もあるが左樣せなければぶん擲ぐるといふ譯にも

行かぬから仕方がない。斯う論じて來ると我國の經濟は決して憂うるに足らぬ、憂ふべきは只人がぼんやりして居る事です。

五、保護政策の可否

上來述べて來た所で我國民としての將來採るべき方針は分つたてせうが、然らば國家としてそれに特別の保護を與へ、關稅政策もそれて行くべきてあらうかに就いて尙少しく說かう、世の中ては保護主義といふことを無雜作に考へ、保護は只出來る樣に考へる人があるらしく見える、即ち少し或る事業に困難な事が起ると其事は保護さへすれば宜いてはないかといふ說を屢々耳にするが元來保護は只は出來ぬ、甲より奪ふて乙に與ふるより外世に謂ふ所の保護は出來ない、そこて奪はれる方は非常に苦しい、得る者は或は宜いかも知れんが併し實際に於ては飛び拔け好い商賣が成立つものてない、資本勢力が自由に動く以上は迚も久しく例外の利益を得る事は出來ぬ。昔の樣なモノポリー即ち獨占的貿易の時代なら出來るが、一度獨占を解いて自由競爭の世に爲つた以上は有効に出來るものてない、保護政策は其保護せんと欲する所の者を永く保護する能はず、却つて飛んでもないものに不測の利益を與へる、詰り消費者を苦めて被保護者には只一時糠喜びをさせるに止まる、即ち被保護者も遂に皆普通の利益を得るより外に仕方がなくなる、果して然らば何の爲に同胞を苦めて迄も保護を與ふる必要があるか、頓と分らぬ、又一般國民の消費力に課すると貯蓄力が減じて流動資本の增殖を妨げ甚しきに至ると固定資本と流動資本の釣合を失ひ事業の發達を障害する結果を生ぜぬに限らぬ、併し是は大主義て如何なる場合にも保護は徹頭徹尾いかぬとは申さぬ、取捨變通は實際問題てある、主義の問題てない、或物が國家の爲めに或る特別の必要があつて是非共此物がなくば國家の生存に困るといふものがあるなら宜い加減に保護してやるのは差支はない、けれども日本の國柄て葡萄酒がなくば國家が成立せぬ、硝子製造をやらぬは困るとか何とかそんな事はない。

倩々日本の國柄を觀察しますと我が國ては迚も米國

流、獨逸流又は古い英國流の保護を與へる事は出來ぬ。甲の業を營んで居るものから其利益の一割丈を取つて乙の營業をするものに與ふることは中々出來まい例へば今日の農利を殺いて工を助けるといつても農は「ノー〳〵」と言ふだらうと思ふ、又商に課して農工々保護しやうとしてもそんな事はどうコウシャウもないといふ事になる、又もつと小さく今度は馬を飼ふ人に鹿を保護するから金を出して呉れといつたらヒンそんな事が出來るものか、そんな事をしたら馬と鹿の混合物が出來るといふかも知れん、又牛に向つて馬に旨いものを食はせたいから錢を出せといつたらモー眞平だといふてせう、我國には國中に殆んど出來ぬものはなくそれが又皆團栗の背競べをしてゐますから何の利益を殺いて何にやると言つた所で殆んど不可能です、何人にした處で己の收入の一割を割いて貴樣を助けても差支はないと言ふものは居るまい、それが居らなければ有効な保護が出來ぬ、又大體から言つて見ても今日工産の利益を殺いて農商を助けるとしても、工はそれては降參て御座いますといふに知れて居る。何を以て何を助けるといふは殆んど私の狹い眼中に存して居ぬ、何かあるなら御敎示に預りたい、私事てない國家の大事てあります。

北米合衆國の如きは御承知の通り非常の保護をやつて居る、元來保護は甲より奪うて乙に與へるといふ事て大體に於て不自然の事に相違ないが前にもいつた通りそれを忍ばなければならん場合が國家生存上の必要から起るかも知れん其時は已むを得ず皆が寄つてたかつて其物を助けて行かねばならん、其善惡は暫く論外として亞米利加は如何してやつて居るかといふに同國は今は少し下向きなれども農利が甚だ大きい仲々偉らい、棉花、麥などは世界無雙です。試に麥の事を御話して見ませう、麥作の一番好い所は西北部ですが是は素晴らしい、大抵普通の畑て八哩四方てあるが大きなのは十二哩四方もある、それを蒸汽鍬て鋤いて往く、其鍬は八畝十二畝を一時に鋤く樣になつて居て「ブーブー」といふて直線に鋤いて行きます、尤も鋤いた丈てはいけませぬから權兵衞機械があつて種を蒔いて行く、收

穫時になると刈取機械でずん〳〵苅取り、それを結果機械で結んで六頭八頭立の大馬車で片つ端からずんずん取入れる、まあ畑の仕事はこんなものです、夫れで一人の百姓が是等の機械を用ひ一年に千人分の麥を作る、米國の農は商業農で我國の農は自衞的農です、各々特長があるので丸で基礎が違う、それから之を製粉所に送り麥粉とし、汽車に積んで紐育に持つて行き、同市で之を麵麭にして賣る、種蒔きからパン賣り迄勞力が都合八人半、それで一年の千人分の麵麭が出來るのである、誠に嘘の樣だが有名なディヴッド、ウェルスといふ人の著書中に書いてあるから決して嘘ではない、それ故米國では農利は中々盛なものだ、それも其筈人口が足らぬのに土地の多い時代には農利程盛なものはない、加ふるに彼の智慧と勉强でやるのですからね、亞米利加は合衆國のみで約三百萬方哩ある、英吉利は十二萬平方哩しかない、獨逸、佛蘭西が大國といつて居るが二十萬餘平方哩です、そこへ亞米利加は三百萬平方哩ある、優に二億の人間を入るゝ事が出來る、それに今は約九千萬しか居ない、物産は今日既に國民の消費するものの倍出來る、斯の如く農利が盛でありますから保護政策を採り農に課して工業を助けても農は綽々餘地があつて苦痛を感じはせぬ、米國は北東部と南西部とは丸で事情が違ふ、東北の方は御承知の通り殖民が古い、さうして北の方になると氣候が寒冷であつて農業に適當しない、そこで南北戰爭前から既に商工に移りつゝありました、然るに商工は西南部の麥棉花の如く大なる利益がありませぬから自然に放棄して置きますと人民は鍬を擔ひてどん〳〵南西部へ出て往く、左樣すると東北は空つぽになる。そこで是は堪らぬといふので南北戰爭まてして保護を始め、今日に至つて居る次第です。斯うして保護によつて農利を殺いて居ますけれども農は今日の處尙ほ平氣です、工のみては食品原料品が追々高くなるから一兩年前よりもう保護は入らぬと云ふ者がちらほら見へる、元來米國の保護は工對農で農利が減じて商工と同地位に降る迄は止まぬと信ずる、けれども近年餘り物價が騰貴しま

すから、流石の「ヤンキー」も閉口してすつたもんだとやつて居ます。

處が日本の產物には其樣な象見た樣なものは居ませぬ、皆背の揃つた可愛い弱い羊の樣なもの計りです、中々甲を殺いで乙に與ふる餘地はありませぬ。又一般消費者も罷商を助ける樣な力はありませぬ、諸般の經濟事情を調査して見ると、日本も最早純農でなく、段々工業國になつて來る、然らば少しは農利を殺いで地租でも高くして工業を助けて見たら如何かといふと中々いかぬ、農は是から餘程獎勵せねばならん、今日日本では米、麥、豆、砂糖皆足らぬ、之を足すには農事を進めねばならん、併し之を奬勵するといつても何も保護稅を農產に掛ける意味でない、金融の道を開くとか耕地整理を容易にするやら、害虫驅除を世話するやら是等百般の改良を促すべしといふのである、假令世論の如く米を保護した所が保護にならず徒に消費者を苦めるのみだ、何故かといふと豐年には米が五千二百萬石以上出來るそれで輸入は僅かしかない、三十二年の如きは五十萬石位の輸入に止まつて居る、然るに凶年には三千萬石臺に落ち三十五年の如きは米產高が三千六百九十萬餘石に止まり三十六年には約五百萬石を輸入し、三十七年には殆んど六百萬石を輸入した、則ち凶歲には豐年の十倍以上を輸入する故に豐年には內地產のみで殆んど供給を充たす事が出來るから輸入米が高くても內國產を釣上ぐる力がなくて保護にならぬ、凶年には內地產の供給が少い所にどさつと這入つて來るから稅額丈は必ず引上る、今日の率は普通は一石に付二圓五十錢凶年には一圓を限度として引下げる事を得るから十圓の米は必ず十一圓にはなる、それ故大に消費者を苦める、委い事は幾ら話しても際限ないから是丈にします。兎に角國が折角工業國に進みつゝある矢先に稅で食品、原料品、助成品、半成品を高くするは策の得たものではない、我輩の判斷では日本では保護政策は六かしい、獨逸でもやりはやつたが昨今劇しい反對が起つて大に餅に搗いて居る、それといふも第一食物が高くなつた、從前は麥の輸入稅が千キロに

付三十五馬克(既に高い)であつたに千九百六年以來五十五馬克といふ大差を生じ、其他保護の爲に石炭は英に對し二割四分、牛肉は二割二分、羊肉は八割七分の增加を示し、英國より廉いものは馬鈴薯と牛乳のみだ、就中石炭の騰貴の如きは只製造事業に不便なのみでなく、北方嚴寒の國では石炭は生計上衣食に次ぐ必要品だから流石保護好きの獨逸國民も終に忍ぶ事が出來ず輓近反對の聲が甚だ高い、是等の材料は彼國の統計年鑑に載つて居るから容易に知れる。斯様な風で保護は外國でも困つて居る、それを日本で宜い事と思つて眞似樣として居る人が多い樣だがそれは丁度東京で流行後れになつたものが田舍で流行る樣な氣味で思はざるの甚しいものと思ふ。

今日の大勢はナショナル即ち一國一統の時代から、「インターナショナル」即ち國際的に事物が變遷して行きつゝある、例へば合衆國は有名な保護國でありますが、然し其廣い三百萬方哩の國中、四十餘州の國は皆政治上獨立だけれども、經濟上は皆共通で立派に一ナショナル」に成つて居る、處で近頃キャナダが發達したものだから、キャナダの麥粉を防がうとしたら製粉所が向ふへ飛んで行つて仕舞ひ、麥を防がうとすれば耕作者が向ふへ行き、造船所を保護しやうとすれば造船所が向ふへ行つて仕舞つて大いに困つて終に兩國の間自由交換主義に基づく協定が出來た又獨逸の資本が白耳義及露國に移出し其間經濟的境界は殆どなくなつたり(白國へ移出の事は三月一日刊行の實業界雜誌に掲載しあり)。佛蘭西も昔は州々に日本の樣に關を立てて關稅を徵收して居たが今日は無論そんな事はない。支那も釐金を廢しやうとしてリキンで居る、獨逸の各州間の關稅同盟は餘程古いもので倫敦も其に加盟して居た事がある、輓近非常な保護政策を採り葉鐵棒鐵等の如き半製品を內地で高くし外國に安く賣るから和蘭人白耳義人が廉價な材料で獨逸人と競爭し、(石炭、コークスの高さも外國人を利す)甚しきに至つては獨逸人自身が蘭白へ資本を移して本國の同盟と競爭する等の奇觀あり。

斯の如く世は一變して何でも事物が世界的になり、世界を一圓とせなくてはいかん事になつて來た。汽船、汽車の速力は恐しく增加した、無線電信がやつて來て雷が告口するといふ事になつて來た、それから今度は一歩進んで人間が鳥に化けた、最も我々も月給鳥といつて閉口して居るもの、又ゼニ鳥メンと言つて威張つて居るものも從前からないではなかつたが今度は人間が空中を飛ぶ樣になつて西遊記の悟空そつち退けてある、又滑走車、自働車も出來た。そこで國稅問題に非常に錯雜を生じて來た、レースやダイヤモンド其他の寶石類、金銀細工物の如き容積少くして價の多いものは大に事情が變り最早三年前の昔と事情が違ひます。左樣いふ事で國稅問題が無茶苦茶になつて仕舞た。

されば保護政策は考へ物て國の特別な必要から此物は保護を要するとあれば斯く申す某が眞先に此物は保護せんといかんと言つて出るかも知れんが主義として保護政策を採るは甚だ不可である、氣候、氣象、資本、勢力、學術、經驗の如何を顧みず何でも彼でも日本で作らなければならん、事業は一般に保護せねばならん、我は產業保護を以て主義とすると出掛けるは國を誤る基であるから此事は事實問題として決せねばならん而して我國に於ては特に農工商の何れを保護するとしても保護を受ける者の利より之れを與ふる者の不利が多い、故に廣く關稅主義としては保護主義勿論いかず、收入主義もいかず、貿易主義を採るべしとするが其を詳論すれは限りあるの紙數の許さゞる所なるを以て玆には略する、然し拙著經濟史眼に揭げ置きましたから御參觀を願ひます。

立國論終

倫敦と巴里の共同便所

「倫敦の町へ出て、ウカと小便をつまらせたら大變である。事新しく探したなら到底見つからない。見渡したところ便所らしいものは何處にもない。その癖少しく町の裏手へ廻れば、日陰物のやうに默つて居る便所はいくらもあるのだ。—これが巴里へ行くとまるで違ふ。共同便所は、貴族か大臣の馬車のやうに大威張りで町筋を占領して居る、ひりたければずん〳〵ひれといふ有樣である。こんな風に倫敦と巴里は違ふのであらう。共同便所は二大國のいゝ表象ではあるまいか」とは最近の某歸朝者の談片であつた。



舞踏會

倫敦　繞石生

毎年除夜には、セント、ボウルス寺院の前庭は人で埋まるといふ。九分九厘までは蘇格蘭人て、それが銘々ヰスキー、ワインの罎を用意して出て居るのださうな。そして正夜半の、舊年を送り新年を迎へる鐘が寺院から鳴り出すのを合圖に、銘々の四周の人に向つて既知、未知の構ひ無く、

『ア、ハツピイ、ニユウ、イア』

を叫んで、豫て用意のヰスキー、ワインの盃を侑める。そして『オールド、ラング、ザイン』を合唱するのだといふ。此の盛んな景色も見たいには見たいが、友人ヰルソン君が案内しやうといふ舞踏會も見たい。どつちを見やうかと迷つた揚句、ダンシング、パアテイへ行

つて見ることに決めた。
夕食はヰルソン氏宅で御馳走になる。食後煙草をふかしながら、
『何處てあるんてす、そして何時から？』
『なに、スクエアの向側のミス、ジイの處だ。八時半からといふんだが、九時過ぎて行きや宜からう』
と緩くり構へて居る。ヰルソン氏方に寄宿してる英人のハンタ君、佛人のフラゼリイ君も同行するのだといふ。二人は食後、衣物を換へに二階へ上つた。
『ダンシングの會だから、矢張りイーヴニングで來りやよかつたに』
といふと、
『プライヹートの小會だから、黒い衣物てさへありや宜いんてす。僕も之れて行きます』
といふ。モオニングを着て居るのだ。二階から下りた二人を見ると、これも脊廣をモオニングに換へた許りだ。フロツコオトの僕いさゝか安堵した。ヰルソン君の妹のエダ君、化粧に仲々手間取る。カフエーも飲まずに自分の部屋へ駈け上つたのだ。かれこれ小一時間も經つたが下りて來ぬ。やつと九時少し前に、スカートの音シヤラ／＼と食堂の扉を明けて入つて來た。イーヴニングを着て居る。裾を一尺餘りも曳きずつて居る。リリイ、ヲヴ、ザ、ヷレイの香ひが馥郁として食堂に漲る。
『さ、出掛けやう。つい其處だから、外套も帽子も家内に置いて行かう』
といふ。五人共、帽子無して、スクエアのペーヴメントを辿る。
空は曇つては居るが降りさうには無い。風も餘り寒くは無い。ミス、ジイの玄關のノツカーを敲く。内からドアを明けた下女が
『どうか御入り下さい』
とホオルに沿ふた部屋の扉を明けて案内して呉れた。もう始まつたと見えて、ピアノの音に連れて、舞踏の足摺の音がして居たが、それがハタと歇んだ。
部屋の入口迄出て來たジイ嬢が、ヰルソン君の紹介

を待つて、僕等野郎三人に握手する。

「よく來て下さいました。折角男の方の數が足りませんで、困つて居ました」

といふ。

「いゝえ、私しや、ダンスは出來ません。唯だ拜見さして頂かうと思つて參りました」

と、實の所を打ち明ける。

部屋へはいつて見ると、天井から下がつて居る三組の花瓦斯燈で晝の如く明るい。いさゝか面はゆい氣がする。部屋は五間に六間位の廣さだ。

右側は壁で、中央二尺許り引込んでるレセスに安樂椅子が置いてある。其れには丈の高い、燕尾服着た若い男が、廿一二の女二人と腰かけて居た。

正面の壁の中央はファイア、プレイスで、石炭が盛んに燃えて居る。その爐の右側のレセスにも安樂椅子があつて、十七八の娘と、廿二三の女とが腰かけて居た。左側のレセスの處には、大きなマホガニイの圓卓が据えてあつて、ワイン、キスキイ、セリイと見ゆるボットルが四五本、ソオダ、ヲーターの罎が四五本、御菓子の盛つてある大皿が二つ三つ、二十枚も積み重ねた小皿が載してある。そして罎や皿の間にはクラッカーが隙間無く置いてある。

左側はスクエアの見える窓が四つある。そして窓際の長椅子に二十五六のスモオキングを着た男と、五十許りの派手な衣物着た女とが腰かけて居た。

部屋の左の隅、食卓と反對の側に、斜めにピアノが一臺置いてある。左右に立てた二本の大蠟燭に顏を照らされて、これも五十許りの女がピアノに向つて坐つて居た。

主人のミス、ジイといふのはミスはミスだが五十近い女だつた。

僕等が部屋へ入ると、皆んな座を立つて寄つて來た。僕はキルソン君の紹介や主婦の紹介て、此の八人一人〳〵に握手する。ハンタ君、フラゼリイ君も同樣だから、「ハウ、ド、ユ、ドウー」が幾度か繰返へされる。一々やるのは厄介だが、然し日本て、偶ま見るやうな

同席して居ながら最後まで睨み合ひて居るやうな、あんな變な、窮屈は無くつて、紹介されて一度握手すると、十年の舊友の如く、親しく話し合ふ此地の習慣は僕には甚だ心地がいゝ。

僕はピアノの横の、入口の扉つゞきの壁に沿ふて置いてあつた椅子の一つに腰かけた。

「さあ、ワルツを」

と言ふので、ハンタ君、フラゼリイ君、それに今二人の紳士が、若い女四人と、二人づゝ組み合つて踊り出した。ワルツは一番普通な踊だ。何處の舞踏會でも十番踊があれば七番はワルツだ、と程普通な踊だ。男の左手と女の右手と握り合つて、多くの場合肩と水平に保つて居る。男は右手で、女の腋下から輕く腰を抱いて居る。女の左手は男の右肩を抑えて居るのもあるが、裳の長い女は、男の右肱を抱へつゝ裳を褰げて居るのもある。音樂は先刻ピアノに坐つてたのがやつた。音樂の拍子に連れて、女を抱へながら、いつも右足を引いて、グル／＼舞をやつてさへ居ればいゝやうに見える。六つかしいもんだと言ふとだが、見て居る眼には左うとも思へぬ。

女は多く澄ました顏して、男の足取に隨いて唯クル／＼廻つて居るやうに見える。舞ひながら——音樂の音で聽こえぬが——男は切りと何か女の御機嫌に入るやうなとを言ふと見える。時々女はニッコと微笑む。僕の前へ、あの組、この組と、舞ひながら通る度毎にワイトローズ、リリイ、ヲヴ、ザ、ヴレイ、ヘリオトロープ、ヴイオレットと、芳香鼻を撲つ。白皙の女の顏が櫻色になる。いゝ色だ。

一番すむ。女共は男の進むる椅子に腰をかける。そして或は牙骨、或は塗骨の、房の垂れた扇子を輕やかに使ふ。

「おゝ、あつ」

なんて言つて居る。フラゼリイ君と、今一人の丈の高い何とか言つた男とが、女の前へ一々行つて、

「何か上げませうか。ラムネ？ソーダ水？」

なんて言つてる。

「えゝ。私にやソーダ水を下さい」
「有難う。そんなにや渇きませんからまづ……」
てなよを女共は返事する。紳士二人は、食卓へ行つて、ソーダ水やラムネやらを注いて、その御盆を恭しく女共の前へ持つて行く。
その次にもワルツが一番あつて、其の次にはポルカが始まつた。
「大谷さん、おやりなさい。」
「とても〳〵」
「スリイ、ステップスですから、すぐ覺えられるてせう」
と主人のミス、ジイが來て言ふ。平に御斷りする。
「ワインを上げませうか、セリイを上げませうか」
と言ふ。ポートワインを一とコップ貰つて、啜りながらダンスを見物して居る。此のポルカがすむと、下女が二人て、裏處からカフエーを運んで來たく先づ若い女の方から飲まして、僕等へは最後に持つて來る。サンドキッチも持つて來た。ハンタ君が僕の隣りの椅子に腰かけに來て、卷煙草を呉れる。
「どうてす、君も加はりたまへ」
「だつて僕は一度も經驗が無いんだから。少しても習つてるとやるんだが」
「なに、皆んな下手だから、クル〳〵廻つてさへ居りやいゝ」
と眞面目て言ふ。
カフエーを下女に下げさしてから、さつき爐の右側の安樂椅子に居た十七八の――非常に美しいのが、座を立つて、僕の前を
「エキスキユース、ミイ」
て通つてピアノを前にして立つた。そして突然朗々と歌ひ出した。文句は少しも判らぬ。佛蘭西語ても無く、獨逸語ても無い。伊太利語らしくきこえる。文句は判らぬが、確かに歌は旨い。歌ひ終つて、皆んなの拍手中に舊の席へ歸つた。
僕は左隣に居るエダ孃に
「何處の歌? 何んとかいつたね、あの娘の名は」

「伊太利の歌。あれがリリイ、バエル。今、それ、あの扇を使つてるの、あれがリリイの姉さんの、ガートルウド。」

と、さゝやく。僕が初めて部屋に入つた時、燕尾服の若い男と同じ椅子に腰かけてた二人のうちの一人がその姉の方だと知る。その時の今一人の廿一二の女の名を聞くと、

「アンナ！佛蘭西の人ですよ」

といふ。そして今一人の、二十二三の圓顔の、中肉中丈のが、ミニイといふ獨逸の女だといふとも知つたアンナ嬢もミニイ嬢も少しも自國語のアクセントが無い。僕は自分の英語に省みて赧顔せざるを得なかつた

次にエダ嬢が主婦に促されてピアノに向つた。そして英吉利の田舍歌の短かいのを、自分で彈きながら歌つた。リリイ嬢には遙かに及ばぬやうだつたが、それても皆んな拍手した。

その次には、またダンスに還つて、ワルツを一としきり踊つた。踊の時はいつもの、五十近い女がピアノに向つた。

それがすむと、皆んなのやれる遊ひをしやうといふことになつて、ミユジカル、チエアといふのをやるとになつた。僕も之には加はつた。

遊戯者が十一人居れば椅子を十脚部屋の中央に一列に並べる。第一の椅子を左向きに置けば、第二のは右向き、第三のは左向き、その次のは又右向きといふ具合に、腰掛ける處を交互に反對の側へ向けて置く。そして可成その十一の遊戯者をば、女男女男と交互にして十脚の一列の椅子の周圍に一方向きに立たせる。音樂に連れて一同足踏み面白く踊りながら椅子の周圍を廻るのだ。すると突然音樂が歇む。歇むが早いか、一番身近の椅子に腰かけるのだ。十一人に十脚しか椅子が無いのだから、一人は腰かけはぐれる。その一人は退けられることになる。今度は椅子を一脚減して、殘つた十人でやる。その次には更に一脚減して九人でやる。到頭終には二人で一脚の椅子を爭ふことになるのである。狼狽へて坐らうとするから、男と女とが一つ

椅子に半々に腰かけることもある。誤つて女の腰かけた上へ男が腰かけることがある。音樂が突然歇んだ時はキヤツキヤといふ騒ぎだ。此の遊戯は二度やつたが二度とも僕は初の三四回のうちに退け者にされてしまつた。

一と休息してから、ガートルウド――妹のリリイ程には無いが、でも美人の部に屬するガートルウド孃が滑稽演説をやると自分で言ひ出した。そして部屋の扉近くの處へ行つて立つた。そしてジエスチユア巧みに辯じ出した。佛蘭西人の遣ふブロークン、イングリシユの眞似をするのださうな。如何さま、文法も滅茶、そして全くのフランス、アクセントだ。言ひ詰ると佛蘭西語を出す。孃は生粹の英國人だが、その英語は全く佛蘭西人の英語にきこえる。

「マ、シエリイ。ザッツ、インポッシーブル。ゼア、イス、ノ、レーゾン、ド、……」

とかいふやうな文句な處では、本當の佛蘭西人たるフラゼリイ君苦笑して聽いて居る。

濟んでから孃はフラゼリイ君に向つて

「どうでした。間に挿んだ私の佛蘭西語は分りましたか」

「私の英語よりか、あなたの佛蘭西語の方が旨い」

なんて言つて居る。

「序に、も一つ遣りませうか」

と、孃は臆せず始める。演題は「スモオキング」といふのだといふ。今度は獨逸人の下手な英語を眞似するのだといふ。こいつも面白かつた。

「デン、ヒー、リーンド、アゲンスト、ザ、ザールウント、ピガン、ツウ、シユモーク。プッフ、ウント、プッフ」

なんといふ處もある。これも大喝采だつた。これも濟んでから、座中の獨逸人たるミニイ孃に向つて

「御氣の毒さま。怒つちやいやよ」

「私しやそんな英語はつかやしなくてよ」

僕はエダ孃に

「實に旨いね」

とさゝやくと、孃も
「イエース、シーイス、ヱリイ、クレヷー」
と感心して居る。
一としきりはまた獨逸人の英語、佛蘭西人の英語の噂が始まる。僕は私かに冷汗が出るやうだつた。
ヰルソン君が僕の處へ寄つて來て
「君の時計は何時だ」
といふ。出して見て、
「十二時前十五分」
と答へる。ハンタ君にも尋ねる。
「僕のは十二時十七分前」
その隣りのアンナ孃にも尋ねる。孃は左の手首に太い金鎖で卷付けた小形の金時計を眺めて、
「私のは十二時に十三分前」
と答へる。
「三人とも違つてるんだな。困つたなあ」
とヰルソン君が言ふ。僕が
「メヂアムを取つて、僕のが正しいことにしちや」
といふと、
「さうしやう。一寸貸して呉れ玉へ」
と言ふ。鎖から外づして貸してやると、ヰルソン君皆んなに向つて、
「レディース、アン、ゼンツルメン。今、十二時前十五分です。一同盃を擧げて舊年をドリンク、アウトし、新年をドリンク、インしやうではありませんか」
と提議した。賛成〱の聲がする。主婦は呼鈴を鳴らしてグラスを六つ、コップを八つ持つて來さした。グラスにはソーダキスキーを注ぎ、コップにはセリイが注がれた。男はグラスを、女はコップを受取る。ヰルソン君膽入りとなつて、部屋の中央に圓陣をつくれと命ずる。男女女男女男といふ風に並ばせる。コップグラスを銘々の足下の床に置く。兩手を胸の前で左右に交叉して隣りの人と手繋ぎをせよと命ずる。それから時計を眺めて居た同君は、
「丁度十二時九分前だ。オールド、ラング、ザイン

を合唱しやう」

といふ。皆んな繋いてる手を上下に振り動かしながら歌ひ出した。オールド、ラング、ザインは、日本の「螢の光」の節だ。いや、「螢の光」はオールド、ラングザインの節を採つたのだ。だから、僕は原歌はうろ覺へだが、「螢の光」なら記憶して居る。然し日本語でやると揃うまいと思つたから、

トトートトト、テートートートト、テートートート、トテーテー

とベースで合はせる。我ながら可笑しくなる。五十女も娘も一パイの聲で歌ふ。ソプラーノもテノルもある、窓硝子が震ひさうだ。

合唱終つて各々コップ、グラスを取上げて、ヒップ〳〵フレイを三度び唱へて、互に盃の縁をかち合はさしてから、グイと飲んだ。

外へ出て鐘の音をきこうといふので、盃を手にしながら、ぞろ〳〵玄關から、外のスクエアの處へ出る。此の邊の家は何處もまだ起きて居る。ピアノの音もきこえる。歌もきこえる。耳をすますと、何處の寺からか、舊年を送り新年を迎へる鐘の音が響いて來る。皆んな、口々に

「ア、ハッピイ、ニュー、ヰア」

と、空を向いて叫ぶ。すると向側の、何處かの二階の窓をあける音がして、

「ア、ハッピイ、ニュー、ヰア」

と應へる聲がした。三軒目の三階からも、窓を明けて

「ア、ハッピイ、ニュー、ヰア」

と叫んだ。僕等は、飲み殘りの酒を飲み干して、通路のアスファルト道へ盃を投げた。ガチャリン〳〵と碎ける音が盛んだ。寺の鐘は切りとゴン〳〵鳴つて居る。

キルソン君は

「僕の隣りのロース君が起きてるやうだから、呼んできませう」

と言つて行つたが、やがて五十餘りの、頭の禿げた

男を連れてかへつた。皆んなが、そのロース君に『ア、ハッピイ、ニユー、ヰア』を浴びせかける。ロース君は『ザ、セーム、ツー、ユー』に忙殺される。

『さあ、クラッカーを皆さん』

と言つて、主婦が一つづゝクラッカーを呉れる。クラッカーは、ポン／＼ともいふ。紙を太鼓の撥程の丸さ長さに巻いて、その上を縞模様の色紙で包んで、兩端が捩ぢてある。二人で端を持つて引張ると、途中から捩ぢきれて、高くポンと音のする仕掛が中にしてある物だ。野郎同士ては引張らぬ。レディに片方を掴まして、一二の三て引張る。中には何か知ら入つて居る。僕のからは、道化役者の冠る、尖つた紙製の帽子が出た。日本商店から買求めたものと見えて、日本字で書いた辻占の入つてるのもあつた。ハンタ君のからは銀紙製の烏帽子が出た。同君はそれを冠つて、僕にも僕のを冠れと言ふ。フロックコートの僕、紅色紙の圓錐形の帽を冠る。主婦と僕とて引きちぎつた中からは辻占が出た。

『ほんとに結婚して下さいますか』

と書いてある。

『何んといふ意味てす？翻譯してきかして下さい』

といふ。

『ヰル、ユウ、リアリイ、マリイ、ミイといふことてす』

『トルウ？アーンチユー、メーキン、フアン、ノブミイ？』

『本當てすとも』

『あゝ、下に英語て小さく書いてあります。あなたの仰つた通りてす。こりや面白い』

と言つて、女共に見せる。皆んなハッハと言つて笑ふ。フラゼリイ君のにも辻占があつた。

『あなたを思つて居ますよ』

と、縦に日本字て書いてあつて、下に小さく、アイ、シンク、ヲヴ、ユーと書いてある。

『君！之を君からだと言つてミス、リツイへやるよ』

と、爐の右側の安樂椅子に腰かけて、扇子を胸の邊

て弄んでる孃の處へ持つて行つた。
『ミス、リリイ。ミスタ、オターニが之を差上げますつて』
『日本字で書いてあるぢやありませんか。讀めやしませんわ』
『いや、下に英語で翻譯してあるさうです』
『ハハハハ。ミスタ、オターニどうも有難う。』
と朱唇を綻ばして、にこやかに皓齒を見せる。孃はフラゼリイ君の戯談だといふことは氣付いて居る。氣付いて居ても、そして『ブラック、コース、ヘア、ダーク、ブラウンの脊低男めが』と内心嘲笑して居るにしても、微塵もそんな氣合を顯はさぬ。交際が旨いといふのは、こんなことを言ふのだらうと思つた。
『ムジイク、アンシャンテイをやらうぢやありませんか』
と誰れかゞ發議した。ガートルウド孃が、
『私しやピアノやりませう。エダさん御試りなさい』
といふ。エダ孃、そこで部屋のドアを明けてホオルへ出て行つた。一體どういふことをするのか、とキルソン君に尋ねると、
『部屋の中の人が私かに、かう〳〵いふことをさせやうと定める。例へばチヨコレイトを取つて食はせやうと定める。鬼になつた人は、何を自分にさせやうとするのか固より知らぬのだ。然し音樂が急になる方へ行つて、鬼は何を爲せやうと思つてるのかを、音樂の緩急で想像して、無言で、爲せやうとされてることを實行するんだ。僕が今言つたことをさせることにしやう。』
といふ。やがてガートルウド孃は何の曲か彈き出した。ホオルへ出て行つたエダ孃は扉を明けて入つて來た。そろり〳〵と爐の方へ進む。音樂の拍子が漸次急になる。エダ孃ずん〳〵進む。爐の前に立つてた年若の紳士の方へ向く。音樂は突然緩やかになる。こつちの方ぢや無いと推察したのか、斜左に向いた。音樂が急になる。圓卓の上へ右手をさしのべる。音樂はいよ〳〵急になる。クラッカーへ手を觸れさうにする。音

樂は緩るむ。コップの上へ手をやる。音樂は依然として緩るい。チョコレートの皿の上へ手をやる。音樂は依然として急になる。チョコレートを一つ取上げる。紳士の方へ持つて行かうとすると、音樂はゆるやかになる。胸のあたりへよせる。急になる。口先へ持つて來る。音樂は極めて急になる。エダ孃推察したのか、ヒヨイト口へ入れてしまつた。一座大喝采だ。

ガートルウド孃が今度は鬼になつて、エダ孃がピアノを彈くことになつた。卓上のクラッカーを取り上げさして、僕の處へ持つて來さして、二人て引つ張らせやう、といふ事に決した。

ガートルウド孃は、左まで迷はずに、旨く當てた。そして僕にクラッカーを突きつけた。僕と引張り合ふと、ポンと破裂して、中から又辻占が出た。

「末長く可愛がつて頂戴」

とあつて、反譯には、ラヴ、ミイ、ア、リトル。ラヴ、ミイ、ロングとある。

「ミスタ、オターニ、聲高に讀み上げ給へ」

とキルソン君が命ずる。仰に從つて胴間聲を上げて讀むと、一座は又も大喝采。

今度は御盆廻し(ターニング、ザ、トレンチャー)をしやうと誰かゞ發議する。壁に沿ふて、車座に椅子に坐る。隅から順番に、一、二、三と番號を打つ。僕は十番だ。盆を部屋の中央で廻して、誰れかの番號を呼ぶ。呼ばれた者は早く立つて行つて、盆が床へ落ちない中に取らぬと罰を食ふといふことだ。よし來た、と僕は「テン、テン」と、忘れぬやうに口の内で唱へて居る。

ジー孃が徑一尺七八寸の銀の盆を持つて來た。そしてクル〱と廻して置いて、「ナムバ、フオア」と叫びながら自席へ還つた。

第四番のエダ孃、すばやく走つて行つて見事盆を取上げた。そして又クル〱と廻して置いて「ナムバ、セヴン」と叫んで、自席へ還つた。「ナムバ、セヴン」のフラゼリイ君、盆が床へ倒れてから駈け出した。尤も意地惡るく、早く倒れるやうに盆を廻したらしい。

時計を罰に差出した。

フラゼリイ君、盃が大分廻つてから「ナムバ、ワン」とやつた。第一番たる主婦のジイ嬢、抑え處が惡るくて、盃を自分で床へ伏せてしまつた。罰とあつて、ブローチを一つとられる。

ジー嬢は第八番のリリイ嬢を名ざした。リリイ嬢成功。リリイ嬢は、第十番と僕を名指した。僕成功。

僕はリリイ嬢をと、折返して、

「ナムバ、エイト」

と、故意と小さい聲で言つたが、リリイ嬢失敗らなかつた。

リリイ嬢は三番のハンタ君を、ハンタ君は五番のアンナ嬢を指名したが、共に成功。アンナ嬢は九番のヰルソン君を指名した。成功。ヰルソン君は十一番のミニイ嬢を指名して、嬢は失敗。罰にハンケチを取られた。斯んな風で、何度か試るうちに、ガートルウド嬢は腕環、ハンタ君は葉卷入を奪ひ上げられた。僕は旨く失敗せずだつた。

御盃廻しが濟んでから、沒收品の始末が始まる。こいつが面白い。ヰルソン君正面の安樂椅子に腰かけて座右に沒收品を置いて居る。そしてリリイ嬢を壓ねいて自分の前へ跪坐せしめて。そして首を垂れて眼を閉ぢて居よと嬢に命ずる。ヰルソン君、それからブローチを取上げて、

「貴女並に紳士諸君。これは男子の物ですか、女子の物ですか」

「勿論、女の物」

と座中の誰れかゞ叫ぶ。

「リリイ嬢。今自分の手にして居る品物は女の物ださうです。此の品物の所有主をして何をさしたらよう御座います」

と、俛いて居るリリイ嬢に伺ふ。眼を閉ぢて居るのだから、その品物は何か、誰れの物か、知りやうが無い。で勝手な、思ひ放題なことを命ずるのだ。かうだ。

「女の物なら、その女に脚を高く上げて踊らせなさい」

ブローチは主婦のジイ孃のだ。喝采と笑聲の裡に、五十近い主婦は座の中央へ出て、二三度脚を高くさしあげてダンスの眞似をやつた。そしてヰルソン君からブローチを返して貰つた。

ヰルソン君ハンケチを取出して。リリイ孃の頭の上で一二度振つて見て、

「いゝ香ひがする。レディのに相違ない。どうですか」

と眞面目な顏で尋ねる。誰れかゞ

「レディの〳〵」

といふ。その間俛むいて跪坐してゐるリリイ孃に、微かな聲でヰルソン君何か言つて居る。ハンケチの所有主を實は知つて居て、その人に向くやうなことをリリイ孃に注入してるらしい。

「あら、不公平ですよ」

と女の方から苦情が出る。ヰルソン君、

「話しちや居ませんてした。えゝ、それて、此のハンケチの持主には何をさせたらよう御座います」

リリイ孃は俛いた儘、

「この部屋の中てその人の一番好きな紳士に接吻させなさい」

と言ふ。蓋しヰルソン君の注文に應じて斯く言つたのだらう。笑聲堂を撼かす許りに起る。

「そんな無理なこと、出來やしませんわ。」

と、笑ひ〳〵自席を立つて、扉近くへ行つて、

「御一人にはしません。男の方皆さんに致します」

と言つて、キッスを投げた。そして喝采を受けた。

ガートルウド孃は踊らされた。ハンタ君は主婦の手に三度接吻せよと命ぜられた。まだ二三人あつたが、今記憶して居らぬ。

今度は又踊らうといふことになつた。僕はヲール、フラワーならぬ、ヲール、ヰードとでも言ひさうな樣て、ピアノの近くに引込んて居ると、フラゼリイ君やつて來て、

「ヲール、ザ、レディスのスペシャル、アンド、アーネスト、リクエストに依つて君も今度の踊に加

はり給はんことを切望す」

と、身振可笑しく僕に勸める。

「實際ダンスは、寄席以外、見たことも今夜初めてな位だから」

と斷ると、

「なに今度のは譯はないから加はり玉へ」

と言ふ。とにかく一度實見することにする。

男と女とが同數向ひ合ふて整列する。二三歩の間隔がある。男列の右端の男と、女列の右端の女とが、筋かひに出て辭儀して引込む。引込むと思ふと、すぐ又同じ樣に出て來て、互に右手を握り合ふてグルッと踊り廻つて元へかへる。又すぐ出て來て、今度は左手を握り合ふてグルッと踊り廻つて元へかへる。又すぐ出て來て、今度は互に兩手を取り合ふて踊る。その次には出て來て背中合せて踊り廻つて自席にかへる。その間一同も音樂の拍子に連れて、足踏を高くして居るのだ右の一組が濟むと、男列の左端の男と、女列の左端の女が同じことを繰返へす。これが濟むと、男列は右へ九十度向きを變じて縱列となり、女列は左へ九十度向きを變へて縱列となる。そして兩列の先頭は男の方は右へ、女の方は左へ百八十度の方向變換で進む。以下之に從つて進んで、男女最後の二人が手をつないで高くアーチを造つて居る下を、男女兩列の先頭同士、二番目同士、三番目同士と腕を組んで潜る。そして元居た線に、今度は元二番目の人が端に立つやうに並ぶ。そして前の踊りを繰返へすのだ。六づかしくもなささうだつたから、到頭加はつた。僕は臍の緒切つて初めてダンスなるものを試みたのだ。僕の相手はミニー孃だつた。恙無く演じ了せた。今考へて見ると汗が出るやうだ。確かにキスキーやポートワインが僕を踊らしたのだ。何んといふ名の踊かと聞いたら、これが、サア、ロージヤー、デカヴレイといふのだといふ。

「フン。これがあれか」

と僕は獨り合點する。

皆んな一息つく。主婦とピアノ彈きの女と何か小言て話してると思つてると、主婦はッと室外へ出た。や

がて部屋の扉をコト〳〵と外から敲くものがある。ピアノ彈きの女が急いで扉の處へ行つて、少し明けた儘て、外の者と小聲で何か言つてる。そして

「フラゼリイさん、郵便が參りました。不足稅二片ださうです」

といふ。皆んな、ハッハと笑ふ。今時分郵便が、と僕は不審に思つてると、僕の横に坐つてたアンナ孃がポストマンス、ノックといふ遊戲だと敎へて吳れる。不足稅丈けの數をキスされるのだといふ。

フラゼリイ君室外へ出て行つたが、ハッハと笑ふ聲がきこえる。室內の皆んなもハッハと笑ふ。主婦の五十介孃にキスされてるのだ。

フラゼリイ君はミニイ孃を指名したらしく、扉を守るピアノ彈の女が

「ミニイさん郵便です。六片ですと」

皆んなハッハと笑ひながら拍手する。

「オヤ〳〵」

と言ひながらミニイ孃出て行く。ミニイ孃はハンタ君を、ハンタ君は某女を、某女はキルソン君をといふ具合に、男は女を、女は男を呼び出すことになつてるらしい。ガートルウド孃が僕を呼び出した。

「大谷さん、郵便！ワン、シリンですと」

笑聲盛に起る。扉を明けてホオルへ出て見ると、花瓦斯燈にミズルトーが結び下げてある。その下に孃が居る。僕の兩手を取つて、輕く僕の頰へ頰を一度つけた許りて、キャッキャと言つて部屋へはいつてしまつた。

僕は誰れを呼ばうかと迷つたが、知り合ひのが無難だらうと思つて、

「エダ孃にして下さい」

といふと、扉を守つてる女が、

「エダさん。郵便。あなたはハーフ、クラウン」

部屋では拍手と笑聲とが非常に盛んだ。出て來たエダ孃、僕の兩手を握つて

「ハウ、ドゥ、ユ、ドユー」

と言ひながら、續け樣に五六度振つて

「キスなんか止しませうね」
と言ふ。僕はいそいで部屋へ還つて來た。皆んな一度は呼び出された。二度呼び出されたものもある。
これがすんでから又もワルツを三組て踊つた。そして退散することにした。各自
「左様なら。面白う御座いました。又御眼にかゝります」
を繰返してジイ孃の宅を出たのは午前の三時半!

島の人（下）

黑頭巾

其一

●下關海峽以東、周防灘の島嶼の中、大島郡は、尤も注目に値するものならずんばあらず。島は、瀬戸内海の巨島にして、大畠瀬門を以て、大畠と相對す。大船は、此の島の沖を過ぎ、小船は、瀬門を過ぐ。全島、山邱重疊し、平地極めて少なく、樹木欝蒼として、而して森ならざる處は、芋の蔓に綠を爲せり。

●島には、處々、湊あり、村落あり。而して、樹の下、畠の中に、白堊の壁の多く見ゆるは、現代に於ける、島の位置を語るものに非ずや。

●山口縣の金力は、東方に偏重す。則ち玖珂、熊毛、及び大島の三郡は、防長の資本の多く集注せる處とす
大島郡の富は、出稼人に由つて吸收せらる。

●元と、此の島人は、防長二國に出稼し、此の島、出身の石工、大工或は婢僕、毛利氏の舊領内に蔓延す。今は則ち、此の島人は、南洋及び米國に發展し、歸來乃ち白堊壁を築き成す。

●本邦に於ける移住民の尤も多きは、和歌山、山口、廣嶋、熊本の四縣とす。山口に在つては、則ち此の嶋を、其の策源地とす。

●近時、熊本の五高教授由比質、天草嶋に遊び、其の實情を調査し、大島郡と頗る相似たるものあるを記す。

吾輩未だ天草島を知らず。然れども、亦た、此の二大島の相似たるものあるを信ぜんと欲するなり。

其二

●大島郡の人、吾が近世の文明史に貢献するは、青木周弼、研造兄弟を以て巨擘と推す。周弼は、蘭學の大家也。緒方洪菴、杉田成卿と併せて、坪井信道門下の三大才となす。

●青木は、殊に、緒方と刎頸の交を爲す。緒方は、浪華に蘭學塾を開き、青木は、藩主に召出されて侍醫となる。公務に鞅掌して、育英に從事するを得ず。乃ち後輩を勸めて、緒方塾に入らしむ。

●吾輩、嘗て、洪菴の門人錄を見る。門人、殆んど東西に遍ねし。而して、長州人を第一とす。其の中には大村益次郎あり。極めて短期なれども、久阪玄瑞も亦た在り。皆、青木が慫慂の力也。

●長州が、夙に、泰西の新知識を涵養したるは、緒方塾に負ふところ少しとせず。而して、緒方塾を長州に推選したる者は、青木也。

●今、此の島の名望家に世良徳壽あり。縣會議員より代議士となる。彼の父、世良修藏、戊辰の時、東北征討の參謀たり。不幸、暗殺せられて、其の名、伸びずと雖も、天、之に年を假さば、有爲の器なりしと聞く。

●鐵道院に青木周三あり、法學士也。壯年有望の吏人たり。また此の島の產。

●中原邦平、また此の島より出づ。毛利家編輯所に主任たること久し、毛利史に精通す。井上伯傳、伊藤公實錄の著あり。

●彼や、年既に六十に近し、酒を好み、談を好み、洒落にして、酒仙の風あり。其の父、伊平、維新前、勤王の志士也。

●僧月性、また屢、大島郡を以て著聞す。彼や、此の島の人にあらず。島の對岸、大畠の西隣、遠崎の妙圓寺の住職也。此の對岸一帶の行政區域が、維新前、大島郡代官に屬するを以て、月性も亦た大島郡を以て知らるゝのみ。

其三

●二十年前の夏、吾輩、一鐵槌を携へ、金石を探集せんが爲に、小舟に搭して、大畠より此の島に航し、對岸の小松開作に上陸す。

●小松開作は、漁莊蟹舍、また一箇の町を爲す。郡役所を去る二里、本土に尤も近き湊也。吾輩の上陸するや、車夫來りて乘車を勸む。

●吾輩、此の山邱滿地の島に、忽ち車に逢ふに驚く。他日、彼の俥は、郡役所の迎賓用にして、島中、唯一の俥なる事を聞き、此の游の一奇緣事となさずんばあらざりき。

●此の游、また、小松近傍の山に登り、絶頂に、大島瀬門を望むとき、地震あり。火山岩上の矮松、悉く、風動す。此の地方に在つては、地震に値ふこと極めて稀也。

其四

●此の島、郡立商船學校あり。今、漸次に繁榮しつゝあり。此の島の學校として、尤も、適切なるもの也。

●瀬戸内海の巨島、半島、商船學校を創置せるもの少しとせず。瀬戸内海は「海の日本」史に於て、頗る、興味あるペーヂを占領す。昔は、海賊の發生地たり、根據地たり。今は、則ち、商船學校、船渠會社、兵學校の集合點たる也。而して、下關海峽より東航すれば最初の商船學校は、大島郡に在り。

其五

●青木兄弟と、松下村塾との干係も亦た傳へざる可らず。松陰先生は、初めて、蘭學を青木周弼より學びたり。而して、青木の多忙なるを以て、其の弟子、日野恕助、代はりて、蘭學の初歩を先生に授く。

●日野も亦た此の島の人。先年、八十の長壽を以て逝く。樸實の好翁。詩を好むこと飯よりも甚し。吾輩、彼に依つて、松陰先生、蘭學入門の舊事を聞けり。

●松陰は、東都に於て、東條英菴に依つて、佐久間象山に紹介せらる。英菴は、知名の蘭學者也。想ふに、先生に、英菴を推選したるは、青木なるべし。

●研造は、家道裕かに、藏書に富む。先生の村塾に在る、つねに、研造の書を借りて讀む。讀んで朱批したるもの、先生の手澤として、其の歿後、研造、殊に、之を尊重す。

其六

●大島郡より稍、東航して、舊岩國領の海上に、柱島（ハシラジマ）あり。眇たる小島、未だ世人に知られず。

●此の島、松多く、中に一老松、俊寛松と稱するものあり。亭々、百尺の老幹。東澤瀉（ヒガシタクシャ）に月上俊寛十丈松の句あり。蓋し、島人は、俊寛、鬼界島に流謫の途次此に寄港すといひ傳ふ。

●澤瀉は東（ヒガシ）崇一、岩國の儒者。近代、陽明學の一大家也。維新前、國事に奔走し、此の島に流さる。赦されて歸るの後、塾を開く。屋漏を厭はず。奇行多し。其

の子に、東敬治あり、今、東京に在つて、陽明學を唱ふ。

●此の島、未だ古風を脱せず、淳樸にして、村長は舊庄屋の儘也。或はいふ、此の島、未だ借用證書を用ふること無しと。

其七

●「明石チヨイト出りや、舞子の濱よ、向ふに見ゆるが淡路島」淡路島の絶景たる、既に古今の歌謠に盡くし人耳に熟せり。須磨、明石、舞子の好風光を以てすと雖も、前に淡路島無くんば、「明媚」の印象を、圓滿ならしめ難し。

●「光源氏」の繪卷の、一半は、淡路島に依つて優美を致す。須磨、明石、舞子の前に島無く、一望茫々、洪濤澎湃として湧かば、此の浦の松は、今の如くに、やさしかるまじ。

●「霧が晴れたが、白帆が見ゆる、曙けの寺々、鐘の聲」須磨、明石の景象、恍として眼前に浮ぶ。而して、白帆は、淡路島の蒼翠に映發して、詩趣、畫趣饒きを致すにあらずや。

●山陽外史は、播州路を經過するとき、毎に、明石の茶店に憩ひ、一杯の醉を買ひ、淡路島を望む。嘗て淡山歌あり。

●又聞く、山陽、嘗て海路、夜、大阪に著するのとき篠崎小竹が淡路に向つて纜を解くに會ふ。岸上、舟中相呼んで別る。詩あり、曰く、人聲燈影浪華磯、吾舍レ舟時君解レ維。暫爾相逢便爲レ別、間雲西去鶴南飛。

其八

●淡路に義民あり、今より百三十年前の事に屬し、且つ、其の名、世上に著はれずと雖も、其の事、壯烈、また以て傳ふべし。

●義民、名は才藏、宮村の人。淸左衞門、山添村の人天明二年、共に磔刑に處せらる。遺芬流れて息まず、島民、春秋に、其の墓を祭り、以て今に至る。

●島は德島の蜂須賀侯に屬す。當時、代官、奸曲を縱まゝにし、苛政、虎よりも猛也。島民、其の暴に堪へず、百方苦訴すれども省せられず。

●慨然として、島民を率ゐて起つ者は、二人者也。黨を結び、義を鳴らし、八幡宮に誓ひて事を擧ぐ。應ずる者數千人。而して二人者の羽翼たるは、楠之助、貞平及び力士楓山也。

●事、阿波に聞す。藩主大に驚き、監吏をして島民を慰撫せしむ。二人者率先して民意を伸べ、奸商平六、

代官と結託して、島民の膏血を絞るの暴状を告白す。

◉代官以下、處罰せらるゝの後、二人者も亦た、暴動の巨魁といふを以て刑を受く。力士楓山、夜暗、竊かに其の首を奪ひ、大宮寺山中に瘞む。楠之助は獄死す、二人者の遺孤、則ち、同志者の保護を得て、遂に祀を絶たず。

◉碧血、化して茂草となり、往々、義民の小さき墓を埋沒することあり。志士百二十二人相謀りて國中に檄し、金を募り碑を建て、題して天明義民墓といふ。之に銘する者は伯板垣也。

其九

◉鳴門蜜柑と淡路燒の名、既に江湖に著聞す。淡路燒の發明者、賀集珉平の事また傳ふべし。

◉珉平、初名は豊之助、雲錦堂「玉ひら」と號す。其の先は尼子氏より出づ。寛政八年、島の三原郡北阿萬村伊賀野村白石山麓に生る。醤油屋にして、世々、里正をつとむ。

◉彼、豪放にして細事を顧みず。家を弟に讓り、專ら釀造を事とせしも失敗に畢る。

◉彼、環海魚鹽の巨利あるを思ひ、漁業に志し、初め手を阿萬、沼島等の附近に下し、後ち、泉州の堺に至り、大網を造り、漁夫百餘人を使役し、大規模の漁業を營む。

◉珉平、文事を嗜み、兼ねて茶花歌道に通ず。屢、京阪に游び、京都の陶匠尾形周平と交はり、之に學んで樂燒を試み、遂に製陶業に深入するに至る。周平は名工道八の兄也。

◉趣味は、趣味を喚起す。珉平樂燒の好果を占め得て黄南京花瓶を模せんと試み、斯道に沒頭して、漁業遂に廢す。

◉彼の製陶は、益、佳境に入り、爲に、京阪に閑游して研究すること三年、周平を伴ふて島に歸り、斯業を事とす。時に、天保五年三月也。製陶業、漸く成るの頃、資産傾く。

◉天保末年、藩主蜂須賀侯、珉平の妙技を嘉みし、勝瑞珉平の名を賜ひ、更に、燒竈を增築して、彼をして專管せしめ、御庭窯と稱す。珉平燒の名、紀淡海峽より灘の沿岸に噪ぐ。

◉彼、老年、專ら意を美術品に用ふ。今、珉平燒と稱するもの、皆、彼が晩年の作也。

◉文久二年、珉平、病を得て、且つ嗣子力太多病なるを以て、業を甥三平に託す。明治三年歿す、辭世二首

あり、曰く、「神や知る、白石山の、陶物の、末ながかれと、祈る心を」「花も咲き、雪も降りつゝ、世の中はなぐさみ多き夢にぞありける」

●珉平歿後、幾も無く廢藩置縣の大號令出づ。陶業經營の方途また一變ず。三平乃ち業を力太に返し、自から、別に窯を築く。力太多病、事に堪へず、親戚樽田幸吉、樽田善九郎等、代りて業を營み、數年の後、相謀りて、三平の窯を併せて、淡陶社と稱し、合資組織と爲し、其後、再變して淡陶株式會社と爲る。

●淡路燒は、纖細喜ぶべし。黃、綠、艶白、龍甲色、鐵色、艶黑、紫泥模古染付安南燒、高麗模、及び七寶靑磁、及び柿色あり。色澤、意匠頗る出雲燒と相似たり。

●淡路燒は、またオノコロ燒と稱す。珉平は、淡路も出雲も、共に、神代の國。而して珉平は出雲より出でて此の島に來り、また相似たる陶器を製出す。宿世の因緣ならずとせんや。

其十

●維新前、十人兩替の內、炭安あり。元祿時代の開店に係る。元と、淡路白山の出にして、白山を氏とす。其の分家に、炭彥あり、道頓堀東に居る。天明八年の開店。此外、遙かに後れて、道頓堀に伊丹屋勝造あり吳服を以て賣出し、一時、名あり。是等の數者は、其の故鄕に尊からずと雖も、また斯の島人の錚々者たるを失はず。

●淡路島は、明石、須磨、舞子の海面を飾りて、王朝の時代、早く既に歌の名所となる。溯りて、人物佳話を尋ねなば、一朝にして數へ盡くす可らざるものあるべし。今、必ずしも茲に錄せず。

●近世の淡路島は、嵐雪の俳界に頭角を拔くありと雖も、其後、寂としてまた聞えず。島影、空しく、山陽及び海上旅客の諷詠に入るのみ。黛色依々として、日夕、舞子の靑松白帆に映發し、一箇人物の出でて、地氣を發揚するものある無し。

●文化五年(百二年前)伊能忠敬が、測地器を携へて渡來せしは、寧ろ、此の、舊るくして人物に饑ゑたる靈地に血清療法を行ひたるものならずんばあらず。山神水伯は、定めて此の佳賓を喝采せしならん。

●忠敬先生の洲本に來りしは、まさに戊辰の歲也。戊辰は、兎角、改新に因緣あるらし。

●忠敬は、島の周圍をば、藤蔓を曳廻して測量し、且つ磁針を以て方位を定め、天鏡及び種々の器械を以て

天度及び、土地の高低を密測し、細密なる繪圖を製作す。かくして、東灘を經て四國に移り、同年八月、四國よりの歸路、西浦を通過せり。此の島、周回三十八里廿五町十四間。洲本四丁目(元桝形)則ち島の元標地にて、北緯三十四度二十一分と測定せるは、此時也。

其十一

●淡路の人物、吾が人文史に貢献せる者、兆殿司を推して巨擘となさずんばあらず。唯だ一の兆殿司あるもまた以て、此の島の誇りとなすに足る。

●兆殿司の郷地は、洲本に近し。洲本は風光明媚、淡路第一とす。三百年間、稻田氏の治處たり。城郭、及び屋敷尙ほ存す。而して屋敷は、今、高等女學校となり、其の大廣間は倫理講堂たり。大襖に大座敷、宛として芝居掛り也。

●洲本は、紀淡海峽に於ける避暑の快適地、寧ろ、京阪紳士の別莊地たらずんばあらず。而して、今、紡績工場の黒煙、盛んに、此の青松白沙の風景を攪亂しつゝあり。

●俳人嵐雪は、此の島の人。或はいふ、宇治川戰の名馬磨墨は、此の島の產、而して、石田三成の妾も亦た此の島に出づと。

●洲本が、京阪の別莊地たるべき形勢に在るを以て、維新前、京阪の學者、數々、此の地に去來し、以て、島の文運を啓發しつゝあり。松本奎堂も亦た、大阪より幕疑を避けて、一時、此地に身を匿くす。

●此の島の人物、財界に出身する者、前に、增田貢之あり。朝鮮の幣制革新に名を留む。今、森田茂吉あり官海より商海に轉ず。

●此の島、人形遣の本場たるの故に、斯界の名人、時々に輩出す。故紋十郎の如き其の一也。

●阿波は、義太夫を、淡路は、人形遣を產す。此の島到處、淨瑠璃と、村芝居と、年中行事の大部を占領し村の若者、芝居を爲さゞる無く、義太夫を呻らざる無く、而して、一旦、事あれば、則ち芝居を興行す。

●大阪の文樂座は、阿波と淡路との藝術を集大成するもの也。今に至つては、此の二國は、文樂座の特色を分擔す。

●此の島、また往々小力士を產出す。今、大阪の幕内にある鳴門岩は其の一也。

●此の島、文藝の士を出すこと案外に多し。蓋し、神話と風景とは、自から地氣を成して、詩才を醸もすものならん。

●伊藤聰秋は漢詩人として、明治に名あり。彼の筆蹟島に滿つ。阪本蠡舟、藤井紫影も亦た此の島の人。

●俳壇に、永田秀次郎、高田蝶衣あり。永田は子規門下。島の豪家に生れ、法律を修め、洲本中學校長より視學官に歴任す。傍ら、テニスを好み、句あり、「暖かき風の吹くなり、テニスあみ」

●高田は、永田が洲本に校長たりしときの生徒也。當時、教師に、大谷繞石、その後、若月紫蘭あり。彼は殊に繞石の提撕を受く。今、此の島に在りて、繞石の外游中、遙かに、中央公論の俳壇に選者たり。

●蠡舟の歴史文章に於ける、其の元祿趣味に傾倒せる紫影の汲々、學究乎として暫らくも研鑽を怠らざる、共に、吾が文壇の精彩たるを失はず。

其十二

●萬古、淡路島を飾るべき大人物は高田屋嘉兵衛也。彼は世界的人物也。吾が海國男兒の誇り也。此の如き大人物の、此の島に出てたるは、千年、島の地氣を萃めて、凝り成せるに非ずや。

●此の島の漁夫、大洋の猛濤を知らず。近渚、魚蟹を漁るに過ぎず。蓋し瀬戸内海の漁夫は、すべて、日本海の漁人より、「線香漁」を以て笑はる。線香を立てゝ風力をトし、而して船を出すを嘲ける也。這般の線香漁、必ずしも淡路島のみとは言はず。

●島の人は、狹量、狹陋にして、團結無く、寛裕無く雄圖無し。此の中より、嘉兵衛を産出して、天空海濶の氣慨を、發揮し、鎖國の舊日本に天荒を破り來る。

●淡路島に、嘉兵衛を産したるは、瓢箪より駒を出だせる也。灰吹より飛龍を出だせる也。

●日本の島、未だ、嘉兵衛ほどの偉男兒を出せるもの無し。嘉兵衛の生立は、島の研究に、一事項を提供するもの也。

●嘉兵衛が北海より持來せりと傳ふる巨石、今、なほ舊稻田屋敷の庭に在り。則ち、今の女學校の講堂の前にあり。

●淡路島の小學校は、到處、須らく、ガロウヰン日記を備へ付けて、嘉兵衛の偉績を傳へ、此の島の「小國民」に、此の萬古遠路の英氣を鼓吹せんことを期せよ。

其十三

●吾輩、嘗て、日本の三景を論ず。宮島を以て第一と推す。宮崎の特色は、明媚の二字に在り。明媚の趣味は、遺憾無く、此の島に流露す。

●天橋立は變化少く、松島は稍、陰鬱也。宮島は居心

善し。他の二景は、書く可く歌ふ可く、其の詩趣畫趣に、人をして憧憬せしむ。而して、身、其の境に入つて、陶然として、趣味に耽るを得しむるは、宮島を推さずんばあらず。

●三景の趣味は、吾輩、此に細説するを要せず。而して、宮島の趣味、歴史も亦た、此に紹介するには、餘りに陳腐なるべし。

●吾輩、未だ、此の島に、大人物の出でしことを聞かず。古來、英雄、屢、此の島に去來し、平相國の落日を招き、毛利元就の陶晴賢を滅し、輓近、公伊藤の朝鮮往來の途次、屢此に流連するに至るまで、嚴島の神威と、明媚の趣味とは、つねに「非凡の精神」を、此の島に吸收し、慰安を感ぜしめたる也。

●英雄譚に富めること、此の島の如きは、全國無比なるべし。而して、萬古、英雄は、此の島より出でず。

●此の島は、恰も、風光の極めて秀麗なる大停車場の如し。百代の過客、此に、流盼し、中懷に忘れ得ず。然りと雖も、其の人、一去一來、敢て、旅裝を解きて居をトするものあらず。

●嚴島の神社、殊に、其の廻廊は、此の島の趣味の一半を占有す。廻廊は繪馬堂也、或意味に於ては、近世書畫、藝術の一大展覽會たる也。

●此の島が、趣味ある大停車場たるの故を以て、藝術家、此に其の作品を展開し、一は以て神明に捧げ、一は以て、世間に廣告す。

●此の意味に於て、宮島の廻廊は、繪馬堂たり。展覽會たり。而して、大停車場のプラットホームの廣告壁たる也。

其十四

●廣告研究の眼を以て見れば、宮島の廻廊は一大研究室たらずんばあらず。嚴島繪馬鑑の書あり。蘆雪の山姥、傑作ならずと雖も、頗る著聞す。賴山陽一族の筆蹟も亦た網羅せらる。唯だ山陽一人を缺如するのみ。

●吾輩を以て見れば『八方睨みの鹿』こそ、尤も趣味あるものならずんばあらず。『八方睨み』は、廣告の極致也。古人、狡猾、早く、既に、此の好圖本を捧げ來る

●宮島の廻廊を見る者は、「此の鹿」に留意せざる可からず。而して此の島の人も、亦た「此の鹿」の精神を以て、益、此の島を廣告せざる可らず。『八方睨みの鹿』は、宮島の生命也。

其十五

●山陽、僅かに、二歳の幼時、其の母に抱かれて、宮

島に來る。其の後、五十年。母子、白髮、再び相携へて來り賽す。

●山陽は、祠官佐伯子幹に依つて、神庫を觀る。秀吉征韓の時、揮ふところの長刀に感じ、詩を賦す。

●宮島の神庫は、王朝以來の史實を集藏する一大實庫也。近世史家、此に來つて啓發する者、實に少からず吾輩も亦た嘗て、其の一部を觀る。宮島の神庫は、世々、此の島に累積されたる、日本歷史の縮圖の庫ならずんばあらず。

●山陽五十二歲、老親と此に來るとき、半生の浮沈を歔欷し、風景に憧がれ、史料に感發し、感慨無量也。其の句にいふ、松漏ニ朝暉ー沙半濕、ー維レ舟今日按レ親行……抱我爺孃下ニ海船ー、當時襁負拜ニ龕前ー……白頭母子重來詣、存沒茫々五十年。語短かきも、情盡きず。

其十六

●宮島の大觀は、其の曉望に在り。夜色好しといふも寧ろ情に在りて景にあらず。

●宮島の旅亭、前に沙汀あり、後ろに深山あり。一夜未明、吾輩、雨聲かと疑ひ、枕を欹てて溪聲を聽けば一痕の殘月、幔を隔てて小也。

●吾輩、興、旺にして、奔りて樓を下り、白沙の洲を行き盡して、宮島神社に至る。處々、人家、人未だ起きず、汨々たる潮聲に、水殿浮ぶ。

●絕景の中に佇立して、島の古今を回憶す。滴露殘月鬢悉く濕ふ。曙色水の如く、海峽に連り、片帆、魚を載せて歸り來るあり。

其十七

●此の島の別趣は紅葉谷に在り。「宮島、廻れば七里、七浦の勝」ありと稱す。七浦の外、幽邃、閑雅の紅葉谷あり。

●輓近、小豆島の寒霞溪、紅葉の勝、瀨戶內海の東口を壟斷す。吾輩未だ寒霞溪を識らず。然れども、其の大觀、「刹那の感興」に屬す。紅葉谷の興趣、日を涉りて盡きざるとは、自から異なり。

●宮島に淹留する者は紅葉谷に於てす。谷中、景勝に倚つて、到處に、小亭あり。青楓、淸溪の上、鹿の水邊に臥して、亭中の人を見上るを見る。

●紅葉谷は、瀨戶內海の西半の秋色を占斷す。秋の霜葉宜しく、新綠の楓葉、更に人に可也。此に來つて、小酌を催す者は、島の人たることを忘れて、知らず〳〵島の人となりつゝある也。

其十八

●宮島に近くして、西に飯島あり。眇たる小塊。海圖にも知られず。小瀨川の河口にも近し。小瀨川は、藝防の國境を流る。長州征伐の戰に、幕軍の算を亂して潰走したる處也。

●此の島、古來、住民のありしことを聞かず。また、人家のあるべき程の地域もあらず。唯だ、一たび、此に、生を送りし二人の武士ありし奇聞を殘すのみ。

●當時、幕軍の潰走するとき、川に溺れ、海に陷る者少からず。彼の二人者は、海濤を凌ぎて、此の島に泳ぎ付きし者なるべし。

●二人の武士は、戎衣の袖を絞りつゝ、傾むく武運を海波に眺めあかし、取つて喰ふべきものも無くして、此に餓死したるなり。

●彼等は、幕府の衰運に殉じたる海上の伯夷、叔齊也必ずしも短命にはあらず、而して早折せる島の人也。心ある漁夫は、其の靈に手向けよ。

其十九

●下關海峽の西口に當り、長府の前に、干珠滿珠の二島あり。樹木鬱茂して、綠葉の塊海上に浮ぶが如し。天蒼翠を凝結して、人間に寄與するものらし。

●相傳ふ。神功皇后征韓のとき、海中に投じ玉ひし干珠滿珠の二玉、草木を生じて、海峽を鎭護するものなりと。吾輩、此の靈島の好風景を見る每に、此の古傳說の眞なるを思はずんばあらず。

●此の二靈島は、下關海峽に向つて、瀨戶內海の西を扼し、陸上の豐浦殯宮を仰ぐ。此の殯宮には仲哀天皇の英靈ましまます也。

●長州藩の七卿は、長府に流浪して、日夕、此の靈島の翠色を眺め暮らし玉ひたり。干珠、滿珠の潮の滿干は、如何に忠烈なる七卿の詠懷に入りけん。

●長州の攘夷も、此の靈島の附近に行はる。四國聯合艦隊との壯烈なる激戰に、其の翠雲は、砲煙硝雨にも汚されず。

●高杉晋作が回天の義擧、長府に發す。恰も十二月十五日の夜、雪紛々として其の晴れ間に、月輝く。靈島の絕景は、相映發して如何に、美しかりしぞ。

●此の島、居民ありしことを聞かず。然れども、少しく地を拓かば、別莊地として、恐らくは海內無雙ならん。而して。之を海軍大將宮に捧げんこと、豈、可ならずや。

●三伏の夏、滴る綠の陰に、海風、凉々、吹き渡る。また、人間、流汗の苦あるを知らず。而して、古今、

「海の日本」の變遷、歷々、雙眸に入る。

●去夏、歷史地理學會、夏期講習會を長府に開き、「海の日本」を主題とす。會終つて、此の島に、園遊會を催ふす。

●夏の一日、此の島人となりて、海の日本を思ふは、海國男兒の快心事たらずんばあらざる也。

其二十

●江田島、能美島は、安藝の誇るべき島なり。江田島には、今海軍兵學校あり。

●江田島の地沙清くして、風清し。兵學校の所在地、人をして神氣爽然たらしむ。

●吾が海軍士官は、此の島人となりて、四年の修業期を送る。此の島の生出には非ずといへども、此の島、宜しく、此の海男兒を產出するを以て誇るを得べし。

●吾が近海の島嶼無數也。而して、海軍兵學校を特設するを得るは、江田島の無上の光榮として、地靈水伯の隨喜して、以て、日夜に、此の學校を呵護するならん。

●吾輩嘗て、江田島に遊び、兵學校を參觀す。海國精神を以て、規律と鍛錬とを陶冶せる「日本魂の砲彈」を製造する反射爐は、則ち、此の島なることを思ふ。

●吾が日本男兒の精英なる精神力を寄寓せしむることと、此の島の如きは、古來、未だ之あらず。吾輩、此の島に宿するの一夜、吾が輓近、將來の海軍史が、此の島より生まれ出ることを思ひて、轉た痛快の念を禁ずる能はず。

●海軍兵學校の敎育法、吾輩三十九年秋、敎育視察記に詳かにす、今茲に再記せざるべし。

●能美島は、江田島と姉妹島たり。此の島、他の奇無し。古來、世上に知らるゝは、碁伯の輩出地たるを以て也。

●德島に、一口淨瑠璃を語らざるの田夫あること無く、能美島に、碁を知らざるの男無し。少年にして、入段の技倆を有する位の者は、桝にて量るを得べし。

●此の島の人に、登張竹風あり。ニイチエ主義を鼓吹して名を成す、碁は笊碁也。

（此項未完）

巴里美人の化粧

林田雲梯

巴里の美人は世界に於て最も優秀と稱せらるるが、予の見たる處ては血色の點に於ても活氣の點に於ても英國婦人に劣る樣だ、然らば何故に世界に於て其の名聲を專にしつゝあるかと云ふに、余は其の修飾及び應接の術に於て長ずる所あるに因ると斷言するに躊躇せぬ、應接の術とは男兒操縱法と謂はんか、魅人の秘法とも云はんか、夫れは別として余は過般の洋行中巴里美人の修飾法に就て少しく研究を試みた。

盛裝の美人を見むと欲せば巴里に於て最も容易であるが、赤裸々の巴里ッ子を見むとするは至難である、素よりソンジョ其處等には裸體美人は澤山に居る、併し是は盛裝したるより一層注意して修飾を加へた皮膚てある、實は既に裸體でないのてある。

余一夕巴里に於て技倆と云ひ、容色と云ひ、二つながら有名なる美人に就いて研究の機會を得た、驚く勿れ此の美人は嘗て我邦の某銀行家を飜弄して莫大の纒頭を獲、今は居るに輪奐の堂屋あり、出るに自用の馬車あり、其の衣服調度は新奇を競ひ身邊に陸離たる寶石珠玉は價を論せず、應接間の什器にすら一萬法を費したりと稱せらる、又以て其の驕奢を知るべしだ、余が奈何にして斯る婦人の秘密室に入るを許されたるかは素より問ふ勿れ。

午後三時余は其の美人の寓居を訪ねた、髮結に往いて在らなかッた、余は佛英對譯字書を手にして其の歸るを待つたのてある、字書の要は彼女多く英語を解せず、余亦多く佛語を解せず而して他人を同行することは絕對に許されなかつたからてある。

何れの國に於ても婦人が髮を大切にする事と、髮結の困難とは同じ事と見ゆ、待つこと二時間ばかりて彼女はいそ〳〵歸り來た、先つ簡短に初對面の挨拶を交換し、やがて彼女は「嗚呼饑じい！髮結が永く掛つたものだから」と獨言しつゝ余に對ひ「今夜九時某男爵

と晩餐の約束があるので餘程急いて仕度せねばなりませぬ」、「其の御仕度こそ余の望みて見んと欲する所てす」彼の女は輕く首肯し、更に「一寸御免私は食事を」と云ひなから食卓に就く、「貴方も此處にお着きなさい、「フオン、シャンパン」は召し上りますか、「夫は結構」彼女の起ちて自ら持ち出すを見れば、實に立派な「ブランデー」てある、余は之を賞味しつゝ彼女の食物如何と見れば、眞に驚くべし黃瓜と「トマト」に我國の醬油をかけ、三尺計の長パンを切取りつゝ喰するのてある、外に副食物とては何もない、「之が晩餐?と聞いたら更に驚いた、是が朝飯とは!!! 午後五時が彼等の朝飯てある、成程午後九時にやるのを午飯と云ふ理も初めて承知した、此食事中つく〲彼の容貌を見るに、顏立醜ならざるも色は蒼白て血色と云ふもの少しもない、凡そ結髮後は何れの邦の女ても引立つて見へるに、此女は少しも生き〱した處がない、是れが巴里美人の通性てあるのか、コンナのが嬌名世界を掩ふは如何なる理由だろう? 斯く思つたら、余はもはや巴里女は厭になつた。

　其原因に就いて或人は食事の加減と運動の加減だと申すが、英國婦人は朝から肉食をする、そして巴里婦人に比ぶると朝起きてある、又運動が盛んだ、活潑て恰も京都美人と東京美人との相違の樣てす、巴里女が英國美人に劣れりと見たのは果して私の偏見てあろうか?

　容色は厭になつたが、髮の毛は黃金色を爲して一種の光澤あり、(チヽレ毛は無いてす) 又非常に多いには感心したから、是を譽めてやつた處が彼れは失笑して「お譽に預りて恐縮てす髮に於ては私達の最も苦心する所てす、實に結髮はかりなら三時間もかゝるものてはありません」私はてつきり日本流て順番を待つ爲だろうと思つた、然るに彼れは語を繼いて「時間が極めてありますから少しも待つことはないてす、ホンの髮結の準備に三時間かゝるのてす」、「準備とは?」「頭髮を流行色に染める爲めなのてす……流行は每年替るが、人間の髮毛は不自由なもので、流行につれて變化して呉れない、それに年はとる、毛は薄くなる、髢の必要が出來する、實に髮ほどうるさいものはありません、是れ御覽」と簞笥の中より出して見せた大小の髢數十本、嗚呼何れの國も同じ事てある、「此毛染めて可笑な話があります、墺國て有名な或る伯爵夫人に、交際社會の女王とまて稱せられたお方がありますが、此お方の髮の立派なることは、男子方の御賞嘆になるの

は勿論ですが貴婦人社會でも一齊に欽羨措かなかつたのです、然るに能く〳〵注意して見ますと、其の毛色が時々變化するのです、是が評判になつてからと云ふものは今迄の賞讃は一種の嗤笑（ものわらひ）となつたのです、私共が染髪も餘程注意せぬと同じ運命に陷りますから、アハ……

「髪は毎日お結になりますか」「ハイ大概毎日です毎日結ふ必要がない位なら女はつまらないではありませんか」蓋し歐米では男子と寢室に在る場合には婦人は必ず其髪を解くと云ふ是れ我邦婦人の髪に氣を奪はるゝより幾等の進歩である、「染髪も？」「否染髪は一週一度です」「貴下の樣な粹なお方は此社會の事情は何も御承知の筈です」、「否、巴里の事は扨て措き日本の事さへ充分には……」「否々日本では名高き通なお方と承りました、何れの國も此の道は同じですもの、何も隱す必要は御互にないではありませんか。」

食事終る、彼女の導く儘に奥の間に至る、實に見事なる部屋である、彼女は余を安樂椅子に憑せて忙はしげに化粧に取懸つた、某男爵の晩餐會は九時、今は五時打つた許り、夫れでも彼樣に急がねばならぬのか、と思つたので余は試に化粧に何時間を要するやを尋ねた、彼女は「二時間半乃至三時間」と答へた、是れは恐入つたものである、東京では春本や林屋の藝妓の仕度が遲いとて小言を云ふが、巴里つ子は御化粧に三時間を要するとは!! 彼女は先づ下女を戸外に斥けて錠を下しランプに點火し、之に銅筒を懸けた、これは湯を作る爲めなのである、其の間に衣を脱て、肌衣一枚となり、黒靴を脱ぎ、白沓に替へる、揚枝を使ひて齒を淸め、嗽ぎ、次に「ビッデー」（曲彔の如きものに小判形の陶器を置きあり）に微溫湯を入れ其の中に何か藥品を注いだ、何かと尋ねても笑つて答へない、側には長い護謨製のスポイトがある、鏡臺の上の各種の壜の行列してる中に Pond's Extract があつたより想像すれば只今混和した藥品は之であつたらう、是は黴病や皮膚病の藥であるそれで笑つて答へなかつたのであらう、それから腰湯を使ひながら女は、「此間米國の御婦人が五百法やるから私の化粧を見せてとの御所望、一度は斷りましたが、已むを得ぬお方から强ての御賴み、餘義なく御覽に入れました、が實は此處までは御覽に入れませんでした、それに御約束の時間があるとかて、一時半ばかりで御歸りになりました」「男子に見せたことがあるかね」「イエ初めてゝ御座います、これ此の通

り下女さへ遠ざけて居るてはありませぬか。なにお化粧の上は丸裸にても何んでゝなつて御覧に入るることは巴里婦人の誇として居りますが、化粧前に御目に懸けるは失禮てす、失禮ばかりか女の恥辱てす、夫れに如何してあなたには御覧に入れる樣になつたてしよう、自分の情人にさへ見せない處をホ…アハ…貴下は巴里に女の化粧法を研究に御出になつたと承りましたが、夫は實に結構てす、私のは是ても薩張した方です、今少し濃厚な所も御覧になつたらよいでしよう、オリムピア杯に出掛ける連中なら五十法か多くて百法もおやりになれば喜んで御覧に入るゝてしよう。

次にタオルて全身を拭摩すること十分ばかり、次に爪の垢、耳の垢を取る、手の爪足の爪にてすりをかける、夫れから手と足の指と指との間を一本づゝ丁寧に洗ふ、而して後に手を石鹸て洗ふ、是れが顏作りの準備てある。

此次が愈々顏だ、第一に「ワゼリンクリーム」Crème Hon-bignaut a la Vaseline を指頭にて塗り、次にサボンにて之を洗ひ落し、此次に「グリスリン」Mousse de Glycerine Bou quee を指頭て塗る、其次に柔かな「ハンケチ」に香水を浸して顏を拭き、夫れから耳の穴より後頭の生際まて拭き其次に Raisein Violette を小切に付けて頰に塗る、是れが奈何なる憔悴したる顏ても紅桃色にするのてある其上に例の西洋白粉を白毛にて付くる、是れにて一段落すむ。

次に眉毛をチョークで修整するのは日本と同じことてあるが其次のが珍だ、眼を見張りてチョークで睫毛をすくひ上ぐること幾度か知れぬ、是は睫毛の黑いのが眼を引立たすると云ふ理窟な相な、通人の苦勞人か素人かを見分けるには、此炭工合ばかりてある、夫れから念入れて生際の毛に白粉又は「クリーム」杯の付いてるのを拭き取り、是から手の化粧に移る、只紅桃色の塗劑を用ゐないのが顏と違ふ。

時恰も八時三十分、實に三時間以上を費したのてある、夫れから服を着けるコルセットの工合などなか〱見事なものだ、是て仕度が悉皆出來た、そこで下女を呼びて「時間が無いから自働車を」と命じて是れから更に髮を直す、指環ボンネット（腕環は脱しなかつた）杯悉皆濟みて女は余の前に立つた。仰ぎ見れば先に厭やと思つた蒼白の女とは全く別人の樣である、曲眉豐頰實に嬋娟花の如く、一笑百媚の面には覺えず美人哉を絶叫したくなつた、是れなら成程人を惱殺する

も理ありてあるが、併し又冷靜に初め髮結から還り來りし時の事を想起するときは、此の化物がと云ふ感が生ずるを禁ずる能はざるのてあつた。

「男爵の晩餐會は十二時に濟むのてす、是非何處かて夜食を御一處に願ひたいてすが、余は晩きを以て辭せむとすれば、「私の素顏を見て厭になつたのてすか、夫れなら貴殿に斯な厭な處を御覽に入るゝてなかつたものを「否々決してソンナ譯てはないてす若しも夜食を共にしたら、余は歸國の後に奈何なる怨を友達より受くるも知れぬから」「日本にもあんなうぶなお方がありますかね、夫れは夫れとしてお國の京都や東京には大層な美人が多いと承りましたが、私も十二年(明治四十五年)には是非お伺ひ致し度いと存じます」「化粧法てお禮は出來ませぬが、富士山ても御馳走に御案内を致しましよう、是非どうか」時に八時五十分、自働車來たとの報知あり、握手急ぎ馳せて樓を下る、門外忽ち聲あり、ピヨポコ〳〵〳〵。

嗚呼巴里美人、彼は午後の二時に起き一日を化粧に費すのである、化粧の外に何の用もないのてある、如此して尙嬌名を博するを得ざらば誰か傾國の美たらん、余は彼女の殘したる肥馬輕車を驅りて悠々エレジー宮殿(ホテルの名)にと歸つた。

舞踊と容姿美

理學博士　田中正平

今世界の人の能く言ふ所を聞くと、日本は美術國だ、日本國民は美術心に富む、のみならず一體の自然、風俗、人情、凡て美的に出來て居る、それに美に感興の大なる國民だ、又更に美を發揮する才能ある國民だといふ、實に聞いては難有い話だ、人間は何處迄も美を重んぜなければならぬ、自分の身體、自分を取捲く周

國のものを皆美にするは誰しも勉めねばならぬものだ、特に此人と人との附合に於ても、亦退いて自分獨り世を樂む上に於ても、此美の缺くべからざる事はいふ迄もなく、又各人の實際左樣に勉めて居る所だ、此節は言ふ迄もなく婦人の服裝から身のまはり萬端皆華美に流れて非常にこれに苦心し、中には一生の快樂此處に在りとして大に勞するものも多い。

美には高尙な美、善良な美、風雅な美、淺薄な美と色々あらう、がその美を發揮する點に於ては日本人なり外國人なり、共に等しく皆有る可きだ、即ち普通の容色ある美人もその普通以上に値打の添はつて見えるのは必ず美貌といふ何處となく人の情に訴へて善い處があるからであらう。それと同じく一國民一民族として美を有すれば、其處に亦値打を生じて他の國民他の民族よりも優秀の位置を占むるに相違ない。それ故美を發揮するは啻に人生の幸福をす增のみでなく、又國民的民族的の大なる關係有るものでないか、即ち國民、民族は地理的習慣、歷史等によつて又一つの美點を有するものである。之を何處迄も注意して發展させなくてはいけぬ、之を徒に據り所もなく、只美だからとて網羅しさへすれば宜いといふのではいけぬ。美には自ら規則あり、又大にそれに關聯する事物順序がある、此目的を達するは一人一己の事業でもあるが、又社會といふ一の團體としても其方に心を向けることあるべきだ、

要する所今日我社會では、日本人の最も美を形くる所の大要素を度外視して居ると思ふ、それは即ち容姿上の美である、それが延いて品格、即ち品性の優美な所を外に對して現はし得る一の手段だ、是か非常に近代に爲つて社會に衰へて來たのは實に悲むべき事と思ふ、如何なる譯で衰へて來たか、衰へたといふ用語は惡いか知らぬが、兎に角蕪雜となつた。今妙齡の淑女及婦人達は身體を美にし綺羅を纒ふの念を皆持つて居り、又段々其方に進む樣に見えるけれど、其進み方が如何にも淺薄に流れる、只金を出して美術品を身に纒へば宜いと考へる、是が大に考ふ可き處だ、即ち美を

得る事が蕪雜になつて居る、換言すれば少し卑近てある、是は何とかして救はねばならぬ、今の世の中て派手を競ふは只外面上の事だ、それ故其苦心をして折角達し得た美貌も十分に其美を活かすことが出來ぬ、即ち美服を着ても十分に着こなすことが出來ず、折角天然の美貌を持ち乍ら遺憾なく之を發揮することが出來ぬのだ、之を發揮するには如何しても一種の藝術の力に待たねばならぬ、加之之を發揮する事が即一種の藝術てなければならぬ、然らば其藝術は何かといふに即ち舞踊の方に屬する。

昔は若い女は殆んど其凡てが舞とか踊とか。少くも都市の女は皆それを嗜むだものだ。昔の本などに色々の習慣などの傳はるのを見ると、中古以來小人數の者が集り、酒を飲んて歡を盡す時には必ず起つて舞つたもので、德川家の時代になつても同様、酒を飲む時には肴をすると稱して、必ず歌ふとか又は起つて舞ふ習慣となつて居た。即ち舞踊は社會に立つものの必要な嗜みといふ有様てあつた。中にはそれを生計の道としやうとしたものもあらうが、慰みとし嗜みとして之に熱中したものも多かつた。左様な必要があるから舞と踊とは美的藝術として成立つのみてなく、大に社會と直接の關係を持つものてあつた。昔の御嬢さん達は皆踊りの稽古をしたものだが、單に樂み慰みといふのみてなくそれて起ち方歩き方着物の捌き方を注意する、即ち女は女らしい姿を十分發揮するといふ風に勉めたのだ、然るに近來に至つては之が全くなく、其方の特志の者は或は西洋の舞踏をやる、又女學校等ては新工夫に係る美容運動とか云ふものを遣るが、此等は益々婦人の美を發揮する方のものてない、それは西洋人が西洋の服を着て西洋の室てすれば初めて役に立つて美の發揮が出來る。西洋ても踊の稽古をするのは交際上の必要もあるけれど、更に容を正し風儀を修むる爲に男女共に之をするのだ、故に西洋てはそれて其目的を達するに宜い筈てある。何故といふに美術的の眼を以て見ると、其家屋、其服裝と相適する様に出來て居るからだ、だから洋裝を着ればダンスがよい、洋服を着た

時にはそれが美觀になる、それ故日本の婦人方が洋服を着るならダンスを遣るも宜からうけれど日本服で居るならいけぬ、日本服は洋服と丸で違う、いや殆んど正反對だ、即ち服裝の美を發揮する事を思へば、ダンスなどをやることは却つて我固有の美を損なふ事となる、將來皆が洋服を着るとならば宜いけれど、依然日本服を着ることとならそれを學ぶ事は却つて害になる。美容運動も深くは知らぬが活潑過ぎるのみでなく西洋型だから、之を稽古した所で決して我國の女の美貌は造り上げらるべきでない。今の貴婦人令孃達の起居振舞は憐れな有樣となつて居る、實に美術的の眼で見ると見られはせぬ。あれでは何千圓の帶を占め、ルビー、ダイヤモンドを飾つても丸で死んで仕舞ふ。加之、折角天然より授かつた美貌を迄打壞はさぬか、所謂先程も言つた如く趣味の荒漠たる證據で、此風では日本人は迚も益々發達し美を追ふて進むものとは思はれぬ。

　て、昔からして此舞踊の發達並に其形式の變遷を伺ひ見るに、先づ第一に言ふべきは朝廷に行はれる舞樂だが、實に之を見ると心を樂ませる、優美な美感に打たせる處がある。然るに大體の形式を見ると其姿は筒つぽだ、是は昔の朝廷は支那を模倣したものだからである、即ち筒袖腿引の形であるが、之を本として其美を發揮させたものと見える、下つて能樂となると又立派なものだが、其折用ひる大口、狩衣といつた樣な能の衣裳は、室町時代に士の間に行はれたもので、能樂はつまり其衣裳を着けて踊るに適當する樣に出來たものだ、此樣に皆衣裳と調和を保つべきものだ、之を無視した運動は滑稽のものである、幸に此二つが今日に殘つて居るから、少し注意して見れば能く皆當時の衣服と關係ある點が知れる。下つて近世の舞踊、特に三絃樂に伴ふて行ふ舞若くは踊は、又近世の服裝に適する樣に出來て居る、否、適するのみではなく、即ち所謂着流しに帶を占め、或は振袖を着る姿に適するのみでなく、又其等の美を發揮する樣な手が着いて居る、無論是迄の舞踊で現代の日本人の衣服の美點なるものが凡て發揮されたとは言はぬ、是からしてまだ發達さ

せる餘地は有らうが、此長い袖、それから裾を引き廻す衣服なるものは、決して前に言つた筒袖、腿引の踊と相容るゝものでない、此等から考へて見ると、今日本で日本の婦人が日本の服を棄てぬ限り、且つ自分の容姿を理想化し美術化するとして、強いて日常生活に於ても何處となく優美な姿態を得樣とするなら、如何しても昔からやり來つた美容を疎かにしてはいけぬ。それを淑女貴婦人が心附かずに度外視して居るのは實に近視眼の行て惜むべき至りだ。日本人は今日に於ても亦日本固有の美點を磨き上ぐる抱負を持ち居るから、不調和な外國の習慣を加味するとか、或は基礎を美術的に置かぬ運動若くは作法に泥むとかするは誠に惜む可き事だ、如何にするも昔の舞踊を本にして所謂日本固有の美を十分發展し、一には日本國内に居つて御互に此美を競ひ生活を樂むのみでなく、一には外國に對して日本の美術國たる處を發揮したい、是が我々の任務でないかと窃に考へるのである。

舞踊の廢れたのは色々維新以來政治の變遷社會の推移により餘儀なくされたに由るものの、外にまだ幾多の理由あるに相違ないが、其これを衰頽させた理由が今日まだ存在し居るか如何かを今一つ退いて考ふる所てはなからうか、それて其理由がまだ存在し居るならば如何にして之を除去すべきかを研究する時代でなからうか、之を研究せず、本に遡つて此舞踊の社會に用ひられぬ所以を斟酌せずに、只舞踊を奬勵しても國民は動くものでない、然らば先づ第一に此衰頽の理由を極むるが必要。第二には此理由が現今猶ほ存在して障害を與へるならそれを除去する事が必要だ、是は單に婦人に任すべきでなく、社會の問題である、公園を拓く、町を立派にする、帝國劇場を設くる等、色々今は金を費して苦心して居る、其他一般に邸宅を立派にする等奢侈に流れて迄皆が財を抛つ世の中だ、此時に當つて此問題を閑却することはなかるべきである。然るに舞踊の現況今日の樣なのは何に因るか、何が故に何百年間此美術的意匠と鍛錬とを有し來つた藝術が一時に衰頽し、今の處では丸て見るものとなり、人々は只

見て樂む、或はそれて生活を爲すといふ者に墮落し、社會が銘々自分で之をやり興味を感ずるといふ程にはならぬのか。それには澤山の理由がある。

第一に、維新の變動だ、即ち華美な都會生活をして居た武士が質素な田舍的生活を爲し居つた武士に政治を讓つた事である、それ故帝都の上流社會と爲るものは孰れも田舍もの所謂野武士だから、田舍の武骨な風習が基礎になるのみならず、自己の成功が其武骨に基くことと故一般に華美を賤むこととなつて來た。如何にもそれにも理由はある、富國强兵を策するには此道樂三昧は駄目である。けれども社會は左樣淳朴質素のみていける者てない、是は日本のみてなく世界萬邦何處ても同じ事、社會には必ず其社會の成立つ種々複雜な機關が揃はなければならぬ。單に淳朴質素のみて行くとすれば、之を極端にいふなら凡ての文學藝術は地を拂つて全廢せらるべきだ。

舞踊を衰頽させた右の原因は今日猶ほ存續して居り、特に敎育社會に於て多く存在して居る、私はそれの善し惡しは言はぬが、只思ふにはそれのみて近世的の社會が成り立つ可きてないといふ事だ、衰頽の原因は他にもまだある。舞踊といふけれども只今ては舞は能の外にない、能は舞だけれど男舞であるから是は今は論じない、今ては京阪地方て行はるゝを舞といひ東京て行はるゝを踊といふが、特に此處には踊に就いて言はう。此踊の初めて出來た時には何處て行つても恥しからぬ立派な藝術てあつたが、世の推移と共に次第に花柳社會との關係を持ち、特に劇場即ち芝居に用ひらるゝに至つて段々品位が落ちて來た。今日なら警察署や又社會の制裁が八釜しく、舞臺の上て淫猥な事の描寫が出來ぬけれども昔は其處は自由て亂れて居る、特に役者の振を着ける役は踊の師匠がしたものだから、踊と舞臺とには密接の關係が生じた、その爲踊の神聖にして高尙な點を失つた、又花柳社會に行はるゝと如何なるかといふに、一番に影響することは花柳社會の風俗の卑近な事が第一だ、昔は花柳社會に身分あるものも入つた事があるけれど、それ等が入つて藝術

を賞翫するといつても本當の眞面目にやるのではない、即ち鬱を晴らしに打解けての騒ぎで、所謂粋だ洒落だといふ處に自分の滿足を求め樣とした丈だ、それ故上流のものが花柳の巷に入つたとしても求むる所が高尚な處になかつたから、好しや藝術が進んでも中には要素が混じて來た、即ち賤しい思想賤しい情緒を發露する方に汚れ行く事となつたのだ。又梨園との關係は如何かといふに、一體に舞臺で舞ふ型と座敷で舞ふ型とは自然違ふのである、舞臺で舞ふと遠方から見る事だから餘程手を荒くせねばならぬ、即ち餘程運動が烈しくなり、且つ手の細かい華々しい處をのみ見せねばならぬから、極、高尚な優雅な所は舞臺の上では映りが惡い、處が事實に於て踊の標準は名優がやつて居たものだから、名優の劇場で演ずるものは劇場外にも眞似る事となる、即ち其手と共に到底梨園の臭味を免れない。是が東京で純良な社會に踊を容れることの出來ぬ原因であらうと思ふ。で、兎に角斯樣な風であつたから、東京で踊の稽古するものは如何樣なものをしたかといふに、凡て劇場に出して引立つものばかりになつた、即ち山姥の踊とか千本櫻の道行とか、三番叟とか、潮汲みとか朝妻とか、斯樣いふものは皆衣裳を着けて舞臺へ上つてやる所で初めて舞踊らしくなつたものだ、所が此等を稽古させるのは小供の時からである。日本では別に小供の時に敎ゆる踊といつてはない。それ故少し上達すると直に姥となつたり、鬼となつたり勇士と爲つたり、奴となつたり、又遊女の眞似をもするといふ事になる。所が小さい小供で之を稽古すると誠に不自然な一種の輕業一種の猿芝居となる。小供らしい優美な所は丸で無くなる。是で踊を稽古させても優美といふ處はすつかり荒んで仕舞ひ、藝がグロテスクの荒々しいものか、左もなくても小供には相應はしからぬ擧動を敎へ込む事となる、此等が大に其發達を妨げた原因となつて居る。

更に衰頽の第三の理由としては、踊を稽古するに伴ふ弊害の多い事それである。踊の師匠は梨園社會花柳社會に關係して居る、それで習ひに行くと又花柳社會

梨園社會のものと一所に変はらねばならぬ、是が弊害を生ずる。それに又踊の師匠は色々の口實を設けてやれお浚ひの何のと定時にやつて、自分の弟子の其兩親の幾らか財政上餘裕のあるものとか、金滿家とかいふものに非常な失費を掛ける、兩親共も亦互に見えを張つて一回に千金を投じた例は多い、即ち自分の小供に踊を仕込んで財産の全部を蕩盡した例も多い。只今ても斯樣いふ處があり此弊は存續して居る。今茲に人あり踊を稽古しやうと師匠に行くとなれば上來數へて來た弊害を其儘繰返さねばならぬ。此等多くの弊害のある處が亦此立派な一種の國藝よりして我々を遠からしめた理由てある。

踊それ自身としては實に立派な藝術、之を國技といひ得べき程のもの故、我々は之を十分に培養し、十分に發達さすべきものと確信して居る、が社會では久しい間丸て度外視して來て居る事だから、今之を再興するのは非常の困難と思ふが、若し前述の如き弊害を避け、踊に附随した惡い點が除かれたなら、今一度之を興して我固有の美を益々發展する事が出來やうと信ずる。それ故前に言つた外にもまだ幾らも理由はあらうが、社會は須らく是等に注目し、其矯正すべき處は矯正し、此藝術を益々清淨潔白に高尚優雅に導くべきものと信ずる。又社會改良家に取つても此問題に就いて十分研究の價値あるものとし、廣く社會の注意を惹く樣勉められたきものと望む。

花見風俗の今昔

文學博士 久米邦武

一、支那の花、日本の花

花見といふが花とは何だか、八釜しくなるが其名分即ち其名例律から定めて見やう。花は誰も知る植物の生殖器が實を結ぶ機能からして其裝飾に出來た丈の者だ、種類は多いが大別すれば少花、多花の二つ。少花には牡丹、蓮、多花には梅、櫻、桃が最も人目を樂ませるけれど、處からて各違ひ、日本に少花を愛した歴史は餘りなく、多花でも支那などとは大分違う。日本では櫻、支那では桃。て支那では花と單に言へば桃の事になつて居るのに日本では櫻の事になつて居る、尤も「このはな」といふは梅で、公任の古今集の註には左樣說いてある、後に大根だなどいふ說も出たけれど先は梅と定めてある、といふ樣な譯て、日本ては花見といへば櫻見だ、梅を「このはな」といつても其咲く頃迄はまだ氣候が寒く、寒い處に花と映發する趣味もあるが、先づ之を見るものは特志の雅趣ある人に限られる、けれども櫻となると其咲く頃は恰も春風駘蕩、人の心も陽氣に浮いて來る、此處へ彼の多くの花が一時にパッと咲き亂れて、凝つて動かぬ錦の雲が天を掩ふから最も人の心身を蕩かす迄に慰むる、て花は櫻、花見は櫻見と相場が定まつて來た。

二、山櫻、庭櫻と櫻狩、花の宴

日本國民の花見といふは櫻見だから、櫻は即ち日本固有の花て太古より重んじたものと見るべきだが、種類は中々多い、ても大別すれば山櫻と庭櫻とに歸する、古今集の序の「春の晨には花の散るを見」の公任の古註に、「うつせみの世にも似たるか櫻花咲くと見る間にかつ散りにけり」といふ證歌を引いてあるが、是は山櫻て花の壽命が甚だ短く僅か一週間てしかない。又伊勢物語の業平の櫻狩の處の歌に「散ればこそいとぞ櫻のめでたけれ、うき世に何か久しかるべき」とあるのも矢張り山櫻てある。が庭櫻は早く散らぬ、小野小町の「花の色はうつりにけりな徒に我身世にふるながめせしまに」は、前の業平の歌と比べて見て明に此庭櫻を詠んだ述懐の歌と思ふ。此二種の花につれて花見にも亦自ら二種ある、櫻狩と花の宴がそれだ。狩とは元來紅葉

狩、螢狩などいふ如く山野を狩り廻るのだ、て櫻狩といへば處定めず所々の櫻の景色を眺めあるき、心行く花蔭を認めては其處に坐を構へて賞翫するのだが、花の宴といへば左樣てはない、庭に面して種々の櫻、即ち糸櫻、八重櫻の類を栽ゑた山に向つて酒宴を催すのだ。

櫻の由來を手短く話すと、今言ふ樣に太古よりあるものだが、歷史に見えた初は神功皇后の磐余の稚櫻ノ宮て、それより引續き履中天皇も此宮に居らるゝ。今の大和の磯城郡櫻井に磐余山といふ小山があるがそれてある。其東に神武天皇以來天ッ神を祭らせられた靈時のある鳥見山がある、去々年私は其鳥見山の靈時を訪ふたが、其山上からは大和の平野が盡く一目に見下される非常の絶景だから、多分此麓あたりに澤山山櫻が植ゑられたものてあろう。此處を起點として其南の多武の峯續きが葛城山になり、葛城山の背面が吉野になつて居る。吉野川に沿ふて所謂一目千本の櫻を栽ゑたのは極古い時代からの事だから、藤原宮の時代迄は京都の花見は此山續きを辿り此山背に出て、吉野を遊び場所と定めたものらしく、そして王侯貴族には離宮別莊があるが一般のものは銘々旅仕度をして口口の山から櫻を狩りながら吉野へ出てそれから又引返したものと思はれる、古き時代は斯樣に人々皆健脚て、櫻見の時には山野を遠く跋涉し、此處彼處に善き花蔭を求めては其處に群れて賞翫したものと思はれる。奈良遷都の後に南山の花見の衰へたことは萬葉集に見えて居る、固より奈良の都にも花見場所は作られたが、それは奈良七代の間て更に今の京都に移された、即ち伊勢大輔の歌に「古の奈良の都の八重櫻、けふ九重に匂ひぬるかな」と詠んだのは此奈良の都の櫻だから、奈良の庭櫻が次第に京都に移されて京都の離宮別莊には盛な庭が造られ、其處に花見の宴の催されたものと思ふ、所謂古今集の序に、「古は世々の帝、春の花の晨秋の月の夜」とあり、花月の二つを擧げてあるが、或は春の花秋の紅葉、約めては春花秋葉ともいひ、一年に二度の娛樂の時と定めたものだ。先づ此樣に山櫻は狩り巡りて、庭櫻は室内に宴を設けて見るといふ樣に、花見

の仕方には判然二様あつたものだ。

三、歌舞と酒食

花見に伴ふ需要品が又ある。概して言へは歌舞と酒食。是は貴賤に通じたもので、上流には詩、歌、管絃の御遊といひ之を又三席の會ともいつたものだ、昔白河上皇の詩歌管絃の三船を仕立てて御遊びの時、藤原恆信が遲れて參り、池の汀に立つて「何れの船にても寄せ候へ」と言つたのは非常の美談となつて居る、それも其筈「何れの船にても寄せ候へ」は詩歌管絃の三つの船何れになりと乘り得る程の藝に達したものならては言ひ得ぬ語、そして恆信程の人ならては此三藝を一身に兼ねることは難いからだ。即ち一般の人には此詩歌管絃は爲し得なかつたけれども是に似た事をして遊んだもので、歌舞は花見に離れぬものであつた。最も貴賤を通じてのものは酒食の二つだ、此酒食も亦狩と宴とて二つに分れる。全體食膳を作るに自ら差別がある、先づ配膳といふは禮服を着けて食ふ式場の膳だ、次を料理といふ、是は宴會に用ふるもので、其料理を別種なものに略したのが茶室に使ふ會席其下に茶漬、辨當、或は鍋などといふ別のあるを先づ知らねばならぬ、扨て花見の酒食は、狩には辨當、宴には簡易にしても料理だ、宴會を最も簡易にすれば會席でも辨當でも濟むけれど狩には辨當に限る、それ故昔の公卿は近く南北朝の頃迄破籠を用ひたが、其後足利時代になつては破籠て花を見る事も出來ぬ境遇と迄なつた、それから江戸時代に及んでも花見には、貴賤を通じて極めて重くて重詰、普通は辨當以下は折詰か或は腰辨當といふ事になつて居た。需要品の話はそれとして更に又此花見の歡樂にはそれを助くべく自然に備はつた宗教的の行事があつた、即ち貴賤老若打連れての春の花遊には必ず佛教趣味から出た三十三所巡り、或は六阿彌陀、六地藏詣り、若くは大念佛などいふが必ず共に催されたもので、即ち此趣味と彼の趣味と相待つて、上下共に春の歡樂に充ちた野邊を面白可笑しく狩り暮したのだ。

四、田舍の花見と、花見の眞趣

爰に花見の精神の精髄ともいふべき田舍人の趣味ある話をしやう。私がまだ故郷(佐賀)に居た頃每度老人から話して聞かされ、是が天然の美を見る趣味の根本だとて、肥後國の百姓の作つた次の俚歌を敎へられた。

あちく時、莟と見たが、こちく時
ハヽアいつひらけたけんにゃががとぢの花

何の事か誰にも分るまい。方言だから解釋が要る。是は其農夫が山一つあちらへ用足しに行つて其戻りに花を賞翫しての作。「あちく」とは「あちらへ行く」、「こちく」とは「こちらへ來る」。「ハヽア」は感嘆の時の間投詞。「いつひらけた」は「滿開」。「けんにゃ」は「けりな」、即ち「いつ開けたけんにゃ」は、「能く開きにけりな」の意。「がが」は曲げものの辨當入の名、「ががとぢ」は「ががを綴ぢ」て、ががを綴づるに櫻の皮を用ふるから自ら櫻の木の名になる。「ががとぢの花」はそれ故櫻の花だ、之を通釋すると。「彼方へ行く時にはまだ莟と見たのだが、此方へ戻つて來れば、ハヽあ能つく開き切つて居るわい、櫻の花がよ」といふ事である、が直接に櫻の花といはなくて「ががとぢ」とある處に田舍人の風俗をも知る便りがあるので面白い。足利の末の戰爭から江戶時代の昇平となつても、武士の旅行には腰辨當といつて握飯に黑豆、梅干、香の物などを、吳蓙様の蓆ものか又は行李に編んだものに入るゝ事となつて居た。それを又網袋に入れて腰に着けたから腰辨當といふ。そして農夫其他一般の勞働者の辨當は多く此「がが」に入れた者だ、即ち右の農夫は戻り途に餘り花の景色が美はしいので仇には立ち去り難く、暫し滿開の花陰に憩ふてががの辨當を開き乍ら咏嘆の懷を此三十一字詩に洩したものだ。賞花の眞味は此處にあると敎えられた。如何にも其通りだ、此歌の心榮えが最も高尙に詠まれたものは、彼紀友則の「久方の光のどけき春の日に靜心なく花の散るらん」だ、是は花の實に最美な趣て、其「花のちるらん」といふ語は惜む心にもなり賞する心にもなる、私の最も感心して居る者だ。

謠曲などにも須磨の蛋人は薪に花を折り添へて山より歸るといふ事が用ひらるゝが、此趣味もががとぢの

花の趣味である。山姥の謡にも「或る時は山がつの樵路に通ふ花の蔭、休む重荷に肩を借し、里迄おくる折もあり」とある。山姥といふは勞働する女の上を作つたもので個中の趣味は亦ががとぢの花趣味だ、花を見て心を慰むるは賤しき男女老若を通じて自然に存する趣味、そして此ががとぢ趣味が其精髓のある所、他は盡く附燒刄、所謂贅澤三昧になるのだ、

私の鄕里の佐賀には堀河天皇の時代から、一の宮の側に實相院といふ眞言寺が建ち、如法經會を始め、今も猶行はれて居るが、是が舊の三月の五日から十日の間續く、其時に、佐賀、神崎、小城凡そ二十萬ばかりの老若男女が御經詣りと稱して一年中最も樂い步行日と定め、銘々に前夜から辨當を作つて持ち行くのもあり、又彼方へ行つて饂飩か何かを食ふものもある、其道筋は紫雲英、菜種の花咲く頃とて野邊は一面の錦繡を敷き詰めた中に、茜或は緋金巾の裳の裾が閃いて步き聯ねる。其行く先の河上一の宮は佐賀の嵐山ともいふべく、淸水の流に沿うて櫻が栽ゑてある。御詣り連は其處で辨當を打開いて快く花を賞翫する。即ち是は粗朴ながかとぢ趣味に宗敎趣味が加つて花見場所が定まつたものだ。惣じて田舍の花見は是だ。

五、上野、向島の花見

是が都となると花見場所の數繁く造られあるけれど、詮ずる所矢張り辨當携帶の野邊步き、花の樹蔭を尋ね暮し一日の快樂を盡すの一事に止まるもの、只都丈に凡てが大業で種々の需要品が附け加へられる丈だ、そこで江戶の花見場所と花見風俗だが、江戶の花見場所は上野の忍が岡が眞先に出來たもの、是は輪王寺の宮の境內で今の東照宮の少し北に元と中堂といつた大きな門があつた、下谷から望めば亢然と花の林の中に聳えて居たもの、昌平黌の生徒が上野ノ中堂下谷ニ看ルといふ句を出して其對句を求めたけれども到頭見付からなかつたといふ話にも殘つて居るもの、明治の初頃はまだあつたのだが、其中堂前が即ち昔の花見場所であつた。が近所には數多の檀林があつたから上野の花見は亂らなものでなく、寛文の頃までは侍以上は

槍を持たせて來たといふ程の場所だから、精々て花に戯るゝといふ位の處、花に狂ふといふ度には行かぬ、先づ厳粛な花見場所となつて居たが、向島の堤に花の栽わつたのはそれよりもズッと後の事だ、其處の堤の櫻は即ち京都の嵐山を形つたものだろうけれど、川が大きくて嵐山よりはパッとして居る、ても淺草の觀音が東京第一の貴賤群集の場所となつて居るから自然向島の櫻が東京第一の花見場所となつて居るけれど、是はつまり狩の場所で宴の場所でない、宴を催すべき設備はしてない。それ故其處の花見は昔から至つて雑踏て、市中幾百萬の人民が僅かな堤に集つて押し合ひへし合ひ往來するから、心靜かに花蔭に坐を占めて清趣を味ふには適せぬ。飲んて食つて狂ひ廻る丈の場所である。

私の初めて江戸に出る前年向島の花見に行つたといふ友人の話を聞いた、極、大兵な、膂力もあり武術にも達した人てあつたが、いや小梅から丑の御前あたり迄行くと酒を勸められる、拳を打ち掛けられる、宛ら狂人の態が多いから、是ては若し不法ても仕掛けらるれば刀の手前、武士の意地、如何様な果し合の必要も起るか知れぬと案じられて引返した、向島の花見は身をたしなむ者のすまじき者だといふ、が私も行つて見た。最初の時には同藩の先輩と肥後の藩士の二人に誘はれ、昌平から上野と花を見て田甫を横ぎり、三谷に出たが、肥後藩の人は頗る當時遊び手てあつたので、吉原の見番藝者を連れて來た。て同伴は隨分不服を鳴らしたけれど、履行したものは據ないから不服の儘に出かけた、今戸から木母寺を渡り、花の下を藝者と一所に歩いて居たが白鬚神社邊迄行くと藝者が顔色變へて青くなり、見番の衆に見られたからとて引返した、是は其頃の江戸時代ては吉原の見番藝者は廓外に出る事叶はぬ厳法てあつたからだ、すると肥後の人も引返したので私は猶ほ獨り八州園あたり迄行つたが、成る程進めば進む程人が狂する有様だ、明治の初迄は花見時の路傍の賣物には、兩耳に掛けて目のみを掩ふ、紙て花魁を作つたものと、薄い紙張子の陰莖を鼻に掛け

られる様に作つたもの等がある、之を花見連が買つて掛けて男女を装ひ戯れ回るといふ狂態を盡して居る、そして聞きしに違はず往來の人に酒を侑める拳を打掛ける、謹愼のものには迚も是より進めずに引返して仕舞ふ。

初度の花見は此様な體裁で不十分であつたが、其後又同僚と申合せて再び出掛けた、今度は小倉袴の書生姿で、淺草を通る、明治の初迄は淺草に只奥山といつて狭い庭があつたばかり、境内には餘り櫻はなかつたが、其處を抜けて吾妻橋へ掛り小梅を經て正面から進んだ、と業平橋から前の河端に一つ二つの出店があり、竹の皮に蒲鉾、燒玉子、椎茸などの口取を盛り、一盛り天保錢一枚の札が出て居たから之を買つて行く、他の一人は既に其前に酒を一升樽に買つて持つて居る、扨て三巡りに行き掛かつたが、段々櫻の蔭になつたから時分は宜しと酒を飲み、用意の口取を食つて見ると是はしたり腐つて居る。又他のを食へばそれも腐つて居る、盡く腐つて居る、如何な書生口にも迚も食へぬ程に腐つて居る。到頭殘らず捨てて仕舞つて天保錢幾枚を形なしにした。繁華雜踏此方から酒を侑めれば他からも亦侑める、相變らずの踊りかける拳を打掛けるといふ騒の中を潜つて兎に角土手の半迄進んで戻つた。

向島の櫻は吉野の山櫻で落花が早いから其年はそれで暮れ、明くる年の春又も同じく四五人連で同じ所へ花見に行つた、此時又他の人が業平橋袂の同じ所で竹の皮包みの口取を買つて來たが、又例の如く三巡り邊て開いて見ると皆腐つて居るといふ、どれと私も試しに食つて見ると不思議！其腐り方が去年と同じ程度だ、如何して此様に同じ様な腐らし方か、腐らし方にも術があるかと不審に思つたが、其後巧者の者に聞くと、凡て此様な者は初め作つてから賣餘りをば、次第〳〵に下等の料理屋下等の料理屋へと廻す、そして最後に此様な出店に落込む迄には凡そ一週間にもなり、最早食へぬ様になつてから賣るから何時も同じ腐り味なのだと分つた。都は餘りに調法過ぎて此通り一方に

は腐敗物迄食はされる、又不廉のものを賣る、或は乞食がたかる、醉拂ひより掻き混ぜらるゝ、時には喧嘩が起る、成る程花は一里餘の長堤を誇らしげに咲き亂れるけれども、私は矢張り田舍のがかとぢの花の少し進歩した位の處がよいと思つた。

六、御殿山の花見

上野、向島の外の花見場所は先づ品川の御殿山と王子の飛鳥山、次は日暮里だが、此等は皆一所に纏まつた花て、下蔭が廣く、其處に花見客は蓆を敷き辨當を携へて坐を占め花を眺むるといふ場所も出來て居た、此處の花見客には昔大御所樣時代の頃から段々と種々の意匠を凝すものが多いのだが、就中最も人口に膾炙したものが二つある、一は一人の老人が極めて風雅な服裝して羽織を上に着流し、二合とは入らぬ程の小さな瓢を肩に掛けて花の下を徘徊し、逢ふ人毎に其酒を侑めつゝ歩いて居た、幾ら多勢の人に注いでやつても其酒が盡きぬ、晝前から夕陽に及ぶも盡きぬ、果ては見る人毎に皆怪み、珍しい人だ、仙人だらう、彼の瓢の酒の盡きぬのはといつて居た、其中に遂に其人に就いて正體を聞いたものがあつて初めて分つて、見れば、同形の小瓢十四五も隱し持ち、まだ三四個には酒が一杯に入つて殘つて居たとの事、珍趣向といふので大喝采であつた。

今一つ。午前早くから一番好い花の陰に一圍の男女が場所を占め、障にならぬ所に幕を一つ張り廻し、其中に蓆を敷き席を定めたが、大名の家族かなどと見え、姫君を連れて老女、中郎、腰元、隨行の侍、醫者、從士、仲間、僕などが居り、種々の風呂敷包を持ち、茶辨當を擔ぎ込んで一方に積み、そして美妙の姫君には褥を敷かせて幕の處に坐らせ、軈て略ぼ座席も整頓したので靜に花を詠めて居る、其處を通るものは誰しも一寸立止り一瞥を與へて行くのであつたが、其姫君は臨月と見え大きな姙娠の腹を抱へて居る。兎角する中姫君が腹が痛むと言ひ出しお附きの女中が心配相にして撫てゝ居たが段々痛む樣になる、それから騷となり、醫者も飛んで來てまだ來月だと思つてゐたのに此處て

御產氣とあつては困つた事だといつて喞つ。て御姬樣御產氣といふ事が外に知れ、一人立ち二人立ち遂にはギッシリ人襖て立て籠める、遂には大きな人山を築く有樣となる、姬君は呻く、醫者は周章てる。老女、中郎皆狂亂の體てある。到頭姬君を褞袍を掛けて其處に寢せ、御側女中が風呂敷包に腰を掛けて產枕の代りとなるといふ騷ぎ、群集は愈よ群集を重ねて今は滿山盡く之を見るといふ有樣になる。苦悶は愈よ烈しく醫者は愈よ狼狽へる、藥箱と茶辨當を取り違へる。此方の包み彼方の包みと、包みを引下して必要なものを搜し得ずに騷ぐ。と早や御產があつたといふ、醫者が馳せ寄つてどれお子樣はとお抱き申して見るとそれは德利てあつた、すると藥籠からは辨當が出る、風呂敷包からは三味線が出る、其中に早やお藥といつて溫めたのも持つて來たのを見れば酒である、先づ祝着とて花の下て御產の祝の三味線を彈く、御姬樣も御安心といふ譯て褞袍を取つて見れば何事もない、隨分洒落た姿て元氣て居る、何の事つたと許り今迄黑山を築いて居た物數寄連はアッケに取られて散つて仕舞つた。御殿山中幾十百の花見の團體色々の珍趣向ある中にも此程のものは今迄ない、多分芝居者か何ぞであつたらうとの噂取り〲てあつた。此樣な暢氣な遺風は明治の初頃はまだ殘つて居たものだ。

其十四五年の頃と覺える、當時はまだ馬車もなかつた、て淺草觀音前から進んて吾妻橋に向つて行つた時に、其橋の降り際に黃色の襦袢を着て靜に步いて來る中年の男が見える、不審と思つて進めば其男は極めて徐行する、近よつて見たら豈圖らんや麩海苔で作つた襦袢なのだ、向島を何處迄行つて戾つたのか知らぬが、徐行は麩海苔の破れぬ爲なのである、是などは餘程馬鹿な趣向だ、多分誰かと賭てもしたものだろうと思つて見て來た。斯樣迄なつては早や花を賞翫する趣味の境を逸したもので或る部分には却つて苦痛をさへ感ずるのだ。惣じて都の花は需要物が備はり居る處から却つて花見の目的はあらぬ方に外れて仕舞ひ、花に戯るゝ所てなくて花に狂ひ、遂に苦痛をも見る或は其爲に

二日酔もする、それてなくも花柳界に落ち込むといふ惡結果になる。つまり花見の眞趣を解せず、櫻狩り、花の宴の別も辨へず、見る爲か飲む爲か食ふ爲か分らずに騒いで放心するのは慨はしい。

七、花見趣味と色、香、聲

全體花は植物生殖器の装飾で色と香を備へる其處へ鶯などの聲を添える、此色、香、聲の三機能て人の精神を慰むる事だが、此色香聲の三の作用は隨分人の精神を導くことの強いもの、それ故宗教にも之を利用し、聲明の度と僧の袈裟、衣、佛壇の装飾の色に心を用ひ、更に香を焚き梵貝其他の聲をも合はせて人の信仰心を強むる様にする、從つて之を惡い方に用ゆれば惡結果を生ずる力が強い、即ち男女間の媒介の工夫等に用ゆれば春情を誘起する力は多大てあるに、更に酒といふ興奮劑を加ふるに於ては人を淫蕩に誘ふ事は容易てある、それ故吉原の見番藝者などの教え込みは、繁絃高調を以て急速に酒を勸め、又踊に嬌態を見せるといふ事の相だ。陽氣の春日和に花見の娯樂は得て酒といふ狂水に放心し易く果ては淫蕩に陷り易いから、花の眞趣を得るに心掛けて其他は適度に止めねばならぬ。

同じ酒を飲むにも足利時代迄は其謠曲などに謠はれ居る風俗を見ると、仲々亂には至らぬ樣だ、謠曲二百番中最も際どい處迄作つたと思ふのは、千手の最初の同吟に、「妻戸をキリ、と押開く、簾の追風匂ひ來る、花の都人に恥かしながら目見えん」との歌て、千手の前が重衡の前に出て來る、それが最後に舞となつて舞ひ終り、同吟に「其時重衡興に乘じ、琵琶を引き寄せ彈じ給へば、又玉琴の絃合せに」となり、次に重衡が、「あわせて聞けば峯の松風通ひ來にける、琴を枕の短夜のうたゝ寢、夢も程なく東雲のほの〴〵と明け渡る、空のあさまになりぬべき、あさまにやなりなんと、酒宴を止め給ふ御心の中ぞ痛はしき」と止めてある。此琴を枕のうたゝ寢は絃合せの証歌て事實てはないのだが、兎に角文句として際どい處迄作つてある。今一つ狂言に下等の長屋の奉公人の所作をする所の、其酒飲んて酔うた後の話に、「飲まう〳〵と思ふ心は月にも花

にも換えられぬ」とあるが、醉後の詬に、猶ほ月にも花にもと花月を比較に取る處は花月の趣味を忘れぬ證據だ。が尙ほ進んで重々の酒宴となりたりといつて歌ひ出す時には、必ず「ザザンザ濱松の聲はザザンザあ」といふ紋切形の狂言謠となつて居る。「ザザンザ」は「ささ」の意味てあるべく、「ささ」は酒の異名だ、是が足利時代の奉公人等の醉つて舞ひ出す時の歌となつて居るのだが、江戸時代に於ける花見などの歌の之に當るものは

浮いた〳〵浮いて來た、瓢簞ばかりの浮きものか、私の心も浮いて來た

てある。酒の藥功も此處迄進んて人の心も此歌の出る程に崩れて來ると、最早や先は知れたもの、花見の末が花柳界に溢れ入るといふ樣にもなる。一年一度の花の時節それ相應に精神の娯樂も取らずばなるまいが、花見の眞趣に心掛け、色聲香の程度も切めては千手の謠以前程に止め、天與の幸福を淸く保つ樣嚴正に注意せねばならぬ。

徳川家達公論



△徳川家達公

文學博士　三宅雄二郎

維新頃滅亡にならうか爲るまいかとした徳川家は漸く回復し、此頃仲々盛な勢てある。日本橋開通式に慶喜公の出られるのは前將軍として敬はれての事、帝都たる東京には明に德川時代の江戸の名殘がある。そして家達公の貴族院議長振は人

の感歎する所て、流石に二百八十藩を統率した趣がある、議長席が高くなり居るのみてなく、公の威望が一段高く見える。貴族院議長は餘り六かしい職てなく、大抵きまり切つて居るらしいが、今は從來の議長よりも重味の加つた所がある、議員が彼是いつても議長が左樣認めるとか認めぬとかいふ一言の下に鎭まつて仕舞ふ、如何にも高飛車に出て、それて事の治まつて行くのは穿つて言へば別段感服する程の事てないにせよ三百年間天下樣と仰がれた後嗣だと見ゆる丈の事はある。家達公の議長振は近頃の一の評判物て、確に威望がある、誠に堂々たるものてある、といふのは公が早く將軍の後を繼ぎ、家柄の重きを感じた處からも來て居らうが、事理を判別する能力をも備へて居るからてある。書記官長に敎へられて事を辨ずるといふ方てなく、書記官長を見ること一の三太夫に過ぎぬ、大抵の事は自ら辨じて綽々餘裕がある、何程潰し値に見積つても公は華族中有數の人物てある、公卿にも大名にも新にも其れ程のは一寸見當たらぬ。

今日華族て威重を保たうと心掛け居るものは徒に尊大に構へて人に惡感を催させる、何等國家に盡すことなく、何等社會に貢獻する事なく、唯漫りに尊大に振舞ふは何たるタワケと思はれたりする。之に反し、勉めてブラざらんとするものは、何事も氣輕てあり手輕てあり、面白可笑しく愉快に交際するが、何分品位の認め得べきのがない。中には華族的にして平民的にせんと試むるものもあるが、調和が取れなくて忽て尊大忽ち丁寧、又忽ち尊大といふが如く、如何にも不調子てある、フロックに下駄よりも釣合がとれぬ。此邊になると家達公は少しも破綻の現るゝ處がない、華族然と構へなくて自づと華族然たる處があり、平民風を粧はなくて自づと平民に一致する。華族として宜く、平民としても宜く、華族としなくても差支なく、平民としなくとも差支ない、一己の紳士たる丈の資格を全うして居る、是程善く出來た人物は珍しからう。弟の達孝伯は容貌の肖て居る丈他の點も肖て居らうか、次の弟は容貌は違つて居り、他の點は如何てあらうか、德川

第一世の下膨れの肖像は廣くは傳つて居るが、家達公は德川式の面相として爭はれぬものがある。兎に角德川の總本家を引受けて恥かしからぬと看做すべきである。

が貴族院議長として適任であるにしても、是丈で終るべきであるか如何であるかは疑問たるを免れぬ。德川内閣は往々人の想ひ及ぶ所である、家達公は威望も有り、才幹も有り、首相たるに堪へさうであるが、堪ふるならば時機到來と共に内閣を組織するが善いか、又は辭退するが善いか。内閣を組織し得ても如何なる内閣も永く續き得べきでなく、相應に困難あり、相應に反對を受けねばならぬ、そして早晩交迭するの已むを得ぬのである、德川内閣が反對を受けて倒れねばならぬ事となると德川家の信望に累を及ぼす事はなからうか。勢、政黨との關係を免れぬ、其間に少からぬ面倒がある、薩長が權力を專にして來たが爲、德川家は昔に比べて同情を寄せらるるが、若し德川家て權を振ふとなれば多數の團結して之を倒すに勉めぬとも限らぬ、折角信望の回復した德川家も是より後伸ぶることが出來なくなるも知れぬ。が政治の事は一身一家の爲に考ふべきでなく、君の爲に、國の爲に、職分を盡すべきであつて、爲すべきを爲せばそれて足る、反對を受くるが如きは何の憂ふるを要せぬ、といふ了簡て或る期間國政に當るとあらば立派なことゝ謂はねばならぬ。が實際危險と感じたら避ける方が宜いと思ふものも少くなからう。

三百年間天下を保ち、其間婚姻政略到らざる所なかつたが爲、血族の續き居る處は頗る廣い、德川を名乘り松平を名乘る丈でも隨分多い、此等か結合したなら大なる勢力を形づくるべきであるが、維新前後の勢に徹すれば其勢力は意外に少かつた、今日ても德川一門が結合して事に當るといふは殆んど望み得られぬ、祖先の祭をするといふ位の事ならば何てもないが、政治上に爲すことあらうとするは殆ど有り得べからざる姿てある。且つ結合して事に當らうと勉めないので他より忌まれず、憎まれず、次第に同情を寄せらるゝ機に

なつた所もある、此邊一得一失を免れぬ、見やうにて色々と違ふ。しかし假りに結合して運動せうとしても德川一門は左程鞏固のものでない、各自安全な圖つて相互に救ふの念に乏しい、三卿の一なる淸水を救ふことが出來なかつたのは、相應に理由ある事にしても、餘り面白い事でない、それでは結合しても多寡の知れたものである。が公爵が二軒、侯伯が幾軒もあつて、それ〴〵相應の體面を保つて居るのは、自らの安全を圖るに勉めたに因るので、今少し力を他に分つたならば今日の樣になり得なかつたかも測られぬ。

が家達公は總本家でも德川諸家松平諸家を統率するのは六かしい、統率しやうとも思はぬであらう、斯樣な事を愚劣だとも考へるであらう、實に今更左樣な事を考へても何にもならぬ。今は家族的の保存すべきであつても、何程か個人的になつて居る處がある、德川一門宗家に從ふよりも各の安全を圖るに傾いて居る、若し家達公にして大政に當るが如き事あれば、同僚下僚は別に定まるべく、德川家の中には贊成せぬものもあらう、親類を以て權力を得之を維持するは最早や過去に屬して居る、德川一門は大なるにせよ其邊に多く言ふべき事はない。併し家達公は十五代將軍の後を受けて總本家たる丈の重望は確かである。貴族院議長は衆議院議長とは違つて居るから、永く此職に居り後世に殘る程の慣例を作ればそれも一廉の仕事である。が家達公は未だ老年でない、議長以下更に大に爲すべきことはないか、疑問は依然として殘つて居る。

△家達公の性行

男爵　阪谷芳郎

家達公は實に能く御身分を重んじて御勉めになる方です、現在貴族院議長でおいての外、種々公益の事に御勉めになり現に慈惠會長を御勤めです、慈惠會は皇后陛下が宮中に在らせられて貧民の上を思ひ、如何にして彼等の憂苦を除くべきかと御焦慮遊ばされた、其御仁意より生れ出たもので、現に其事業として慈惠醫

院なるものが出來て居る、私なども其顧問の一人に擧げられて、資金の募集とか何とかいふ事に多少手傳つて來ても居ますが、公は其會長として仲々能く骨を折らるゝ、先年日露戰爭の當時、國庫債券の募集に華族中最も率先して應ぜられたのも公である、實に左樣いふ樣な時に當つて公は能く國家の爲に御勉めになる、其他外交の上にも意を用ひ、毎年折々各國の大使公使等を招いて交情を溫められ、其際朝野の重立つ人々をも共に招かれる、斯樣な事は我國に於て他に公程に勉める人はありません、誠に感心な事です。

それで御身のまはりといふと大相御質素に遊ばさるゝ、御召物でも御粗末なもの、千駄ケ谷の御屋敷へ行つて見ましても、廣いには大相廣くもありますけれど只それ丈で格別何等の御手入れもなく至つて御質素なものです。勿論御維新の時は御不幸な、事の行違て、慶喜公は恭順を表し御謹愼となつたのですけれども、遂に八百萬石の領地が、俄に駿遠參の内七十萬石に減ぜられましたから、隨分御手元御困難の御事情も有つたでせうが、兎に角勵精質素を御守りになり一門の敎育に力を盡し立派に御家門を御維持になつて居るとは感歎の外はありません。それに至つて平民的にあらせられて、平常は御子樣方御姬樣方と御一所に市中を電車で御出掛けになります、勿論御馬車等の御備はあつて、宮中へ御參内の時になど御召になるのはなるのですけれど。

議會に臨ませられても議場の整理は御立派なものですが、それといふのも一毫の私を許さず、嚴正に公平を御守りになるからで、政府の內情議院內の黨派の內情等を一々御存知ない事はないのだが、正義の前には他の何者の存在をも許さんといふ堅い信念から御處理になるから、何人と雖も公を動かす事は出來ない、甚首相が懇願に行かうと他の議院內の首領株が行かうと國家の公事に於ては公は又一點の情誼を許されない。それも只譯もなしに正義一點張りだと困る節も有るけれども、公は左樣ではない、能く胸中に理解しては御出てになる、それ故其訴ふる所を聞かれて成る程國家

の爲重要な事吃緊な事だと思召すと、表には情誼的要請は凡て御容れにならぬが、何時の間にか無理の無い樣に、然るべき場合に於て都合能くリードして御出てになる、即ち議事の順序などいふ樣なものに於てもそれ丈の事をなさる。その嚴正な點に於ては、書記官でも何でも恐れて居る、十時開會の時間となればキチンと十時に出席になる。

御學問は如何いふものを御專攻になつたか知りませんが、何しろ彼樣な始末で御維新後は一寸內地に御用がないものだから長い間英佛兩國に御留學になつて居ました、それ故佛英等の語學には御達してある。今度の御渡歐は只の御觀光でせう、それに倫敦には御令息家正さんが御出になつて居り、特に新婚の事でも御在りなのですから尙更御出てになつた事と思ひます、家正さんも誠に能く御出來になり、學習院から大學迄始終優等で押通し、大學卒業の際には慶喜公の世子慶久さんと共に、二人とも恩賜の銀時計を得られはせぬかと言はれた程の御成績でした。公の御家庭の嚴重な事といつたら實に驚歎の外はありません、御子樣方は凡て他に御住になつて其處で御敎育になり、家正さんの如きは大學卒業の時迄は一度も父君の處に御泊りにおなりの事はなかつたといひます。公の慶喜公に對せらる、御扱ひなども誠に行届いたものです。慶喜公と家達公とは眞の御父子ではない、維新の際に龜之助樣と稱せられて傍から入つて御家を御繼ぎになつたのだが偶ま或る宴會等で兩公御一座になる事がある際見て居ますと、其萬事に御心添えになつて鄭重を極めさせられ、御間柄の御睦いことは實際の御父子と見奉る外ない程であります。實に日本貴族の標本皇室の藩屛と申すべきは此御方でありましよう。（談話校閱濟）

△家達公

男爵　澁澤榮一

公は私の敬服して居ります一人です、貴公子であつて而かも事務の才があり、現に貴族院議長として其職

を盡さるゝに聊か恥づる所なく十分其責任を果さるゝ丈の才識を御持てあります。

御家庭も誠に美しい、公は人と爲り穩健で別けても公平である、私は特に慶喜公の御懇命を受け別して昵近して居るので、其關係から家達公にも親しくなり慶久御目にかゝるのですが、從來慶喜公に對しての御扱などは實に御懇切なもので、傍から見て有りたいと望むほどの限りは遺憾なく爲さつて御出てになります、少しも申分がありません。

獨り御家庭の細事のみではありません、誠に公事にも諄々と能く御盡しなさる、即ち公は何れの方面にも凡て宜しい方と思はれます。

どうか此上には、公は尚ほ春秋に富ませらるゝ事でもあり、一層御學問に御精勵遊ばして完全に益々大知識を御注入になり、今一層大人物と御成りになることとを希望します。

曾て歐羅巴へ御出てになる時に、日本倶樂部で公の爲に宴を開きましたが、其席上で私は送別の辭を申述べました、其中に公を宋代の韓魏公に比して御話し、益々其器を御大成遊ばして國家の柱石と爲らせらるゝことを希望して置きましたが、私は實に公を韓魏公と思ひます、歐陽修の晝錦堂の記に委しく書いてあります。即ち官に仕へて將相に至り、富貴にして故鄉に歸るは、人情の常で、昔も今も同じい所だ、志を得なくて微賤に居る時は庸人孺子皆之を輕侮する、それで蘇秦は其嫂に斥けられた、朱買臣は其妻にさへ嫌はれた、が一旦功成り名遂げ、高車駟馬前を導いて進み騎卒後を擁するとなると、前の庸夫愚婦は俄に驚いて奔走し、自ら車塵馬足の間に罪を悔ゆるに至る、今昔の變化の斯樣に急激な處が即ち士の意氣の甚だ盛な處であるから古人は之を以て衣錦の榮に比べたものだ、が惟大丞相衞國公は然らずて、名門に生れて初から立派な處に育ち、早く高科に上り顯官にも任じた人、他人の榮とする處は公に取つては少しも榮てない。故に能く將相に出入し王家に勤勞し、夷險節を一にし大事に臨み大議を決するに至つて、紳を垂れ笏を正うし、聲氣を動か

さず、そして天下を泰山の安きに措く、社稷の臣と謂つべしといはれたが。是が即ち直に移して我家達公を評する話として宜いと思ひます。公は生れ乍らにして華冑貴公子である、如何しても韓魏公であります。

只遺憾と思ひますのは、公も其一人であるが今日の華族の方々は多く世間の事に身を入れられぬ事であります。それが名譽ある皇室の藩屏かは知らぬが少しく慊らなく思ひます。社交の事でも凡ての世間の事に、如何も名族の方々の力といふものが現はれて居らぬ樣です、私は一般名族の此失に顧みて公の今後はどうか率先して此方面に、即ち廣く社會民人の爲に御盡しになる事を希望します。公は私どもが斯樣々希望を述べ得る程に實に有望な方であります。

△志甚だ小ならず

中村彌六

公の批評は困難だ、私は公には接近して居ない、のみならず公は西園寺侯などと違ひ、まだ舞臺に上つて居ない。世間の表に立つて人の耳目に映ずるといふ位置でない。西園寺侯なら兎や角言つても市場の品物てすが家達公はただ畠の品物ですからね。西園寺侯が魚河岸の魚なら家達公は生け簀の魚といつても宜い、まだ海のものとも山のものとも判然せぬ。

が私は公は以て志甚だ小ならすと見る。其品行嚴正なる上に於て、其衞生を重んじ體力の强健を圖らるゝ上に於て、其他有らゆる點に於て靜に觀察すると、公はだまつてヂッとして居られるけれども、公の胸中には何者かを心掛けて居らるゝ、志や甚だ凡ならずと睨んで居る。公は今や春秋に富んて居らるゝ、多分未來の總理大臣を夢みて居らるゝ事と思ふ。

今の政界の多くの頭顱を見渡して、さて十年の後を想ふと如何であろう。能く總理の器をもつ者があろうか私には見當らぬ、今は軍人が勢力を得て居る、武斷派が優を內閣に稱して居る。けれども此サーベルの光が何時迄續くでせうか、サーベルは日清戰爭から光り出

し、日露戰爭で磨ぎを掛けられて今日に至つて居るが此上又何處かと戰爭でもなければ次第に鏽が來るに相違ない。其光は決して長くはない。いや最早や此頃では餘程鏽が着いて來た、今度の軍人恩給法案がそれてないか、あれが今より二三年前だつたら殆んど無難に議會を通つたに相違ないが、今日では彼の通りの修正を見たではないか。我輩はサーベルの長く光ることを望まず、又遠からず其全く光らぬ時代が來ると思ふ、武斷派に代つて文勳ある者が大政補弼の衝に當ると思ふ。さあ其時に當つて果して誰があらうか、見渡す所家達公を置いて決して外にはなからうと思ふ。

私は武斷派政治をよくない、之に代るに文治派を以てすべしだと思ひ、幾年來左樣いふ人物を物色して來たが、僅に之を故近衞公に得た。て公に接近し公にも信用を得て、互に胸臆を披瀝し合つたのだが不幸にして夭折された、爾來之に代るべき人を誰かと思つて來て居るが、今は只德川公が其人てないかと考へる。近衞公と家達公とは其力量才幹に於て相去る處あるものではあるまい、其生い立ち境遇に於て、前者は偃蹇姿態を作す磯邊の松と現はれ、後者は素直に只摩天の勢ある谷間の松と現はれた丈、松の松たる事に於ては變りはなからう。近衞公は貧乏公卿の家に生れて身邊に制肘なく、輕く身を振舞ひ得る便利あるに反し、家達公は三百年積威の將軍家に人と爲つて、世間とは隔てられて深宮に長じた人、自ら身を重く處せなければならぬ境遇となつて居る。二公若し地を換へたならばどちらも同樣の事にならう。だから家達公にも亦故近衞公の如き花やかな活動の素質だけはあると見る。

公が時折の外出に御濠の松を見られ、或は參内の折に皇城を仰がるゝ時の感觸は、自ら一般人の感觸とは違うものがあらうと思ふ。御濠の松に昔を忍ぶ風の通ひ、皇城の棟に心有りげの旭光の輝くを見ては、其の胸底に人知れぬ父祖三百年間經營の事業の跡を回想する感慨があろうと思ふ。是は公に於て感情のある限り免れぬ事だ。そして不言の間に十六代將軍の形式は撤せられても實際に於て能く將軍同樣の大任に膺り、家

門の名譽を辱しめぬ丈の奉公をして見たいと望まるゝてあらう。

公が彼の德望才識を以て內閣の首班に就かれたなら乾度能く統一が保てゝ行け樣と思つて居る、何と言つても積習の然らしむる所、德川家の三百年間扶植して來た恩威の餘光はまだ今の日本人の頭から拔けては居ぬ、現に日本橋が一つ出來たとて、其柱の題字には慶喜公の揮毫を請ひ、渡初には家達公を煩はすといふ心理は如何なる感情から來て居るか。凡てを解釋し得て餘りある、私は之を惡い事とは思はぬ、其處に我國民性の美はしさがある樣に思ふ。前將軍慶喜公は國步艱難の時運に際會して一橋家より選ばれて將軍家に入つた人、其才識は甚だ超邁なものがあつたのだが、時利あらず遂に大政を離れて身を蕭散の地に置かるゝ事となつた、て餘儀なく天與の才力を有らぬ琴、三昧線、茶、花の末技に向け、其方に於て殆んど百不能の者無しといはれて居らるゝが、家達公にも等しく其才能は具有し乍ら少しも左樣な末技に心を傾けず、謹嚴方直に身を持し、運動を勉めて體力の强健を謀り、又好んで識者に交らるゝ、更に最近に於て歐洲を漫遊し、觀光に事寄せて新知識を吸收せらるゝなど、如何見ても其胸中に何者か大に期する所がなくては叶はぬ。其志や決して凡ならずと見る、又我輩は衷心よりして左樣ありたいと期待する、左樣でなくて何等の抱負もなく今より十年の後も倘ほ埋沒して居らるゝならば我輩の思ふた程でない人物なので慊らぬ。

△完き人

尾崎行雄

富貴の家に生れ、雨風のうき目も知らずに、婦人の手に育てられたものは、眞に不幸な人である。世の貴公子を思ふ毎に、私の胸に浮べる判斷は、これまで、かうてあつた。

かゝる浮世をへだてたやうな社會に生育しては天質が如何に立派な人物であらうとも、決してよく發育

する事は出來ぬ」、から考へて居つた。從つてかゝる人々に對しては常に、その人々の官爵位階等に對し、唯形式的な敬意をしか表する氣になれなかつた。どうも心服といふ文字は、此場合、とても用ゐ得るものではないと思つてゐた。これは私が年來の永い情癖であつた。

然るに、此の永く而も固かつた情癖は、偶然にも、今ま話題に上つてゐる家達公に接するに及んて、その中に幾多の誤を含んてゐる事を發見した。少くとも、彼の家達公は此の概念からは、全く除外さるべき人てあると思ふやうになつた。此の概念は、原則としては誤りてはなからうけれど、その中にある除外を有して居ると思ふやうになつた。

多くの中には、尙聰明にして公正濶達、而も道德堅固てあつて、よく知識上道義上諸般の性格を具へて行く事の出來る人もあるものである事を知つた。

試に貴族院議長としての家達公を見よ、公があらゆる問題に對して判斷を下す事の迅速にして而も公平に且つ一たび判斷を下す以上は之を守るの堅き、備さに良議長たるの性格を發揮して居る、歷代の議長の數は多いが、凡ての點を平均して見ると、恐らくは家達公の右に出づるものは一人もなからうと思ふ。

伊藤公、西園寺侯、近衞公、次に今の德川家達公等吾國上院の議長は何れも立派な人々てあるが、他の點に於ては兎に角、議長としては、現下の公を凌ぐ者がなかつた。吾々傍觀者はかく觀察し、かく信じてゐるのてある。

公には私心といふものが少しも見えない。公平――極めて公平てある。そして、貴公子社會にはまゝ見受ける軟弱の風を見る事が出來ない。剛直てある。公平にして而して剛直だ。甚しい沒分曉漢にあらざる何人もが、之に心服するのは、その處てある。

公には少しも偏した態度がない。正しき判斷は、その中核に牢固として拔くべからざる礎を保つてゐるのてある。

貴族院三百有餘の富貴顯榮及び有識者の中にあつて嶄然頭角を現はし聲色を動かさずして之を統率し行く

有様を見れば、たゞ敬服の外はないのである。

翻つて公宴私會の席上に於ける公を見るに、之れはまた平明淸淡を極めたもので、中に自ら春風の駘蕩たるを感ぜしめる。高級の人にも低級の人にも、老ひたるにも稚きにも、向はるゝ態度は常に一様である。人をして窮屈とか遠慮とかの感じを起さしむる事が、全くない、その態度は、從つて、對者の何人をもその心から引著せしめられずにおかぬ。

内外の交際社會多士の中にあつて、公は何れの方面にも、何等遜色のなきのみか、却つて秀拔して見られるのである。何人に接する場合にも、又は如何なる場所に於ても、公は何等の補助をも要せず、立派な主人公として切りまわされる。であるから、公が主人公を勤められる時、その補助者は、補助者たる資格を缺いて居るやうに見えるのである。又は客となつて他に臨む時は、いつもその席上の花となつて、身邊溫かい春香を漲らすといふ有様である。

これ等の技倆は抑も公の遺傳であらうか、又は教育の結果であらうか、それは今分明すべき事柄ではないが、兎に角、吾國では一寸類のない人物である。

元來、富貴に生れついた者の多くは、身に一種の威嚴を備ふると同時に、人をして近き難い感を起させるものであるが、是れは主に東洋の話であつて、歐洲の富貴な家に生れたものは、極めて溫容和氣に充滿して居る。

家達公が丁度さういつた人である。思ふに之は、公が年少の頃から久しく、英吉利に留學して、その長所を得た上に、生得の遺傳がその素地をなして居るからであらう乎。

公の學識——不幸にして私は之を知らないが、諸般の事柄に對し裁決極めて公正にして、而も常にその當を得てゐるのは、學識といふよりも、寧ろ、公が常識の圓滿に發達した人であるからで、如何なる局に遭遇する時も、その責任を誤る事がない所以であらう乎。

英國人が最も重大視する常識を、私は珍らしくも完全に公の腦中に發見するものである。

その器度の大にして廣く且つ深き、とは夙に衆人の公に認むる處であるが、かの衆議沸騰の際にも、泰然之を處理するの技倆に至つては、更に之に強く固き勇氣を加ふるものであらう。

衆議院の傍聽席に注意を拂ふものは、議事の少しく重要なる時、必づこゝに公の風貌を見るであらう。重大の議事なき時でも隙さへあれば常にこゝに臨み、深い興味を以て、素朴なる代表者の民論に耳を傾けらるゝやうである。

公は又健全なる體軀と強き精力を有して居る。人間としては先づ、何れの方面から見ても、缺點の指摘すべきものがない。

その相貌に見はるゝが如く、公の人格は、福德圓滿なものであると、私は觀察して居ります。餘り譽め過ぎるようだが、まだ惡く云ふべき點を見出さないから仕方がない、譽めるばかりては人物評にはなるまい。

△貴族院議長

伯爵 大木遠吉

私が公に近くの機を得たのは、當選後僅かに三年餘てある。つまり私は單に議長としての公を見た。赤裸々なる個人としての公に接する事がない。私の議長に於ける眼界は極めて狹いのである。

議長としての德川家達公——之に就て一應の見解を述べて見やう。

元來議長の職分は、議場の整理である。自ら議を提げて衆に臨むのではない。衆説を公平に聽取して、之等を整理するのである。眼中に個人を存せず、その意嚮を正しく徹する。何人の議をも徹底せしむるが本分である。

此の本分の解釋にして誤まらずんば、今日、公の採つて居らるゝ態度は、實に理想的議長の態度である。

已往に於ても、蜂須賀、伊藤、近衞等知名の議長は少くなかつた。が、その本分に副ふの正しきに於て、私

は今日の公を以て白眉となすに躊躇せぬ。
此の見解は要するに、私が理想とする議長と、現實の徳川議長とがよく相合致せるが爲めてあらう。
勿論、公にしても、如何にしてその職分を完うせんかといふ事には、尋常ならざる工夫を積まれ議長としての修養に努められて居る事てあらう。此の理想に向つて修養するの努力は誰しも一應は抱くものであるがさて之を實行する日になると頗る難事になる。私が之を自身にたとへて考へても、直ちにその困難なる事を感ぜざるを得ない。是れその修養力が、必ず結論に副はざるべからずといふ意志の強固なるを要するからてある。
それを公は著々として實行して居られる。先づ私はその人格の強固なるに敬虔の意を表せざるを得ない。世或は、公は征夷大將軍の後裔なるが故にその職を完うする事が出來るとか、或はかゝる名門の出たるが故に、虚名におそれて强ひても之に服するのだとかいふ人もあるが、私は眼中大將軍なく、將又、公爵なき事を揚言する。私の公に敬慕措かざるはその行爲の敬ふべきが故のみてある。
公の人格のかゝるは一にその天分であるが、又その深大なる修養が與つて甚だ力あるのである。多年の特殊なる經驗と公平無私なる天分、而して一意その職を完うせんとする美しい誠意――此の誠意を、公は生れながらにして待つて居られると思ふ。
誠意といふものは、由來順境に生れた人には珍しくない。がたゞ誠意ばかりて人物の價値は附けられるものてはない。此の誠意から胚胎した勇氣がなくてはならぬのだが、公には又これがある。
さまざまに曲折して湧く人間の情念を、公はその堅實なる意志を以て絕ち、常に本體の誠意から生ずる結論に伴はん事に力める。斯様な態度はたゞ非常に勇猛心の豐富な人にのみ求められるのであると自分は確信する。
公の修養が半はその天分に關する事勿論であるが、公が讀書力の豐富なる事、數度の遊學に親しく西歐の

先進國に見聞を深めたる事、今日に於ても尙、機會を待つて千里を遠しとせぬ事、その原因はかゝる各方面に認める事が出來る。或は諸國の議會に臨み、或はさま〲の政士に面して、常に如何にしてその職を完うし、態度の公平なるを得るかに、參考せらるゝが故に表はるゝ處は文明的、立憲的、而して組織的な議長となるのである。公は此點に於て、實に理想的の人物てある。國家も亦、かゝる人物を上院に得た事を幸福と思はねばならぬ。

名門或はその他の歷史的因襲よりする尊敬――それと私の心持とは、自覺の上に於て全く別種である事を知つて貰ひたい。

家康は一時の雄てこそあつたれ、忌憚なくいへば、實は理想の人てはない、故に三百年後にまでもその德を謳歌して、末葉にまでも之を及ぼさしめるといふ程の人てはない、代々の將軍中家光、吉宗位は稍見るべき點があるが、その餘は見るに足らぬ。唾棄すべき人物も少くない。歷史的崇拜の念慮は私には微塵もないのである。私は唯、單に一個人としての家達公に深く敬服するものである。

由來、公的の半面には、如何なる人物といへども、そこに距りのある表裏を存するものである。所謂錦の裏だ、ところが不思議にも、此の錦(家達公)の表裏は一だ。世にある裏面の複雜は、こゝには表と變らぬ赫々たる光輝を持つて居る。

一夕の食を共にして、時に煖爐を圍むの機會も、その一擧一動及談話の點々に就て見るも、表面の議長たる態度が、その公的生涯と殆ど一致して居る。茲に私は益々敬服の度を深めたのである。

世間からも、家庭の良主人と許せられて居るやうだが、是も充分に首肯される。

趣味といふものゝ上から公を見ると、私はたゞ意外の感に打たれる計りである。あのいゝ體格で――その趣味の淸新高尙、超凡脫俗なのには、驚かれる。此の點に於ては、公と私とは全く一致しない。

公は又、他人に對して、露骨な干渉をした事がない。

儀容を正して進んで人を威壓せんとするやうな處は毫厘もない。無論常軌を逸した忠告などはせぬ。而も公が感化力の偉大なるは誰しも認むる處である。思ふに、此の感化の力は、かの不動の誠意から出て來る。單に節制を人に強ふる朱子學のやうな、徒らに制慾を強ふる人もあるが、之は何等の力もないのである。之に反して、公は生得が制慾的に出來てゐる。であるから、人に向つても別に制慾を說くてもないし、又之を咎める事をもせぬ。一度その人に接すると、暖々たる春風の駘蕩たる之に狎るべきが如くして、而も毅然として、秋霜烈日の侵すべからざるものがあつて、無言の中に俗情は一掃されるやうに思はれるのである。是れ正に偉大なる人格の感化力である。

奈何して、この門にかゝる人傑が出たのであらうか。それは全くわからない。一時の桀臣たる內閣の諸侯、その數は多いが。私にとつては只、彼も人我も人といふだけのものである。到底、公に近い人をすら發見する事が出來ぬ。それ等の中に在つて、公は殆ど一個の素朴なる田舍漢である。而もその權威に到つては、恐らく比儔するものがない。

自分が若し議長の席に居る場合には、極めて公平に行はねばならぬと思ひながら。行ひ得ざること確實なりと思ふに拘はらず、現に之を行へる者がある。私が深い敬虔の念に打たれるといふのも、不思議である、奇蹟であるといふのもつまりは其處である。

以上は言はゞ概說であつて、末節には勿論、さまざまな無邪氣な失敗もある。が、感服に堪へないのは、公は、自己の失策を自覺すると同時に、直ちに、その誤を正さるゝので、その間何等の執著をも胸中に存して居らぬ。天分の美德が致すところであらう。

願はくは、永く日本の上院をして此の良議長を失はしめざらんが爲め、切に公の健全を祈る次第である。

以上は、短い月日の間に得た私の見聞に過ぎないので、九牛の一毛をも盡さぬ事と考へるが、唯、その大本に於ては、決して誤らぬと自ら信ずるのである。

△現在は未知數なり

池邊吉太郎

貴族院議長として公は立派な方の樣だ、一體德川家代々の將軍にどれ丈の人物があるかしらん。先祖の家康から第三代家光迄は偉らい人だつた。が二代の秀忠は人物の宜い迄て稍劣る、家光も家康よりは劣つてると思ふ。八代の吉宗は偉らい人だつた。外には名將軍はない、ないんだらうと思ふ、德川の歷史は何度調べても分らぬが、而かも一番分らぬのが是だ、正しい事は一寸も知れぬ、そして實か嘘か分らぬ講釋師の能くやる樣な事だけが殘つて居る。事實はすつかり塗り隱してある、是が幕政の方針だつたんだらう。色々な事が書いてあつても何將軍が如何といふ事は薩張り言つてない。家茂、家治といふ樣な話になると幾らか分つて來るが其前は薩張り分らぬ、是は將軍ばかりでない、大老、老中のあたりが矢張り分らぬ、德川三百年間に如何樣な人物が居つて如何樣な事をしたのか、漸く最近の處で松平越前守、阿部伊勢守、井伊掃部頭などが幾らか分るけれども他は分らぬ、或は皆平凡であつたかも知れぬ、が今まだ其子孫達が居られるから勝手な事は言へぬ、將軍樣にも偉いものはなかつたか知れぬ、それに比較して如何といふ事は失敬だけれど如何だらうかと思ふて居る。

彼の方が貴族中の長者であるし、又まだ春秋にも富んで居らるゝから、是から如何いふ事を爲さるか、今後只謹んで拜見しませう、是迄は色々遠慮の事もあつたでせうが、今は活動の時期に達したとおもふ、勝さんの丈夫な時には頻に德川家に勸めて動かぬ樣に〳〵にとして居た相だ、慶喜公も時の場合で一旦朝敵に立たれたが、自身では恭順の意を表し、其後自分で幽閉同樣にして長らく靜岡に隱居して居られた。此樣の事情から勝さんの左樣いふのも尤もな事だ、それで一門を一切動かせぬ事になつて居た。今の家達公も其檢束を大分受けて居られたんだらう。其習慣かも知れぬ、現在は何も言はれぬ。又言ふ必要もない、併し遠慮の

時期は既に過ぎ去つて居るから少しは言はれても宜い扨て如何樣な事を言ふたりしたりされるか知らん。愈よ時機が來て如何いふ事を言はれるか、私には今分見當が附かぬ。位に居つてやられたら適れ名將軍かも知れぬといふ位の處だ。是から偉らい事をするのかも知れぬ。先以て公は現在では未知數だ。

△紀州系統の公

舊臣某

元の御主君てはありますが、麻布（頼倫侯）や芝（達孝伯）の御屋敷の樣に度々伺ふ譯てはありませんから委しく御話する事は出來ません、左樣です、御讀書といつてもホンの實用の外には何を凝つて御讀みになるといふ事も伺ひませぬ、書も御下手てはないが、是も御實用丈の事と拜見しますし、銃獵の茶のといふ別段これといふ御趣味もない樣に存じます、只角觝丈は大の御好き、晴天十日の打上げ迄は用さへなければ大抵廻向院へ御出てになるのです、といつても秋元子若くは板垣伯程に、誰を贔負と御騒ぎになる事はありませぬ、議會では議場の整理に於て何人も知る如く介聞あらせられますが、是は幾百年來積威の然らしむる處が與つて力ある事と思ひます、御通りになる時には皆が恭敬して肯て座を立つのは只公御一人の相てすからね、とはいへ積威のみて行くものではありません、それに伴ふ御識量がなくてはならぬ事です。

公の御容貌は如何しても紀州系てす、德川御一族には自ら分明に看取される二系統がありますが、其一の紀州系は皆あゝ言つた樣な肉のふつくりかゝつた、色ざしの稍黒みを帶びた御顔、何となく威重が加はつて見えます。公には他の諸公侯伯等に見るべからざる威重が備はつて居ります、矢張り萬人の上に臨む將軍といふ貫目があります。左樣、之を代々の將軍と比べたら初代家康の略はなく、三代家光の覇氣はなく、先づ溫厚な二代將軍てせうね、六代將軍即ち享保の吉宗ほどの手腕も御有りてありますまい。餘程の手腕てなけ

れば彼の享保の改革は出來ませんからね、然し之を二代秀忠と見奉つたものの、あれよりはも一層大きい御人物てせう、即ち代々の將軍中では立派な名君てありませう。

他の一系統といふのは水戸系てす、此方は丸て違う前者頼信公の系統を多血膽汁質と見るならば、此方、頼房公の系統は純然たる神經質てあります、顏、面長にして瘠せて居るのが其特有てすが、黄門光圀卿ても今の慶喜公ても皆左樣いふ型てあります。不思議な事には紀州系統の人々の概して趣味に乏しく從つて無藝を免れないのに比して此水戸系は全く趣味の人、從つて又多藝の人てす。慶喜公の如きも往くとして可ならざるなしといふ有樣、何一つ御出來にならぬものはありませぬ、書は初は戸川播摩守に學ばれ、後には師倘する所を改め、支那風を狙つて居られる樣てすが餘程の御上手、油繪ゟ餘程早くからの御執心、寫眞も御寫しになる、銃獵も御好みて御上手てあります、又特に網打ちに御堪能てす、御幼少の御時分から如何なる末技にもあれ、學んだからには其精を極めなければ止めぬといふ御氣質の事とて何事にも尋常ならぬ御熱心がある未だ靜岡に御出ての時の事、小さい函やら煙草盆の類を御座敷の眞中に高く盛り上げ、投網を肘に捌いて身を輕く其上に立たせらるゝ、そして體を一捻して撒かせられて稽古を爲さつた相てすか、何しろ小さい函やら烟草盆の積み重ねものだから、一寸ても無理があれば瓦落利と崩れる、之を崩さぬ樣に網を撒き得れば、如何なる船の動搖にも堪え得て狂ひがなく網が打てるとの御思付きなので遂に能く成功され、御名人に御成りてあります。謠曲は松本金太郎を師として是れ又御上達、碁も優に初段以上の御腕前、琴、三味線と數へましたら優に御堪能なものばかりでも十指を屈するに餘ります、御學問も英語には御造詣深く、佛語も相應に御出來になり、そして漢學やら其他普通の學問も御遺りになつて居ます。和歌も御詠みになれば漢詩も御作りになります。俳句だけは遊ばされぬ樣てす。慶喜公の如きが水戸系の立派な御標本て在らせられますが、

併し人君としての貫目は斯ういつた風てない紀州系の方にある樣てす、如何も水戸系の方は才氣英發といふ事は許されますけれども、ドッシリした重み、即ち人君の德に於て聊か缺ける處があるかと思ひます、多藝には又得て缺點の伴ひ易ひもの、水戸系には兎もすると左樣いふ人が見えるのてす、烈公の如きも多藝多才と同時に亦多情多感の人、烈公の女好きは有名な話て末年には男色を迄近づけられたと申します、德川一族は隨分血筋が互に入り亂れて通つて居りますが、水戸の血の最も多いのは一つ橋、淸水の兩家てす、田安は六代吉宗から出たのだが此方には水戸の血は有りません。尾張は文化の頃に龞甲の傘を作つたなどいふ粹人も出ましたけれども、此系統は概して平凡な何等他奇なき穩かな人物のみ多く出る處てす。

達孝伯は家達公の同母弟、賴倫侯は異母弟てありますが、伯は極めて平民的な、そして事務の才幹に富ませられた方てす、現在華族會館長たる兄君の公を助けて鋭意其事務を御管掌になる外、伯爵同志會にも牛耳を取られ、又弘道會々長としても御盡力になつて居ります、御邸宅なども非常に御質素なものてす、之に比べると侯の方は餘程ハイカラの方てす、南葵文庫などの御設備なども殆んど理想的に整頓して居ります、麻布の御本邸も全く西洋建築になつて居ります、今度大磯に理想通りの御別宅を御造りになるのですが、それは彼の水戸黄門の西山莊を學び、極めて質素な建築を爲さる積りて、材は粗末な少々位節はあつても頑丈なものをと心掛け、盡く敷居無しにして室に上下の限を設けず、如何なる皂隷輿儓の屬といつても隔意なく座敷に進み得る樣にする外、更に客室をば日を受くる事多き南向きとし、從者等の溜りの室をば勉めて空氣の淸冷なるべき處に設くる計畫てあります、即ち皆平民的の用意より出るもので、廣堂に坐して歡樂に耽る身には、日向に面したとしても涼を容るゝ事は十分に出來るのだが、從者等にそれはないから切めて居室だけても涼を容れるに十分でなければならぬといふ理由なのてす、又庭園は盡く野花野草を以て風致を取るとい

ふ考です、が御本邸の方には飽く迄上下の制を撤せず、座にも各々君臣の班あらしむる樣になつて居る、即ち此處は儀式の場表向の場彼處は自由の場內所の場といふ積なのでせう。千駄ヶ谷(家達公)の御屋敷は達孝伯の處と同然又甚だ質素簡朴を極めた者なのです、御家庭は公侯伯の御三邸とも極めて純潔、誠に華冑社會の好模範、醜聲の未だ曾て外に洩れた事はありません。夫人は近衞家からの御入輿、其間に令嫡家正さんが御生れになりましたが、此方こそは正に三代將軍の俤ありとして一門に繫がる下々の者の等しく未來を瞻仰し居る事ですが、武張つた事が御好きで、學習院御在學中にも擊劍、柔術、水練等に於て尤を稱して居られ、御學才は特に拔群で帝大に入らせられても特待生を以て御通しになり、今は少壯秀才の法學士と推されて、現に外交官試補で倫敦に御出でになつて居ります、必ず未來の一大政治家でせう。德川御一門は實に家運萬歲萬々歲と稱すべきであります。

今と爲つては言つても宜いでせうが。實に近く明治の二十年頃迄は、政府は此將軍家に對して危殆を懷くことは尠小でありません、初中終銳き監視の目を注いで居たのだが、其間泰然として動かず、猜疑の端をも少しも機微に現はされなかつたのは容易な事でありません、其處に公の人物があります、上野の御廟も芝の御廟も荒廢に任せてちつとも重修の御企てもなく、他の視聽に觸れぬ樣にして御過ごしになつて來ましたのです。

△德川樣

相撲茶屋武藏屋女將

德川樣で御座いますか。私共ではもう、三代程の御贔負を戴いて居りますので、隨分と古いお馴染——と申すのも恐れ多い事で御座いますが——なので御座いますよ。妾が覺えてからだけでも、三十年からのお馴染樣ですもの。たしか、亥年でいらつしやいますから、お四十七位にはおなりでせうね。御瓦解の時分からと言ふのですから、ずツとお稚い時から、お相撲の方は御熱心で居らしつたのですね。

さあ、何と申し上ましたら、——たゞもう畏れ多く思ふばかりで御座

んす。まあ、天子樣にも續くやうな方で御座んすからね。

大概、お奧にはお見えになりますのですが、議事堂の方へお出ましの時分にはお忙しい中ですから、三時半頃からお見えになるのです。えゝ、殿方のお伴樣二三方と、本當のお忍びで御出になりまして、あのせまい二階で御不肖なさるんで御座んすよ。

お靜かな、直な方でしてねえ。別段お話のお相手に出る——元より私共なぞがお話のお相手に出られるものでも御座いませんが——それに殿樣がお見えになります時分は、丁度店も立て込みますさ中ですからね、殿樣もたゞ、その日〱に入の多少なぞをお尋ねになる位のもので御座んす。おしたくはなさらない方が多いので、たまには丼なぞでお濟ましになる位ゐな茶屋でゴタ〱遊ばすやうな事は全く有りませんのです。

煙草も御酒も召さない方ですから、御家來の方も、殿樣の前では、いづれも御遠慮申すやうで御座いますよ。

尤も、相撲茶屋といへば、これからはどうですか、今までの處では、芝居茶屋等に較べますと、ずつと質素で御座んすからね。私共にも女氣といふやうなものは御座いませんし、殿樣も、とんと御婦人御同伴などの事はお見受けしないんです。

こちらが忙しい上に、殿樣があゝしたお直な方で居らつしやるから、私共でも、お見えになる、お茶を上げる、お送りをするといふだけで御座んす。それに、以前は相撲茶屋も、こちら(本店)からお送りしたものですが、今では館前の方からですからね、餘計におかまいが出來ないのですよ。ですから、今では、どうかすると御自身に木戸札をお持ちになつて、館前にお立ちになるやうな事もあります位で御座んす。

極おだやかな、お控へ目な方で、それに、あの殿樣には、御贔負といふものが昔からありません、たゞ、御覽になればいゝといふ御氣性なのでせうね。それはもう御見巧者な事は申すまでもありますまいと思います。

ですから、御邸へも、藝人といふものは一切入りませんし、さういふ御家風ですから、私共も却つて、御邸へ御機嫌伺ひに出る事を控へますやうなわけで御座んす。

お直な、その時々で孰れにでもお出來遊ばす、靜かな殿樣だと思つて居りますが、しかし、私共にはとても、近づいて親しくお話する事も出來ないやうに、貴く思はれます。

何ですつてね、新しい日本橋の渡り初めを、お殿樣が遊ばすんですつてね。矢つ張り御先祖からの御ならはしなのでせうね。(完)

和歌

尾上柴舟選

小澤紫紘

○

やはらかき春のけはひのほの動く街上に逢ふ女めぐしき

すがれたる水仙の花ふと思ふ夜更けの灯影うすくらき室

頬にのこるうすやはらかきぬくもりにしきりに思ふ春のやさしさ

いとけなき夢を仄かに殘し來し母校の春のこひし此頃

讀みさせし本の頁にうす光る夕日にくゆる沈丁花かな

ましろなる波のかしらのひた／＼と素足にまろぶ春の渚よ

いさゝかの春の愁のなつかしさ海に來てよりいちゞるしかり

ところ／＼白く光れる大海の極よりきたる春のやは風

葉脈の日毎さやかになりまさる樹々の若葉にみてる力よ

暮れのこる野の遠近にげんげなど眼にさやかにもうつりぬるかな

逸見雨山

○

雨の日や風の音にも怖れ鳴くめしひの犬の聲のかなしさ

けたゝましく又犬が鳴く眠られぬまゝに故なくマチなどを擦る

家ごみの中に疲れてふと聞きし鷄の音のなつかしさかな

乘り捨てし滊車の蒸氣の夕月に白きを見つゝ喧噪を出づ

追はるゝまゝ昨日を今日に繋ぐべき緣(よすが)もあらぬ生を續くる

電燈にパッと花やぐ頬のあたりしばし憂は遠のきてゐぬ

やゝ芽ぐむ春の林が草におくうすき影よりかげろふの立つ

ありし日を思ひ疲れて扉に倚れば記憶の人と君成りしかな

○　飛川晶樹

ぬくもりの殘る布團にまた入りてしみじみ夜半の冬をあぢはふ

わが爲めにいくたび涙ながしけむ老いてみ頰もさびしわが母

やるせなきものうき思ひうかべたるうら若き頰ににほふ春の日

山の湯のけむりの中にきさらぎの梅ほのかにも咲きそめにけり

山かげの小さき家の夕けむりなびく林へ寢にかへる鳥

匂やかに少女の頰のうかび出づる春のゆふべのなつかしき窓

落葉樹の枝のしげみに鳥なけり春あさき日の山に昇れば

このごろの寂しさ馴れし口笛も吹かず大野の青にしたしむ

物おもふ瞼はかろく閉ぢてをり春のひかりに身をひたしつつ

○　小林落葉

亂れたる胸をかゝえて床に入りやがてしづかに昏睡に入る

雪ふれば唯いそ／＼と何故か心うれしくなりて來にける

慰まぬ心抱きて白々と月ふるまちをかへり來しかな

ほろ／＼と涙しづかに傳りぬ野末の山に眼をなぐるとき

靄しろく野の停車場の灯をつゝめり春の夜のさびしさ

ことさらにはしやぐ人にうちまじり悲しきことを忘れむとする

○　安井竹美

たんぽゝのうすき光りに疲れきて心さびしく消息をまつ

野にくればいつしか春はふけてあり風なきにとぶたんぽゝの花

やわらかに林檎の花をつゝみたるひるすぎの日のうすく濁れる

思ひ疲れ野よりかへりし指先に豌豆の葉の匂ひ

うつれり

よみしあとの心もちなど思ひつゝ長き手紙に切手をばはる

蓬など子らにまじりて摘むといふ別れし人の消息をよむ

○　神作蘆水

海そこに眼ひらくやうに花ひらく草あらむかな春しづかなり

なぎさべに人なき冬のしづけさよ陽は海の上の伊豆に落ちゆく

夜に入りてなほま白なる大浪の渚の二里をつかれきにけり

風の音をねながらきけば大浪の青黒う捲くかなしさも見ゆ

眼に入るなり春の北風の吹きあるゝ海ぞひ路の夜の松原

○　福山杜鵑花

青々と五月の海はわが眉に明るさなげてさゞめきをうつ

疲れきて閉ぢし瞼に透きてくる瓦斯なやましき夜の劇場

五月來ぬ五月はバラをふりかざしいささか悔のなしと如くに

痛ましく強き音して宇生みゆく青き光りの下のからくり

○　玉野白草

しみじみと心地好氣にも沁み透る春の日影のうれはしさかな

うら淋し浮びし中に君もありなき母もありたそがれの中

暮近き渚に立てば雪かづく君住む山の紀の國も見ゆ

うるほへる木々のあはひに青く高く夕べの空の見ゆる淋しさ

○　山村白水

落ち初めし木下少しくくれそめぬふところ手して立つ男あり

木に倚りて靜かに立たむ更け果てし月のあかりのまばら松山

木々の影からびたる葉の上にちる大人しき子と丘に連れ來し

○　眞崎白城

水仙のひとつふたつが咲きそめぬやう〳〵雪のはれし夕ぐれ

夕されば小暗き窓にくにおもふ身にさびしかり水仙の花

やるせなく歌をうたひて暮れてゆく野末の空をまたも見やりぬ

○ 外山廉三

父のなき兒と云ふ聲につきやられわりなかりける少年の日よ

○ 細井魚袋

夜ふけて消化不良の痛む胃に起されてあり淋しき心

春眞晝妻がしきたる床の上に病めるからだをうち投ぐるかな

○ 赤松星岬

いくつかの船はなれ行く河口の潮はあかく夕ばえてあり

○ 鍵屋利右衛門

日當りの小春の丘にからびたる蔓草の實のいとも悲しき

初冬の空氣乾ける高原の旅ゆく友よさびしかるべし

○ 木村禮三郎

一日のよろこびなどの身にもしむ頃となりけり春の風吹く

醉ひざめのかろき疲れにさじをとるコーヒーの味の心よき哉

○ 木暮刀水

靑き山紫の山黒き山ほのにかすめる春の野にきぬ

うすみどり湖にそふ野の上にまばらにふりぬ初春の雪

○ 山崎俊夫

あたゝかきあかの匂ひのたゞよへる湯槽を照らす靑白き瓦斯

○ 芝野花

亡き父のひとりごとなどいつしかに學び得たるがあはれなるかな

幸ひに凡夫と生れくさ〳〵のなげき苦しみ味ふを得つ

○ 松井綠水

群集の中にまじりて煙草など吸ひつゝしづに明

日を思ひぬ

○　伊藤白遙

ストオブに親しむあさのこゝろよさ君おり〳〵に口笛を吹く

たびやかた戸を閉す音の聞ゆればつくづく母の戀しうなりぬ

○　木内篁雨

あゝかくて時の過ぐるをひたに待つこの空虚(うつろ)なる生をかなしみ

○　今村和平

古(ふる)き戀古(ふる)き戀人かゝるものふと胸(むね)を過(す)ぐ冬とはなりぬ

ともすれば冷(つめ)たき涙(なんだ)流れ出づ夢醒(ゆめさ)めやすくなれるこのごろ

○　尾崎義兵

かなしみを聲やいづくへはこびゆくうたへばこゝろやゝになぐさむ

○　荷田重

春晩き夕の湯屋に二三人つと入る時のふとの淋しら

これ故に吾を詐り道も解く兄と云ふ名は呪ふべきかな

○　橋本芳生

薄蒼き空のはてより滲み來ぬなみだのごとく白き春雨

○　石塚紫園

何故かわが父母の云ひつけに背き安かる子となりしかな

○　朴堂

折々はからからとなる山中の落葉の里のなつかしきかな

若人のむれにまじりて興じつゝ年がひもなき我をあざける

○　森一雄

白毛布日向にしきて蜜柑吸ふわが靜かさを君は知らざり

灯を消して床につく時おそろしく胸にひらめく朝よりのこと

○　水野村子

けふ人に嫁ぐといふにはつきりと物いひ給ふ君あはれなり

○　落合夕空

夕やみの川の堤に立ちつくしうするゝ町のどよめきを聞く

○　二松泰河

暖房のぬくみの中に漸くに生をつなぎて鶯をきく

○　外山廉三

かにかくに十九となりぬともすればやぶれ勝なる夢を見つゝも

○　杉原紫舟

鈍りたる心を今日も携へて青き野を行く光の中に

應募和歌は東京小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

春日

高田蝶衣選

寫經稍明眸の翳を言ふ春日　木犀
拈華の語心頭に在る春日かな　同
垂訓の地とも草生す春日かな　同
峽底の浮屠開眼の春日かな　同
漁撈實習を江に泊す春日かな　波月
筆硯の閑影技愛づ春日かな　同
旅装解いて溜り仕事や春日影　同
食客の衣も糊して干す春日　同
春の日やかゝる時眞珠生れけん　唯郎
凡人の夢平々の春日かな　同
魚荷長う春日に着きて檢す役　都月
早歸りの女工春日の渡船埋む　同
我に書あり婦に結縮を春一日　浪窩
牧春日凡そ毛色に品種知る　同

骨からみとの瘡に泣く妓や春日にて　寒泉
髪洗ふ湯飛沫もよし春の日に　同
棋才ある妻に出ず在る春日かな　其蜩
關守の鳥飼ふ関や春日影　同
春の日や廂の柑皮煤黑に　蔦雨樓
足場外れの怪我手當ある春日かな　同
輪島塗師春日なぐ海に漕ぎ出て丶　狠子
春日街投げ錢に謡ふ節ぬるう　同
砥石切りし跡八疊の岩春日　鬼見愁
擣き減りをまぶる粉あり春日小屋　同
國禁の大船工む春日かな　五黄
傾國を品す儒生も春日かな　同
春日美女見送れば悲し松に倚る　百幽
賣家未だ遊び場や春日人の來る　同
里風呂に貝吹けば春日湖に沈む　摘[illegible]辰
藁火して干鱈蟲燒く庭春日　同
春の日や衣干して絲の弱り知る　水馬
春の日や太守歸國の布令をきく　繞雨
春日寸暮尙悠々の興にあり　無香子
春日や暗行御史の碑に吟ず　眠郎
箭工の談敵欲りす春日かな　行々子

湖泊そゞろに陸思出や春日影　秋圃
頌德の文辭美に失す春日かな　雨霽人
自らを售るに詭辯や春日人　石・人
春日や眼借りろ／＼と虻が鳴く　總子
病めるかに袖笠人や園春日　枯月
陣幕の家紋たゞよふ春日凪　竹二
戒僧も有頂天なる春日かな　蓮意
色石を桝て賣るなり春日島　蔕柿
歸依衆の佛事渡海を春日凪　綠星子
破門なれど春日に旅意も浮き立てり　十黄
出奔歸らず遺物整理も春日なれ　哭鬼哉
犯者泣く教化や春の日傾く　西鴉

課題　燒野山　四月十日〆切
茂　五月十日〆切

規定　△淡路假屋在釜口高田蝶衣宛
△一人三十句限△字體明瞭之事

評論

獨逸と日本

墨西哥革命は我に於て對岸火災のみ、米國の出兵も我に於て遠山の雲烟のみ、然かも其之を利用して我が聲名を損じ、信用を傷け、列國嫉視の中心點たらしめんとするものあるに至ては、對岸火視し、雲烟視するを得ざる也、

獨逸にウエルト、コレスポンデンツ社なるものあり豫ねて獨逸政府の優渥なる保護を受け、世界通信の業に從ふ、例の半官報北獨アルゲマイネ、ツアイツングと特殊の關係を有し、獨逸政府が得意とする新聞政策の中軸たり、本年二月此社は俄然奇怪の風說を傳へて天下を驚かしたり、其說に曰く近來紛々たる騷擾、中米に惹起するは、其裏面に日本あれば也、換言すればこは日米衝突の一現象に外ならず、日本天皇の政府は太平洋の支配問題につき米國との衝突避く可からざるを見、密使を墨西哥に派遣し、大統領ヂアス氏を說きて同盟條約を締結したり、其要を記すれば日墨兩國は其一方が第三國に攻擊せらるゝ場合には相援く可く、又墨國は豫て米國に許したるマグダレナ灣使用權（石炭港及海軍港として）を取消す可しと言ふに在りと、

同通信社は更に附言して曰く、是本社が最も消息に精通せる筋より知り得たる所也と、此通信諸方に流布せられて後約一箇月、米國の米墨國境出兵に際し、日墨同盟說、盛んに米國に起り、排日熱を激成し、遂に我が內田大使をして此浮說を取消さしめたるは讀者の共に知る所ならん、

何ぞ獨り之のみならん、先きに「日本は智利海岸に海軍根據地を求む」と傳へたるも、「巴奈馬運河附近の

一島嶼を買收せんとす」と報じたるも、皆是獨逸の仕業也、知らず獨逸は何が故に斯る行動に出でつゝある乎、

我國に對して怨恨ある乎、否、彼れは自國の利害より打算せる也、乞ふ其理由を示さん、

第一、獨逸は南中米に發展せんとするもの也、現に秘魯智利在留外國人中最も多數を占むるものは獨逸人也、伯剌西に於ける其勢力は今更ら喋説する迄も無し此際日本が南米發展の政針を執り來れるは其狼狽を促したるも自然のみ、されば獨逸は、日米兩國を離間し相爭はしめて、一は日本の勢力增進を防遏し、一は自ら所謂漁夫の利を得んと欲する也

第二、世界に於ける獨逸の强敵、競爭者は英國に在り、日米離間は其最も恐れつゝある英米接近を妨止し日英同盟の威力を減殺し、殊に歐州方面に於ける獨逸の覇權確立を容易にするもの也、

あゝ德に依らずして利に依るは現今の外交界の常、獨逸に執りては是或は止み難き所ならん、然かも我國民に對しては抑亦何等迷惑千萬なる厄禍ぞや、

伊太利選擧法改正難

三月十八日、伊太利ルザチ内閣辭職す、何故ぞ、曰く選擧法改革案、議會に敗れたるを以て也、

伊國選擧法改革案は恐らくは同國宿題たる上院改革案と關聯せるものならんか、然かも目下同國建國五十年祝祭に當り、此事あるは洵に遺憾と言はざるを得ず、

土耳其の政局

見來れば土耳其と淸國と何ぞ相似たる、其對外交渉の難問題輻輳せる所、其邊境に於ける政權を確立せんとする所、殆んど一也、

唯だ土耳其政府が淸國閣臣以上に惱みつゝあるもの二あり、何ぞや、邊境の住民が淸國民程從順ならず、其自治權を固持して事を干戈に訴ふること其一、軍隊の勢力隆然として、内外政に干渉し、其煩に耐え難きものあること其二、

エーメン州の叛亂、アルバニアの不穩、吾人は恐る首相ハッキ、バーシャの頭髮を半白ならしめたらんことを、況んや軍人は軍事費增加と增税とを迫りて、藏相陸相の衝突絶間なきに於てをや、

斯くの如き間に在りて、獨英以下の土耳其領亞細亞分割策進捗すとの說を聞く、誰か亦一掬の淚なきものぞ

佛國內閣更迭

二月二十七日佛國ブリアン內閣辭職し、三月二日モニイ內閣組織せらる、其顔觸は下の如し

首　相　モニー氏　外務大臣　クリユッピー氏
大藏大臣　カイヨウ氏　勞働大臣　ポンクール氏
工務遞信大臣デュモン氏　殖民大臣　メスサン氏
農務大臣　ペエン氏　文部大臣　ステェグ氏
司法大臣　ペルリェ氏　商務大臣　マスセ氏
陸軍大臣　ベルトオ氏　海軍大臣　デルカッセ氏

抑もブリアン內閣辭職の原因は、表面上社會急進黨が其對羅馬敎會處分を緩漫なりと攻擊したるに在り、然かも裏面の事實を檢し來れば、是寧ろコンベ、ブウルジョワ以下佛國政界の元老株が、ブリアン氏に元老無視の振舞あるを憤りて、壓迫を加へたりと見る可きが如し、換言すれば、ブリアン內閣の沒落は、佛國の寡頭政治が容易に改められざるを示せりと言ふ可き也。

次ぎに新內閣の勢力は如何、佛國代議院は三月六日百十四對三百〇九の多數を以て之れが信任を可決したり、此點より見れば、議會內の地盤堅固なるが如きも、デルカッセ、カイヨウ兩氏を除けは、首相始め閣員皆第二流の政治家なるを奈何。將た其政綱なるものを見るも、能く人心を惹くに足るの主張なきを奈何、過激派は政策の徒らに因循偸安を事とするを攻擊し、溫和派は其殆んど極端派に捕へられたるを嘆ず、或は恐る、モニー氏の執政も遂に不幸短命の內閣に終らんことを、

アルサス憲法の行惱

獨逸領アルサス、ローレン憲法案行惱む、何故ぞや

曰く普魯西は飽く迄之を自己の支配下に置かんが爲め、獨帝即ち普魯西國王をして自在に其知事を任免せしめんとし、之に反して他の聯邦は普魯西の勢力増加を好まず、是非知事を終身とし、アルサスを聯邦同樣の地位に引上げんとするを以て也、

而して普魯西の行爲が、四十年前佛國より割譲せしめたる兩州人民の權利と幸福とを想ふよりも、寧ろ自己の權勢を振張するに熱中せるは、流石にマキアベリ主義の特色を暴露して餘蘊なしと言ふ可き也、

獨逸婦人教育の勝利

歐信傳ふらく、一婦人伯林大學に於て始めて「獨帝の褒賞」を受くと、是獨逸婦人教育の勝利と謂ふ可し、顧みるに獨逸は常に婦人高等教育に反對せりと稱するも過言にあらず、何ぞや、大學の門は容易に之が爲めに開かれざりしを以て也、大學當局者はあらゆる特權を婦人に拒否したるを以て也、然れども時勢の流れは、同國の頑冥なる教育家も之を奈何ともする能はざりき、一九〇〇年巴丁大學始めて婦人を入れ、一九〇三―四年巴威之に傚ひ、一九〇八年普魯西之を學び、昨年メクレンブルヒ又婦人の就學を許すに至れり、而して今や此吉報を聞く、

思ふに同國の婦人教育論者は、之が爲めに一層氣焰を高むるに至らんか、

濠洲總督の功績

濠洲總督ダッドレー伯退き、デンマン男之に代る可き旨三月上旬公報あり、吾人は此報に接して、轉たダッドレー伯の人物と功績とを想起せざるを得ず、

伯や圓滿の人、心事公明の人、敢て辛辣の手腕ありと言ひ難きも、愛國の至誠は敵味方共に之を認む、是則ち其先きに統一黨内閣の下に愛蘭省の顯職に在りたるにも係らず、一九〇八年自由黨内閣が現職に推薦したる所以也、而して就職後、濠州の内政は之を保守、勞働諸黨の決する所に委し、殆んど顧省せざるが如くなりしも、唯拒む能はざるは、その英吉利本國と濠洲

との結束を深うしたることと是也、吾人を以て之を見る、總督の功績は實に之丈けにて充分なりと言はざるを得ず、伯齡正さに五十六、歸鄕の上は本國政界に貢献する所多かる可し、若しそれ後任者デンマン男に至ては、四十歲未滿のデンマン家三代主人たり、南阿戰爭に從ひ、功ありたりと言ふ外、知る所なし、徐ろに其就任後の政治を檢して、其人物を論評せんのみ、

英國海軍擴張

英國政府が三月九日を以て同國下院に提出せる豫算に依れば、總支出額は四億四千三百九十萬圓を超え、前年度に比すれば三千七百萬圓の增加を示し、過去十年間に於ける未曾有の巨額なりと、而して水兵の增加は約三千名、軍艦新造は大裝甲艦五隻、保護巡洋艦三隻、不裝甲巡洋艦一隻、驅逐艦二十隻、潜航艇六隻なりと稱せらる、是豈莫大なる擴張計畫にあらずや、宜なるかな、政府味方の自由、勞働黨員中よりさへ「海軍費膨張を遺憾とする」決議案提出せられたることや、雖然統一黨と異り平素軍費縮小を持論とする自由黨內閣をして此案を編成せしめたる對獨的關係及事情も亦全く無視す可からざるを奈何、

片々錄

△佛國技藝院文藝奬勵の爲め每年高尙なる思想に依れる小說の原稿に對し四千圓の懸賞を設くるの決議を通過す日東の自稱文明國に見難き所 △南米パラグウェイ國叛徒に聲援せる亞爾然丁船舶を放還す亦强國の威力の前には理義も屈服するの一證歟△獨逸內務卿デルブリュク氏宣言して曰く獨逸は遠からず每年五億圓を社會政策の爲め使用するに至らんと以て此新進帝國の進步を徵す可し△三月十六日陰謀的集會取締法印度立法參事會に提出せらる新總督ハルデンジ卿も亦威壓政策に出てんとするか△英國海軍の柱石たりしカースンホー總督長逝す之を惜むもの豈獨りアルビオン島民のみなりとせん。

（懷沙陰客）

國民教育と早稻田

老伯

敎育は塵溜の如し、社會に一塵起れば即ち敎育といひ一埃颺れば即ち敎育といふ。此の如くにして藤村操の尻も、出羽龜の尻も、近くは幸德秋水の尻も、盡く敎育なる一大塵溜に運び來つて投入し去る、曰く敎育を更張すべし、敎育を健全にすべし、此の如きは現代敎育の權威を失せるに因るなり、敎育家の罪なりと。而して敎育家は默々として之を甘受す。之を臭い物には蓋をする一大塵溜と稱する事の言稍々不遜ならば、正に老若男女幾萬の信徒の有らゆる祈願を受け入れ給ふ蓮花臺上の阿彌陀如來に比すべきなり。難有い哉。されど今の所謂敎育とは何ぞや。社會の認むる所は只一學校敎育それならずや。學校敎育なるものは學齡に達せる兒童より初めて靑年期に及べる迄の國民の一部分を僅に敎ゆるものならずや、尙ほ現代敎育に取り洩されたる國民の多分を殘す。未來の社會を形くるに與りて功なしとせざれど、現下の社會を廓淸するには力足らざるものあり。而かも未來の社會も爾く學校敎育のみに依賴して其理想通りに健全に造らるべしや否や。國家の權力を以てしても學校敎育を經ざるものの口と手とを一切箝制し去るを許さず、然らば即ち湯を沸かして水を注ぐの諺を此處に有力ならしむるものに非るか。學校敎育を受けたるものも軈ては學校敎育を受けざる者の渦中に放置せられて一半は其爲に呑了せられ了るとせよ。學校敎育の效力も頗る危まるべきものならずや。而して社會の一塵一埃盡く之に投入せられて始末をせよといはるゝに至つては負擔重きに過ぐ、頗る好き迷惑なるべし。敎育を言ふは可し、されど其所謂敎育なるものは今少しく廣義に見られ、廣義に見らるゝ儘に亦施設せられざる可からず。吾人は此意味に於て學校敎育の振興を望むよりも更に大に社會敎育其者に期待なからざるを得ず。昔は佛敎的信仰盛にして寺院敎育なるものも行はれ、春の彼岸秋の彼岸と

四季折々に善男善女を會して多少當時に相應せし敎化を與へたれどもそれすら末法無信の現代にては殘燈影幽かなる有樣なるに於て愈よ益々新しき社會敎育其者に期待なからざるを得ず。早稻田老伯志を政界に得ざるや、轉じて其事を敎育方面に成さんと欲し、曩に國民讀本を著し、次いて去臘國民敎育講習會を早稻田大學に開き、續いて今又靑年講習錄發刊の企ある等職として此に見る所あらずんばあらず、世に是迄講義錄なるものの發行、其種類少しとせざれど、其着眼汎く社會敎育の上に在らざるが故に講義科目も亦自ら異ならざるを得ず、或は政治經濟學、或は法律學、或は理化學、或は文學哲學、若くは中學程度の普通學等、各々其目的によつて一部に偏し、普く國民たるの要素を備へしむるの用意に成れるものはあらず、然るに大隈家の編修に成るべき講習錄は全く思を此に致せるもの、吾人の希望に最も能く吻合せるものたるを失はず、名は靑年と稱するも實は老人讀んで可なるべく中年者讀んで可なるべく、靑年亦固より讀みて可なるべく、更に商賈と農夫と工人と士流とを問はず、盡く知識を此に求めて明かに現代國民たるの遺憾なき修養を積むを得べし。伯や齡已に耳順を越ゆ、而かも元氣甚だ旺盛、此一發刊物を機關として向後地方に迄も自ら出馬講筵に長廣舌を揮ふべしと語れりとも聞く。吾人は吾人の屬望する社會敎育の爲大に老伯の老いて益健なるを喜す。而して之を機として更に一事の望むべきあり。そは全國大中小の各學校敎員をして盡く老伯の心を心とし、身は學校敎員たるに止まらず更に社會の敎員なりといふ一大確信と一大犧牲心とを起し、恰も一半は昔日の僧侶の如き感想を抱き。學校敎育の暇には四季折々の好機を捉へて一齊に國民敎育に鋭意し、學校を殿堂として有らゆる階級有らゆる年齡の國民を攝受し薫陶せん事是なり。敎育の意義と其事業と此の如くに迄擴開せられんか、初めて現下の社會廓淸の效も收めらるゝ事遠からざるべきのみ。蓮花臺上の死如來も活如來たるべきのみ。然らずして徒に僅に冬夏兩季の休暇を利用し、惡く言はゞ只中小學敎員の財布を當て込み

に地方に馳せ廻る如き中央二三の學者あるを見て滿足せんか、社會敎育の前途は遼遠なり。錢程光る阿彌陀の說法は決して流布の範圍の廣き者にあらず、吾人は錢なくして光る阿彌陀の說法を望むこと痛切なると共に、其阿彌陀たらんことを普く全國各大中小の學校敎員に期せざるを得ず。

南北朝問題決せりとなすか

輕卒なる政府者の措置は國民の道德的信念に一大ショックを與へて大問題となり、遂に小學敎科書の文字を改竄し、又當事官僚の免黜を見るに至れり、而して之を見たる國民は最早や之を以て萬事了せり、兩朝の正閏は定まれりと做す者の如し。何くんぞ知らん猛火も暴颷に逢へば猶且つ暫く下に忍びて黑煙獨り大地を匍ふ。南北朝の事亦之に類せずや。吾人は其孰れを可とし其孰れを否とするものにあらず。されど或る一部の論者の如くに、動もすれば純正史學の存在を危くして迄無暗に德敎に殉ぜしめんとするを排す。何となれば史實は史實なり、其史實に據つて誤らざる健全なる倫理的判斷を下す處に德敎は常に危殆なく保持せらるべし。而かも百步二百步を讓りて史學は德敎に殉ずべしとするも、誤られたる史實が永久に掩ひ盡くさるべくば國家の存立上是れ亦可ならむ、されど思想は奔流の水の如く、國家の大威力大權力の手を以てして塞ぎ得べきにあらず。若し其史實が幾分なりとも早晚世に現はるゝに至らんか、之と矛盾せる德敎は枯骨のみ。生命あるべからず。故に何れにせよ今日に於て凡ての論者が熱せず騷がず冷靜に眞理を求めて我國の歷史に統一的明解を與ふるの工夫を凝せ。北朝論者としては南朝論者に些の餅を設くる能はざらしむる程に論據の明白なるものあるを要するは固より、更に南朝論者としても十分に北朝論者をして一蹶復た起つ能はざる底の根本的打擊を敢てせざるべからず、然らずして何れに

ても其解釋の道に横はる躓きの石有るに於ては尋常小學の生徒は無難なるべし、高等小學の生徒は猶ほ欺くべし、而して中學の生徒に至りては遂に誣ゆべからず。誣ゆべからずんば其折角の德敎論も何の價値ぞや、德敎論の一角破れて却つて他の健全なる部分迄も疑はれ千丈の堤の蟻螻の一穴に搖々たる危殆を感ずることなしとするか。吾人は重ねていふ今は其何れにも與せざるを、只北朝論若くは對立論の虛妄無稽ならば南朝論者たるもの極力其虛妄無稽を抉出して天下の知識階級に確乎たる信念を扶植すべし、而かも之を爲すの策は三百代言の勝を其場限りに爭ふの陋を倣さず、又厲聲怒罵次ぐに洞喝の言を以てせず、互に人格を尊重して然る後に議を進め、其眞理の趨く所に歸せしめて憾まざるの道に出でんことを要請す、斯くして若し眞に是ならば各中小學敎員も安んじて歷史倫理の講座に上り、百疑千疑も生徒の質問に應じて直下に雲散せしめ得べし。形式に於て今や此問題を決定せる如きも吾人は恐るゝは暴颷下の猛火のみ、端なく又死焰再燃の警なきかを。茲に於てか之を言ふ。（以上二項紅塔生）

新刊批評

▲影と聲　春陽堂發行

自然主義派に對して一旗幟を立て居る東京朝日の夏目漱石氏一派の四人、即ち阿部次郎、小宮豊隆、安倍能成、森田草平諸氏の已に一旦世に公にした其折々の評論ものを集めたものだ。斯う一冊に纒まつて居るのは此人々の自然派に對する健闘振りや主張や就ひ知るに便り多くてよい(定價金八十錢)

▲本居宣長　村岡典嗣著　警醒社書店

着眼偏僻ならず、着論奇矯ならず、從つて全篇平淡な文字に充ちて居る丈、縦観横観して描き出された宣長の眞面目に信用が置ける。極めて着實な、そして精到な研究と思ふ。(定價金一圓五十錢)

▲南朝正統論　笹川種郎著　春陽堂發行

南北朝問題は最近に於ける尤も騒しい問題だが、著者は其南朝正統論側として最も諸新聞に奮闘した人、此に收むる「南朝史は國史の精華なり」以下五章盡く其奮闘の武器として諸新聞に出たもので、まだ〱生々しい血痕を止むる者だ、此度の爭は純正史學者と目的論者の爭ともいふべきだと思ふから、それ等の意見は評論欄に譲つて玆にはいはぬ。唯熱誠なる文字として江湖の一讀を推奬する。(實價金四十錢)

▲益軒樂訓附養生訓抄　丁未出版社發兌

月に幾百種出るか年に何千種出るか、圖書出版の盛なる明治の今日程の事は我國にはないが、而かも百年の後二百年の後となつたら如何であらう、悉々曉星の感は免れまい、何れの時代でも其當時の者となると皆まだセリ屋に掛けられたものでセリ殘しが孰れ程出るか知れない、左樣考へるとタイムの波に淘汰し殘された古書ほど信用の置けるものはない。已にセリ屋で及第した代物だからだ。が如何せん時異なれば言語風俗等に隔りが出來る爲現代人には一寸分らない所も出來る、それに又昔は多く寫本で傳へて居るから誤寫脱字も免れない、又本字を以て當てれば分る處を假名を當て或は平たい文字のあるものを故らに漢文より脱化した晦澁の文字を當てなどして、當時には通俗かも知れねど今からは頗る節縛立つて難讀なものもあるので、勢ひ讀書人には之より遠離する傾が生ずる。が古書を讀むは其古人の思想、感情に直接に面接せんと欲するのだから、之を救ふの策としては現代人に讀み易からしむるの手段を取る事である。丁未出版社の丁未文庫諸篇を見るに全く此意を體して作つたもので、當て字、假名遣ひ、送り假名、てにをは等盡く現代通用のものに改めてあり、曾々しい假名べつたりも除かれてある。之を手始めに續々古書を校訂續刊する相だが、我々は古書の爲に荊蕀の拂はれる事として大に歡迎する。古書に敬意を失するものなどといふ難有屋連は固より虫の食つた書物を見て居つて宜い、直に腦の糧にしやうとするものは別に考ふべきだ。丁未文庫の第一篇として出た本書の如きは時代も近く、又勉めて平明流暢、通俗をとのみ狙つた益軒の文だから左程の難有味も感ぜられぬか知らんが、爾後は續々更に古く更に六かしい方面に溯つて手を着けて貰ひ度い。(定價金三十錢)

▲醒睡笑　丁未出版社發兌

安樂庵策傳といふ京都の洒落僧の滑稽頓智に富んだ話の數々を書き記

したもの矢張り前の丁未文庫の第三卷として出たもの(定價金三十錢)

▲杜翁大觀　青本精一、山田藏太郎共著　隆文館發行

初に杜翁の小傳を附し次に追懷篇と稱して、センケーヰチ、ローザノフ、メンシコフといふ樣な樣々な人物の評論談やら實際談やらが豐富に收めてある、本書の特絕の價値ある所は此處に在る、佳書たるを失はぬ卷首の雪嶺博士並に蘆花氏の序文、共に逸すべからざる好文字である(定價金四十五錢)

▲和譯史記列傳上卷　田岡嶺雲譯註　玄黃社出版

史記の史書としての價値は今更言はずもがな、本書は和譯漢文叢書の第五篇として世に出たもの、例によつて其譯註、精淳なこと丈をいつて置く(定價金一圓二十錢)

▲日本樂府　大町桂月譯解　至誠堂書店

我日本の重なる史談を詩に作つた山陽外史の日本樂府は、面白いものだが、今の漢文を多く讀まぬ青年には其妙趣が分らぬ、此者は上欄に原詩下欄に和譯外に註ともいふべく桂月氏の史話小品ともいふ可きものが載つて居るから、之によつて原作の妙趣が十分に窺はれやう(正價金五十錢)

▲エマーソン論文集　戶川秋骨著　玄黃社發行

「正體の知れざるはエマーソンなり、彼は即ち預言者なり」「エマーソンは靜かなる森林の如く、深き潭淵の如し」とは、譯者がその冒頭に於て語る所である。若し日本現代の文人思想家を正體の知れるものゝみと觀じ、之に不滿を抱いてゐるものがあれば、此の論文集は少くも破夢者であつて、又辛辣なる一光明である。よく原文の調子を偲ばせる譯文は、歷史、自恃、報償、靈法、戀愛、友情、細慮、勇壯、大靈、圓環、智力、藝術の十二論に分れて、その偉大なる自信を表白してゐる。各編末の註釋は少しく譯者の老婆心が過ぎた。(金一圓四十錢)

▲春の樂座　細越夏村著　悠々書樓發行

散文詩二十一篇、就中「月」「黃昏」「斷章七篇の一」「黑い手」などとる。主としてその表白の技巧をとる。暗示又は瞑想の方面に於ては、作者は尙自適し過ぎてゐやう。作者の立つてゐる處は、作者が思つてゐるよりも、もつと暗い處なのだ。(金二十錢)

人道講話(大内青巒撰述、(定價金四十五錢)　森江本店發行

菅原傳習鑑(丁未文庫第二編定價金三十錢)　丁未出版社發兌

勇氣論(シャールワグネ原著廣田和譯述)(定價金二十五錢)　内外出版協會

次號の說苑欄には新に

我滯歐外交官の手腕

望月小太郎氏

の雄篇を收むべし、歐羅巴は列國使臣追逐の場、此間に鑣を進むる我外交官の手腕如何、近く這般の情勢に通じ來れる氏の筆明快に之を語らむ。其他好評嘖々たる

黑頭巾氏の「島の人」

も筆法の遒勁と觀察の奇警と、次回を以て正に其の頂點に達して大團圓を告ぐべく、更に之に加ふるに如何なる人の如何なる趣味の者を以てすべきか、常に新粧を以て讀者に見えつゝある本誌を信頼して可なり

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 金澤庄三郎編

辭林

四十四年版出づ

版を重ぬるに從ひ内容に改訂を加ふるは凡百の辭書中、獨り辭林あるのみ。初版以來茲に四星霜、時代の要求に副はんとを旨とせる辭林は年々歳々進歩して止まざる也。四十四年版に於ては更に多くの新熟語を加へ、發音索引・字音索引の外、別に難訓索引を附したれば、如何なる難字難語も索めて得ざるはなく、その重寶至便なること世是に匹敵するものなかるべし。而かも表裝は脊革綴マーブル附にして新意匠を凝らしたれば、内容と外觀と相俟つて眞に讀書界の逸品たらん。

三萬部限り
特價金貳圓 送料金拾六錢
定價金貳圓五拾錢

詳細見本呈上 送料貳錢

東京神田
三省堂書店
振替口座一三九七

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

池邊義象編

古事記通釋

古事記は我國最古の典籍にして我建國の由來我皇室の淵源は固より政治道德宗教教育文學美術及び法律の思想も之に依て知ることを得べし然るに其辭句難澁にして故事出典の深遠なるに依り世人往々一部專門家の研究に委ねて之を見るもの稀なり池邊先生夙に此に慨し本居平田諸先生の註釋を基礎として最も簡易なる解釋を施し以て初學の便に供したり

全一册菊判
四百五十頁
上製頗美本
定價一圓卅錢
郵稅八錢

福本日南監譯

國語日本政記

日本政記は神武天皇より後陽成天皇に至る百八世二千年間の編年史にして綱紀の弛張教化の隆替を記述して之に附するに自家の論贊を以てす賴山陽晚年の作にして死に至るも猶補訂の筆を絕たざりきと目下盛に論議せらるゝ南北朝問題の如きは已に本書に於て論定せられて餘蘊なし今原書十六卷の漢文を和譯して之に國音を附し且つ難解の辭句一々七號活字を以て細註を施したり

全一册袖珍形
六百餘頁上製
頗美本函入
定價八十錢
郵稅六錢

(中ノ二ノ三)

發兌元 東京本鄉一丁目 振替二〇五五 株式會社 啓成社

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

現代思潮界の標的

太陽

四月一日發行 第五號 正價卅錢 郵税三錢 前金十六冊一年分四圓六十八錢

■南北朝史論

久米文學博士 吉田文學博士 黒板文學博士 三浦文學博士 井上文學博士 副島法學博士 三上文學博士

◎外政の新局面　建部博士

◎我國民の公共心に就て　戸田博士

◎クロパトキン著 法律と強權を評す　平出修

◎米國好意の程度如何　川崎巳之太郎

◎植物培養上最近の進歩　三好博士

◎千里眼と馬尾蜂　小熊捍

■帝國劇場批評……諸名家

◎雪の裾野　遅塚麗水

◎重荷　江見水蔭

◎手術（小說）　德田秋聲

◎讃美歌（同）　生田葵

◎溫室（脚本）　高安月郊

懸賞脚本當選發表

口繪十八頁

東京本町 博文館

(中ノ二ノ四)

春期大附録號小説

犧牲（完結）　嶋崎藤村

鶯　上司小劍

田舍　眞山青果



犧牲（續篇）

島崎藤村

一

橋本のお種が娘お仙を連れて上京するといふ報知が、正太の家の方へ來た。半歳も考へて旅に出る人のやうに、いよ／＼お種が故郷を發つと言つて寄したのは、七月下旬に入つてからのことであつた。

「漸く、私の待つて居たやうな日が來た。番頭の幸作も養子分に引直して、今では家のもの同様である。

それに嫁まで取つて宛行つてある。私も、留守を預けて置いて、發つことが出來る。お前達は奈何いふ日を送つて居るか。お仙と二人で、そちらの噂をしない日は無い。お前達の住む東京を、お仙にも見せたい……叔父さんや叔母さん達にも逢はせたい……』といふ意味が、お種の手紙には長々と認めてあつた。

斯の母からの便りを叔父達に知らせる積りで、先づ正太は鹽瀬の店を指して出掛けやうとした。

同じ河の傍でも、三吉や直樹の住むあたりから見ると、正太の家は廐橋寄の方であつた。その位置は駒形の町に添ふて、小高い石垣の上にある。前には埋立地らしい往來がある。正太は家を出て、石段を下りた。朝日が、川の方から、家の前の石垣のところへ映つて居た。それを眺めると、母や妹の旅立姿が彼の眼に浮んだ……日頃、女は家を守るものと定めて、めつたに屋敷の外へ出たことも無いお種——左樣いふ習慣の人が、自分から思立つて上京する氣に成つたとは。正太は、あの深い屋根の下に踠き悶いて居た母の生涯を思はずに居られなかつた。

鹽瀬の店の車に乗つて用達に馳廻つた後、正太は森彦叔父の旅舎へ立寄り、それから引返して三吉叔父の家の前に車を停めた。丁度三吉は下座敷に居た。叔父の顔を見ると、正太は相場の思惑にすこし手違ひを生じたことから、遣繰算段して母を迎へる打開話を始めた。

「へえ、お仙ちやんを連れて？　姉さんも出て來るにはすこし早いナ。」

と三吉は首を傾げて居た。

『叔父さんも左樣思ひてせう。』と正太は不安らしく、『どうも母親さんは……阿爺に逢ふのを目的にして出て來る樣子です。いろ〳〵綜合して、私も考へて見ました。いづれこれは、何處かの溫泉場へ阿爺を呼寄せて、そこで會見しやうといふ希望が、母親さんに有るらしいんです……どうも左樣らしい……唯母親さんが出て來るものとは、どうしても私に思はれません。』

猶、的確に言ふために、正太は幸作から近く來た手紙の模樣を叔父に話した。兩親が、世間へは內證て、互に消息を通はせて居ることをも話した。

『母親さんから奈何いふ手紙が行くものですか、それは解りませんが——』と正太はその話を繼いで、『阿爺の手紙は、豊世が受取つて、それから母親さんの方へ取次いで居ます。時々、私も目を通します……』

『奈何な風に、君の父親さんからは書いて寄すものかネ。』と三吉が聞いた。

『あの年齡に成つて、彼樣いふ手紙を交換してるものかと思ふと、驚く……』と言つて、正太は歎息して、『私達の書く手紙なぞとは、全然違つたものなんです。』

『どうてせう、假に、達雄さんが郷里に歸つたとしたら——』

『そりや、叔父さん、阿爺が歸れば必ず用ひられます——土地に人物は少いんですからネ。そこです。用ひられゝば、必ず復た同じことを繰返します。そりやあ、もう目に見えて居ます。』

叔父に逢つて談話をして見ると、正太は頭腦がハッキリして來た。父の家出——つゞいて起つた崩壞

の光景――その種々の記憶が彼の胸に浮んで來た。三吉の方でも、甥の顔を眺めて居るうちに、何となく空恐しい心地に成つた。

「こりや姉さんにも、すこし考へて貰はんけりや成らんネ。」と三吉が言出した

正太は力の籠つた語氣で、「ですから、私は母親さんを引留めやうと思ひます……」

「大きに左様だ。今こゝで、下手に會見なぞさせる場合ては無いネ。」

「もし母親さんが是方へ參りましたら、叔父さんからもよく話して遣つて下さい。」

お種が歸らない夫を待つことは、最早幾年に成る、と其時三吉も數へて見た。娘お仙を夫に逢はせて見たら、あるひは――一旦失はれた父らしい心胸を復た元へ引戻すことも出來やうか――離散した親子、夫婦が集つて、もう一度以前のやうな家を成したい――斯う彼女が、一縷の希望を夫に繋ぎながら、心竊かに再會を期して上京するといふは、三吉にも想像し得るやうに思はれた。

門前には、車が待つて居た。正太は車夫を呼んで、心忙しさうに自分の家の方へ歸つて行つた。

お種がお仙と一緒に東京へ着いた翌々日、正太はその報告がてら、一寸復た三吉叔父の家へ寄つた。

「一昨日、母も無事に着きました。」と正太は入口の庭に立つたまゝ、すこし改まつて言つた。

「お雪。」と三吉は妻の方を顧みて、「姉さん達も御着に成つたとサ。」

お雪は最早三番目の男の兒を抱いて居る頃であつた。橋本の姉の上京と聞いて、微笑みながら上り端のところへ來た。

『月でも更りましたら、御緩り入來しつて下さい。』と正太は叔父叔母の顏を見比べて、『叔母さんも、何卒叔父さんと御一緒に――母もネ、着きました晩なぞは非常に興奮して居まして、斯樣な調子ぢや困つたもんだなんて、豐世と二人で話しましたが、昨日あたりから大分それでも沈靜いて來ました――』

簡單に母の樣子を知らせて置いて、正太は出て行つた。

月でも更つたらと、正太が言つたが、久し振りで三吉は姉に逢はうと思つて、その日の夕方から甥の家を訪ねることにした。種夫に着物を着更へさせて、電車で駒形へ行つた時は、橋本とした軒燈が石垣の上に光り始めて居た。三吉は子供を抱き擁えて、勾配の急な石段を上つた。

『種ちやん、父さんと御一緒に――よく入來しつて下さいましたねえ。』と豐世が出て迎へた。

『坊ちやま、さあアンガなさいまし。』女中の老婆も顏を出した。

『斯樣な小さな下駄を穿いて――』と復た、子の無い豐世がめづらしさうに言つた。

間もなく、三吉はお種やお仙と挨拶を交換した。遠慮の無い種夫は、綺麗に片付けてある家の內を步き廻つた。お種は自分の方へ子供を抱寄せるやうにして、

『種ちやん――これが木曾の伯母さんですよ。お前さんの姉さん達は、よく斯の伯母さんが抱ツこをしたり、負ぶをしたりしたツけが……』と言つて、お仙の方を見て、『お仙や、あのワン〱をこゝへ持つ

て來て御覽。」

お仙は、簞笥の上にある犬の玩具を取出して、種夫に與へた。

「叔父さん、二階の方へいらしつて下さい。」と正太が先に立つて言つた。

「左樣せまいか。二階で話さまいか。」と言つて、お種は子供を背中に乘せて、「お仙もいらつしやい。」

「母親さん、危う御座んすよ。」と豐世は灯の點いた洋燈を持ちながら、皆なの後から階梯を上つた。

二階は、水樓の感じがすると、三吉が來る度に言ふところで、隅田川が好く見えた。對岸の町々の灯は美しく水に映じて居た。正太に似て背の高いお仙は、緣側の欄に近く居て、母や叔父の話を聞かうとした。斯の娘の癖で、どうかすると叔父の顏に近く自分の處女らしい顏を寄せて、言ひ難い喜悅の情を表はさうとした。お仙は二十五六に成るとは見えなかつた。ずつと若く見えた。

「奈何だネ、お仙、三吉叔父さんにお目に掛つて奈樣な氣がするネ。」

と母に言はれて、お仙は白い纖細い手を口に宛行ひながら、無邪氣に笑つた。

「彼女は、何の位嬉しいか解ないところだ。」とお種は三吉に言つて聞かせた。「お前さん達のことばかり言ひ暮して來た。彼女が鄕里に連れられて行つたのは、六歲の時だぞや。碌に記憶があらすか。今度初めて東京を見るやうなものだわい。」

種夫はすこしも靜止して居なかつた。部屋の内は正太の趣味で面白く飾つてあつたが、子供はそんなことに頓着なして、大切な道具でも何でも翫具にして遊ばうとした。

『種ちやん、いらッしやい、豊世叔母ちやんが負ぶして進げませう――表の方へ行つて見て來ませうネ。』

と豊世は種夫を連れて、階下へ行つた。やがて、往來の方からお仙を呼ぶ聲がした。

『お仙ちやんも、そこいらまで一緒に見に行きませんか。』

豊世が誘ふまゝに、お仙も町の夕景色を見に出掛けた。

正太は母や叔父を款待さうとして、階梯を上つたり下りたりした。二階の縁側に近く煙草盆を持出して、三吉はお種と相對に坐つた。お種が廣い額には、何となく憂鬱な色が有つた。でも案じた程でも無いらしいので、三吉もやゝ安心して、亡くなつた三人の子供の話なぞを始めた。山で別れてから以來、お種は言ひたいことばかり、何から話して可いか解らない程であつた。

『房ちやん達のことを思ふと、種夫もよく彼迄に漕付けましたよ。何の位手數の要つたものだか知れません。』

『左樣さ――どうも見たところが弱さうだ。』

姉弟が話の緒口は未だ眞實に解けなかつた。急に、正太は階下から上つて來て、洋燈の置いてあるところに立つた。

『母親さん、お仙ちやんが居なくなつたさうです。』

斯う坐りもせずに言つた。思はず三人顔を見合せた。

お仙を探しに行つた三吉が、町を一廻りして歸つて來た頃は、正太も、豊世も、お種も出て居なかつた。家には、老婆一人茫然と留守をして居た。

「お仙ちやんは未だ歸りませんか。」

と庭から聲を掛けて、三吉は下座敷へ上つて見た。壁に寄せて座蒲團の上に寢かして置いた種夫の姿も見えなかつた。

「坊主は？」

「坊ちやまですか。めんめを御覺しだものですから、御隱居樣が負ぶなさいまして、表の方へ見にいらツしやいました。」

夏の夜のことで、河の方から來る涼しい空氣が座敷の內へ通つて居た。三吉は水淺黄色のカアテンの懸つた玻璃障子のところへ行つて見た。そこから、石段の下を通る人や、町家の灯や、水に近い夜の空なぞを眺めながら立つて居た。お仙が居なくなつたといふ時から、やがて一時間も經つ……

三吉は老婆の方へ引返した。

「もう一度、私は行つて見て來ます。」

老婆は考深く、「御新樣も、もうそれでも御歸りに成りさうなものですね。」

「何處ですか、そのお仙ちやんの見えなく成つたといふ處は。」

「なんでも奥様が御一緒に買物を遊ばしまして――ホラ、電車通に小間物を賣る店が御座いませう――彼處なんで御座いますよ。奥様は、御孃様が御側に居らツしやることゝ計り思召して、坊ちやまに何か御見せ申してゐらしつたさうですが、鳥渡振向いて御覧なさいましたら、最早御孃様は御見えに成らなかつたさうです。それはもう、ホンの鳥渡の間に……」

それを聞いて、三吉は出て行つた。

二度目に彼が引返して、暗い石垣の下までやつて來ると、お種は娘の身の上を案じ顔に、玻璃障子のところに立つて居た。

「姉さん、お仙ちやんは？」と三吉は往來から尋ねて見た。

「未だ歸らない。」

といふ姉の答を聞いて、三吉も不安を増して來た。

「三吉。」とお種は弟を家の内へ入れてから言つた。「お前は今夜、是方で泊つて呉れるだらうネ。」

「えゝ、兎に角行つて坊主を置いて來ます――それから復たやつて來ませう。」

「あゝ左様してお呉れ。弱い子供だから、お雪さんが心配すると不可。ワン／＼も持たせてやりたいが、可いわ、私がまた訪ねる時にお土産に持つて行かず。」

三吉は眠さうな子供を姉の手から抱取つた。

『坊ちやまのお下駄はいかゞいたしませう。』と老婆が言葉を添える。

『ナニ、構ひませんから、新聞に包んで私の懐中へ捩込んで下さい。』

斯う三吉は答へて、『種ちやん、吾家へ行くんだよ。』と言ひ聞かせながら、子供を肩につかまらせて出た。種夫は眠さうに頭を垂れて、左右の手もだらりと下げて居た。

『まあ御可愛さうに、おねむていらッしやる。』と老婆が言つた。

三吉が自分の家へ子供を運んで置いて、復た電車で引返して來た頃は、半鐘が烈しく鳴り響いて居た。細い路次や往來は人で埋まつた。お仙が居なく成つたといふさへあるに、加に火事とは。三吉は仰天して了つた。火は正太の家から半町ほどしか離れて居なかつた。

『これはまあ何といふ事だ。』

といふお種の言葉を聞捨てゝ、三吉は二階へ駆上つた。續いてお種も上つて來た。雨戸を開けて見ると、燃え上る河岸の土藏の火は姉弟の眼に凄じく映つた。どうやら、一軒て濟むらしい。見て居るうちに、すこし下火に成る。

『もう大丈夫。』

と正太も階下から上つて來た。三人は無言のまゝ、一緒に火を眺めて立つて居た。

雨戸を閉めて置いて、三人は階下へ下りた。まだ往來は混雜して居た。石段を上つて來て、火事見舞を言ひに寄るものもあつた。正太は心の震動を制へかねるといふ風て、

「叔父さん、濟みませんが下谷の警察まで行つて下さいませんか……淺草の警察へは今屆けて來ました。」

『お仙も、』とお種は引取つて、『彼樣いふ神樣か佛樣のやうなやつだから、存外無事で出て來るかも知れないテ。』

『お仙ちやんは、こゝの番地を覺えて居ますまいね。』と三吉が聞いた。

『どうも覺えて居まいテ。』とお種は歎息する。

『なか〳〵車に乘るといふ智慧は出さうもない――おまけに、一文も持つて居ない。』と正太も附添した。

三吉は思ひ付いたやうに、老婆の方を見て、『老婆さん、貴方はあの路次のところへ行つて、角に番をして居て下さい。ぢやあ私は下谷の警察まで行つて來ます。』

夜は更けて來た。火事の混雜の後で、餘計に四邊はシーンとして居た。青ざめた街燈の火に映る電車通には、往來の人も少なかつた。柳並木の蔭は暗い。路次の角に、豐世と老婆の二人が悄然立つて、見張をして居る。そこへ三吉が歸つて來た。

『まだ歸りませんか。』と三吉は二人に近づいて尋ねた。

『叔父さん、奈何したら宜う御座んせうね。』と豐世は愁はしげに答へた。

『まあ家へ行つて相談しやうぢや有りませんか。』
斯ういふ三吉の後に随いて、豊世は重い足を運んだ。老婆も默つて歩いて行つた。
正太の家には、お仙を搜しに出たものが皆な一緒に集つた。
『何時でせう。』と三吉が言出した。
『十一時過ぎました。』と正太は懷中時計を出して見て答へた。
しばらく正太は沈吟するやうに部屋の内を歩いて見た。やがて、玻璃障子の閉めてあるところへ行つて、暗い空を窺ひながら立つて居たが、復た皆なの居る方へ引返した。時々、彼は可恐しげな眼付をして、豊世の顔を睨みつけた。
『あぶない〳〵と平素から思つて居たが、是程とは思はなかつた。』正太は斯樣な風に妹のことを言つて見た。
『一體、私が子供なぞを連れてやつて來たのが惡かつた。』と三吉が言つた。
お種は引取つて『そんなことを言へば、私がお仙を連れて出て來たのが惡いやうなものだ。いや、誰が惡いんでも無い。みんな彼の娘が持つて生れて來たのだぞや。奈何なことが有らうとも、私はもう絶念めて居ますよ。それよりは、働けるものが好く働いて、夫婦して立派なものに成つて呉れるのが、何よりですよ。』
『私はネ、』と正太は叔父の方を見て、『事業と成ると、奈樣にでも働けますが——使へば使ふだけ、ます

〳〵頭腦が冴えて來るんてす——唯、斯ういふ人情のことには、實際閉口だ。』

『正太も亦た、斯様なことに凹んて了ふやうなことぢや不可。』

とお種は健氣にも、吾兒を勵ますやうに言ふ。

『ナニ、これしきのことに凹んてたまるもんてすか。私の頭腦の中には、今塩瀬の店の運命がある——おまけに明日は晦日といふ難關を控えて居る。』

斯う言つて、正太は鋭い眼付をした。

『さアさ。』とお種は浴衣の襟を掻合せ乍ら、家中を見廻して、『出來たことは仕方が有りません。兎に角一時頃まて皆なに休んて貰つて、三吉と正太には氣の毒だが、それからもう一度捜しに行つて貰はず。三吉、すこし寢たが可いぞや。老婆もそこて横にお成りや——それにかぎる。』

寢ろと言はれても、誰も寢られるものは無かつた。第一、左様いふお種が眠らなかつた。すこし横に成つて見た人も、何時の間にか起きて、皆なの話に加はつた。十二時頃、一同夜食した。

時計が一時を打つ頃、三吉、正太の二人は更に仕度して出掛けることに成つた。

『叔父さん、風邪を引くといけませんよ——シャツても進げませう。』と言つて、正太は豐世の方を見て、

『股引も出して進げな。』

『ぢやあ、拜借するとしやう。』と三吉が言つた。

三吉は股引に尻端折。正太もきりゝとした服装をして、夏帽子を冠つて出た。

「姉さん、お仙ちやんが歸つて來たさうですネ――よかつた、よかつた。僕は今そこの交番で聞いて來た。」

と言つて、三吉が飛込んで來た。

「お仙、叔父さんに御禮を言はないか。」

とお種に言はれて、お仙はすこし顔を紅めながら手を突いた。斯の無邪氣な娘は唯マゴ〳〵して居た。

「叔父さん、もうすこしで危いところ。」と豊世は妹の後に居て、「惡い者に附かれたらしいんですが、好い鹽梅に刑事に見つかつたんださうです。今迄警察の方に留めて置かれたんですッて。」

そこへ正太も妹の無事を喜びながら入つて來た。

「隨分心配させられたぜ、もう〳〵奈様なことが有つても、獨りでなんぞ屋外へ出されない。」と言つて、正太は溜息を吐いて、「お仙がもし歸らなかつたら、それこそ家のやつを擲殺して呉れやうかと思つた。」

「え丶、そこどこぢやない。」と豊世は後向に涙を拭いて、「お仙ちやんが歸らなければ、私はもう死ぬつもりでしたよ……」

一同はお仙を取圍いて種々なことを尋ねて見た。お仙は混雜した記憶を辿るといふ風で、手を振つたり、身體を動つたりして、

『なんても其男の人が、私の處を聞いたぞなし。私は知らん顏して居た。あんまり煩いから、木曾だって左樣言いてやつたわなし。』

『木曾はよかつた。』と三吉が笑ふ。

『先方の人も變に思つたでせうねえ。』と豐世は妹の顏を眺めて、『お仙ちやんは、自分ぢやそれほど可畏いとも思つて居なかつたやうですね。』

お仙はきれ〳〵に思出すといふ顏付で、『ハンケチの包を取られては大變だと思つたから――あの中には姉さんに買つて頂いた白粉が入つて居たて――私は斯うシッカリと持つて居た。男の人が、それを袂へ入れろ〳〵と言ふぢやないかなし。私が入れた。さうすると、斯の袂を捕へて、どうしても放さなかつた‥‥。』

『アヽ、白粉を取られるとばかり思つたナ。』と正太が言つた。

『えゝ、』とお仙は微笑を浮べて、『それから方々暗い處を歩いて、終に木のある明るい處へ出た。草臥たらうから休めッて、男の人が言ふから、私も腰を掛けて休んだ‥‥』

『して見ると、矢張公園の内へ入つたんだ。あれほど僕等が探したがナア。』と三吉は言つて見た。

お仙は言葉を續けて、『煙草を服まないかッて、その人が私に呉れた。私は一服しか貰つて服まなかつた。夫婦に成れなんて言つたぞなし――えゝ、えゝ、そんな馬鹿なことを。』

『よかつた、よかつた――夫婦なぞに成らなくつて、よかつた。』

斯うお種が言つたので、皆な笑つた。お仙も一緒に成つて笑ひ轉げた。
「皆な二階へ行つて休むことにしませう。正太も仕事のある人だから、すこし休むが可い――さアさ、皆な行つて寢ませう。」
とお種は先に立つて言つた。
「皆樣の御床はもう展べて御座います。」と老婆も言葉を添へた。
一同は二階へ上つて寢る仕度をした。三吉は寢られなかつた。彼は一旦入つた臥床から復た這出して、蚊帳の外で煙草を燻し始めた。お仙も眠れないと見えて起きて來た。豐世も起きて來た。三人は緣側のところへ煙草盆を持出した。しまひには、お種も我慢が仕切れなく成つたと見え、白い寢衣のまゝ蚊帳の內から出て來た。
「正太さんはよく寢ましたネ。」と三吉は蚊帳の外から覗いて見る。
「これ、そうッとして置くが可い。明日は大分多忙しい人ださうだから――」とお種は聲を低くして言つた。
其時、豐世は起つて行つて、水に近い雨戸を開けかけた。
「叔父さん、一枚開けませう。もう夜が明けるかも知れません。」

一夜の出來事は、それに遭遇つた人々に取つて忘られなかつた。折角上京したお種も、お仙を連れての町あるきは可恐しく思はれて來た。河の見える家に逗留して、皆なて一緒に時を送るといふことが、何よりお種母子には樂しかつた。

八月に入つて、正太も家のものを相手に暮すやうな日があつた。兄夫婦や妹の間に起る笑聲は、過去つた日のことをお種に想ひ起させた。下座敷の玻璃障子の外には、僅かばかりの石垣の上を丹精して、靑いものが植えてある。お種は、郷里に居て庭の植木を愛するやうに、その草花の手入をしたり、綺麗に掃除したりした。

お種は草箒を手にして、石段の下へも降りて行つた。餘念なく石垣の草むしりをして居ると、丁度そこへ三吉が路次の方から廻つて訪ねて來た。お種はそれとも氣がつかず、往來に腰を延ばして、自分の草むしりした跡を心地好さそうに眺めて居た。三吉は姉の傍まで來た。まだお種は知らなかつた。其時、三吉は兩手を延ばして、背後から靜かに姉の目を隱した。

斯の戯は、寧ろお種をビックリさせた。彼女は右の手に草箒を振りながら、叫んだ。何事かと、正太や豊世は顏を出した。三吉は笑ひながら姉の前に立つて居た。

「お前さんか――俺は眞實に、誰かと思つたぞや。」

とお種も笑つて、「まあ、お入り。」と言ひながら、弟と一緒に石段を上つた。

「姉さん。」と三吉は家へ入つてから言つた。「一寸御使にやつて來たんです。明日は私の家て御待申して

居ますから、何卒御話に入來しつて下さい。』

『それは難有う。私もお前さんの許の子供を見に行かずと思つて居た。それに、久し振てお雪さんにも御目に掛りたいし……』

斯ういふお種の顔色には、前の晩に見たより焦心つて居るやうなところが少なかつた。その沈んだ調子が、反つて三吉を安心させた。

正太と二人きりに成つた時、三吉は姉の様子を尋ねて見た。

『母親さんも考へて來たやうてす。』と正太は男らしい眉を揚げて、前の夜の可恐しかつたことを目で云はせた。

『なにしろ、君、出て來る早々彼様いふ目に遭遇したんだからネ……實際、あの晩はエラかつたよ……。』

『私なぞは、叔父さん、すくなくも十年壽命が縮みました。』

『ホラ、君と二人て最後に公園の内を探つて、廣小路へ出て來ると、あの繁華な場處に人一人通らずサ……あの時、君は下谷の方面を探り給へ、僕は淺草橋通りをもう一遍捜して見やうッて言つて、二人て帽子を脱つて別れましたらう――あの時は、君、何とも言へない感じがしたネ。』

『左様〱、一つ踏外すと皆な一緒に奈何なるかと思ふやうな……こりやあウカ〱しちやあ居られない、左様思つて、私は上野の方へ獨りて歩いて行きました。』

水を打つたやうな深夜の道路、互に遠ざかりながら聞いた寂かな足音――未だそれは二人の眼にあり

耳にあつた。

女達が集つて來た。親類の話が始まつた。遠く滿洲の方に居る實のことが出るにつけても、お種は夫の達雄を思出すらしかつた。お俊の結婚も何時あるかなどゝ噂した後で、三吉は辭して行つた。

お仙を殘して置いて、お種は獨りで弟の家族に逢ひに行つた。

三吉の家では、お雪が子供に着物を着更へさせるやら、茶道具を取り出すやらして、姉を待受けて居た。氣の置けない男の客と違ひ、姉に親類中一番年長のお種のことで、何となくお雪は改まつた面持で迎へた。弟の家内の顏を見ると、お種は先づ亡くなつたお房やお菊やお繁のことを言出した。

三吉は姉の側に坐つて、「姉さん、御馴染の子供は一人も居なくなりました。」

「左樣サ――」とお種も考深く。

「種ちやん、橋本の伯母さんに御辭儀をしないか。」とお雪が呼んだ。

「種ちやんはもう御馴染に成つたねえ。御預りのワン〳〵も伯母さんが持つて來ましたよ。」

「姉さん、これが新ちやんです。」と三吉は、漸く匍つて歩く位な、次男の新吉を抱寄せて見せる。

「オヽ、新ちやんですか。」とお種は顏を寄せて、「ほんに、斯の兒は壯健さうな顏をしてる。眼のクリクリしたところなぞは、三吉の幼少い時に彷彿だぞや……どれ、皆な好い兒だて、伯母さんが御土産を出

さずか。」

子供は、伯母から貰つた翫具の犬を抱いて、家のものに見せに歩いた。

「お雪、銀ちやんを抱いて來て御覽。」と三吉が言つた。

「これ、温順しく寢てるものを、そうッとして置くが可い。」とお種は壁に寄せて寢かしてある一番幼少い銀造の顔を覗きに行つた。

「どうです、姉さん、これが六人めですよ——隨分出來も出來たものでせう。」

「お前さんのところでは、お雪さんも御達者だし、どうして未だ〲これから出來ますよ。」

斯樣なことを傍で言はれて、お雪はキマリが惡さうに茶戸棚の方へ行つた。

「眞實に、子供があると無いぢや、家の内が大違ひだ。」と言つて、お種は正太の家のことを思ひ比べるやうな眼付をした。

其日、お種は心易く振舞はう〱として居たが、どうかすると酷く興奮した調子が出て來た。時にはそれが病的に聞えた。すこしも靜止して居られないやうな姉の樣子が、何となくお雪には氣づかひであつた。お種は狹い町中の住居をめづらしく思ふといふ風で、取散した勝手元まで見て廻らうとするので、お雪はもう冷々して居た。

姉を案内して、三吉は二階の部屋へ上つた。日中の三味線の音が、乾燥いだ町の空氣を通して、靜かに響いて來た。

「姉さん、東京が變りましたらう。」

斯ういふ弟の話を、お種は直に吾兒の方へ持つて行つた。

「今度、出て來て見たら、正太の家には妙なものが掛けてある。何様とかの御護符だげナ。そして、一寸したことにも御幣を擔ぐ。相場師といふ者は皆な斯ういふものだなんて……若い時は彼樣な奴ぢやなかつたが……」

「しかし、正太さんはナカ〳〵面白いところが有りますよ。ウマくやつて呉れると宜う御座んすがネ。」

「まあ、彼は、阿爺さんから見ると、大膽なところが有るて――」

お種は言ひ淀んで、豐世から聞いた正太と他の女との關係を心配さうに話した。

「アヽ向島の藝者のことてすか。」

「それサ。」

「へえ、豐世さんは未だ心配してるんてすかネ。そんな話は、疾くに奈樣か成つたのかと思つて居た。」

「ところが左樣て無いらしいから困るテ……豐世もあれて、森彥叔父さんなら何事でも話せるが、どうも三吉叔父さんは氣遣ひだなんて言つてる。」

斯うお種が言つて笑つたので、三吉の方でも苦笑した。

お雪は姉の馳走に取寄せた松の鮨なぞを階下から運んで來た。子供が上つて來ては、客も迷惑だらうと、お雪はあまり話の仲間入もしなかつた。

三吉は半ば串談のやうに、「お雪は姉さんをコワがつて居ますよ。」

「そんなことがあらすか。」とお種は階梯を下りかけたお雪の方を見て、「ねえ、お雪さん、貴方とは信州以來の御馴染ですものネ。」

お種の神經質らしい笑聲を聞いて、お雪は泣き騷ぐ子供の方へ下りて行つた。

三吉は思ひ付いたやうに、戸棚の方へ起つて行つた。實が滿洲へ旅立つ時、預つて置いた父の遺筆を取出した。箱の塵を拂つて、姉の前に置いて見せた。その中には、忠寛の歌集、萬葉假名で書いた短冊、いろ／＼あるが、殊にお種の目を引いたのは、父の絶筆である。漢文で、『慷慨憂憤の士を以つて狂人と爲す、悲しからずや』としてある。墨の痕も淋漓として、死際に震へた手で書いたとは見えない。

父忠寛が最後の光景は、いつも三吉が聞いて見たく思ふことであつた。お鶴が通夜の晩に、皆な集つて、お倉から聞いた時の話ほど、お種は委しく記憶して居なかつた。そのかはり、お種はお倉の記憶に無いことを記憶して居た。

『大きく「熊」といふ字を書いて、父親さんが座敷牢から見せたことが有つたぞや。』とお種は弟に微笑んで見せて、『皆な、寄つて集つて、俺を熊にするなんて、左樣仰つてサ……それは、お前さん、氣分が種々に成つたものサ。可笑しく成る時には、アハヽ、アハヽ、獨りでもう堪えられないほど笑つて、そんなに可笑しがつて被入つしやるかと思ふと、今度は又、急に沈んで來る……私は今でもよく父親さんの聲を覺えて居るが、きり／＼す啼くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかも寢む、と唸吟じて置いて、

ワアッと大きな聲で御泣きなさる……」

お種は激しく身體を震せた。父が吟じたといふ古歌――それはやがて彼女の遣瀨ない心であるかのやうに、殊に力を入れて吟じて聞かせた。三吉は姉の肉聲を通して、暗い座敷牢の格子に取縋つた父の狂姿を想像し得るやうに思つた。彼はお種の顏を熟と眺めて、默つて了つた。

斯の姉が上京する前、正太から話のあつた達雄との會見――今にそれを姉が言出すか〳〵と、三吉は心に思つて居た。お種は、弟の方で待受けたやうなことを何事も言出さずしまひに、郷里の方の變遷などをいろ〳〵と話り聞かせた後で、一緒に階下へ降りた。

お雪は眼の覺めた銀造を抱き擁へて、

「へえ、伯母ちやん、銀ちやんを見て下さい。」

「オヽ、溫順だそうな。白い前掛を掛けて――好い兒だ、好い兒だ。」とお種は孫でもアヤすやうに言つた。

「斯の通りの子持て御座いますから、いづれ私は夜分にても伺ひます。」

「お雪さん、御待ち申して居ますよ。お仙にも逢つてやつて下さい。」

それから一週間ばかり、お種は逗留した。そこ〳〵に歸郷の仕度を始めたと聞いて、親戚はかはる

ん／＼正太の家を訪ねた。三吉も別れかた／＼出掛けて行つた時は、お俊、お延などの娘達集つて來て居た。森彥の二番目の娘て、遊學のために上京したお絹も來て居た。

「三吉、御免なさいよ。今髮を結つて了ひますから。」

とお種は階梯の下に近く鏡臺を置いて、その前に坐りながら挨拶した。お種の後には、白い前垂を掛けた女髮結が立つて、しきりと自分の身體を動かして居た。

「叔父さん、私も母親さんの御供をして、一寸鄉里まて行つて參ります。實は行く前に、御相談したいことも有りますし、私の方から今伺はうと思つて居たところなんてす。」

正太は叔父の顏を見て、丁度好いところへ來て呉れたといふ風に言つた。

三吉、正太の二人は連立つて、河の見える二階へ上つた。窓の扉だけ赤く塗つた河蒸汽が、音波を刻んて眺望の中に入つて來た。やがて川上の方へ通過ぎた。

三吉は薄く濁つた水を眺めて、

「姉さんも、何事も言出さずに歸つて行くものと見えるネ……時に、正太さん、相談したいといふのは何てすか。」

と叔父に言はれて、しばらく正太は切出しかねて居た。金の話てあつた。鄉里に居る正太の知人て、叔父の請判があらば、貸出しさうなものが有る。商法の資本として、二千圓ばかり借りて來たい。迷惑は掛けないから、判だけ捺して呉れつて。實は――この話は、母親さんから斯う／＼いふ人があると、聞出

したのが元なんです。』と正太は折入つて三吉に頼んだ。

お種は髪が出來て上つて來た。

『三吉――もう俺も親類廻りは濟ましたし、是頃の晩のやうなことが有ると可恐しいて、サッサと郷里の方へ歸るわい。』

斯う話して居るところへ、お仙も來て、名殘惜しさうに叔父の方を見たり、二階から見える町々の光景などを眺めたりした。

『なあ、お仙。』とお種は娘の方を見て、『三吉叔父さんにも御目に掛つたし、これでお前も氣が濟んだずら……早く仕度をして歸るまいかや。』

『え〻、田舍の方が安氣で好い。兄さんや姉さんの傍に居られるだけは、東京も好いけれど――』とお仙は皆なの顏を見比べながら言つた。

三吉が別れを告げて、斯の家を出たのは町に燈火の點き始める頃であつた。薄暗く成つて、復た三吉は引返して來た。つゞいて森彦も入つて來た。

『オヤ、三吉叔父さん、森彦叔父さんも御一緒に……』

と豊世は迎へに出た。二人の叔父は用事ありげに下座敷へ通つた。

『叔父さん達は御風呂は如何ですか。』と豊世は款待顏に、『今日は、郷里へ歸る人の御馳走に立てましたところですが――』

「それぢや、兎に角一ぱい入るとしやう。」と森彦が言つた。
皆な出發するといふ前の晩のことで、何となく家の内が混雑して居た。

食事を濟ました後、叔父達は二階の緣側に近く居て、風呂から出る正太を待受けた。屋外は最早暗かつた。お仙は煙草盆の火を見に上つて來た。
森彦は胡坐にやりながら、
「お仙、兄さんは未だお風呂かネ。」
「いえ、もう上つたずら……これから私達もよばれるところだ。」
斯う言つて、お仙は一寸緣側へ出た。沈んだ空氣は對岸の町々を遠くして見せた。河は湖水のやうに靜かであつた。お仙は欄のところから夜の空を眺めて見て、やがて階下へ引返して行つた。
そのうちに正太が煙草入を手にして上つて來た。チラと彼の眼は光つた。
森彦は肥つた身體を正太の方へ向けたが、顏はむしろ三吉の方へ向けて、
「いや、他でも無いがネ――俺は途中で三吉と行き逢つて、彼がお前から相談を受けたといふ話を聞いた。そいつは考へ物だぞ、三吉も一緒に來い、俺が行つて正太によく話してやる。左樣言つて彼を引張つて來たところだ。」

「あゝ、そのことですか。」と正太は苦笑した。

三吉は河の方を見て居た。森彦は正太を諭すやうに、みすみす三吉に迷惑の掛るものを默つて觀て居る譯には行かぬ、證文に判をつけ――實も達雄も皆な同じ行き方で親類を倒して居る――斯う腕まくりして言出した。

「左樣いふことなら、叔父さん、斯の話は斷然止めませう。」

と正太はキッパリ答へた。

お種が階下から煙草盆を提げて談話の仲間入に來た頃は、森彦の聲は高かつた。ウンと言はなければ氣の濟まないのが斯の叔父の癖で、お種や正太を前に置きながら、盛んに橋本父子を攻擊し始めた。叔父の目から見ると、正太の相場學なぞは未だ未だ幼稚なもので、仲買人のナの字にも行つて居らぬ。斯樣なことが森彦の口を衝いて出て來た。

其時、豐世もお仙と一緒に、浴衣でやつて來た。叔父の猛烈な語勢が、階下に居る老婆はおろか、どうかすると隣近所までも聞えさうなので、心の好いお仙は沈着いて居られないといふ風であつた。母の傍へ行つたり、兄の顏を眺めたりして、ハラハラして居た。

「森彦――お前の言ふことは、好く解つた……好く解つた……正太も、叔父さんの言ふことをよく聞いて置いて、橋本の家を興して呉れるが可いぞや……えゝ、えゝ、それを忘れるやうなことだや、申譯が無いて……」

斯うお種は言ひかけたが、興奮のあまり聲が咽喉へ乾干び付いたやうに成つた。豊世も姑の側に考深い眼付をして、女持の煙管で煙草を燻して居た。

「今迄の家風は、皆なが言ふことを言はなさ過ぎたと思ひますわ。」と豊世は顔を揚げて、「母親さん、これから皆なでもつと言ふことにしやうぢや有りませんか。」

輕い、無邪氣な、お仙の笑聲が起つた。

漸く、一同は笑つて話すことが出來るやうに成つた。森彦も愛嬌のある微笑を見せて、

「なんでも人間は信用が無くちや駄目だ。俺なんかも、十年一日のごとくして、志ばかり徒に大きいやうなものだが、信用を失はないやうに心掛けて居るんで持つてる……」

「左様サ。お前さま酒も飲まず、煙草も服まず――そこは一寸眞似の出來ないところだ。」とお種が言つた。

「これで何だぞい、俺は旅舍生活を始めてから、唯の二度しか女郎屋へも遊びに行つたことが無い。それも交際で止むを得ない時ばかり。一度はMさんの出て來た時、一度は――」

「二度と斷つたところはよかつた。」と三吉が笑出した。

「いえ、正直な話サ。」

森彦は三吉を睨むやうにして言つたが、終には自分でも可笑しく成つたと見えて、反返つて笑つた。

「姉さん。」と森彦はお種の方を見て、「俺は斯ういふ話を覺えて居るが――貴方達が未だ東京に家を持つてる時分、お仙が二階から轉がり落ちて、ヒドク頭を打つた――それを貴方達は知らずに寢て居た」

いふことだが——』

『そんなことは、虚言だ。』とお種は腹立たしげに打消した。

『兎に角、今夜のやうな話は、爲る方が可いネ。』と三吉が正太に言つた。

『稀には斯ういふ話も聞かんと不可。』正太も元氣づいた。

お種は弟を顧みて、『三吉、お前は私のことを……旦那に逢つて見る積りて、今度出て來たんだらうなんて、左樣言つたさうなネ……』と他事のやうに言つた。

『まあ其樣な話が出たことも有りました。』と三吉は微笑んて、『しかし、姉さん、子のことも考へんけりや成りませんからネ。』

『え丶、え丶、そこどこぢやない。』とお種は力を入れた。

しばらく森彦は姉の横顔を眺めたが、やがて、

『この婆サも、これて未だ色氣が有る。』

と急所を衝くやうに言ひ放つた。盛んな笑聲が起つた。一同の視線はお種の方に集つた。

『ウン有る——有る、有る。』

お種は口を尖らせて、激した調子て答へた。そして、ブル／＼身體を震はせた。

『風向が變つて來ましたぜ。』と三吉は戲れるやうに。

『今度は俺の方へお鉢が廻つて來たさうな。』とお種も笑ひ碎けた。

お仙は手を振つて笑つた。

「しかし、串談は兎に角、」とお種は浴衣の襟を掻合せて、「斯う皆な集ることも、めつたに無い。どうだ、豊世、お前も何か言ふことがあらば——叔父さん達の前で言へや。」

「母親さん、私は……別に言ふことも有りません。」

と答へて、豊世は胸を押へながら、俯向いて了つた。

叔父達が夏羽織を引掛けて、起ち上つた頃は、對岸の灯も幽かに成つた。混雑した心地で、一同は互に別れを告げた。

「いや、危いところ——」

と森彦は正太の家を離れてから、三吉に言つた。

二

晝間から花火の音がする。

兩國に近い三吉の家では、毎年川開の時の例で、親類の娘達を待受けた。豊世も、その日約束して置いて、誰よりも先にお雪のところへ遊びに來て居た。

「よくそれでも、叔母さんは子供の世話を成さいますねえ。」

「私だつて心から子供が好きぢや有りません。」

叔母のやうな家庭的な人の口から、意外な答を聞いたといふ面持て、豐世は母衣蚊屋の内にスヤ／＼眠つて居る乳呑兒の方を眺めた。そこへ二番目の新吉を背負つた下婢に連れられて、種夫が表の方から入つて來た。

「種ちやんも、新ちやんも、オベヾを着更へませう。今に姉さん方がいらつしやるよ。」とお雪が言つた。

「どれ、種ちやんは叔母さんの方へいらつしやい。」と豐世は種夫に手招きして見せて、「豐世叔母さんが好くして進げませうネ。」

幼い兄弟は揃ひの新しい浴衣に着更へた。丁度、三吉は町まで用達に出掛けた時て、子供に金魚を買つて戻つて來た。

「正太さんは？」

三吉は豐世の顏を見て尋ねた。お種を送りながら郷里の方へ行つた正太も、最早引返して來て居た。

「宅は後から伺ひますつて。」と豐世は微笑んで、「どうして、宅が斯様な日に靜止して居られるもんてすか。」

「今、豐世さんから伺つたんてすが、」とお雪は夫に、「鹽瀨の御店もイケなく成つたさうてす。」

「叔父さんは未だ御聞きに成りませんか。」と豐世が言つた。

「いよ／＼駄目なんてすか。好い店のやうてしたがナア。そいつは正太さんも氣の毒だ。」

『眞實に相場師ばかりは、明日のことが如何成るか解りませんネ。川向に居ます時分――あの頃のことを思ふと、百圓位のお金は平素紙入の中に入つて居たんてすがねえ。』と言つて、豊世は萎れて、『左樣言へば、森彦叔父さんに彼樣言つて頂いたんて、宜う御座んしたよ。あのお金を借りて持つて居やうものなら、それこそ――今頃は如何成つて居るか解りませんよ。』

三吉はお雪と顔を見合せた。

『私もツマりませんから、花火でも見て遊びますわ。』と豊世は嘆息した。

お雪は着物を着更へた。豊世は叔父から卷煙草を分けて貰つて、眼を細くしながらそれを吸つた。三吉も煙草を燻して居たが、やがて獨りで二階へ上つて行つた。

黄色い花火の煙が町の空に浮んだ。三吉は二階の縁側に出て、往來へ向いた簾の影から眺めた。

『……人妻などに成るものではないと、よく貴方から言つて寄したから、ひよつとかすると最早名倉さんの方へ歸つて居るかとも思ふが……試みに斯の手紙を進げる……』

斯う三吉は心に繰返して見た。これはお雪が舊い男の友達から、彼女へ宛てゝ寄した手紙の中の文句で。

言ふに言はれぬ失望が、ふと斯の手紙を讀んだ時から、三吉の胸に起つて來た。長く艱難を共にしな

がら、是程妻が自分を知らずに居たか、と彼は心にナサケなく思つた。のみならず、全く心の持方の違つた、氣質も異なれば境遇も別な、斯ういふ他人の手紙の中から、如何妻の心を讀んだら可いか、第一それからして思ひ迷つた。

ポン〳〵音がする。煙は風に送られて、柳の花のやうに垂下つた。三吉はションボリ立つて眺めて居た。

『叔父さん――』

と聲を掛けて、正太がヅカ〳〵階梯を上つて來た。

急に三吉は沈鬱な心の底から浮び上つたやうに笑つた。正太と一緒に坐つて、兜町の方の噂を始めた。

『鹽瀬の店も駄目ださうだネ。』と彼が言つて見た。

『豐世からでも御聞きてしたか。』と正太は叔父の方をキッと見て、『私が兜町へ入る頃から、鹽瀬といふものは實は駄目だつたんです。外部を彌縫して居ましたから、店に使はれる者すら知らなかつた。幹部へ入つて見て、それが解つた。いよ〳〵あの店も致命傷を負ひました。銀行からは取付を食ふ、得意は責めて來る――左樣成つたら、實にミジメなものですよ。多分、あの店は、一旦閉めて、更に廣田といふもの丶名義で小さく始めることに成るでせう。私なぞは、今迄の行き掛り上、相談には乘つてやつて居ますが、殆んど手を引いたやうなものです。』

すべての劃策は水泡に歸した、と正太は歎息した。彼は仲買人として、別に立つ方法を講じなければ

成らない、とも言つた。

「榊君は如何したらう。」と三吉は思出したやうに。

「あの人も失敗して、郷里へ歸つたきりです。再擧を計る心は無ささうです。」

斯樣な話をして居ると、階下では娘達の笑聲が起つた。二人は一緒に階梯を下りた。お俊、お延、お絹を始め、お雪が末の妹のお幾も集つて來た。娘達の中には、縁先に出て、すゞしさうな鳴海絞を着た種夫や新吉に、金魚を見せて居るものも有つた。

「お雪、皆なで寫眞を撮らうぢやないか。お前達は子供を連れて先に寫してお出。俺は正太さんと二人で寫す。」

と三吉は妻を呼んで言つた。お雪は嬉しさうに微笑んだ。往來にはゾロ／＼人の通る足音がした。

夕方から、表の木戸を開けはらつて、風通しの好い簾の影で、一同揃つて冷麥を食つた。

「世が世なら、傳馬の一艘も買切つて押出すのにナア。」

と正太は白い扇子をパチ／＼言はせながら、叔父と一緒に門の外へ出て見た。

「お俊ちやん達もいらつしやいな。」

お雪は娘達を呼んで、豐世と一緒に入口の庭へ下りた。町中のことゝて、往來の片隅に涼臺を持出して、

あるものは腰掛け、あるものは立つて通る人々の風俗を眺めた。

『お俊ちやんは島田に結つていらつしやれば可いのに、好く似合ひますわ。』と豊世はお俊の方を見て。

『此頃もネ、お俊姉さんのは催促髷だなんて、皆なでサン〴〵冷かしました。ですから姉さんは結つていらつしやらないんですよ。』

斯うお絹が言出したので、娘達は皆な笑つた。

『絹ちやんは感心に、田舍訛が出ないこと。』と豊世は言つて見た。

『鄕里で稽古して來たんですもの。』とお絹はすこし下を向いた。

『延ちやんは、もうすつかり東京言葉だ。』とお雪も娘達の發達に驚くといふ眼付をした。

群集は町を隔てゝ潮のやうに押寄せて來て居る。花火の音と一緒に、狂喜する喚聲が遠く近く響き渡る。正太と三吉は、河岸を一廻りして戻つて來た。娘達は揃つて出掛けやうとした。

『ハイカラねえ。』

とお延は、町を通る若い娘を叔父に指して見せて置いて、連の後を追つた。

お雪は子供を見に家の内へ入つたが、やがて茶を入れて凉臺のところへ持つて來た。豊世も煙草盆を運んだ。

『お俊ちやんから今日話がありましたが、』とお雪は夫の傍へ寄つて、『お祝の時には、私の帶を貸して下さいッて。』

「帶は自分のが有るぢやないか。」と三吉が言つた。
「御婚禮の時の着物に似合はないんてすツて。」
「ぢやあ、貸して進げるサ。」
斯様な内輪話をして居る叔母を誘つて、豐世は河岸の方へ歩きに出掛けた。涼臺のところには、正太と三吉と二人殘つた。
三吉は笑ひながら、「向島も如何しましたかネ。」
と小金の噂などをして見た。二人の間には、向島て意味が通じた。
「豐世のやつも、氣ばかり揉んて――弱つちまう。」と正太は歎息するやうに。
「いつそ、向島に逢はせて見たら如何てす。」と三吉は戲れて言つた。
「いゝ、叔父さん、旣に最早逢はせて見たんてす。駄目、駄目、それほど豐世がサバケて居ないんてすからネ。土手のある待合てした。そこへ豐世を連れて行くと、向島も來て幾に思つたと見えて、容易に顏を出しませんてした。あそこて、豐世が一つ笑つて呉れると可いんてサ……」
「そりや、君、笑へないサ。女同志だもの。」
「すると、流石は商賣人だ。人が惡いや。歸りに向島が車を二臺あつらへて、わざ〳〵二人乘の方へ豐世と私を乘せて、自分は一人乘てそこいらまて送つて來ました……後て、豐世の言草が好いぢや有りませんか、「もつと私に凄い女かなんかと思つて居た、貴方は彼様のが好いんてすか、」ツて……しかしネ、

叔父さん、色に持つなら私は彼様いふ溫順しいのを選びますよ。そのかはり、取卷には奈樣な凄いんても……」

紅や薄紫の花火の色が、夜の空に映つたり消えたりした。二人が腰掛けて居る凉臺から、その光を望むことが出來た。三吉は、多勢子供を失つてから、氣に成るといふ風で、時々自分の家の內を覗きに行つて、それから復た正太の話を聞きに來た。

どうかすると、三吉の心は空の方へ行つた。半ば獨語のやうに、

「家といふものは奈何して斯う煩しいもんてせう。僕のところなぞは、もうすこしウマく行きさうなものだがナア……」

斯う正太に話して聞かせた。

そのうちに、豐世やお雪は手を引き合ひながら、明るい軒燈の影を歸つて來た。二人とも下町風の髮を結つて、丁度背も同じ程の高さてある。お雪は三十を一つ越し、豐世もやがて三十に近かつた。お雪が堅肥りのした肩や、乳の張つた胸のあたりに比べると、豐世の方はやゝ瘦せて居たが、それても體格の女らしく發達したことは、二人ともよく似て居た。二人は話し〳〵凉臺の方へ近いた。

間もなく娘達も手を引いて歸つて來た。私語く聲、輕く笑ふ聲が、そこにも、こゝにも起つた。知らない男や女は幾群となく皆なの側を通過ぎた。

仕掛花火も終つた頃、三吉は正太と連立つて、もう一遍橋の畔まて出て見た。提灯や萬燈を點けて歸

つて行く舟を見ると、中には兜町方面の店印をも數へることが出來る。急に正太は意氣の銷沈を感じた。叔父と一緒に引返した。

遲く成つたので、花火を見に來た娘達は分れて泊ることに成つた。お俊とお絹は正太夫婦に連れられて行つた。三吉の家には、お延、お幾が殘つた。

町中の夏の夜。郊外では四月五月も釣る蚊帳が、こゝでは二月か、三十日位しか要らない。でも、毎年のやうに蚊が増えた。其晩も皆な蚊帳の內へ入つた。

ふと、三吉が眼を覺ました頃は、家のものは寢靜まつて居た。蚊の聲がウルサク耳について、しばらく彼は眠られなかつた。枕頭の方では、乳臭い子供の香をたづねると見え、幾羽となく集つて來て居る。蚊帳の內にも飛んで居る。三吉は床を離れた。蠟燭とマッチを探つて來て、火を點した。妻子はいづれもよく寢て居た。綠色の麻蚊帳が明るく映つても、目を覺まして聲を掛けるものも無かつた。

「種ちやんは彼樣なところへ行つて、轉がつてる――仕樣が無いナア、皆な寢相が惡くて。」

斯う三吉は、叱るやうに言つて見て、あちこちと子供の上を跨いで歩いた。

蚊を燒きながら、三吉はお雪の枕許へ來た。まだお雪は知らずに寢て居た。見ると、何等の記憶に苦ひといふことも無く、結局自分が勝つと言つたやうな顏付をして、乳呑兒の頭の方へ無心に母らしい手

を延ばしながら、静かに横に成つて居た。三吉は燭臺を妻の寢顏に寄せた。そして、お雪の心を讀まうとするやうな眼付をして、猶よく見た。何物も變つたものが蠟燭の光に映らなかつた……深い眠はお雪の身體を支配して居るらしかつた。顏面のどの部分でも、眠つて居ないところは無かつた。白い腕までも夢を見て居た。

蚊帳の外まで燭臺を持つて廻つた後、三吉は火を吹き消した。復た自分の床に入つて、枕に就いた。

翌朝は、お延やお幾が種夫を間に入れて、三吉夫婦と一緒に食事した。新吉もその傍で、下婢に食べさせて貰つた。

『いやです、父さん——人の顏をジロ〱見て。』とお雪は食ひ乍ら言つた。

『見たつて可いぢやないか。』と三吉は串談らしく。

『そんなに見なくたつて宜う御座んす。』

とお雪が言つたので、娘達はクス〱笑つた。

『奈何だ、昨夜俺は起きて、お前達の知らない時に蚊を燒いたが……皆なよく寢て居た。』と言つて、三吉は戲れるやうな口調で、『叔父さんは延の寢言まで聞いちやつた。』

『噓、叔父さん、私が寢言なんか言ふもんですか。』とお延が笑ふ。

『私は、兄さんが蚊を燒きにいらしやつたのを知つてたけれど……默つて寢た振をして居た。』とお幾も笑つた。

間もなく三吉は獨りて自分の部屋へ上つて行つた。

二階——そこは三吉が山から持つて來た机の置いてあるところで。そこから坐りながら町々の屋根や、水に近い空なぞを望むことが出來る。そこから階下に居る人達の聲を手に取るやうに聞くことも出來る。彼が仕事て夢中に成つて居る時は、夜遲くまで洋燈が點いて、近所の家々て寢て了ふ頃にも、未だそこからは燈火が泄れて居ることもある。

階下から聞える聲は、とは言へ三吉の心を靜かにしては置かなかつた。男と女て爭ふなぞはクダラナイことだ、斯う思ひながら、知らず〳〵彼はその中へ捲込まれて行つた。何時まで經つたら、夫と妻の心の顏が眞實に合ふ日が有るだらう。そんなことを考へるさへ、彼は厭はしさうな眼付をした。

夫としての三吉は、妻の變らない保護者て有つた。しかし好い話相手ては無かつた。妙に、彼はお雪の前に長く坐つて居られなかつた。すこし長く妻と話をして居ると、もう彼は退屈して了つた‥‥斯ういふ性分の三吉に比べると、もつと心易い人が世の中にはある。左樣いふ人が階下へ來て、皆なを笑はせることも有る。それを三吉は二階から聞く度に、詫しい心を起した。どうかすると、彼は階梯を馳け降りるやうにして、左樣いふ人の手から自分の子供を抱取ることも有つた。

「人の細君をつかまへて、雪さんなどゝ平氣て書いて寄す男もある。」

と三吉は思つて見た。左樣いふ人が妻には親切な面白い人のやうに言はれても、その無邪氣さを三吉は奈何することも出來なかつた。

すこしの言葉の爭ひから、お雪は鬱いて了ふことが多かつた。すると、三吉は二階から下りて、時には妻の前に手を突いて『何卒まあ宜敷御頼申します、』と詫びるやうに言つた。

お俊の結婚がある頃は、三吉の家では名倉の母を迎へた。大きな名倉の家族に取つて無くてならない調和者は斯の人であつた。『橋本の姉さんと、名倉の母親さんとは、丁度兩方の端に居る人だ。』と三吉はよくお雪に言つて聞かせるが、斯の母は多くの養子に對してばかりでなく、娘を嫁けた先の三吉に對しても細いところまで行き屆く。倦まず立働く人で、お雪の傍に居つても直に眼鏡を掛けて、孫の爲に繼物したり、娘の仕事を手傳つたりした。

丁度、勉も商用で上京して居た。勉の旅舍は左程離れても居なかつたし、それに名倉の母が逗留中なので、用達の序に來ては三吉の家へ寄つた。お雪が母親の周圍には賑かな話聲が絶えなかつた。

斯ういふ中で、兎角三吉は沈み勝ちであつた。賢い名倉の母に隱れるやうにして、日の暮れる頃には町の方へ歩きに出た。何處へ行つて、何を見やう、別に彼はそんな目的があるでもなかつた。唯、家から飛出して行つて、路を通る往來の人の中に交つた。彼の足は電車の通ふ、橋の方へ向き易かつた。そこから、黄昏時の空氣、チラ〳〵點く燈火、並木道、ゴチャ〳〵した町の建物なぞを眺めては歸つて來た。家の近くには、人の集る寄席がある。そこへも彼はよく獨りで出掛けて行つた。藝人が高座でする毎時

きまりきつた色話だとか、假白だとかゝ、それほど彼の耳を慰めるても無かつた。彼は好きな卷煙草を燻しながら、後の方の隱れた場所に座蒲團を敷いて、獨りて默つて坐つた。そして、知らない人の中に居て、言ひ難き悲哀を忘れやうとした。

名倉の母は長く逗留して居た。その間に、お雪は留守番を母に賴んで置いて、舊の學校友達だの、豊世の家だのを訪問して歩いた。子持て、しかも年寄のない家に居ては、斯ういふ機會がお雪には少なかつたからて。三吉は妻の外出にすら、何とも言つて見やうの無いやうな不安な感じを抱くやうに成つた。

ある晩、お雪は直樹の家を訪ねると言つて出て行つた。十時過ぐる頃まで歸つて來なかつた。妙に三吉は心配に成つて來た。

「母親さん――お雪は奈何したてせう。斯樣に遲くなつても、未だ歸りません。一寸私はそこいらまで行つて見て來ます。」

斯う名倉の母に言つて置いて、三吉は直樹の家まで妻を迎へに行つた。

橋の畔て彼はお雪の歸つて來るのに行き逢つた。

「父さん。」

と聲を掛けられて、三吉はやゝ安心したやうに、

「心配したぜ。斯樣に遲くまて話し込んでるやつが有るもんか。もうすこして、俺は直樹さんの家まて行つちまうところだつた。」

お雪は夫に寄添つた。斯うして二人ぎりで一緒に歩くといふことは、夫婦にはめつたに無かつた。三吉は妻を連れて、暗い道を靜かに考深く歩いて歸つた。

「――「一體お前は奈何いふ積りで俺の許へ嫁に來た」なんて、よく父さんが其樣なことを私に言ひますよ。」

「へえ、父さんは左樣いふ心で居るのかねえ。」

斯うお雪と母親とで話して居るところへ、勉が商人風の服裝をして、表から入つて來た。勉は大阪まで行て來たことから、東京での商用も辨じた、荷積も終つた、明日は歸國の途に就くことなぞを話した。斯の人とお雪の妹との間には、最早種夫と同年の子供がある。

「父さん、今がお別れに參りました。一寸逢つてやつて下さい。」

と名倉の母が階梯の下から呼んだ。

三吉も談話の仲間に入つた。快活な世慣れた勉の口から、三吉は種々な商人の生活を聞くことを樂んだ。勉もよく話した。

勉とお雪の愛。それを知つて、三吉が二人を許してから、可成長い月日が經つ。三吉は勉に交際つて見て、好くその氣心も解つた。以前のことは最早昔話のやうに思はれる迄に成つて居た。制へ難い不安

の念につれて、幾年となく忘れられて居た苦痛が復た起つて來た。男同志さしむかひて居れば、三吉の方でも快く話せる。そこへお雪が入つて來ると、妙に彼は笑へなかつた。

勉は三吉の蒼ざめた顔を眺めて、

「しかし、小泉さんも御多忙しいでせう。」

「え丶、え丶、多忙しい人です。」と母は引取つて、やがて三吉の方を見て、「父さん――貴方は御仕事の方を成すつて下さい。何卒お構ひなく。」

名倉の母は茶を入れかへて、歸國するといふ養子にす丶め、茶の好きな娘の亭主にも飲ませた。間もなく勉は旅舍の方へ戻つて行つた。三吉は勉の子供へと思つて、土産にする物を町から買求めて來た。それを持つて妻の前に立つた。

「父さん、何物か――」と種夫は見つけて、父に縋りつく。

「お前のお土産ぢや無いよ。あつちの叔父さんに進げるんだよ。」と三吉は子供に言ひ聞かせて、やがてお雪に、「これはお前に頼むぜ――俺のかはりに、後で勉さんの旅舍まで行つて來てお呉れ。」

「そんなことをしなくッても宜う御座んすに。」

と母は顔を出して言つた。

夕飯の後、三吉は二階に上つて、机に對つて見た。「馬鹿。」と彼は自分で自分を叱つた。「奈樣ても可いぢやないか、そんな事は……傍觀者て澤山だ。」斯う復た自分に言つて見た。不思議な本能の力は、しか

し彼を唯傍觀させては置かなかつた。何時の間にか、彼はお雪が勉の旅舎に訪ねて行く時のことを想像した。彼女と勉との交換す言葉を想像した。

『奈何したといふんだ、一體俺は……』

思ひ屈したやうな眼付をして、彼は自分の部屋を見廻した。

其時、『君は嫉んだことが有るか……』斯うある佛蘭西人の物語の中にあつた言葉を胸に浮べて、三吉は心に悲しく思つた。男が嫉む――それが自分のことだと感じた時は、彼は自分の性質を羞ぢずに居られなかつた。許した、許した、とは言つたものゝ、眞實に勉やお雪を許しては居なかつた、とも思つて來た。

階下では、三人の子供も寢た。お雪は仕度が出來たと見えて階梯のところへ來て聲を掛けた。

『ぢや、父さん、一寸行つて參ります。』表の木戸を開けていそ〳〵と出て行く妻の樣子は、二階に居てよく知れた。三吉は熟と耳を澄まして、お雪の下駄の音を聞いた。

震へる自分の身體を見ながら、三吉は妻の歸りを待つて居た。人が離縁を思ふのも斯ういふ時だらう、斯樣なことを悲しく考へて、終に、今迄起したことも無い思想に落ちて行つた。僧侶のやうな禁欲の生活――寂しい〳〵生活――しかし、それより外に、養ふべき妻子を養ひながら、同時に斯の苦痛を忘れ

るやうな方法は先づ見當らなかつた。このまゝ家を寺院精舍と觀る。出來ない相談とも思はれなかつた。三吉はその道を行かうかとも考へ迷つた。

お雪は、勉が留守だつたと言つて、旅舍の方から戻つて來た。

翌日、勉からは、三吉とお雪の兩名宛て、葉書が屆いた。それには、子供への土産の禮を述べ、折角姉上が訪ねて呉れたのに、不在て失禮した、これから郷里へ向ふ、母上にも宜敷、としてあつた。

十月は末に成つて、三吉は長い風邪に侵された。名倉の母は未だ逗留して居た。熱のある夫の爲に、お雪は風藥だの、食物だのをこしらへた。それを二階に寢て居る夫の枕許へ運んだ。時には、子供が隨いて上つて來て、母の肩につかまつたり、手を引いたりして戯れた。

「叔父さんは御風邪てすか。」

正太が階梯を上つて來た。三吉は快くなりかけた時て、厚いドテラを引掛けたまゝ、床の上に起直つた。

「正太さん、失禮します。」と三吉は坊主枕を膝の上に乘せて言つた。

「御無沙汰して居りますが、豊世さんも御變りは有りませんか。」

斯うお雪は正太に尋ねて、元氣づいた夫の笑聲を聞きながら階下へ降りて行つた。

「奈何てす、兜町の方は。」と三吉は正太が言はない先に言出した。「何とか言ひましたネ、廣田サ…今度の店の方は奈何てすかネ。」

正太は寂しさうに笑つた。「え〻、まあ暖簾が掛けてあるといふばかり。それに、叔父さん、店員は大抵去りましたし、あの店も小さいところへ移りました……鹽瀬の沒落以來、もう昔日の面影はありません。」

「でも、君は出ては居るんでせう。」

「此節は、遊びです。實は此頃、廣田の店の爲に、一策を立て〻見ました。まあ、乘るか反るか、一つやツけろと言ふんで。あるところへ一日の中に九度も車で驅付けさして、しかも雨の降る日に、斯の店を活かすなり殺すなり奈何なりともして呉れ、左樣言つて私が轉がり込んで行つた……宛然ユスリですネ……奈何しても先方で逢はない。すると、廣田の店の方で、どうも橋本は凄いことをするなんて、そんな裏切者が出て來る……膽ッ玉の小さな男ばかり揃つてるんですサ。彼樣なことで何が出來るもんですか。私も何卒して、早く新しい立場を作らんけりや成らん……」

正太の眼は物凄く輝いた。同時に、何となく萎れた色を見せた。やがて彼は袂を探つて、鉛の入つた繭を取出した。仕事もなく、徒然なま〻、斯の繭を土臺にして、慰みに子供の翫具を考案して居る。斯樣なことを叔父に語り聞かせた、正太は紀文の遺したといふ翫具の話なぞを引いて、流石に風雅な人は面白いところが有る、とも言つた。

日の光は町々の屋根を掠めて、部屋の內へ射込んで居た。臥床の上にツクネンとして居る叔父の前で、正太はその鉛の入つた繭を轉がして見せた。

夫は家を寺院と觀念しても、妻はもとより尼では無かつた。

そればかりでは無い、若い時から落魄の苦痛までも嘗めて來た三吉には、藥を飲ませ、物を食はせる人の情を思はずに居られなかつた。彼が臥床を離れる頃には、最早還俗して了つた。彼の精神は激しく動搖した。屈辱をも感じた。

兄妹の愛――そんな風に彼の思想は變つて行つた。彼は自分の妹としてお雪のことを考へて見やうと思つた。

十一月の空氣のすこし暗い日のことであつた。めづらしく三吉はお雪を連れて、町の方へ買物に出た。お雪は紺色のコオトを鳥渡したヨソイキの着物の上に着て、手袋をはめながら夫に隨いて行つた。『まあ、父さんには無いことだ――御天氣でも變りやしないか、』とお雪は眼で言はせた。

ある町へ出た。途中で三吉は立ち留つて、

「オイ、もうすこしシャンとしてお歩きよ‥‥そんな可羞しいやうな容子をして歩かないで。是方がキマリが惡いや。」

「だつて、私には‥‥」

とお雪はすこし顏を紅めた。

買物した後、三吉はお雪をある洋食屋の二階へ案内した。他に客も見えなかつた。街に近い食卓を選

んて、三吉は椅子に腰掛けた。お雪も手袋を取つて、血肥りのした、よく働いた手を、白い食卓の布の上に置いた。

『こゝですか、貴方の最顧にしてる家は。』

とお雪は言つて、花瓶だの、鏡だの、古風な油繪の額だのて飾つてある食堂の内を見廻した。彼女は又、玻璃窗の方へも立つて行つて、そこから見える町の屋根などを眺めた。

白い上衣を着けたボオイが皿を運んで來た。三吉は匙を取上げながら、妻の顔を眺めて、

『奈何だネ。お前の舊い友達て、誰か可羨しいやうな人が有るかネ。ホラ、黑縮緬の羽織を着て、一度お前の許へ訪ねて來た人が有つたらう。あの人も見違へるほどお婆さんに成つたネ。』

『多勢子供が有るんですもの……』とお雪は思出したやうな眼付をして、スウプを吸つた。

『旦那に仕送りするなんて言つて、亞米利加へ稼ぎに行つた人も奈何したかサ。左樣かと思へば、旦那と子供を置いて、獨りて某處へ行つてる人もある……妙な噂があるぜ、彼樣いふ人がお前には好いのかネ。』

『でも、あの人は感心な人てす。』

『左樣かナア……』

ボオイが皿を取替えて行た。しばらく夫婦は默つて食つた。

『芝に居る人は奈何なんかネ。』と復た三吉が言つた。『よくお前が遊びに行くぢやないか。』

「あの人も旦那さんが弱くッて……平常つまらない、つまらないッて、愚痴ばかしコボして……」

「何と言つても、女は長生するよ。直樹さんの家を御覧な、老祖母さんが一人殘つてる。強い證據だ。大きな、肥つた體軀をした他の内儀さんなぞが、女といふものは弱いもんですなんて、其様なことを聞くと俺は可笑しく成つちまう……」

「でも、男の人の方が可羨しい。二度と女なんかに生れて來るもんぢや有りません。」

夕日が輝いて來た。食堂の玻璃窓は一つ〳〵深い繪のやうに見えた。屋外の町々は次第に薄暗い空氣の中へ沈んで行つた。やがて夫婦は斯の食堂を下りた。物憂い生活に逆ふやうな眼付をしながら、三吉は滿腹した『妹』を連れて家の方へ歸つて行つた。

三

駒形から川について廐橋の横を通り、あれから狹い裏町を折れ曲つて、更に藏前の通りへ出、長い並木路を三吉叔父の家まで、正太は非常に靜かに歩いた。

叔父は旅から歸つて來た頃であつた。正太は入口の庭のところに立つて聲を掛けた。

「叔父さん、御暇てしたら、すこし其邊を御歩きに成りませんか。」

「御供しませう――しかし、一寸まあ上り給へナっ」

斯う答へて、三吉は甥を下座敷へ通した。家には客もあつた。お雪の父。斯の老人は遠く國から出掛けて、三吉の家で年越した。母と一緒に成りに來た。それほど長く母も逗留して居た。

「や、毎度どうも――」

と名倉の老人は正太に挨拶した。氣象の壯んな斯の人でも、寄る年波はかりは爭はれなかつた。髯は餘程白かつた。

二階へ上つて、叔父と一緒に茶を飲む頃は、正太は改まつても居なかつた。旅から日に燒けて來た叔父の顔を眺めながら、

「時に、叔父さん、吾家の阿爺も……いよ〳〵滿洲の方へ行つたさうです。」

斯様なことを正太が言出したので、三吉は仕掛けた旅の話を止めた。

「阿爺もネ――」と正太は聲を低くして、「ホラ、長らく神戸に居ましたらう。何か神戸でも失敗したらしい。トヾのツマリが滿洲行と成つたんです……實叔父さんを賴つて行つたものらしいんです……實は私も知らずに居りました。昨夕お倉叔母さんが見えまして――あの叔母さんも、お俊ちやんはお嫁さんに成るし、寂しいもんですから、吾家で一晩泊りましてネ――其時、話が有りました。實叔父さんから手紙で阿爺のことを知らせて寄したさうです……」

橋本の達雄と小泉の實とが滿洲で落合つたといふことは、話す正太にも、聞く三吉にも、言ふに言は

れぬ思を與へた。つく〴〵二人は二大家族の家長達の運命を思つた。

三吉は旅の話に移つた。一週間ばかり家を離れたことを話した。山間の谿流の音にしばらく浮世を忘れた連の人達も、歸りの温泉宿では家の方の話で持切つて、皆な妻子を案じながら歸つて來たことを話した。

古い港の町、燈臺の見える海、奇異な女の風俗などのついた繪葉書が、そこへ取出された。三吉は思ひついたやうに、微笑を浮べながら、

『どうです、向島へ一枚出してやらうぢや有りませんか。』

叔父の戯を、正太も興のあることに思つた。彼は自分で小金の宛名を認めて、裏の白い燈臺の傍には『御存じより』と書いた。斯の『御存じより』は三吉を笑はせた。彼も何か書いた。

三吉は立ちがけに、

『豐世さんが聞いたら苦い顔をすることだらうネ……』

斯う言つて復た笑つた。

正太はヒドく元氣が無かつた。繪葉書を懷中にしながら階下へ降りて、名倉の老人の側を通つた。三吉も、勝手の方で働いて居るお雪に言葉を掛けて置いて、甥と一緒に歩きに出た。

藏つときの間にある狭い路地を通り拔けて、二人は白壁の並んだところへ出た。そこは三吉がよく散歩に行く河岸である。石垣の下には神田川が流れて居る。繁華な町中に、斯様な靜かな場處もあるかと思はれる位で、薄く曇つた二月末の日が黑ずんだ水に映つて居た。

船から河岸へ通ふ物揚場の石段の上には、切石が垣のやうに積重ねてある。その端には鐵の鎖が繋いである。二人は斯の石に倚凭つた。滿洲の方の噂が出た。

三吉は思ひやるやうに、

『兩雄相會して、酒でも酌むやうな時には――感慨に堪えないことだらうナ。』

正太も思ひやるやうな眼付をして、足許に遊んで居る鷄を見た。

水に臨んだ柳並木は未だ枯々として、蕭散な感じを與へる。三吉はその枝の細く垂下つた下を、あちこちと歩いた。

やがて正太の方へ引返して來た。

『正太さん、君の仕事の方は奈何なんですか――未だ遊びですか。』

斯う言つて、石の上に卷煙草を取出して、それを正太にも勸めた。

正太は沮喪したやうに笑ひながら、『折角、好い口があつて、その店へ入るばかりに成つたところが……廣田が裏から行つて私の邪魔をした。その方もオジヤンでサ。』

『そんな人の惡いことを爲るかねえ。手を携へてやつた味方同志ぢやないか。』

『そりや、叔父さん、相場師の社會と來たら、實に酷いものです。同輩を陷入れることなぞは、何とも思つてやしません。手の裏を反すやうなものです……苟くも自己の利益に成るやうな事なら、何でも行ります……自分が手柄をした時に、そいつを誇ること、他の功名を嫉むこと、それから他の失敗を冷笑すること――親子の間柄でも容捨はない……相場師の神經質と嫉妬心と來たら、恐らく藝術家以上でせう。』

正太は叔父の心當りの人で、もし兜町に關係のある人が有らば、紹介して呉れ、心掛けて置いて呉れ、斯樣なことまで賴んで置いて、叔父と一緒に石段の傍を離れた。

二人は河口の方へ靜かに歩いて行つた。橋の畔へ出ると、神田川が隅田川と落合ふところで、歌舞歡樂の區域の一角が水の方へ突出て居る。その邊は正太にとつての交際場裏で、よく客を連れては遊興にやつて來た。『橋本さん』と言へば、可成顏が賣れたものだ。『しばらく來ないな――』と正太は呟きながら、いくらか勾配のある道を河口の方へ下りた。

隅田川が見える。白い、可憐な都鳥が飛んで居る。川上の方に見える對岸の町々、煙突の煙なぞが、濁つた空氣を通して、ゴチヤ〱二人の眼に映つた。

『河の香からして變つて來た。往時の隅田川では無いネ。』

と三吉は眺め入つた。

岸について兩國の方へ折れ曲つて行くと、小さな公園の前あたりには、種々な人が往つたり來たりし

て居る。男と女の連が幾組となく二人の前を通る。

「正太さん、君は女を見て此節奈様な風に考へるネ。」

「さあねえ——」

「何だか僕は……女を見ると苦しく成つて來る。」

斯う話し〳〵、三吉は正太と並んで、青物市場などのあたりから、濱町河岸の方へ歩いて行つた。

對岸には大きな煙突が立つた。昔の深川風の町々は埋立地の影に隱れた。正太は川向に住んだ時のことを思出すといふ風で、あの家へはよく榊がやつて來て、壯んに氣焔を吐いたことなぞを言出した。

其時、彼は岸に近く添ふて歩きながら、

「榊君と言へば、先生も引込きりか……あれて、叔父さん、榊君の遊び方と私の遊び方とは全然違ふんてす……先生の戀には、選擇は無い。非常に物慾の壯んな人なんてすネ……」

電車が兩國の方から恐しい響をさせてやつて來たので、しばらく正太の話は途切れた。やがて、彼は微笑んで、

「そこへ行くと、私は選む……一流てないものは、妓でも話せないやうな氣がする……私は交際て引手茶屋なぞへ行きましても、クダラナイ女なぞを相手にして、騷ぐ氣には成れません。隣室へ酒を出して

置いて、私は獨りて寢轉びながら本なぞを讀みます。すると茶屋の姉さんが、「橋本さん、貴方は妙な方てすねえ、」なんて……」

二人は電車の音のしないところへ出た。その邊は直樹の家に近かつた。昔時、直樹の父親が、釣竿を手にしては二町ばかりある家の方からやつて來て、その邊の柳並木の蔭で、僅かの閑を自分のものとして樂んだものてあつた。その人が腰掛けた石も、河岸の並木も大抵奈何か成つて了つた。柳が二三本殘つた。三吉と正太は立つて眺めた。潮が沖の方から溢れて來る時で、船は多く川上の方へ向つて居た。

「大橋の火見櫓だけは、それでも變らずに有りますネ。」

と正太が眺め乍ら言つた。

靑い潮の反射は直に人を疲れさせた。三吉は長く立つて見ても居られないやうな氣がした。

正太を誘つて、復た歩き出した。

大橋まで行て引返して來た頃、三吉は甥の萎れて居る樣子を見て、

「正太さん、向島にはチョク／＼お逢ひてすか。」と言つて見た。

「サッパリ。」

「へえ、其處なかネ。」

「威勢の惡いことと夥しいんてす。向島が私に、茶屋でばかり逢ふのも冗費だから、家へ來いなんて……左樣なると、先方の母親さんが好い顔をしませんや、それに、藝者屋へ入り込むといふやつは、あまり

氣の利いたものぢや有りませんからネ。」

と言ひかけて、正太は對岸にある建物を叔父に指して見せて、

「彼處に會社が見えませう。あの社長とかゞ向島を贔顧にしましてネ、箱根あたりへ連れてつたさうです。根引の相談までするらしい……向島が、奈何しませうッて私に聞きますから、そんなことを俺に相談する奴が有るもんか、奈何でもお前の勝手にするサ、左樣私が言つてやつた……でも、向島も可哀相です。私の爲には借金まで背負つて、よく私に口說くんです、どうせ夫婦に成れる譯ぢやなし……」

正太は默つて了つた。三吉も沈んだ眼付をして、しばらく物を言はずに歩いた。

「左樣〱。」と正太は思ひ付いたやうに笑ひ出した。「ホラ、此頃、雪の降つた日が有りましたらう――ネ。あの翌日てサ。私が河蒸汽で吾妻橋まで乘つて、あそこで上ると、ヒヨイと向島に遭遇しました半玉を二三人連れて……ちつとも顏を見せないが、奈何したか、この雪にはそれでも來るだらうと思つて、何程待つたか知れない、今日はもう奈樣なことがあつても放さない、左樣言つて向島が私を捕へてるぢや有りませんか。今日は駄目だ、紙入には一文も入つてやしない、と私が言ひますとネ、御金のことなんぞ言つてるんぢや有りませんよ、私が奈樣かします、一緒にいらしつて下さい、左樣向島が言つて置いて、チヨイト皆さん手を貸して下さいッて、橋の畔に居る半玉を呼んだといふものです――到頭、あの日は、皆なで寄つて群つて私を捕虜にして了つた。」

愛慾の爲に衰耄したやうな甥の姿が、ふと其時浮び上るやうに、三吉の眼に映じた。二人は兩國の河

蒸汽の出るところまで、一緒に歩いて、そこで正太の方は廐橋行に乘つた。白いペンキ塗の客船が石炭を焚く船に引かれて出て行く迄、三吉は鐵橋の畔に佇立んで居た。

笑つて正太と話して居た三吉も、甥が別れて行つた後で、急に輕い眩暈を覺えた。頭腦の後部の方には、壓しつけられるやうな痛みが殘つて居た。

疲勞に抵抗するといふ眼付をしながら、三吉は元來た道を神田川の川口へと取つた。潮に乘つて入つて來る船は幾艘となく橋の下の方へ通過ぎた。岸に近く碇泊する船もあつた。しばらく三吉は考へを纒めやうとして、逆に流れて行く水を立つて眺めた。

「どうせ一生だ。」

と彼は思つた。夫は夫、妻は妻、夫が妻を奈何することも出來ないし、妻も夫を奈何することも出來ない。斯の考へは、絶望に近いやうなもので有つた。

「アー――」

長い溜息を吐いて、それから三吉はサッサと家の方へ歸つて行つた。

丁度、名倉の老人が一杯始めた時で、膳を前に据えて、手酌でちびり〱やつて居た。

「何卒御構ひなく、私は斯の方が勝手なんで御座いますから。」

と老人は三吉に言つて、自分で徳利の酒を注いだ。

お雪は勝手の方から、何か手造りのものを皿に盛つて持つて來た。老人の癖で、醉が廻つて來ると皆なを前に置いて、自分の長い歴史を語り始める。巨萬の富を積むに到るまでの經歷、遭遇した多くの艱難、一門の繁榮、隱居して以來時々試みる大旅行の話など、それに身振手眞似を加へて、樂しさうに話し聞かせる。服裝などはすこしも氣に留めないやうな、質素な風采の人であるが、どこかに長者らしいところが具はつて居た。

「復た、阿爺さんの十八番が始まつた。』といふ眼付をして、母も傍へ來た。

「しかし、阿爺さん、』と三吉は老人の前に居て、『あの自分で御建築に成つた大きな家が、火事で燒けるのを御覽なすつた時は――奈樣な心地がしましたか。』

「奈樣な心地もしません。』老人は若い者に一歩も讓らぬといふ調子で言つた。『あの家は――燒けるだけの運を持つて來たものです――皆な、左樣いふ風に具はつて來るものです。』

往時は大きな漁業を營んで、氷の中にまで寢たといふ斯の老人の豪健な氣魄と、絕念の早さとは年を取つても失はれなかつた。女達の親しい笑聲が起つた。そこへ種夫と新吉が何か膳の上の物を狙つて來た。

「御行儀惡くしちや不可よ。』とお雪が子供を叱るやうに言つた。

「種ちやんか。新ちやんも大きく成つた。皆な好い兒だネ。』と老人は醉つた眼で二人の孫の顏を眺めて、

やがて酒の肴を子供等の口へ入れてやつた。

『コラ。』と母は疊を叩く眞似した。

子供等は頰張りながら逃出して行つた。下婢が洋燈を運んで來た。最早酒も澤山だ、と老人が言つた。

食事を終る毎に、老人は膳に對して合掌した。

其晩、殘つた仕事があると言つて、三吉が二階へ上つた頃は、雨の音がして來た。彼は下婢に吩咐けて階下から殘つたベルモットを運ばせた。それを飲んで疲勞を忘れやうとした。

お雪も幼い銀造を抱いて、一寸上つて來た。

『どうだ――』と三吉はお雪に、『斯の酒は、歐羅巴の南で產る葡萄酒だとかいふが―非常に口あたりが好いぜ。女でも飲める。お前も一つ御相伴しないか。』

『强いんぢや有りませんか。』とお雪は子供を膝に乘せて言つた。

雨戸の外では、蕭々降りそゝぐ音が聞える。雨は霙に變つたらしい。お雪は寒さうに震へて左の手で乳呑兒を抱き擁へながら、右の手に小さなコップを取上げた。酒は燈火に映つて、熟した果實よりも美しく見えた。

『オヽ、强い。』

とお雪は無邪氣に言つて見て、幾分か苦味のある酒を甘さうに口に含んだ。

『すこし頂いたら、もう私は斯樣に紅く成つちやつた。』

と復たお雪が快活な調子で言つて、熱つて來た頰を手で押えた。三吉は靜かに妻を見た。

『相談したい。旅舍の方へ來て呉れ。』斯ういふ意味の葉書が森彥の許から來た。丁度名倉の老人は、學校の寄宿舍からお幾を呼寄せて、母と一緒に橫濱見物をして歸つて來た時で、長火鉢の側に煙管を咬へ乍ら、しきりと其の葉書を眺めた。

『兎に角、俺は行つて見て來る。』

斯う三吉が妻に言つて置いて、午後の三時頃に家を出た。

森彥は旅舍の方で弟を待受けて居た。二階には、相變らず熊の毛皮などを敷いて、窓に向いた方は書齋、火鉢の置いてあるところは應接間のやうに、一つの部屋が順序よく取片付けてあつた。三吉が訪ねて行つた時は、茶も入れるばかりに用意してあつた。

『や。』

と森彥は弟を迎へた。

何時まで經つても兄弟は同じやうな氣分で合ひ合つた。兄の頭は餘程禿げて來た。弟の鬢には白いやつが眼につくほど光つた。未だそれでも、森彥は、どこか子供のやうに三吉を思つて居た。弟の前に菓子なぞを出して勸めて、

「今日お前を呼んだのは他でも無いが……實はエムの一件でネ。」

斯う彼は切出した。

森彦が言ふには、今度といふ今度は話の持つて行きどころに困つた、日頃金主と頼む同志の友は病んで居る、一時融通の道が絶えた、こゝを切開いて行かないことには多年の望を遂げることも叶はぬ……人は誰しも窮する時がある、それを思つて一肌脱いで呉れ、親類に迷惑を掛けるといふは元より素志に背くが、二百圓ばかり欲しい、是非頼む、斯う弟に話した。

三吉は困つたやうな顏をした。

「お前の收入が不定なことも、俺は知つて居る。しかし此際奈何にか成らんか。一時のことだ――人は大きく困らないで、小さく困るやうなものだよ。」と森彦は附添して言つた。

しばらく三吉は考へて居たが、やがて兄の勸める茶を飲んで、

「貴方のは人を助けて、自分で困つてる……今日までの遣方で行けば、斯う成つて來るのは自然の勢ちや有りませんか、私はよく左樣思ふんですが、貴方にしろ、私にしろ、吾儕兄弟の一生……いろ〳〵人の知らない苦勞をして……その骨折が何に成つたかといふに、大抵身內のものゝ爲に費されて了つたやうなものです。そいつを變へて掛らんことには――」

「今更そんなことを言つても仕方が無いぞ。」

「いえ、私は左樣ぢや無いと思ひます。時には斯ういふことも思つて、心の持ち方を變へるが好いと思

ひます。」

「ても俺は差當り困る。」

「いえ、差當つてのことて無く、根本的に――」

森彦は弟の言ふことを汲取かねるといふ風て、自分の部屋の内を見廻して、

「お前は左樣言ふが……俺は身内を助けるから、斯うして他人から助けられて居る。恭て言へば、まあ捨石だ。俺が身内を助けるのは、捨石を打つてるんだ。」

「奈何てせう、その碁の局面を全然變へて了つたら――」

「奈何すれば可いと言ふんだ、一體お前は……」

「てすから、斯う新生活を始めて見たらと思ふんてす――田舍へても御歸りに成つたら奈何てせう――私は其方が好ささうに思ひますネ。どこまても貴方は、地方の人て可いぢや有りませんか、小泉森彦て……それには、田舍へても退いて、身の閑な時には耕す、果樹ても何ても植える、用のある時だけ東京へ出て來る、それだけても貴方には好からうと思ふんてす。」

「何かい、お前は斯の旅舍を引揚げろと言ふのかい。」と言つて、森彦は穴の開くほど弟の顏を眺めて、

「そんなことが出來るものかよ。今こゝて俺が田舍へても歸つて御覽、それこそ……」

「面白いぢや有りませんか。」

「馬鹿言へ。そんなことを俺が爲やうものなら、今日迄俺の力に成つて呉れた人は、必と驚いて死んて

了ふ……』

其時、三吉は久し振だから鰻飯を奢ると言出して、それを女中に命ずるやうにと、兄に頼んだ。

『稀には斯ういふ話もしないと不可。』と三吉が尻を落付けた。『飯でも食つて、それから復た話さうぢや有りませんか。』

森彦は手を鳴らした。

夕飯の後、三吉は兄が一生に遡つて、今日に到るまでのことを委しく聞かうとした。森彦が事業の主なものと言へば、八年の歳月を故郷の山林の爲に費したことで有つた。話がその事に成ると、森彦は感極まるといふ風で、日頃話好な人が好く語れない位であつた。巣山、空山の差別、無智な人民の盗伐などは、三吉も聞知つて居ることであるが、猶森彦は地方を代表して上京したそも／＼から、終には一文の手宛をも受けず、すべて自辨で斯の長い困難な交渉に當つたこと、その盡力の結果として、毎年一萬圓づゝの官金が故郷の町村へ配布されて居ること、多くの山林には五木が植付けられつゝあることなぞを、弟に語り聞かせた。

『あの時、』と森彦は火鉢の上で兩手を揉んで、『Ｍさんが郷里の總代で俺の許へ來て、小泉、貴様は斯の事件の爲に何程費つた、それを書いて出せ、と言ふから、俺は總計で三萬三千圓に成ると書付を出し

た。其話は今だにそのまゝて、先方で出すとも言はなければ、俺も出せとも言はない……て、知事が氣の毒に思つて、政府の方から俺の爲に金を下げるやうに、盡力して呉れた。その高が六千圓サ。ところが其金が郷里の銀行宛て來たといふものだ。ホラお前も知つてる通り、正太の父親さんが彼樣いふ譯て、あの銀行に證文が入つてる、それに俺が判を捺いてる。そこで銀行の奴等が斯ういふ時だと思つて、その六千圓を差押へて了つた……到頭俺は橋本の家の爲に千五百圓ばかり取られた――苛酷いことをする奴等だ、何の爲にその金が下つたと思ふんだ、一體誰の爲に俺が精力を注いだと思ふんだ……』

『何故、森彦さん、その時自分を投出して了はなかつたものですか。兎に角これだけの仕事をした、後は宜敷頼む、と言つてサッサと旅舍を引揚げたら、郷里の方でも默つては置かれますまい。その後仕末をする爲に、今度は貴方が困つて來た……何か儲仕事をしなけりや成らんと成つて來た……』

『まあ。言つて見れば其樣なものだ。俺は金を取る爲に、彼の事業を爲たんては無いて――儲ける？そんなことを念頭に置いて、誰が彼樣な事業に八年も取付いて居られるものか。まだ俺は覺えて居るが、夜遲く獨りで二重橋の横を通つて、俺の精神を歌に讀んだことがある。あの時、自分でそれを吟じて見ると、涙がボロ／＼零れて……』

自分で自分を憐むやうな涙が、森彦の頬を流れて來た。

『畢竟、是は俺の性分から出たことだ。』と復た兄は弟の方を見た。『一度始めた仕事は――それを成し遂げずには置かれない。俺の精神が郷里の人に知られなくとも、可い。俺はもつと大きく考へとる積りだ

どうせ郷里の奴等には解らんと思つてるんだ。百年の後に成つたら、あるひは俺に感謝する者が出て來る……』

『森彦さん、そんなら貴方は何處までも其精神で通すんですネ。自分の歩いて來た道を、何處までも見失はないやうにするんですネ。しかし、後仕末は奈何する。私はそれを貴方の爲に心配します。』

『だから、今度は儲けるサ。儲ける爲に働くサ。』

『ところが、それが貴方には六ケしいと思ひます。貴方は矢張儲ける爲に働ける人では無いと思ひます――』

『いや、そんなことは無い。今迄は儲けやうと思はなかつたから、儲からなかつた。是からは大いに儲けやうと思ふんだ――ナニ、いかないことは無い。』

『どうも私は、今迄と同じやうに成りやしないかと思つて、それで心配してるんですが……何だか、斯う、吾儕には死んだ阿爺が附纏つて居るやうな氣がする……何處へ行つて、何を爲ても、必と阿爺が出て來るやうな氣がする……森彦さん、貴方はそんなことと思ひませんかネ。』

兄は默つて弟の顔を見た。

『私はよく左樣思ひますが、』と三吉は沈んだ眼付をして、『橋本の姉さんが彼樣して居るのと、貴方が斯の旅舍に居るのと、私が又、あの二階で考へ込んで居るのと――それが、座敷牢の内に悶いて居た小泉忠寛と、奈何違ひますかネ……吾儕は何處へ行つても、皆な舊い家を背負つて歩いてるんぢや有りません

か。』

『左様さナ……』

『そいつを私は破壞したいと思ふんです。折があつたら、貴方にも言出して見やう〳〵と思つて居たんです。何とか貴方も……』

『待つて呉れ――俺も直き五十だよ。五十に成つてサ、未だそれでも俺の思ふやうに成らなかつたら、その時はお前の意見を容れる。田舎へでも何でも引込む。それまで待つて呉れ。』

『いえ、私は左様いふ意味で言つてるんぢや無いんです……』

『それは左様と、先刻の金のことは奈何して呉れる。』

『何とか工面して見ませう。いづれ御返事します。』

『そんなことを言はないで、確かに是處で引受けて歸つて呉れ。』と言つて、森彦は調子を變へて、『今日は、貴様は、ドエライやつを俺の許へ打込みに來たナ――いや、しかし面白かつた。』

兄は高い聲で笑つた。

晩の八時過に、三吉は斯の旅舎を辭した。電車で歸つて行く途中、彼は兄の一生を思ひつゞけた。家へ入ると、お雪は夫から帽子や外套を受取りながら、

『森彦さんのとこでは、奈何な御話が有りました。』と尋ねた。

『ナニ、金の話サ。』と三吉は何氣なく答へる。

「大方そんなことだらうッて、阿爺さんも噂して居ましたッけ――阿爺さんが貴方のことを、「父さんも餘程兄弟孝行だ」なんて――」

夜中から降出した溫暖な雨は、翌朝に成つて一旦休んで、更に淡い雪と變つた。午後に、種夫や新吉は一人づゝ下婢に連れられて、町の湯から歸つた。銀造も洗つて貰ひに行つて來た。お雪は傘をさして、終に獨りで泥濘つた道を歸つて來た。

明るい空からは、輕い綿のやうなやつがポタ／＼落ちた。お雪は足袋も穿いて居なかつた。多くの女のやうに、薄着でもあつた。それでも湯上りのあたゝかさと、燃えるやうな身體の熱とで、冷々とした空氣を樂しさうに吸つた。濡れた町々の屋根は僅かに白い。雪は彼女の足許へも來て溶けた。斯の快感は、湯氣で蒸された眼ばかりでなく、彼女の肌膚の渴をも癒した。

「長い湯だナア。」と母は、歸つて來たお雪を見て、叱るやうに言つた。

「だつて、子供を連れてるんですもの。」

斯うお雪は答へて置いて、勝手の方へ通り拔けた。

冷い水道の水はお雪を蘇生るやうにさせた。彼女は額の汗をも押拭つた。鏡臺の上には、家のものがかはる／＼行く姿見がある。彼女はその前に立つた。細い黃楊の鬢櫛を兩方の耳の上に差した、濡れて

亂れたやうな髪が、その鏡に映つた。

『叔母さん、お湯のお歸り？』

斯う正太が、お雪の知らないうちに入つて來て、聲を掛けた。正太は叔母の後を通過ぎて、樓梯を上つた。

『正太さん、よく斯の道路の惡いのに、御出掛てしたネ。』

と三吉は二階に居て迎へた。

『えゝ、叔父さんの許より外に、氣を紛らしに行く處も有りませんから。』

斯う言つて、正太は長い紺色の絹を首に卷付けたまゝ、叔父の前に坐つた。部屋の障子の玻璃を通して、濕つた屋外の空氣が見られる。何となく正太は向島の方へ心を誘はれるやうな眼付をして居た。

『いかにも春の雪らしい感じがしますネ。』と正太は叔父と一緒に屋外を眺めながら言つた。

『正太さん、昨日僕は森彦さんの宿へ行つてネ。金の話が出ました。その序に、種々なことを話し込んだ。田舍へ行つたら奈何です、それまで僕は言つて見た――午後の三時から八時頃まで話した。』

『や、そいつはエラかつた。三時から八時に渡つたんぢや――どうして。森彦叔父さんと貴方の對話が眼に見えるやうです。』

『しかし、話して見て、互に了解する場合は少いネ。僕の方で思ふことは、眞實に森彦さんには通じないやうな氣がした。言ひ方も惡かつたが。唯、田舍へても引込め――左樣いふ意味に釋られて了つた。』

『そりや、叔父さん、森彦叔父さんには出來ない相談です。彼の叔父さんは、第一等の旅館に泊つて、第一等の宿泊料を拂つて行く人です。苦しい場合でも、左樣しないでは氣の濟まない人です。草鞋穿て、土いぢりでもしながら、片手間に用務を談ずるなんと、左樣いふ氣風の人ぢや有りません。』

『極く平民的な人のやうだが、一面は貴族的だネ。どうしても大きな家に生れた人だネ。すこし他が難澁して來ると、なアに俺が奈何かしてやるなんて――御先祖の口吻だ。』

斯う話し合つて見ると、二人は森彦のことを言つて居ながら、それが自然と自分達のことに成つて來るやうな氣がした。舊家に生れたものでなければ無いやうな頽廢の氣――それを二人は互に嗅ぎ合ふ心地もした。

『森彦さんから、僕に二百圓ばかり造れと言ふんサ。』と三吉は以前の話に戻つて、『それがネ、眞實にあの人の爲に成ることなら、奈樣なことをしても僕は造るサ。特にその爲に一作するサ。どうも今日の狀態ぢや、復た前と同じことに成りやしないか……それに、僕だつて、君、ヤリキレやしないよ……』

と言ひかけて、暫時三吉は聞耳を立てた。階下では老人の咳拂が聞える。

『名倉の阿爺さんなぞは、君、今に僕が共潰れに成るか／＼と思つて、あの通り熱と默つて見てる……決して僕を助けやうとはしない。實に、强い人だネ。僕も亦、痩我慢だ。仕事のことで彼の阿爺さんに助けられても、暮し向のことや何かで助けて呉れと言つたことは無い。彼樣して、下手に助けないで、熱と默つて見てる――あそこは彼の阿爺さんの面白いところさネ。』

其時、表の戸を開けて入つて來る客の聲がした。階下では皆なの話聲が起つた。

「あゝ、⌃子さんだ。」

と三吉が正太の顏を見ながら言つて居るところへ、お雪はそれを告げに來た。三吉は正太に會釋して置いて、一寸階下へ降りた。

老人や母や勉は長火鉢の周圍に集つて居た。三吉は友達にでも話し掛けるやうな調子で、勉に話し掛けた。

「へえ、今度も商用の方ですか。」

「えゝ、毎年一度や二度は出て來なけりや成りません。」と勉は商人らしい丁寧な調子で言つた。「時に小泉さん、㊉の兄さんから御言傳がありましたが、貴方の御宅でも女中が御入用だそうですから——近いうちに一人連れて御出掛に成るさうです。」

「左樣ですか、そいつは難有い。名倉の兄さんも奈何してますかネ。相變らず御店の方ですかネ。」

「大將も多忙しがつて居ます。」

斯樣な調子で、三吉は打解けて話した。彼はお雪を傍へ呼んで、勉を款待させて、復た正太の居る方へ上つて行つた。

「えゝ、福ちやんの旦那さんです。彼方の方の人達は大坂の商人に近いネ。皆な遣方がハゲしい。」

と三吉は正太の前に復つて言つた。

未だ正太は思はしい仕事も無く、ブラ〳〵して居た。骨を折つて口を見つけに飛び歩かうともして居なかつた。彼はいくらか窶れても見えた。謠の會の噂、料理の通、それから近く歐洲を漫遊し歸つて來たある畫家の展覽會を見たことなど、雪の日らしい雜談をした後で、正太は歸つて行つた。

修業ざかりの娘を二人まで控えた森彦の苦んで居る姿が、三吉の眼にチラついた。何のかんとの言つて見ても、三吉は兄を助けずに居られないやうな氣がした。彼は、名倉の兩親に隱すやうにして金をつくることを考へた。

(十)

の兄と連立つて、名倉の母が長逗留の東京を去る頃は――三吉は默つて考へてばかり居る人でもなかつた。「隨分、父さんはコワイ眼付をする。」と名倉の母はよく言つたが、左樣いふ眼付で膳に對つて、飯を食へば直に二階へ上つて行つて了ふやうな――最早そんな人でもなかつた。

時には、樓梯を踏む音をさせて、用もないのに三吉は二階から降りて來た。下座敷の柱に倚凭つて、

「お雪、俺とお前と何方が先に死ぬと思ふ。」

「どうせ私の方が後へ殘るでせうから、左樣したら私は奈何しやう――何にも未た子供のことは爲て無いし――父さんの書いた物が遺つたつて、それで子供の敎育が出來るか、奈何か、解らないし(まあ、覺束ないと思はなけりや成りません、何處の奧さんだつて困つてゐらつしやる)と言つて、女の敎師な

ぞは私の柄に成い！――左様したら私は仕方が無いから、女髪結にても成らうかしら――」
夫婦は互に言つて見た。
名倉の老人は、母だけ先へ返して、自分一人、娘の家に殘つた。若い時から鍛へた身體だけあつて、三吉の家から品川あたりへ歩く位のことは、何とも思つて居なかつた。疲れるといふことを知らなかつた。朝は早く起きて、健脚にまかせて、市中到る處の町々、變りつゝある道路、新しい橋、家、水道、普請中の工事などを見て廻つた。東京も見盡したと老人は言つて居た。
「でも、阿爺さんは、割合に歩かなく成りました――あれだけ年をとつたんですネ。」
とお雪は言つた。
いよ〳〵老人も娘や孫に別れを告げて歸國する日が來た。㊉の兄が連れて來て呉れた下婢に、留守居を頼んで置いて、三吉夫婦は老人と一緒に家を出た。子供は、種夫と新吉と二人だけ見送らせることにした。
「老爺さんが彼方へ御歸りなさるんだよ――種ちやんも、新ちやんも、サッサと早く歩きませうネ。」
とお雪は歩きながら子供に言つて聞せかた。半町ばかり行つたところで、彼女は新吉を背中に乘せた。
老人と三吉は、時々町中に佇立んで、子供の歩いて來るのを待つた。幾羽となく空を飛んで來た鳥の群が、急に町の角を目がけて、一齊に舞ひ降りた。地を摺るかと思ふほど低いところへ來て、鳴いて、復た威勢よく舞ひ揚つた。チリ〳〵バラ〳〵に成つた鳥は、思ひ〳〵の軒を指して飛んだ。

『最早燕が來る頃に成りましたかネ。』

と三吉は立つて眺めた。

電車で上野の停車場まで乘つて、一同は待合室に汽車の出る時を待つた。老人はすこしも靜止して居なかつた。どうかすると三吉の前に立つて、若い者のやうな聲を出して笑つた。

お雪の側には、二人の子供がキヨロ〳〵した眼付をして、集つて來る旅客を見て居た。老人はその方へ行つた。かはる〴〵子供の名を呼んで、

『皆な溫順しくしてお出――復た老爺さんが御土產を持つて出て來ますぜ。』

『名倉の老爺さんが復た御土產を持つて來て下さるトサ。』とお雪は子供に言ひ聞かせた。

『斯の老爺さんも、未だ出て來られる……』

斯う老人はお雪を見て言つて、復た老年らしい沈默に返つた。

發車の時間が來た。三吉夫婦はプラットフォムへと急いだ。

『種ちやんも、新ちやんも、老爺さんに左樣ならするんだよ。』

と三吉は列車の横に近く子供を連れて行つた。お雪は新吉を抱上げて見せた。

白い髯の生えた老人の笑顏が二等室の窓から出た。老人は窓際につかまり乍ら、娘や孫の方をよく見たが、やがて自分の席に戻つて、暗然と首を垂れた。驛夫は列車と見送人の間を馳せ步いた。重い車の廻轉する音が起つた。

「阿爺さんも――ひよつとすると、是が東京の見納めだネ。」と三吉は、妻と一緒に見送つた後で、言つた。

五月に入つても、未だ正太は遊んで居た。森彦の方は、新しい事業に着手すると言つて、勇んで名古屋へ發つて行つた。

「正太さんも奈何か成らんかナア。彼樣して遊ばせて置くのは、可惜いものだ。」と三吉は心配さうにお雪に話して、甥の樣子を見る爲に、駒形の方へ出掛けた。

例の石垣の下まで、三吉は歩いた。正太の家には、往來から好く見えるところに、『貸二階』とした札が出してある。何となく家の樣子が寂しい。三吉が石段を上つて行くと、顔を出した老婆まで張合の無ささうな樣子をして居た。

正太夫婦は揃つて町へ買物に出掛けた時であつた。程なく歸るであらう、といふ老婆を相手にして、しばらく三吉は時を送つた。二階は貸すと見えて、種々な道具が下座敷へ來て居る。玻璃障子のところへ寄せて、正太の机が移してあつて、その上には石菖蒲の鉢なぞも見える。水色のカアテンも色の褪せたまゝ掛つて居た。

老婆は茶を勸めながら、

「是方へ私が御奉公に上りました時は、まあ斯様な仲の好い御夫婦もあるものでせうか、と左様思ひまして御座いますよ。段々御様子を伺つて見ますと……私はすつかり奥様の方に附いて了ひました。そりや、貴方、女は奈何致したつて、女の味方に成りますもの……」

斯の苦勞した人は、夫婦の間に板挾みに成つたといふ風で、物靜かな調子で話した。主人思ひの様子は、奉公する人とも見えなかつた。

「でも、是方の旦那様も、眞實に好い方で御座いますよ。」

と復た老婆が言つた。

三吉は玻璃障子のところへ行つて、眺めた。軒先には、豊世の意匠と見えて、眞綿に包んだ玉が釣してある。その眞綿の間から、青々とした稗の芽が出て居る。隅田川はその座敷からも見えた。伊豆石を積重ねた物揚場を隔てゝ、初夏の水が流れて居た。

「さう、三吉叔父さんがいらしつて下すつたの。」

と豊世は、夫の後に随いて、町から戻つて來た。

「奥様、先程も一人御二階を見にいらしつた方が御座いました。」

と老婆が豊世に言つたので、正太夫婦は叔父の方を見た。夫婦の眼は笑つて居た。

川の見えるところに近く、三吉は正太と相對に坐つた。其時正太は苦しさうな眼付をして、生活を縮める爲にこゝを立退かうかとも思つたが、折角造作に金をかけて、風呂まで造つて置いて、斯の樂しい

住居を見拾てるのも殘念である、暫時二階を貸すことにした、と叔父に話した。

『奈何してゐらつしやるかと思つて、今日は家から歩いてやつて來ました。』と三吉が言つた。『途中に芥子を鉢植にして賣つてる家がありました。斯樣な町中にも彼樣な花が咲くか、左樣思つてネ、めづらしく山の方のことまで思出した。ホラ、僕等が居た山家の近所には芥子畠なぞが有りましたからネ。』

『叔父さん、私共では斯ういふものを造りました。』と豐世は叔父の後へ廻つて、軒先の眞綿の玉を指して、見せた。『稗蒔てすよ――往來を通る人が皆な妙な顏をして見て行きます。』

正太は何を見ても詫しいといふ風であつた。豐世に、『彼方へいつて御出』と眼て言はせて置いて、

『實は、叔父さん、私の方から御宅へ伺はうと思つて居たところなんてす。未だ御話も致しませんてしたが、近いうちに私も名古屋へ參るつもりです。彼方の方で、來ないか、と言つて吳れる人が有りましてネ……まあ二三年、私も稽古のつもりて、彼方の株式社會に入つて見ます。』

『そいつは何よりだ。』と三吉が賴母しさうに言つた。

正太は心竊かに活動を期するといふ眼付をした。自分で作つた日露戰爭前後の相場表だの、名古屋から取寄せて居る新聞だのを、叔父に出して見せて、

『叔父さんからも御話がよく有りますから、今度は私もウンと研究して見ます。下手に周章てない積りです。斯の通り、彼方の株の高低にも毎日注意を拂つて居ます……「どうして、橋本は行るぜ、彼はナカ〳〵の者だぜ、」――左樣言つて、是方の連中なぞは皆な私に眼を着けてる……』

『それに、君、森彦さんは彼方へ行つてるしサ——何かにつけて相談して見るさ。』

『左樣です。森彦叔父さんと私とは、全く別方面ですから、仕事は違ひますけれど……彼の叔父さんも、いよ〳〵今度が最後の奮鬪でせう——私は左樣思ひます——まあ、彼方へ出掛けて、彼の叔父さんの働き振も見るんですネ。』

『でも、彼の兄貴も……變つた道を歩いて行く人サネ。何を爲てるんだか家のものにまで解らない……それを平氣でやつてる……あそこは面白いナ。』

『何か斯う大きな事業をしさうな人だなんて、豊世などもよく左樣言つて居ます。』

『彼の兄貴は一生夢の破れない人だネ——あれて通す人だネ——しかし、ナカ〳〵感心なところが有るよ。お俊ちやんの家などに對しては、よくあれまでに盡したよ。大抵の者ならイヤに成つちまう……』

豊世が貰ひ物だと言つて、款待顏に羊羹などを切つて來たので、二人は他の話に移つた。

『こゝまで來て、眺望の好い二階を見ないのも殘念だ。』といふ叔父を案内して、一寸豊世は樓梯を上つた。何となく二階はガランとして居た。額だけ掛けてあつた。三吉は川に向いた緣側の欄のところへ出て見た。

『豊世さん、顏色が惡いぢや有りませんか。柰何かしましたかネ。』

『すこし……でも、此節は宅もよく家に居て呉れますよ……何事も爲ませんでも、家で御飯を食べて呉れるのが私は何よりてす……』

叔父と豐世とは斯樣な言葉を替し乍ら、薄く綠色に濁つた水の流れて行くのを望んだ。豐世は愁はしげに立つて居た。

『どうかしますと、私は……斯う胸がキリ〳〵と傷んで來まして……』

斯う訴へるやうな豐世の顏をよく見て、間もなく三吉は正太の方へ引返した。

玄關の隅には、正太が意匠した翫具の空箱が澤山積重ねてあつた。郷里から取寄せた橋本の藥の看板も立掛けてあつた。復た逢ふ約束をして、三吉は甥に別れた。

『正太さんを褒めるのは貴方ばかりだ。』

お雪が自分の家の二階で、夫に話して居るところへ、勝手を知つた豐世が階下から聲を掛けて上つて來た。

『叔母さん、御免なさいよ。御斷りも無して入つて來て――』

と豐世は親しげな調子で挨拶した。

正太が名古へ發つてから、斯うして豐世はよく訪ねて來るやうに成つた。長いことお雪は豐世に對して、好嫌の多い女の眼で見て居た。『豐世さんも好いけれど……』とかなんとか言つて居たものであつた。正太と小金の關係を知つてから、急にお雪は豐世の味方をするやうに成つた。豐世の方でも、『叔母さん、

叔母さん、」と言つて、旅にある夫の噂だの、留守居の詑しさだの、二階を貸した女の謠の師匠の内幕だのを話しに來る。正太が發つ、一月あまり經つと、最早町では青梅賣の聲がする。ジメ〳〵とした、人の氣を腐らせるやうな陽氣は、餘計に豊世を家に靜止さして置かなかつた。

「豊世さん――正太さんの許から便りが有りましたぜ。」

と三吉に言はれて、豊世は叔父の方へ向いた。風呂敷包の中から、雜誌や本などを取出して、それを傍に居る叔母へ返した。

三吉は笑ひ作ら、「何か貴方は心細いやうなことを名古屋へ書いて遣りましたネ。」

「何とか叔父さんの許へ言つて參りましたか。」

「正太さんの手紙に、「私は未だ若輩の積りて、これから大に遣らうと思つてるのに、妻は最早老に入りつゝあるか……左樣思ふと、何だか感傷の情に堪えない、」――なんて。」

それを聞いて、豊世はお雪と微笑を交換した。名古屋から送るべき筈の金も屆かないことを、心細さうに叔父叔母の前て話した。

二階から見える町家の屋根、窗なぞて、濡つて居ないものは無かつた。空には見えない雨が降つて居た。三人は、水底を望んて居るやうな、忍耐力の無い眼付をして、時々話を止めては、一緒に空の方を見た。どうかすると、遠く濡れた鳥が通る。それが泳いて行く魚の影のやうに見える。

「豊世さん――一體貴方は向島のことを如何思つてるんてすか。」三吉が切出した。

『向島ですか……』と豊世は切ないといふ眼付をして、『何だか私は……宅に捨てられるやうな氣がして成りませんわ……』

『馬鹿な――』

『でも、叔父さんなぞは御存ないでせうが、宅でまだ川向に居ました時分――丁度私は一時郷里へ歸りました時――向島が私の留守へ訪ねて來て、遲いから泊めて呉れと言つたさうです。後で私はそのことを先の老婆から聞きました。よく圖々しくも、私の蒲團なぞに眠られたものだと思ひましたよ。そればかりぢやありません、宅で向島親子を芝居に連れてく約束をして、のッぴきならぬ交際だから金を作れと言ふぢや有りませんか。私はそんな金を作るのはイヤですッて、左樣斷りました。すると、宅が癇癪を起して、いきなり私を……叔父さん、私は擲られた揚句に、自分の着物まで三十圓ばかりの質に入れて……』

豊世はもう語れなかつた。瀟洒な襦袢の袖を出して、思はず流れて來る涙を拭つた。

『叔父さん――眞實に教へて下さいませんか――如何したら男の方の氣に入るんでせうねえ。』

と復た豊世は力を入れて、眞實男性の要求を聞かうとするやうに、キッと叔父を見た。

『如何したら氣に入るなんて、私には其樣なことは答へられない。』と三吉は頭を垂れた。

『でも、ねえ、叔母さん――』と豊世はお雪に。

『亭主を離れて觀るより外に仕方が無いでせう。』と三吉は奈何することも出來ないやうな語氣で言つ

た。……

「そんなら、叔父さんなんか、奈何いふ氣分の女でしたら面白いと御思ひなさるんですか。」

「左樣ですネ、」と三吉は笑つて、「正直言ふと、是はと思ふやうな人は有りませんネ……昔の女の書いたものを見ると、ても面白さうな人もある。八月のさかりに風通しの好いところへ花莚を敷いて、薄化粧てもして、サッパリとした物を着ながら獨りで寢轉んで見たなんて――私は左樣いふ人が面白いと思ふ。」

豐世とお雪は顏を見合せた。

子供の喧嘩する聲が起つた。それを聞きつけて、お雪は豐世と一緒に階下へ降りた。茶の用意が出來たと言はれて、三吉も下座敷へ飲みに來た。

「馬鹿野郎！」

いきなり種夫はそいつを父へ浴せ掛けた。

「種ちやんは誰をつかまへても「馬鹿野郎」だ。」と三吉は子供を見て笑つた。「でも、お前の「馬鹿野郎」は可愛らしい「馬鹿野郎」だよ。」

「種ちやんの口癖に成つて了ひました。」とお雪は豐世に言つて聞かせた。「御客のある時なぞは、眞實に

困りますよ。」

「馬鹿野郎！」

と復た種夫は誰に言ふともなく繰返して、ぷいと弟や下婢の遊んで居る方へ行つた。

「豊世さん、煙草はいかゞ。」

と三吉は巻煙草を取出して、女の客や妻の前でウマさうに燻した。

「一本頂きませうか。」と豊世は手を出した。「自分ぢや左様吸ひたいとも思ひませんが、他様が燻してゐらつしやると、つい頂きたく成る。」

お雪も夫の巻煙草を分けて貰つて、左の人差指と中指との間に挟んで吸つた。

「あれで宅は奈何いふもんでせう。」と豊世は叔父に、「名古屋へ参ります前なぞは、毎日寢てばかり居りましたよ。叔父さんが寢てるが可いッて仰つたから、俺は寢てるなんて、そんなことを申しまして……」

「正太さんも一時は弱つてましたネ。」と三吉は心配らしく、「僕の家なぞへ來てもヒドく元氣の無いことがあつた。」

「宅がよく申しましたよ、是方へ上つて御話をしてると、自分の塞がつた心が開けて來るなんて、左様言つちやあ吾家を出掛けました……どうかすると、宅が私に、「三吉叔父さんは僕の戀人だ、」なんて……」

三吉は噴飯して了つた。お雪は巻煙草の灰を落しながら、二人の話を聞いて居た。

「もうすこし宅も仕事を為さうなものですがねえ。」と豊世は考へるやうに。

「僕は左様思ひます――まあ、吾儕の方の言葉で言ふと、正太さんは矢張'Dilettante'の一人です。」

「……と言ひますと？」

「樂むやうに生れて來た人なんですネ。橋本のやうな舊い家に、彼様いふ人が出來たんですネ。」

「…………………」

「吾儕の親類の中で、繪とか、音樂とか、芝居とかに、彼の人ぐらゐ興味を持つ人は有りません。そのかはり彼様いふ人に仕事をさせると――どうかすると、非常に器用な素人ではあつても、無器用な專門家には成れないことが有ります。」

「左様いふものでせうかねえ……」

「一體、正太は人懐こい――だから彼様に女から騒がれるんです。」

豊世は苦いやうな、嬉しいやうな笑ひ方をした。

入口の庭の隅には、僅かばかりの樹木が植えてある。中でも、八手だけは勢が好い。明るい新緑は雨に濡れて透き徹るやうに光る。青々とした葉が障子の玻璃に映つて、何となく部屋の内を靜かにして見せた。その靜かさは、あだかも蛇が住む穴の内のやうな靜かさであつた。

お雪は起つて行つて、お俊夫婦の寫眞を取出して來た。新郎は羽織袴。新婦も裾の長い着物で、並んで撮れて居た。

「お俊ちやんの旦那さんは大層好い方だそうですネ。」とお雪は豊世と一緒に寫眞を見ながら、「お俊ちや

ん は眞實に可羨しい。』

『私も可羨しいと思ひますわ。』と豐世が言つた。

「何故、そんなに可羨しいネ。」と三吉は二人の顔を見比べた。

「でも仲の好いのが何よりですわ。笑つて暮すのが――」とお雪は豐世の方を見て。

「今にお俊ちやん達も笑へなく成るよ。」

斯う言つて三吉が笑つたので、二人の女も一緒に成つて笑つた。

三吉は家の内部を見廻した。彼とお雪の間に起つた激しい感動や忿怒は通過ぎた。愛欲はそれほど彼の精神を動搖させなく成つた。彼は、お雪の身體ばかりでなく、自分で自分の身體をも眺めて見て、それを彫刻のやうに樂むことが出來るやうに成つた――丁度、杯の酒を餘つた瀝まで靜かに飲盡せるやうな心地で。二人は最早離れることも奈何することも出來ないものと成つて居た。お雪は彼の奴隷で、彼はお雪の奴隷であつた。

四

「叔母さん――私も郷里へ行つて參りますわ。宅から手紙が參りましてネ、どうも田舎の家が圓くいかないやうだから、暫時お前は母親さんの傍へ行つてお出なんて。まあ、奈何したんてせう。お嫁さんを

貰ふまでは、母親さんの眼の中へ入いても痛くない幸作さんでしたがねえ……私もイヤに成つて了ひますわ……彼方へ行き、是方へ行き、一つ處に落着いて居られた例は無いんですものね。叔父さんも、何でしたら、一度郷里へいらしつて下さいましな。母親さんによく話してやつて下さい。眞實に、叔父さんでも行つて頂くと有難いんですけれど……」

斯う言つて、豐世が三吉の家へ寄つたのは、八月の下旬であつた。それに附添して、

「名古屋へ私が手紙を出しました序に、「駒形の家は月が好う御座んすが、そつちては奈樣な月を見てますか」ッて、左樣申して遣りましたら、「俺は物干へ出て月を見てる」なんて、そんな返事を寄しましたよ――彼方も御暑いと見えますね。」

と夫のことを案じ顔に言つた。彼女は留守宅を老婆に託して行くこと、名古屋廻りの道筋を取つて歸國することなぞを、叔父や叔母に話して置いて、心忙しさうに別れて行つた。

三吉は父母の墓を造らうと思ひ立つて居た。山村に眠る兩親の墳は未だそのまゝにしてあつたので、幸作へ宛てゝ手紙を送つて、墓石のことを頼んで遣つた。返事が來た、石の寸法だの、直段書だのを細く書いて寄した。九月の下旬には、三吉は豐世からも綸葉書を受取つた。

「其後、叔父様、叔母様には御變りもなく候や。國へ歸りて早や一月にも相成り候。こちらも思ふやうに參らず、留守宅のことも案じられ、一日も早く東京へ參りたく候――」

と細い筆で書いてある。

秋も末に成つて、幸作からは彫刻の出來上つたことを報知して來た。そこ〳〵に三吉は旅の仕度を始めた。姉の様子も心に掛るので、諏訪の方から廻つて、先づ橋本の家へ寄り、それから自分の生れ故郷へ向ふことにした。森彦や正太は名古屋に集つて居る。序に、歸りの旅は二人を驚かさうとも思つた。お雪も夫の手傳ひていそがしかつた。お種のことや、幸作夫婦のことや、未だ郷里に留まつて居る豊世のことなぞが、取散した中で夫婦の噂に上つた。

「橋本の姉さんも、親で苦勞し、子で苦勞し――まだ其上に――最早澤山だらうにナア。」

と夫の嘆息する言葉を聞いて、お雪も姉の一生を思ひやるやうな眼付をした。

家を出て、三吉は飯田町の停車場へ向つた。

中央線は鐵道工事の最中で、姉の許まで行くには途中一晩泊つて、峠を一つ越さなければ成らなかつた。それから先には峠の麓から馬車があつた。

斯の旅に、三吉は十一年目で橋本の家を見に行く人であつた。故郷の山村へは十三年目で歸る。――

三吉を乗せた馬車が、お種の住む町へ近づいたのは、日の暮れる頃であつた。深い樹木の間には、ところ〳〵に電燈の光が望まれた。

あそこにも、こゝにも、と三吉は馬車の上から、町の灯を數へて行つた。

馬車は街道に添ふて、町の入口で停つた。馬丁の吹く喇叭は山の空氣に響き渡つた。それを聞きつけて、橋本の家のものは高い石垣を降りて來た。幸作も來て迎へた。三吉は斯の人達と一緒に、覺えのある石段を幾曲りかして上つて行つた。

古風な門、藥の看板なぞは元のまゝにある。家へ入ると、高い屋根の下で焚く爐邊の火が、先づ三吉の眼に映つた。そこで彼は幸作の妻のお島や下婢に逢つた。お仙も奥の方から出て來た。

「姉さんは?」と三吉が聞いた。

「一寸町まで行きました、姉樣も一緒に。今小僧を迎へに遣りましたて、直ぐ歸つて參りませう。」

斯う幸作が相變らず世辭も飾りも無いやうな調子で答へた。幸作は豐世のことを『御新造』と言はないで、『姉樣』と呼ぶやうに成つて居た。

「母親さんも奈樣にか御待兼てしたよ。」

とお島は客を歡待顏に言つた。斯の若い細君は森彦の周旋で嫁いて來た人で、言葉遣ひは都會の女と變らなかつた。

「もう、それでも、皆な歸るぞなし。」とお仙は叔父の方を見た。

遲く著いた客の前には、夕飯の膳が置かれた。三吉が旅の話をしながら馳走に成つて居ると、そこへお種と豐世が急いて歸つて來た。お種は提灯の火を吹消して上つた。三吉と相對に、爐邊の正面へドッ

カと坐つたぎり、姉は物が言へなかつた。

「叔父さん、眞實によく被入しつて下さいましたねえ。」と豊世は叔父に挨拶して、やがてお仙の方を見て、「お仙ちやん、母親さんに御湯でも進げたら好いでせう。今夜は叔父さんが御着きに成るまいと思つていらしつたところへ、急に御見えに成つたものですから、母親さんは嬉しいのと――』

お種はいくらか蒼ざめて見えた。お仙のすゝめる素湯を一口飲んで、兩手を膝の上に置きながら、頭を垂れた。

やゝしばらく經つた後で、

「三吉。俺は何事も言ひません――是が御挨拶です。」

とお種は大黒柱を後にして言つた。

古めかしい奥座敷に取付けられた白い電燈の蓋の下で、三吉は眼が覺めた。そこは達雄の居間に成つて居たところで、大きな床、黒光りのする床柱などが變らずにある。庭に向いた明るい障子のところには、達雄の用ひた机が、位置まで、舊の形を崩さないやうにして置いてある。黄色い模樣の附いた毛氈の机掛は、色の古くなつたまゝで、未だ同じやうに掛つて居る。

年をとつたお種は、旅に來て寢られない弟よりも、早く起きた。三吉が庭に出て見る頃は、お種は箒

を手にして、苔蒸した石の間をセッセと掃いた居た。

「斯様な山の中にも電燈が點くやうに成りましたかネ。」と三吉が言つた。

「それどこぢや無いぞや。まあ、俺と一緒に來て見よや。」

斯うお種は寂しさうに笑つて、庭傳ひに横手の勝手口の方へ弟を連れて行つた。以前土藏の方へ通つた石段を上ると、三吉は窪く堀下げられた崖を眼下にして立つた。

削り取いた傾斜、生々した赤土、新設の線路、庭の中央を横斷した鐵道の工事などは、三吉の眼にあつた。以前姉に連れられて見て廻つた味噌倉も、土藏の白壁も、達雄の日記を讀んだ二階の窓も、無かつた。梨畠、葡萄棚、お春がよく水汲に來た大きな石の井戸、そんなものは皆な奈樣か成つて了つた。お種は手に持つた箒て、破壞された庭の跡を弟に指して見せた。向ふの傾斜の上の方には僅かに木小屋が一軒殘つた。朝のことて、ツルハシを擔いだ工夫の群は崖の下を通る。

お種は可恐しいものを見るやうな眼付して、弟と一緒に奥座敷へ引返した。幸作は表座敷から來て、三吉の注文して置いた墓石が可成に出來上つたこと、既に三吉の故郷へ積み送つたことなぞを話した。お種は妙に改まつた。

朝飯には、橋本の家例て、一同爐邊に集つた。高い天井の下に、拭き込んだ戸棚を後にして、主人から奉公人まで順に膳を並べて坐ることも、下婢が爐邊に居て汁を替へることも、食事をしたものは各自膳の仕末をして、茶碗から箸まで自分々々の布巾て綺麗に拭くことも――すべて、斯の爐邊の光景は達

雄の正座に着いた頃と變らなかつた。しかし、席の末にかしこまつて食ふ藥方の番頭も、手代も、最早昔のやうな主從の關係では無かつた。皆な月給を取る爲に通つて來た。

「御馳走。」

と以前の大番頭嘉助の悴が面白くないやうな顏をして膳を離れた。斯の人は幸作と同じに年季を勤めた番頭である。幸作は自分の席から、不平らしい番頭の後姿を見送つて、「爲るだけのことを爲れば、それで可いぢやないか。」といふ眼付をした。

賑かな笑聲も起らなかつた。お種は見るもの聞くもの氣に入らない風で、嘆息するやうに家の內を見廻した。其朝、彼女は箸も執らなかつた。三吉を欵待すばかりに坐つて居た。豊世やお仙は言葉少く食つた。二人は飯の茶椀で茶を飲みながらも、皆なの顏を見比べた。

「母親さん、召上りませんか。」

とお島は姑の方を見て、オヅ〳〵とした調子で言つた。

「俺は牛乳を飲んだばかりだで……また後で食べる。」

とお種は答へたが、ぷいと席を立つて、奧座敷の方へ行つて了つた。

食後に、三吉は久し振の爐邊に居て、幸作を相手に澤田といふ潔癖な老人のあつたことなぞを尋ねた。あの忠寛の舊い友達で、よく斯の家へやつて來た老人は疾に亡くなつて居た。

ふと、三吉は耳を澄ました。玄關の方へ寄つた藥の看板のかげでは、お島の忍び泣するけはひがした。

「左様かナア。」といふ眼付をしながら、三吉は爐邊からお仙のボンヤリ立つて居る小部屋を通つて、姉の居る方へ來た。

奥座敷の中央には、正太が若い時に手づから張つて漆を抹いたといふ大きな一閑張の机が置いてある。その前に、お種は留守を預つたといふ顔付で、先代から傳つた古い掛物を後にして、達雄の坐るところに自分で坐つて居た。豊世は茶道具を取出して、それを机の上に運んだ。

三吉は斯の座敷ばかりでなく、納戸の方だの、新座敷の方だのを見廻した。改革以來、澤山な道具も減つた。たゞさへ廣い家の内が餘計に廣く見えた。

「でも、思ひの外種々な道具が殘つてるぢや有りませんか。」と彼は言つて見た。

「皆なの丹精で、これまでに爲たわい。旦那が出て了つた後で、私がお前さんの家から歸つて來た時なぞは……眼も當てられずか。」とお種は肩を動つた。

「左様言へば、達雄さんも滿洲の方へ行つたさうですネ。」

「左様だゲナ――」

「姉さん、貴方は達雄さんに置去にされたやうな氣はしませんか。」

「神戸に居る間は、未だ左様は思はなかつたよ……どうも歸つて來て呉れさうな氣がして……滿洲へ行

つて了つた……それを聞いた時は、最早私も駄目かと思つた……』

『仕方が有りません。思ひ切るサ。』

『三吉――お前はそんなことを言ふが、どうしても私は思ひ切れんよ。』

お種は心細さうに笑つた。

ゴーといふ音が庭先の崖下の方で起つた。工夫が石を積んで通る『トロック』の音だ。お種は頭脳へ響けるやうな眼付をして、その重い音の遠く成るまで聞いた。やがて、名古屋に居る正太の噂を始めた。彼女は幾度も首を振つて、『奈何かして彼がウマクやつて呉れると可いが、』を熱心に繰返した。

茶が入つたので、隣の新座敷に薬の紙を折つて居たお仙が母の傍へ來た。豊世は幸作夫婦を呼びに行つた。

養子夫婦が入つて來ると、急にお種は改まつて了つた。幸作は橋本の薬を偽造したものから、詫を入れに來た話などをして、その男が置いて行つた菓子折を取出した。

『どれ、皆なて偽薬の菓子をやらまいか。』

と幸作は笑つて、それを客にもすゝめ、自分でも食つた。

お種は若い嫁の方を鋭く見て、

『お島は甘いものが好きだに、澤山食べろや――』

『頂いて居ります。』とお島は夫の傍に居て。

「オヽ、あの嬉しさうな顔をして食べることは――」

姑は無理に笑はうとして居た。

長くも若夫婦は茶を飲んで居なかつた。二人が店の方へ行つた後で、三吉は姉に向つて、

「姉さんの顔はゝ、どうして其様にコワく成りましたかネ。」

「左様か――俺の顔はコワいか。」とお種は自分の眉を和げるやうに撫でながら、「年をとると、女でも顔がコワく成るて……どうかして俺は平静な心を持つやうに、持つやうに、と思つて……斯うして毎日自分の眉を撫でるわい。」

「どうも貴方の調子は皮肉だ。あんまり種々な目に遭遇つて、苦しんだものだから、自然と姉さんは左様成つたんでせう。目下のものはヤリキレませんぜ。」

「そんなに俺は皮肉に聞えるか。」

「聞えるかッて――「オヽ、あの嬉しさうな顔をして食べることは、」――あんなことを言はれちや、奈何な嫁さんだつて食べられやしません。」

豊世やお仙は笑つた。お種も苦笑して、

「三吉、左様まあ俺を責めずに、一つ斯の身體を見て呉れよ。俺は斯ういふものに成つたよ――」

と言つて、着物の襟をひろげて、苦み衰へた胸のあたりを弟に出して見せた。骨と皮ばかりと言つても可かつた。萎びた乳房は両方にブラリと垂下つて居る。三吉は、そこに姉の一生を見た。

「エヲイもんぢやないか。」

とお種は自分で自分の身體(からだ)を憐むやうに見て、復た急に押隱した。滿洲の實(みのる)から彼女へ宛てゝ來た手紙が文机の上にあつた。彼女はそれを弟に見せやうとして、起(た)つて行つた。

「ア、ア、ア、ア――」

思はずお種は舊い家の内へ響けるやうな大欠伸(おほあくび)をした。

幸作は表座敷に帳簿を調へて居た。優雅な、鷹揚な、どことなく貴公子らしい大旦那のかはりに、進取の氣象に富んだ若い事務家が店に坐つた。達雄の失敗に懲(こ)りて、幸作はすべて今迄の行(い)き方(かた)を改めやうとして居た。暮しも詰めた。人も減らした。爐邊に賑やかな話聲が聞えやうが、聞えまいが、彼はそんなことに頓着して居なかつた。ドシ〱藥を賣弘めることを考へた。「大旦那の時分には、彼樣(あんな)に多勢の人を使つて、今の半分も藥が賣れて居ない――彼(あ)の時分の人達は何を爲(し)て居たものだらう――母親(おつか)さん達は皆なの食ふ物をこしらへる爲にいそがしかつた。」斯う思つて居た。お種に取つて思出(おもひで)の部屋々々も彼には無用の長物であつた。

斯ういふ實際的な幸作のところへ、商家の空氣を知らないお島が嫁いて來た。達雄やお種から見ると、二人は全く別の世界の人であつた。若い夫婦は奈何(どう)お種を慰めて可(い)いか解(わか)らなかつた。

三吉は斯の人達の居る方へ來て見た。そこは以前彼が直樹と一緒に一夏を送つた座敷で、庭の光景は變らずにある。谷底を流れる木曾川の音もよく聞える。壁の上には、正太から送つて來た水彩畫の額が掛つて居る。斯ういふものを見て樂む若旦那の心は幸作にもあつた。

「姉樣を呼んでお出。」

と幸作は妻に吩咐けた。

豊世は困つたやうな顔付をして、奥座敷の方から來た。「斯樣な折にでも話さなければ話す折が無い」と言つて、幸作は奈何に正太の成功を祈つて居るかといふことを話した。苦心して蓄積したものは正太の事業を助ける爲に送つて居るといふことを話した。お仙を連れて空しく東京を引揚げてからのお種は、實に、譬へやうの無い失望の人であつた――斯樣なことを話した。

「兄樣さへ好くやつて呉れたら、私は何事も言ふことは無い――私は今、兄樣の爲に全力を擧げてる――一切の事はそれて解決がつく。」

と幸作は力を入れて言つた。

姑と若夫婦と兩方から話を聞かされて、三吉は碌に休むことも出來なかつた。其晩も、彼は奥座敷の方へ行つて、復たお種の歎きを聞いた。姉は遲くなるまで三吉を寢かさなかつた。

夜が更ければ更けるほど、お種の眼は冴えて來た。

「姉さん、若いものに任せて置いたら可いでせう。」

と三吉が言ふと、姉はそれを受けて、

『いえ、だから俺は何事も言はん積りサ――彼等が好いやうに爲て貰つてるサ――』

斯ういふ調子が、どうかすると非常に激して行つた。幸作夫婦が始めやうとする生活、ドシ〳〵やつて來る鐵道、どれもこれもお種の懊惱しい神經を刺戟しないものは無かつた。斯の破壞の中に――彼女はジッとして坐つて居られないといふ風であつた。

お種は肩を怒らせて、襲つて來る敵を待受けるかのやうに、表座敷の方を見た。

『なんでも彼等は旦那や俺の遣方が惡いやうなことを言つて――無暗に金を遣ふやうなことを言つて――俺ばかり責める。若い者などに負けては居ないぞ。さあ――責めるなら責めて來い――』

橋本の爐邊では盛んに火が燃えた。三吉が着いて三日目――翌日は彼も姉の家を發つと言ふので――豊世やお島やお仙が臺所に集つて、木曾名物の御幣餅を燒いた。お種は臺所を若いものに任せて置いて弟の方へ來た。

三吉は庭に出て、奥座敷の前をあちこちと見廻つて居た。以前斯の庭の中で、家内中揃つて寫眞を撮つたことがある。それを三吉は姉に言つて、達雄が立つて寫した滿天星の木の前へ行きながら、そこは正太が腰掛けたところ、こゝは大番頭の嘉助が禿頭を氣にしたところ、と指して見せた。彼は自分で倚

凭つて寫した大きな石の間へ行つて見た。その石の上へも昇つた。

お種は、どうかすると三吉がずつと昔の鼻垂小僧のやうに思はれる風で、

「三吉、お前がそんなことをしてるところは、正太に酷く似てるぞや。」

斯う言つて、彼女も座敷から庭へ下りた。姉は自分が培養して居る種々な草木の前へ弟を連れて行つて見せた。山にあつた三吉の家から根分をして持つて來た鈴蘭には赤い珊瑚珠のやうな實が下つて居た。斯うして、花なぞを植えて、舊い家を夢みながら、未だお種は歸らない夫を待つて居るのであつた。

新座敷は奥座敷とつゞいて斯の庭に向いて居る。その縁側のところへ來て、お仙が父の達雄に彷彿な、額の廣い、眉の秀でた、面長な顏を出した。彼女は何を見るともなく庭の方を見て、復た臺所の方へ引込んで了つた。

木曾路の紅葉を思はせるやうな深い色の日は、石を載せた板葺の屋根の上にもあつた。お種は自分が生れた山村の方まで思ひやるやうに、

「三吉が行くなら、俺も一緒に御墓參をしたいが――まあ、俺は御留守居するだ。」

獨語のやうに言つて、姉は爐邊の方へ弟を誘つた。

午後に、お雪から出した手紙が三吉の許へ着いた。奥座敷の縁側に近いところで、三吉はその手紙を姉と一緒に讀んだ。其時、お種は幸作に吩附けて、家に殘つた陶器なぞを取出させて、弟に見せた。藥の客に出す爲に特に燒かせたといふ昔の茶呑茶椀から、達雄が食つた古雅な模樣のある大きな茶椀迄、

大切に保存してあつた。

『叔父さん、斯様なものが有りましたが、お目に掛けませうか。』

と豊世は煤けた桐の箱を搜出して來た。先祖が死際に子供へ遺した手紙、先代が寫したらしい武器、馬具の圖、出兵の用意を細く書いた書類、其他種々な古い殘つた物が出て來た。

三吉はその中に黑船の圖を見つけた。めづらしさうに、何度も〳〵取上げて見た。半紙程の大きさの紙に、昔の人の眼に映つた幻影が極く粗い木板で刷つてある。

『宛然——幽靈だ。』

と三吉は何か思ひ付いたやうに、その黑船の圖を見ながら言つた。

『僕等の阿爺が狂に成つたのも、斯の幽靈の御蔭ですネ……』と復た彼は姉の方を見て言つた。

お種は妙な眼付をして弟の顏を眺めて居た。

『や、こいつは僕が貰つて行かう。』

と三吉はその圖だけ分けて貰つて、お雪の手紙と一緒に手荷物の中へ入れた。

叔父の出發は豊世に取つて好い口實を與へた。斯ういふ機會でも無ければ、彼女は容易に母を置いて行くことも出來ないやうな人であつた。

『叔父さん、御願ひですから私も連れてつて下さいませんか。私も仕度しますわ。』

と豊世は無理やりに叔父に頼んで、自分でも旅の仕度を始めた。

三吉はすこし煩さうに『實は、僕は獨りで行きたい。それに他の細君なぞを連れて行くのも心配だ。』

『心配だと思ふなら止すが可いぞや。』とお種が言つた。

『何でも私は隨いてく。』と豊世は新座敷の方から。

『ぢや、汽車に乗るところまで送つて進げやう。』と三吉も笑つて引受けた。

いよいよ別れると成れば、餘計にお種は眠られない風であつた。其晩、姉は奥座敷に休んで弟と一緒に遅くまで話した。姉の様子も氣がゝりなので、一旦枕に就いた三吉は復た巻煙草を取出した。彼は先づお仙の話をした。あれまでに養育したは姉が一生の大きな仕事であつたと言つた。藥の紙を折らせることも静かな手細工を與へたやうなものだ、自然と好い道を取つて來たなどゝ言つた。

『彼女が有るんで、俺も今迄持續えて來たやうなものだわい。』とお種も寢ながら煙草盆を引寄せた。

新座敷の方に休んだ豊世やお仙は寢沈まつて居た。三吉は橋本の家の話に移つて、幸作の骨折も思はねば成らぬ、正太には生命が呉れてある、何物も幸作には其様なものが呉れて無い、左様神經質な眼で養子や嫁を見るべきものでもあるまい、缺點を言へば正太の方にも有るではないか、などゝ姉を沈着かせたいばかりに種々並べ始めた。一體、何の爲に達雄が家出をしたと思ふ、そんなことを言出した。

『三吉、貴様は……何か俺の遣方が惡くて、それで、家が斯う成つたと言ふのか……何か……』

お種は尖つた神經に觸られたやうな様子をして、むつくと身を起した。電燈の光を浴びながら、激しく震へた。これほど女の節を立て通した自分に、何處に非難がある、と彼女の鋭い眼付が言つた。どう

かすると、弟まで自分の敵に見えて來るかのやうな……

『姉さん、姉さん、左樣貴方のやうに――他の言ふことをよく聞きもしないうちから――何故そんなに思ひ詰めて了ふんです。もつと靜かな心で考へられませんか。』

斯樣な風に、三吉の方でも半ば身を起して、言つて見た。お種は直に話を別の方へ持つて行つた。興奮のあまり、彼女はよく語れなかつた。

『でも、何でせう。達雄さんだつても、まかり間違へば赤い着物を着なくちや成らなかつたんでせう。』

『それサ……むゝ、それサ……赤い着物を着せたくないばつかりに……』

『でせう。その爲に皆な苦心をして、漸く今日まで濟付けた。正太さんのことなぞを考へて御覧なさい。ウツカリして居られるやうな時ぢやありませんぜ。』

『むゝ、解つた、解つた。若いものを相手にするやうなことぢや、是方が小さいて……』

『小さいも、大きいも無いサ。』

『いや、解つた。』

話が次第に紛糾つた。終には、一體何を話して居るのか、兩方で解らないやうに成つた。

『畢竟――姉さんは奈何すれば可いと言ふんですか。』

『俺は正太の傍へでも行つて、奈何な苦勞をしても可いから、親子一緒に暮したいよ。』

斯う話の結末をつけて見たが、何だか二人ともボンヤリした。

拂曉まで、お種は碌に眠らなかつた。

夜が白々する頃には、豊世も床を離れて、何かゴトゴト言はせて居た。お種は雪洞を持つて新座敷の方へ行つた。

「母親さん達は昨夜遲くまで話していらつしやいましたネ。」

「碌に寢ずか。」

「豊世、お前も行つて了ふかい。」

「何だかぼそぼそ聲がしてましたが、そのうちに私は寢て了ひました。」

「豊世――俺はツマランよ。」

お仙は未だ眼を覺さなかつた。思はずお種は娘の枕許て泣いた。

三吉と一緒に朝茶を飲む頃のお種は、前の晩とは別の人のやうであつた。

「折角來て呉れたのに、今度はイヤな話ばかり聞かせましたネ。」とお種はサッパリした調子て。

「三晩とも話し續けだ。」

「いや、どうして。オホヤカマシ。」

姉弟は顔を見合せて笑つた。

豊世も仕度が出來た。やがて出發の時が來た。爐邊には、お種をはじめ、お仙、幸作夫婦、藥方の衆まで集つて、一緒に別離の茶を飲んだ。

三吉達を見送らうとして、お島とお仙の二人は町はづれまで隨いて來た。

斯ういふ道中をあまりしたことの無い豊世は、三吉と一緒に餘儀なく歩かせられた。舊い木曾路は破壞される最中であつた。時々、岩石の爆裂する音が起つた。大きな石の塊が可恐しい響をさせて、高い崖の上から紅葉した谷底の方へゴロ／＼轉がり落ちて行つた。

「女が、獨りでなんぞ、到底通られる時ぢや有りませんネ。」

と豊世は叔父に隨いて歩き乍ら言つた。

都會風な豊世の風俗は、途中に仕事をして居る勞働者の眼を引き易かつた。どうかすると、十人も二十人も「ツルハシ」を手にした工夫の群が集つて、石や土を運ぶことを休めて、道を塞いで居た。

大きな森林は三吉の眼前に展けて來た。路傍には自然と足を留めさせるやうな休茶屋がある。樹木の間から、木曾川の流れて行くのが見える。左樣いふところへ寄つて、三吉が豊世を休ませやうとすると、かみさんが茶を運んで來て、「奥さんは、今日は何處から？」などゝ聞く。豊世はハニカンでも居なかつた。自分のことは言はずに、三吉の方を指して、

「あれは、私の叔父さんですよ。」

斯う笑ひ乍ら答へる。斯の笑ひが反つて休茶屋のかみさんを戯れるやうに思はせた。復た二人は笑つて

出掛けた。

停車場の新設された驛へ着いたは、日暮に近かつた。豐世は汽車の時間を問合せた。叔父と一緒に一晩そこで泊らせて貰つて、一番で名古屋へ發ちたいと言つた。斯う頼む人を翌朝停車場へ送り屆けた時は、三吉も漸く氣樂な一人に成ることが出來た。

深い秋雨に濡れながら、三吉は森彦が家のある村へ入つた。そこまで行けば、木曾川を離れて、山林の多い傾斜を上るやうに成る。三吉が生れ故郷の隣村である。森彦の養家は小泉兄弟の母親の里で、姓は同じ小泉であつた。養父は疾に亡くなつて居た。留守居する養母、妻、子供は、三吉の周圍に集つた。其日は、名古屋の方に居る森彦、東京に修業中のお延、お絹の噂で持切つた。

舊の街道は木曾風の屋造の前にあつた。從順な森彦の妻は夫を待佗顔に見えた。

大きな木曾谷は次第に盡きて來た。兄が家のある村を離れて、更に三吉は山林の間の坂道を上つた。二里ばかり歩いた。峠の一部落から一緒になつた男と連立つて進んで行くと、子供の時に見馴れた山々が谷の向にあらはれて來た。

「三吉様。その外套も私が持たず。」

と連の男が往時と同じ調子で言つて、辭退する三吉の外套を無理やりに引取つた。斯の男は「カルサン」

を空いて、三吉の荷物まで自分の肩に掛けて居た。

「あまり構つて下さらない方が、私は難有いんです。今度は唯墓參りに來たんです。」

斯う話し／＼行く三吉は、高い山の上の日のあたつた道を歩いて居た。舊い馴染の人達に見つからないうちに、彼は獨りて、自分の生れた家の跡を見て廻らうとした。途中て、寺の方へ向ふ連の男に別れた。

洋服に草鞋穿て、寂しい旅人のやうに三吉は村へ入つた。ずつと以前大火があつて驛路の面影も殘つて居なかつた。そこは美濃路の方へ下りやうとする山の頂にあつた。傾斜に成つた道の兩側には、新規に建つた家だの、燒殘つた家だのが、樹木の間に出たり引込んだりして並んで居た。畠に成つて居るところもあつた。

石垣の上には十一二ばかりに成る女の兒が遊んで居た。猿羽織といふものを着て、何處の人が通るかといふ眼付をしながら、三吉の方を見て居た。三吉は勝手が違つたやうに、心覺えの場所を探した。

「こゝらに小泉といふ家があつた筈てすが――知りませんか。」

とその女の兒に一寸尋ねた。小娘は妙な顔をして、

「そこだに。」

と直ぐ眼前にある桑畠を指して見せた。

連の男は迎へに來た。村を横に切れて、田畠の間の細い道を小山の方へ登ると、小泉の先祖が建立し

たといふ古い寺がある。復た三吉は獨りで山腹の墓地へ廻つて見た。寺の名と同じ戒名を刻んだ先祖の墓の前を通り過ぎて、墓地の出はづれまで行つた。その眺望の好い、靜かな一區域は、父母の眠つて居る場所だ。幸作に賴んで作つた新しい墓石は塚の前に建てゝあつた。

幼い記憶が浮んで來た。以前から見ると明るく成つた樹木の間から、三吉は村の家々を望んだ。「旦那衆」の住居は多くは燒けて小さく成つた。昔は頭の擧らなかつた百姓の部落の方に澤山新らしい家が建込んで居た。

舊い馴染の人達は、何時までも三吉を獨りにしては置かなかつた。その翌日は、彼は寺の廣間で、墓參の爲に集つて來た遠い近い親戚とか、出入の百姓とか、其他小泉の昔を忘れずに居る男や女の多勢ゴチャ／＼集つた中に居た。

三日目に三吉は以前の隣家へ移つた。大きな酒屋を營んで居た家で、小泉の屋敷跡も今ではその所有に成つて居る。二階の客間は、丁度以前の小泉の奥座敷と同じ向にあつて、遠い美濃の野を一段高く望まれるやうな位置にある。そこへ主人は三吉を誘つた。桑畠は直ぐ石垣の下にあつた。忠寬の書院、母やお倉のよく縫物をした仲の間、實の居た「くつろぎ」の間、上段、離れ、會所などゝ名のつけてあつた廣い部屋々々の跡は、眼下に見ることが出來る。溫厚な長者らしい主人は、自分も往時を思出したといふ風で、三吉と一緒に縁側に立つて、あそこに井戸があつた、こゝに倉があつた、と指して見せた。忠寬の座敷牢のあつたといふ木小屋の邊は未だ殘つて居た。三吉が祖母の隱居して居た二階建の離れには、

今は主人の老母が住むとのことであつた。

『や、小泉さんに進げるものが有る。』

と主人は、手を鳴らして酒を呼んだ後で、桑畠の中から掘出されたといふ忠寛の石印を三つばかり三吉の前に置いた。

古い鏡も掘出されたことを、主人は語つた。忠寛の書院の前にあつた牡丹は、燒跡から芽を吹いて、今でも大きな白い花が咲く。斯樣な話も出た。

斯の明るい二階へも、村の人や三吉の學校友達が押掛けて來た。以前は、『オイ、三公』なぞと狎々しく呼んだ旦那衆が、改まつてやつて來て、『小泉君』とか『三吉君』とか言葉を掛けた。主人を始め、集つて來る人達は大抵忠寛の以前の弟子であつた。

『でも、忠寛先生の時分には――いくら無いと言つても――六七十俵の米は藏に積んであつた。皆な兄さんが亡くしたやうなものだわい。』

斯う笑ひ話のやうにして、高い醉つた聲で舊を語るものもあつた。

人を避けて、復た三吉は緣側の障子の外へ出て見た。家は破れても、山々の眺望は變らずにある。傾斜の下の方には、石を載せた板屋根、樹木の梢などが見える。秋は深い。最早霜が來たらしい桑畠の中には、色づいた柿の葉が今にも落ちさうに殘つて居る。

何となく時雨れて來た。

荒廢した街道について、三吉は故郷の村から美濃の方へ下りた。二里ばかり送つて隨いて來るものも有つた。ある町へ出た。そこで名古屋行の汽車に間に合つた。

正太が泊つて居るのは矢張株式に關係した人の自宅であつた。三吉は名古屋へ入つて、清潔な『閑所』の多い、格子窻の續いたある町の中に、その宿を見つけた。

『誰方？』

茶色な暖簾を分けて、五十近い年恰好の婦人が顏を出した。

『小泉です。橋本の叔父です。』

叔父と聞いて、婦人は三吉を靜かな奥深い客間へ案内した。正太も豐世も出て居なかつた。其時、三吉は、斯の婦人の口から、正太が既に名古屋の相場で失敗したことを聞いた。斯の婦人の若い養子も、正太と手を組んで、大きな穴を開けたと聞いた。

午後の四時頃に正太夫婦は散歩から戻つて來た。表二階が正太の借りて居る部屋であつた。

『豐世、何かお前は叔父さんに見て來て進げたら可からう。』

と正太は買物を命じて置いて、表から裏口へ通り抜けられる土間の板を渡つた。三吉も其後から、斯の家の母親が坐つて居る部屋を横に見て、高い壁に添ふて、箱梯子を上つて行つた。

二階は薄暗かつた。三吉は正太と窓に近く坐つて、互に顔を見合せた。正太が相場の失敗を語り出す前に、その意味は叔父の方へ通じて居た。

『や、種々な話が有る。』

と三吉は正太の並べる言葉を遮つた。何となく正太は悄然として居た。それを見て、叔父は自分の旅を語り始めた。

『どうも叔父さん、種々御世話様で御座いました。』と豊世が上つて來て言つた。『なんですか、私も是方へ來てから、また母親さんが一人加えたやうな氣がしますわ。』

階下に住む婦人がナカ／＼のエラ者で、商賣の道にも明るく養子の失敗を憂へて居ることなぞが、かはる／＼正太夫婦の口から出た。そのうちに、正太は、『お前はそつちへ行つてお出』と豊世に眼で言はせて、默然と叔父の前に頭を垂れた。

『叔父さん、私もいよ／＼洗禮を受けました。』

斯様なことを言出した。三吉は不思議さうに甥の顔を見た。

『實は――』と正太は沈痛な語氣で、『熱田へ遊びに參りましたら、その歸り道で洗禮を受けました――二度、略血しました。』

『叔父さん。』と正太は男らしい響のある調子に返つた。『私もこれから大に遣ります。醫者に診て貰ひましたところが、「お前の病氣は自分で作つた病氣だ、精神の過勞から出た病氣だ、下手にクヨ〱するな、そのかはり五年や十年の生命は引受けた」と言つて呉れましたんです。「仕事を爲ても構はんか」と聞いたら、「差支は無い、」ッて言ひますからネ。「よし、」と。「それぢや俺は是からウンと遣つて見せる、斯の病氣に罹つてから事を成した者は――いくらもある、」斯ういふ覺悟を抱いたんです。』

『どうだね、奈何な心地がするネ。』と三吉は病人扱ひにしたくないといふ風で。

『何となく、斯う嚴粛な心地が起つて來ました……』

『そいつは面白いナ。何だねえ、正太さん、今日迄のことは忘れて行るんだネ。是非とも親讓りの重荷を奈何しなけりや成らんとか、なんとか、そんなことは先づ側に置くんだネ。自分は自分の爲るだけのことを爲る――それで可いぢやないか。』

『私もその積りです。それにネ、叔父さん、銀行側の人ですら、「もう達雄さんも好い加減にして歸つて來たら好からう」――なんて言つて呉れた人もあるんです。』

『今度の旅は、君の家でも大分ヤカマシかつた。僕は君、三晩とも碌に寢ずサ。姉さんに向つて種々なことを言つて、終には、赤い着物の話まで出た。そこまで僕は姉さんには言はなかつたが、何故達雄さんが家を出る時に、自分の爲たことは自分で責任を負ひます……赤い着物でも何でも着ます……そのかはり妻子に迷惑を掛けて呉れるな、と言はなかつたらう。家を出る位の思をしても……その苦痛が何の

役にも立たない……」

「いゝえ、叔父さん、左樣阿爺の方から出て呉れゝば、まさかに赤い着物を着せるとも、誰も言ひはしなかつたらうと思ひます。ところが阿爺は左樣ぢやなかつた。『俺にそれを着せて呉れるな』と言出した……其時、もう是は駄目だ、と私も思ひました。」

斯う二人は達雄のことを言つて見たが、でも何となく頭が下つた。目下のものが舊家の家長に對する尊敬の心は、是方に道理があると思ふ場合でも、不思議に二人に附いて廻つた。その心は、奈樣な無理なことでも聞かなければ成らないやうな——

豐世が膳を運んで來た。正太は力の無い咳をして、叔父と一緒に笑ひながら食つた。三吉は姉の生涯を心にあはれに思ふといふ話なぞをした後で、

「僕は、今度は、姉さんにも言つた……莫迦に怒られちやつた……」

「なにしろ、母親さんは、神聖にして犯す可らず……吾家ぢや左樣成つて居ましたからネ。しかし、叔父さん、小泉忠寛翁の風貌を傳へたものは——貴方の姉弟中で、吾家の母親さんが一番ですよ。」

正太はすべて可懷しいといふ眼付をした。母も、幸作夫婦も、家を捨てゝ行つた父も——

「森彥叔父さんを訪ねて見やうぢや有りませんか。私の病氣のことは未だ誰にも言はずに有ります。あ

の叔父さんにも知らせて有りません。母親さんは無論のこと。唯、貴方に御話するだけです。豊世は……これはまあ看護をして呉れる人ですから……』

斯様なことを言つて、翌日正太は三吉を誘つた。彼は胸に病のある人とも見えないほど爽快な聲で話す時があつた。活氣のある甥の様子に、三吉もやゝ安心して、一緒に森彦の宿を訪ねることにした。

『森彦叔父さんも奮鬪して居ますぜ。』

と正太は箱梯子を降りかけた時に言つた。

午後に成つて、正太は名古屋の女の觀察、音曲、家屋の構造などの話を叔父に聞かせながら歸つて來た。暖簾を潜ると、茶室のやうに靜かな家の内には讀經する若主人の聲が聞える。それを聞きながら、二人は表二階の方へ上つて行つた。

豊世は行末のことまでも思ふといふ風で、考深い眼付をして、二人の傍へ來た。

『豊世さん、貴方は奈何する人ですか。』と三吉が尋ねた。『未だこゝに居る人ですか。』

『私も困つて了ひますわ。斯うして置いても行かれませんし、左様かと言つて、東京の家を疊むのも惜しいなんて言ひますし――』

『あゝ、意氣地の無いものは駄目です。』と正太は妻の方を見て、アテコスるやうな調子で歎息した。『どういふものか、豊世は、イヤに突掛つて來るやうなことばかり言ふ……斯う俺に……しかし、無理も無いサ。斯の年に成つて、碌に妻も養へないやうな人間だからナア。』

これを聞くと、豐世はもう何事も言へなかつた。萎れて、下を向いて了つた。

「まあ、森彦さんにも相談するサ。」と云つて、三吉は調子を變へて、「駒形の家に居る老婆さんネ、あの人も一生懸命で君の留守居をしてるよ。稀に僕が留守見舞に寄ると、これは旦那から預つた植木だから、どうしてもこいつを枯らしちや成らんなんて……餘程主人思ひだネ。」

正太も笑つた。「叔父さん、ホラ、私がこの夏、岐阜の方へ行つて、鵜飼の繪葉書を差上げましたらう。あの時、下すつた御手紙は、大事に取つといたります。」

「奈何な手紙を進げたつけネ。」

「ホラ、私が長良川に隨いて六七里下りましたなんて申上げました時に……あの暑い盛りに……夏草の香のする川の岸を……」

「左樣〳〵、是方の暑さが思ひやられたッけ。」

正太は深い、深い溜息を吐いた。

暮方に、三吉は東京へ向けて、夜汽車で發つことにした。叔父を見送らうとして、正太は一緒に斯の宿を出た。電車で名古屋の停車場まで乘つた。時間はまだすこし早かつた。正太は燈火の點き始めた停車場の前をあちこちと靜かに歩いて、ふと思ひついたやうに叔父に向つて、

「貴方の許の叔母さんにしろ、吾家のやつにしろ、今が一番身體の盛んな時でせう――」

見ても壓迫を感ずるといふ調子に、彼は言つた。

間もなく三吉は新橋行の列車の中に入つた。窓の外には、見送の切手を握つた正太が立つて、何もかも慘酷いほど身に浸るといふ樣子をして居た。車掌は飛んで來て相圖の笛を鳴らした。正太は前の方へ曲み氣味に、叔父をよく見やうとするやうな眼付をした。三吉も窓のところに、濡れ雫に成つた鷄のやうにションボリ立つて居た。

「叔母さんにも宜敷……」

と正太が言ふ頃は、汽車は動き出して居た。

停車場の灯、薄暗い人の顏は窓の玻璃に映つたり消えたりした。宿の方へ戻つて行く正太の姿を、三吉は想つて見た。「鄕里へても歸つて靜養したら奈何です、」と森彥の旅舍から歸りがけに甥に言つた時、正太が首を振つて、健氣にも未だ戰はうといふ意氣を示したことなぞが、三吉の胸にあつた。正太の失敗も知らず、病氣も知らず、まして彼一人に希望を繫いで居るやうな橋本の家の人達のことも浮んで來た。

「可哀想な男だ。」

斯う口の中で言つて見て、長いこと三吉は窓のところに立つて居た。

（をはり）



鷺

上司小劍

――貴下。

貴下は貴下の令夫人の父君、母君に對して如何に考へて居らるゝか。縁親は實の親よりも大事にしなければならぬ、と昔の道德は敎へてゐたさうて、この道德は今でも破棄されてゐないのでせうから、私も私の妻の父――母はない――を實の父母よりも大事にしなければならぬのであらうと思つて居ります。

けれども、私には實の父母がない。兄弟もない。母には十二の年に別れ、父には十四の年に別れましたから、實の親よりも――と云つたところで、一向見當が付かない。

友達の妻君の父母は何うであらうかと、當つて見ますと、娘の緣付いた先きなぞへは行きたくないと云つて、盆と正月と一年に二度だけ、義理一片に來るやうなのが多い。尤も妻君の母親は女性のことてすから、娘の容子が見たいのて、何家でもチョク／＼來るやうてすが、娘の好きな菓子でも買つて來て、茶の間て茶を入れて、婿の留守を幸ひに娘と〻もに婿の噂さなぞして、若夫婦の[illegible]の中の取り散らかつてゐるのを片付けて行くと云ふやうな風らしいのてす。また『お父樣には秘密だよ』と云つて、娘の身の廻はりの物なぞを持ち込んて來る母親もあるやうてす。

『家のお父樣はね、私が此家へ來てから二度ほどしか來て吳れないんてすよ、それも一寸顏を出すと直ぐ歸つて了ふんてすもの』と怨むやうに云つた妻君もありました。

ところが、私の妻の父は、私の家へ來るのが好きて、一箇月に三度は乾度來ます。それも娘や婿に會ひに來るのてはなく、孫の顏を見に來るのてもなく、只酒を飮みに來るのてす。私の妻の父は、子よりも孫よりも酒が好きてす。

來る度每に酒を出さなくてもよからう、と友達は云ひますが、出すのてはなくて持つて來るのてす。持つて來ると云つても、自分の家から持つて來るのてはありません。來がけに、私の家の取り付けの炭や薪や醬油や酒を賣る家へ寄つて、貧乏德利に一升詰めさせて提げて來るのてす。『來てから態々下女に酒を取らせにやるのは氣の毒だから、乃公が取つて來てやつた』と斯う云つてゐます。私は御承知の通り酒を用ゐませんが、酒代を每月三升か四升分づ〻必ず拂ひます。私の親孝行はこれだけてす。

――貴下。

この酒好きの老人――私の妻の父――は病氣になりました。『今日あたりはまた貧乏徳利の來る時分だな』と、私が妻に話してゐますと、集配人が靴音高く葉がきを投げ込んで行きまして、其の葉がきには、

『一筆申進候、偖拙老事五六日以來病氣にて醫師にかゝり、いろ〳〵治療相加へ候へ共、何分はかどり不申、食事更にすゝまず、やう〳〵おもゆ、かゆにてしのぎ居り候故、一寸御出下され度此段御願申上候』

と書いてあつて、宛は妻の名になつて居りました。

『一寸風邪でも引いたんでせう。此方に病人があつても見舞一つ云はず、お酒さへ飲んだら直ぐ歸つて了うんですもの……それで自分が惡いと喧しく云つて來るんですからね、眞個に勝手なんだから』と云ひ〳〵、妻は外出着に着更へて出て行きましたが、夕方に歸つて來て、

『今度はダイブ患いやうですね。胃ださうですが、癌になつてるかも知れないんですツて、あれほど好きなお酒を、見るのも厭やだと云つてますよ。何も喰べないで氷ばかり嘗めてるんですもの』と、稍心配さうに私の机の側へ來て話しました。

『あれぢや死ぬかも知れませんね……さう思ふと、この正月あたりから來る度に心細いことを云つてましたものね……それに餅を呉れいの、砂糖を呉れいのと始終何かしら持つて行きましたが、今日行つて見ると、餅も砂糖もドッサリあるんですよ、お餅なんぞ水餅にして大きな甕に一杯漬けてあるのが

臭くなりかゝつてるんてすよ、それてお餅を上げませうかと云ふと、黴の生へたのても何てもまだ持つて行つたんてすからね、全く死慾が出てたんてすよ」

妻は私の讀んてゐる彼女には分らない字の本を覗き込むやうにして、語りつゞけました。

「あのお寺にはね、まだいゝ座敷があるんてすのに、暗い厭やな座敷を借りてるんてすよ、もう五十錢も出せば明るい座敷があるのに、暗いところて辛抱してゐるんてすからね。それに可笑しいんてすよ、水餅の甕には封印がしてあるし、米箱にはチヤンと錠が下してあるんてせう……勤めに出てゐる間に盗まれるとても思ふんてせうね。あのお寺の人は皆いゝ人てすもの、惡いことなんぞするものてすか」

妻の心配氣な顔の色は、何時の間にか消えて、子供にお伽話ても聽かしてゐるやうな調子になつてゐました。

『會社は日給てせう、一日ても休むと其の日だけ貰へないものてすから、病氣になつても辛抱して動けなくなるまて勤めに出てたんてすね。だから餘計に惡くなつたのてすよ……馬鹿ぢやありませんかね」

妻の話が何時までも果てしなく續きますので、私は已むを得ず本を綴ぢて、癖のない毛に櫛の目の能く通つた妻の頭を見下しながら、

「醫者は何う云ふの」と、別に答へを求むるのてはなく、只無意識に抑揚のない低い聲を出しました。

「胃が惡いと云ふんださうてすが、其の醫者と云ふのがいづれ代診か何かてせう、あの人のことてすか

ら良い醫者にかゝりッこはありません……だもんですから、私に姉さんとこへ手紙を出して彼家のかゝり付けの醫者を呼ばして呉れと云ふんですよ、芝に醫者がないんぢやなし、態々小石川から呼ぶことはないでせう。それも博士とか何とか云ふのならですが、姉さんとこのかゝり付けの懇意な醫者と云ふのは婦人科でせう……死慾か何か知りませんが、お父ッつあんはそらヅルイんですからね、診察料も藥代も車賃も皆姉さんに出させやうと思つてるんですよ』

妻はこゝまで話して、便所に立ちました。私は机にもたれてぼんやりとしてゐますと、手水鉢の水で手を洗ふ音が聞えて、妻はやがてまた私の側へ來ました。障子の開いた時にチラと外を見ますと、二月の末の弱い日影にも春の色は見えて、疵の多い緣側は暖かさうでした。

『昨日まで姉さんとこから初が看病に來てゐたのですが、姉さんはあの身體で來月が産み月ですから初の手が離せないので、家の松を初の代りによこして呉れと云ふんですよ』

妻の云はうとするところはこれで了つたやうです。

『姉さんとこだつて、政坊の死んだ時に、お父ッつあんは今日政坊が息を引き取ると云ふ日まで見舞ひに行かないんでせう。私が喧ましく云つたので、漸と行つたのですが、小石川の家の方でお酒を飲んでゐて、本郷の病院へは到頭行かなかつたんですもの、姉さんはいゝとしても姉婿さんは面白くはありませんはね』と、妻はまた云ひ足しました。

妻は、子供をたいおんぶして戸外へ出てゐた下女の松を呼んで、芝のお寺へ行く道筋を敎へながら、五十錢銀貨を一つ渡して、

『電車賃だつて家は山の手線だから、姉さんとこから行くより往復二錢餘計要るんですもの』と、獨り言を云つてゐました。

松は看病に行つたきり三日ほど歸つて來ませんでした。何家からも何のたよりもありませんでした。四日目の夕方、毎も報い顔をしてゐる松が蒼白い、疲れ切つた顔をして、足音もなく裏口から入つて來ました。

『只今……御隱居様は大變お悪いんでございます。今日小石川の奥様がいらッしやいました時にも、物がよく仰しやられないんでございます』と、松は私達夫婦のまだ何も聞かぬ中に斯う云つて跪きました。子供は母の膝を離れて珍らしさうに松に行きました。

『姉さんは大きなお腹をしてまだ出て歩いてもいゝのかね……小石川からお醫者様が來たの』

『えゝ、お見えになりました……芝てお頼みになつたお醫者様は……』と云ひかけて、松は袂で一寸口を押へ、『大變なお醫者様でございますよ、飛白のドンックを着て、草履のやうに減つた薩摩下駄を穿いていらッしやるのです』

『何うせお父ッつあんのことだもの、廉いものばかり探すんだから……そんなお醫者様が何處に居るんだらう』

「田町の方ださうでございますが、お薬は其處へ頂きに行くのではございません。書付にして藥種屋へ二錢で私が買ひにまゐりました」

「まア厭やだね」

「方劑を書いて藥劑師に調合させるんだもの、それは日本一の醫學博士かも知れないよ」と、私は戯れのやうでもなく云つたのでしたが、妻と下女とは一時に噴き出しました。

「小石川のお醫者樣は何う云ふの、あの人も婦人科だから能く分らないだらう」

妻は忽ち笑ひを納めて、屹と松に聞きました。

「胃が餘程悪いやうですが、私の手では難かしいから、然るべき人に見せて貰ひたい、と仰しやるんでございます……それて宇都宮の旦那樣へも電報をお打ちになりまして、明日此方からも小石川からも皆さんがお寄りになつて、宇都宮の旦那樣と御一所に病院へお入れになる御相談をなさるのでございますツて……奥樣には明日何うかお早くいらして下さいと小石川の奥樣が仰しやいました」

斯う云つて、松は一寸手を支へました。

「全て物が云はれないんかね」と妻も全く心配さうな顔をしないのではありませんてした。

「いゝえ……小石川の奥樣が何か仰しやつても、うん〳〵と唸つてゐらッしやるだけで、お返事がありませんから、私も物が仰しやられないのだと思つとりましたら、今朝ほど私が七輪て火をおこしとりますと、そんなに焚き付けを使つては可けない。ツてお寢間から仰しやるんですもの、私、喫驚いた

しました」

松はまだ喫驚をつゞけてゐるやうな風でした。

「小石川の奥様がお出てになりまして、私と二人で戸棚の中の片付け物をいたしましたが、何時お煮になつたのですか、お芋が黴だらけになつたのがお丼に一杯殘つとりましたし、お正月に宇都宮からお送りになりました納豆も矢ッ張り黴になつとりましたので、そんなのを棄てやうといたしますと、お眠つていらしたと思つて居りましたのが、大きな眼をお開きになつて、お寝間から手をお振りになるんでございますよ」

斯う云つた松の顔には、何とも知れぬ一種の色が浮んで居りました。

翌る日は、妻と二人で芝のお寺に行つて見ることにしました。早くからと思つて居りましたけれど、妻が鐵瓶の湯と長火鉢の銅壺の湯とを空にして、金盥でチャブ〳〵と兩肌抜ぎの頸や顔を洗ふのや、髮を撫で付けるのや、白粉を付けるのや、着物を着更へるのに時を費して、家を出たのは九時頃でした。

山の手線の電車を工場の烟突の多く見える町の裏手に下りて、コークスや煉瓦の破片に雑つて、竹の皮や蜜柑の皮の散ばつてゐる寂しい通りから、ゴチャ〳〵と小ひさな店の多い、汚ない子供が多勢ガヤ〳〵と遊んでゐるところへ出て、それからまた寂しい通りへ曲りますと、樂書の多い煉瓦の塀と傾いた

軒に貸二階の紙札を白く貼つた家との間の路次に、『說敎△△寺』と書いた將棊の駒のやうな立札が見えて、妻は足早に驅け拔けつゝ、其の路次を先きに立つて入つて行きました。

路次の中頃にアーチ形の新しい石の門と、青苔の生へた石の塀とがあつて、其の門を入ると直ぐ石塔の込み合つた墓場で、正面に白い土藏造りの本堂が見え、左手が庫裡の玄關になつて居りました。

妻の縮緬の羽織の袖が、『釋何々』と彫つた石塔の前の花筒の、干幹びた樒に引ッかゝつて、ガサ〳〵と音を立てました。私は後を振りかへつて、石の門も石の塀も皆石塔の古いのを材料にして積み上げてあるのを知りました。

庫裡の玄關を上つて、長い冷たい廊下を行きますと、突き當りの室の黃色く燻ぶつた障子を妻が引き開けました。其處が妻の父の室で、三方の塞がつた光線の足りないと云ふよりは、殆んど晝と云ふものゝないやうな座敷で、人の顏や物の色よりも先づ第一に厭やな臭ひを感じました。眼よりも鼻の方が早く働く場所でした。

其の暗い座敷の片隅に、病人は手織木綿の夜具を引つ被つて寢て居りまして、傍には姉の家の下女が黑い顏に圓い眼を光らしつゝ、ションボリと坐つてゐました。眼が漸く暗いのに馴れて、隅々までが分るやうになつた頃、廊下に足音がして、宇都宮の兄と小石川の姉とが連れ立つて入つて來ました。

『會議で宇都宮から三里ほどあるところへ行つて居りますと、家から小使に電報を持たしてよこしたものですから、昨夜夜通して宇都宮へ歸りまして、一番で今まゐりました』と、白墨を持つて子供を敎へ

る仕事をしてゐる妻の兄は、切口上で手柄話てもするやうに、私達に云つて、フロックコートの裾を撥ねながら、病人の側に寄ると、

「お父ッつあん、何うも飛んだことで……實はもう少しおよろしいんだと彼地へお連れ申さうと思つてまゐつたんてしたが……」と頓狂な聲を出しました。

妻は姉と顔を見合はせて、ニッと笑ひました。病人からは何の聲も出ませんてした。

フロックコートの袖を夜着の下から差し入れて、兄が病人の背を撫り始めた時、姉の夫の身長の高い肥つた洋服姿も暗い室に見えましたので、一同ていろ／＼と相談を始めました。

「幾ら金がかゝても私が何うにかしますから、一つ入院と云ふことにお願ひしたいものですな」と云つた兄の聲が一際高く響いて、入院のことに話は決りました。

私が病院に掛け合ひに行く役に當りますと、妻も妻の姉も一所に行くと云ひました。臨月に近い腹をした姉は、十丁と距つては居らぬ病院まで歩くに一時間近くかゝりました。

「兄は口て巧いことばかり云つてるが、ズルイのはお父ッつあんによく似てる」

「お父ッつあんは鶩見たいに、子供は皆生みッぱなして、學校へ一つ入れたんぢやなし、片付く時に箪笥一本買つたんぢやないんてすからね。それを考へると……」

「兄だけはそれても學校へ入れたんぢやないか」

「學資のかゝらない學校てせう」

『其の代り、年老つてもあゝやつて子供の世話にならないで、一人で座敷借りしてるぢやないか』

姉と妹とはこんなことを話しながら、人の家の軒下ばかりを歩いてゐました。

軒の低い、古い木造建築の病院の應接室の、紙卷煙草の吸ひさしのドッサリ突きさしてある大きな火鉢の側では、事務員が腹の大きい姉を入院患者だと思つて、傳票と云つたやうな紙に名を書き入れながら、『お幾つですか』と聞いて『六十です』との私の答へに、『お年ですよ』と念を押しながら、妙な顔をして姉の顔を見詰めました。手にしてゐる紙片を覗きますと、『佐々木乘子』と父の名に子の字を付けてあるのです。

間違ひだと分つた時には、事務員も、傍にゐた圓い顔に薄化粧をした看護婦も、此方の女二人も一時に笑ひ崩れました。

並等の十號室と決めて、病院の門を出ると、姉は、

『あんな馬鹿々々しい間違ひが起るんだもの、此處へ入院すると、事によつたら癒るかも知れないよ』

と云ひつゝ、小皺の多い眼の廻はりをピク〳〵動かして、將來を見通したやうな風を見せました。

昏睡したやうになつてゐる病人を釣臺に乘せて病院に送り込んだ時は、松の大樹の繁つた公園の瓦斯燈に白熱の光りが輝き初めてゐました。

五人の人數は寺の座敷に集つて跡片付けをしました。病人の蒲團の下に入れてあつた革製の大きな紙

入れは、釣臺を送り出した時から姉の手にあつたが、五人は先づ其の中を調べました。

喰うものも喰はずに貯金をしてゐると云ふことは、一同の想像が一致して居りましたから、姉は一番に貯金帳らしいものを抽き出して調べましたが、それは父の勤めてゐる會社の共濟貯金と云ふもので、金高は簿記式に數字で書き入れてありますから姉には分りませんでした。銀行に勤めてゐる姉の夫はそれを引き取つて、手早く眼を通した上、

「差引殘高五圓八十錢也」と節を付けて叫びました。

「たツたそれッぱかり」と姉が先づ云つて、失望と意外との色が一同の顏に浮びました。

姉はまだ紙入れの中を調べて一圓紙幣三枚と、貸金證書五通とを抽き出しました。土地賣買の周旋てもしてゐたものと見えて、地所の覺書が貸金證書に雜つて居りました。

「奴さん、利息に眼がくれて……」と姉の夫は微笑みながら證書を一通〱披きますと、五十圓のが二通と、三十圓のが一通と、五圓のが一通と、二十圓のが一通とて、利息は皆一圓に付五錢の定めと書いてありましたが、其の中二十圓の借用主が宇都宮の兄の名であつた時は、四人が顏を見合はせました。

「イヤ何うも……」

兄は頭に手をあげて苦笑ひをしました。

「兄さん隨分ですね」と、姉は兄の拔けあがつた額を見詰めました。

「息子に金を借して證文を書かして、利息を取る氣なんだからね」と、姉の夫は兄を慰めるやうに云い

つゝ、大きな紙入れを懐中へ押し込む眞似をして、有り合はした火箸を煙管に見立て、急がしさうに煙草を吸ふ狀を、病人の健康であつた時さながらの身振(みぶ)りて見せて一同を笑はしました。

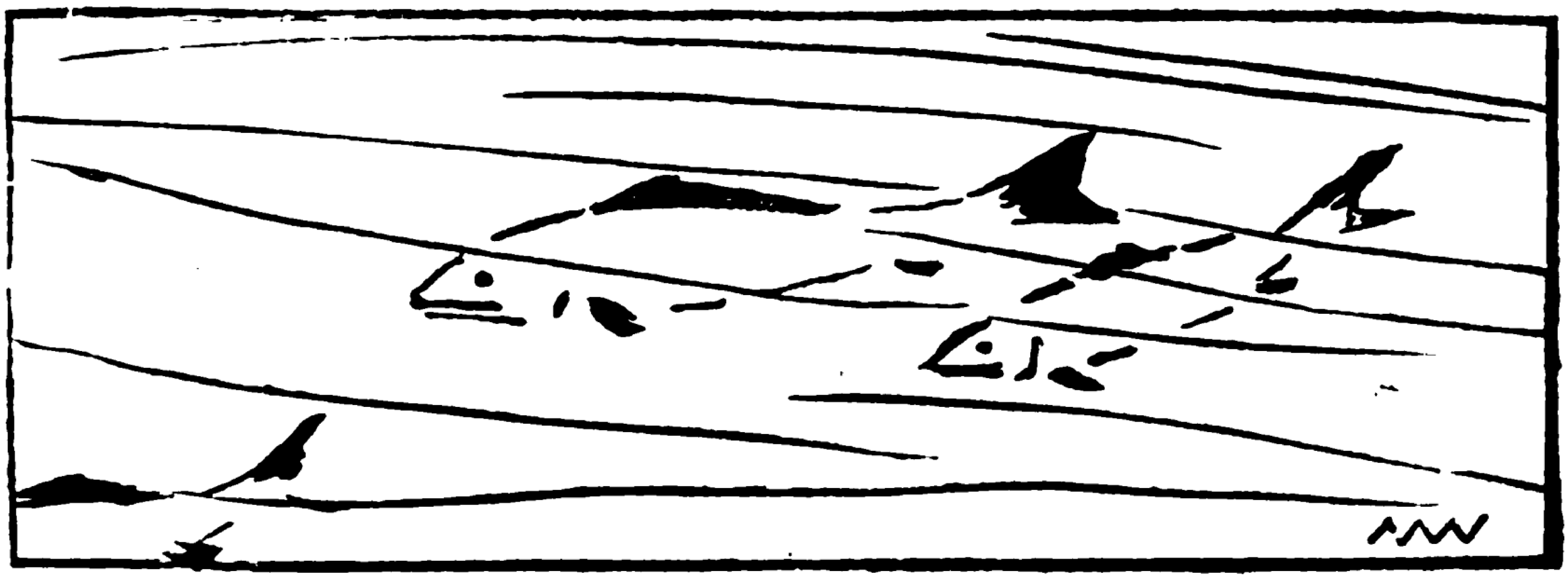
「これぢや、差し當り病院の拂ひにも困るぢやありませんか」

姉の改つて云つた聲が、陰濕な空氣に哀はれッぽく響いて、一同は只考へ込んで居りました。

夕飯の時は旣に過ぎてゐましたが、取り亂した室には茶を一つ入れる用意もなくて、三人の男は交(かわ)る〴〵燐寸を擂つて、紙卷煙草に火を點(つ)けてゐました。

私は、眼も鼻も口も人並みよりは大きい病人の相貌を思ひ浮べて、先刻妻の云つた「お父ッつあんは鶩(あひる)見たいに、子供は皆生みッぱなして……」の一句をさま〴〵に考へました。

（完）



田舍

眞山青果

一

今度この濱へ來て、かつみは初めて田舍を見たと云つても好い。尤も未だ父親の病氣で居る時分には、上總の大原だの片瀬の××亭だのと轉地したことはあるが、然しその頃はまだ小さかつた。それに、西岡の小母さんなど云ふ賑かな連もあつた。

かつみは今年丁度十になつた。こゝに居る今泉から手紙を寄來して、かつみを誘つて來たのは寂しい東京の盂蘭盆が過ぎて間も無くの日であつた。

その日かつみは重の井の女中に膝を抱かれて、千代の間の隅から壽美藏の伊勢音頭を一幕見た。白地の浴衣を着た見物が土間のそこゝに團扇をヒラ〳〵動かして居た。濃い藍絞りの木綿幕が靜かに引かれると、晝芝居

の靜かな空氣をどよまして鳴り溢れる太鼓の中から、二つ打つシャギリ留めの木の音が冴えた響通つた。

かつみは息詰まるやうな小さな胸廓を外の夕闇にほぐしながら、初夏の薄闇らしい露地をさびしく家へ歸つて來ると、母親はもう銀坐のお店から歸つて居た。灯の無い家の中は鼻に匂ふやうに暗かつた。これを着られると肩が落ちてかつみは悲しくなる洗洒しの筒袖浴衣を着て、眼鏡を外した顏は妙に顏に癖が付いて見えた。

「お前、今泉の小父さんを知つてゐるでせう。そら、何時か蒲鉾だの何だのを送つて下すつた」

母親は今日來た手紙のことを話して聞かせてから前髮を梳き下しながら斯うかつみに聞いた。

「知つてるわよ、坊だつて、ほら、あの髯柔和な小父さんでせう」とかつみは受け口の唇に力を入れて故と突き反らすやうにした。

「新しいお嫁さんが來て被在るよ。それでも好い？それから、お母さんも」

「お嫁さんが來たの、然う、然う。おや坊が見て上げるから好いわ。本當にお嫁さんが來たの」

「あゝ、然うだッて」

斯う云ふ話をしながら親子の寂しい晩飯は濟んだ。兄の昂は午後から近所の友達どもと金杉橋へ遊びに出て未だ歸らなかつた。

淺い色の岐阜提灯が靜かに動いて、この前良人が京土産に買つて來た猪の子形の蚊燻しからは、青臭

いやうな草蓮の煙が低く吐き出された。乾し臺のある前の家一軒越すと、その前は電車も通る、俥も通る、終日撒水の車も通るのだが、夕暮の空氣は重く凝固なつてこゝまでは動搖が傳つて來ない。靜かにこの家一軒を暮れさせて行くやうに見える。

母親は何を考へるとも無い姿付きて、空の底の何所かに殘つて居る餘光を探がすやうな寂しい目付して外の夕闇を眺めて居るのであつた。

かつみは何時もの事てはあるが、母の斯うした俛れた心持を見ると、壓されるやうに心が重たくなるのてあつた。

今大阪へ行つて居る祖母――父の母親には隨分ひどく叱られ鳴られ、時には撲たれもしたが、然し遊び盛りの昴にはその年寄の頑固な折よりは母親の涙含んだ目を見せられるのが辛かつた。今晩も破れ笊に小半分拾つて來た蜆貝を窃つと戸ノ口へ隱して置いて、一日に燒けて光かる顏を恐る／＼臺所から入つて來た。

茶の間の緣端に出て、默つて居る母親の方を見い／＼暖和しくお膳の晩飯を食べて、ソツと暗らい方から蚊帳へ入つた。

「あら、昴さん。今まで何處へ行つて來たの。又、川てせう。」

老せた妹に斯う云はれても默つて聞こえない振りをして居る。頸を斜しげて窃つと母親を覗ふと、こ

れも又全く氣が付かないやうに狭い垣根際に植え付けた秋草の叢に集る夏の夜の闇を眺めて居た。

活版屋横町の空地では今夜も小供どもの涼み相撲が初つたものと見える。ワッと囃す見物の聲が餘り遠いところからのやうに聞えて來た。

母親が斯う云つて佛壇の灯を消しに立つた時、近所の時計が明らかに十打つた。母親は故と閉め殘した雨戸の隙間から、闇と云つても夏の夜の光かる闇夜を眺めながら、暫く團扇をゆるがせて居た。

「最う寢ませうかねえ、起きて居たづてツマらないから」。

母親を憚かる小さな私語がポツ〳〵して、小さい二つの枕の間から聞えた。話に身が入つて、偶もすると驚喜の聲を上げるのは妹のかつみであつた。「然う」。とか「あッ」。とか籠み上げる喜び聲が交つた。それは兄の昴が三つ多い自分の經驗からして、自分の知つて居る――寧ろ思つて居る田舍と云ふものに就いて話して聞かせるのであつた。蒼い波の頽れる海際、白雲が流れて隱れる山、サラ〳〵と音して流れる河、光かる大野に咲く赤い白い花、軟かい蝶々の翅、松の林、自然に生いた胡頽子の木、木苺の實それは小さいかつみの好奇心を溢れ立たせるやうな話ばかりであつた。

昴は一年の夏から秋にかけてを、父と一緒に熱海の海邊に送つたことがあつた。父は或る新聞に長篇小說を書く約束で居ながら、直ぐ目に近かい山と海との心持に引かれて、毎日〳〵釣竿を擔いでは谿流の巨石の上に日を送つた。その頃が最う病氣にかゝり初めた頃で、好く盗汗が出て困まると蒼い顔して居た。或る夜目覺めると、昴の目を蓋するやうに、枕元の金盥をかくしたのも丁度その時であつた。最

う一度眠つて蒼白い曉の光りて見ると、仰向けに寢た父の前額には氷嚢が乘つて居て、スヤ〳〵眠つて居る顏が何時になく皺多く皮膚がくろずんで見えたのを覺えて居る。昴は話して居る間に、暗らい聯想がツイその父の顏まで歷々と目の前に顯はれて來るやうになつたが、それは態とでも忘れて山や海の朧ろな記憶を呼び起して妹に話した。

「昴さん、嘘だわ。そんな川にお魚なんか居るもんですか」

かつみは身體中に溢れて來る好奇の喜びを無理にも信じたいと思ふ所から、故と時々理由も無く兄の話に反對してこんな事を云ふのであつた。

「嘘なら行つて御覽、僕アお父さんと行つてチヤンと見て來たんだから」

「ぢや、こんな大きなお魚が泳いて居るのが見える」

「見えるとも、ツ、ツ、ツウツト、水を撥ねくらかして、逃げて行くんだよ」と昴は怜悧さうにクル〳〵した目を燿やかして息まで興ませて居る。

「ぢや、取れば好いに、取れないかしら、坊にも」

「お父さんは取つたよ、こんな……こんなに大きい黒鯛を」

「まツ、黒鯛」

かつみは頭が疲れるほど喜んで床の中に手足を踊り動かすのであつた。すると、最う遠うに眠つてしまつたとばかり思つて居た母親が懶るさうに寢返りして、

「かつみさん、最うお寢なさいよ、十二時過ぎてますよ」と云ふ。
「昴さんも寢るんですよ」
「ハイ」
昴は待ち兼ねて居た母の聲に喜んで、何時になくハツキリした調子で斯う返事するのであつた。でもかつみは身體中がうづくやうで中々寢られさうは無つた。
「母さん、本當。田舍へ行くと何處にでも蟹なんて居るの。足の下から小さい蟹がサラ〳〵ッて逃げて行くッて本當？」
「あゝ、居ますよ」と云ふ聲は半分夢の中に眠つて居る。風通しの暗らい、厚い石壁の中に一日の仕事に疲れ切つて、この頃は足に水腫さへ來たと云つて居る母親は、ムッと顏を撫でる夜の暑さに中てられて、懈るッこい腕を疊の上へ投出して居る。
「そして、その蟹、坊にも取れるの、幾つも〳〵」
「えゝ、取れますよ」
「こんな、こんなに大きいお魚が泳いで居るのが見える？」
「えゝ」
「お父さん、こんなお魚を本當に取つたんですか、母さん」
「…………」

「ねえ、母さんては。」

「…………」

團扇を動かして居るから、未だ眠らないのと思つて、斯う追駈け〳〵問ふて見るが、何時となくスヤ〳〵眠る母親の鼾が靜かに聞えるのであつた。

何所の家の涼み臺からか鈴虫の澄んだ聲が聞えて來る、そして、雨戸の間が光かる夜の遅い蒼い閃が時に、曲線(カーブ)を曲がる電車の蒼い焔に燃えるのであつた。

卯も一日の疲れに眠つた。かつみは何時までも色々の事を考へては見て居る。

二

「駄目よ、唯流したッて。罰があたることよ。」

「だから、あすこの屋根へ抛り上げて了ふんだ。」

「いやよ、いやよ。お酒を飲ませないと憤つて了ふことよ。」

「お酒？」

「え〻。」

「坂本さん所へ行かうか、那所(あすこ)にお酒はあるよ。」

行きませうか。お盃にポッチリで好いからお酒下さいッて、坊が小母さんへ然う云ふわ」。

「僕だッて云ふよ」。

「昴さんだッて、そりや好いわ」。

斯う云ふ話が二三日の間、母の歸らない夕暮の檐端を見上げる小さい二人の唇から出かれた。その翌日から毎日引續いて雨であつた。母親は本綿合羽の裾を濡らして、歸つて來る時間も常よりは遲くなつた。銘々申合はせて交代に三日づゝ店を休む缺員の爲めに、電話係とは云ひながら母親の退りも自然外の人同樣後れるのであつた。

「ぢやアね。晩のお菜も三浦へ賴んで置くから、六時過ぎても母さんが歸らないやうだつたら、行つてお婆さんから頂いて來るんですよ。昴さん、お前兄さんだからかつみさんを使つちや不可ませんよ」。

母親は出掛けに斯う云つて用意して、纔か家賃と米代にも足りないほどの糧を稼ぐために銀座の商店まで出て行くのであつた。

或る晩、母親は店の支配人から鼠色の封筒に包んだものを受取つて雨の中を歸つて來た。途中或る書籍店へ立寄つて、良人の筐底から出た斷片的な隨筆類を一冊に纏めて出版する相談を初めた。それは元々あちらから云出した事ではなし、未だ遺骨も葬らずに飾つてあつた所へ來て、是非何んでも出版さしてくれと、家探しゝても反古紙を掻集めたい申分であつた。

その時は斷つた。本屋は變な顏付して歸つて行つた。それを今度は此方から相談するのであつた。疲

れて會社から歸つて來る夜々、良人が書齋にあつた手文庫から反古紙で一杯になつて居る支那カバンやらを周圍に取り亂らして、その中から一枚〳〵膝の上に皺を伸しつゝ、書き捨ての原稿を讀んだ。兎に角一冊として出版されるだけの紙數にはなつた。

「何れ拜見しまして、何分少し時節が遲れた形がありますからね、何んなら私の方から人を差上げて浄書さしても好しう御在ますですが。」

本屋の主は如才ないことを云つて、然う氣乘りして居るとは見えなかつた。まさ子――かつみの母親の名――も、それは知つて居る。良人が死んでこの二三年この方の文壇の變りやうと云つたらそりやひどいものであつた。毎月〳〵月初めに出る雜誌の廣告を見ても、死んだ良人を中心として論ずる論議は少くなつた。新しい、思ひも掛けぬ人々が世に出た。

死んだ良人は身體が過去の人となつたやうに、その藝術も過去の人として語られるやうになつた。

「何分お願ひ申します。色々私の方にも都合があるもんですから。」と、斯う云つて笑つた。

「えゝ、そりや最うお察し致しますよ、何しろ先生は惜しい事をなさいました、お兒さん方の爲めにも今二三年は死なれない方でしたのにな。」

書籍店の主人は斯う云つて送り出した。

雨の降る暗らい晩であつた。芝居小屋の前には花瓦斯のみ徒らに燃え榮えて、裸な幟竿が雨の暗に突立つて居た。まさ子は何んとなく心の底に形の無い饑渴を感ずる氣分であつた。

かつみはこの二三日、人の顏さへ見ると田舍の話をした。自分の心持を滿たさう爲めもあるが、一つは又田舍と云ふものを他に聞かせたくもあつた。母親の顏を見るなり又それをねだるのであつた。

「そりや行つても好いけど……。」

母親は斯う云ひ掛けて考へて居た。晩飯前だけれど、格別喰べるものを欲しいとも思はなかつた。

「かつみさん、だけどもね、若しかして、かつみさんを家の子にしたいッて、今泉の小父さんが然う云つたら何うするの。」

夜、蒸暑い蚊帳へ入つてから、下膨れの軟かいかつみの頰へ顋を置きながら、偶と斯う云つた。

「坊を、小父さんが。」

「然うさ、その時は小父さんの子になりますか。」

「いやよ。たゞ泊るだけ、直ぐに歸つて來るのよ。」

「けれど、小父さんが何んッて云ふかも知れないもの。」

「厭よ、厭よ、厭よ。……母さん、そんな事を云つちや厭よ。」

かつみは蚊帳を洩して來るランプの灯にやゝ衰へた母の顏を凝つと見詰めて居る中に、何んとも云はれぬ悲しい心持になつてシクシク泣き出した。

それを宥める母親の聲も、何時の間にか曇つて、その大きな目の底には淚が滲み出して見えた。

三

かつみは初めての長い汽車に乗つた。昴はガラス板にピッタリ顔を喰付けて、汽車と共に走る青い野と山を眺めて居た。鐵橋の長い轟きに身を揺られては、面白さうに眼をクル〳〵さして室内を見廻して居る。

かつみも初めは兄と並んで外を眺めて居たが、直ぐ目下の砂利が風を巻いてスウと線路に流れるのを見ると目がクラ〳〵する氣分になる。

電信柱が列をなして走るのが、丁度生きて居るものでもあるやうに見えた。

「かつみさん、暑いよ。顔を中へ入れてお置き。」

母親に斯う注意されて引込ました少女の耳朶は少し蒼かつた。

「母さん。」

かつみは甘たれた調子で母の膝にまつはつた。遠く窓の外に走る山際の蒼い山々を空しく見て居る。

「何うしたのさ、かつみさん。」

「私？……　何うもしやしないわ。」

「おや、チャンとして被在い。皆さんに笑はれますよ。」

母親は香を撒り込んだハンケチで襟元をあほぎながら美しく微笑した。汗に光かる顔をならべた三等

車のうちでは、際立つて威のある上品な母の顔がうれしかつた。筋の荒らいお召の單衣が背高かい母親の姿にシットリ落付いて、肩から肘へ流れ、腰から兩の脛へ流れる線が圓味を持つて筋が伸びて居る。光かる緣の近眼鏡もわざとらしくは見えない。

かつみは嘗つて父親等と一緒に鎌倉の八幡樣の石段から材木座の方へ遊んだ日の午後を思ひ出して居た。

秋の日に銀杏の葉がハラ〳〵と降つた。そここの茅葺の家の垣根をのぞいて見ると、井戸端や畑畔に紫色の秋草が盛りに咲いて居た。母親のパラソルは父が銀座から自分で見立てゝ買つて來たもので、日を透して見ると靑味の含んだ紫色に光つて居た。

「私にや派出過ぎるわ、何んぼ何んだつて。」と、嬉しさうにして斯う笑つた、その頃の苦勞の無い母親の笑顔が目に見える。

齒並の小さい、白い、父親も同じく笑つて居た。

汽車が進むほど、兩側から厭する眞夏の綠が濃くなつた。激しい日が降りそゝぐ時にはそれが白くキラ〳〵と光り、雲が流れて日が影つた時には急に綠が年老いたやうに心を吸ひ込む。まだ正午過ぎて間も無いとは思ひながらも、妙に日の夕影を思はずに居られなくなるのである。

窓際から凝つと見詰めて居ると、何時になくその綠りの顫えに誘はれて庇弱なかつみの神經も一緒に顫えた。

向側に腰掛けて、始終ヂロ／＼と母の顔を見詰めて居る人があつた。昔風な襟の付いた木綿縮のシャツを着て、臭さい卷煙草を太い指にふかして居る、ガサツな誰の目にも役場の書記とも見える田舍の若者であつた。

「さア、窓を。」

ある小さな停車場を出て間も無く、その人は車中の硝子窓を閉めて廻つた。昴も窓を閉められて不平さうな顔して母の隣りへ戻つて來た。

ガアと音して汽車は暗らきへ走つた。トンネルであつた。夜が明けるやうに蒼い薄明りから蒼い日和へ汽車が走り出た時には、かつみは母の膝へ深かく顔をうづめて隱れて居た。

「もう好いのよ、かつみさん。」

斯う云はれて初めて、脅かされた顔を振り上げた。その田舍風な男はゲラ／＼咽頭佛を見せて笑つて居た。

「トンネル。」

「トンネルだつた。」

小兒ども二人は斯う云つて驚きの顏を見合はせた。特にもかつみはホツト溜息を吐くのであつた。例の田舍の人はさも可笑しさうに又一層笑つて、

「そんなに長かつたんですか。この先き箱根へ行くと、こんなトンネルなぞ十も二十も續いて居ます。

――全體どちらへお出なさるんです、靜岡ですか、沼津ですか、それとも……」。

と停度なく母親へ話しかける。

「國府津まで參ります」。

母は言葉少なく斯う答えた。出來る事ならかつみは、「何所へ行つたつて餘計なお世話よ」。とキッパリ云つてやりたかつたのだが、何んだか恐ろしいやうな氣持がして、母の陰から小さくなつて、それでも目を固めてその男を見てやつた。齒の黃色い穢ない色の男であつた。

その男はそれにも滅氣ず、尙ほベラ〳〵と唾を口に貯めながら母親へ喋つて居る。穩和しい母親はいやをいやとハッキリ云ふ事も出來ないて、俯向きながら言葉少ない應答へして居る。

かつみは何んとなく口惜しくなつた。それと共に、今度行く濱のことを聞くと、又色々の事が氣にかゝつて來た。今までは今泉の小父さんと云つたゞけて、直ぐ心に判かつて居るやうな氣もしたけれど、好く考へて見ると記憶がボンヤリ心に霞んで居て、それとハッキリ捉えられさうにも無い。あの人か、この人かと色々に考へて見て居る。

酒に醉ひさへすると、腹一面に人の顏を描いて――兩の乳を目玉に臍を口に見立てゝて、肌拔ぎになつて踊るのが畫師の酒井さんてあつた。馬のやうに長い穢ない顏て居ながら、それても時々風車のおもちやなぞを買つて來て來れる遠野さん、髯の立派な伊澤さん、銀行に居る岡田さん、津田さん、三村さん、川邊さん、何れも賑かな話して笑つて歸る人だちてあつた。お客さへあると夜深かしゝて話すのが

父の癖て、一晩睡つて目を覺ましても未だ酒を飲みながら議論して居るやうなとは珍らしくなかつた。何うかすると、二晩も三晩も續けて泊つて行く人もあつた。先に居たとくや（下女の名）は始終ブツ〳〵臺所に云つて居て、奥樣も旦那樣もそれは好い方てはあるけれど、あのお客樣には閉口するツて零して居たのを聞いた事がある、又母の里親も始終、「お前のところのお父さんはお客さんて貧乏して、加之にその爲めに身體まで害して居るんだ」と斯う云つて居るのを聞いたことがあつた。

然し賑かなことてあつた。その頃は始終賑かな元氣が家内に溢れて居て、外の正月や盆は別に心付かないほどてあつた。

最ういよ〳〵降りる停車場へ近かくなつたと聞いた時、かつみは何んとも云はれぬ不安に心を襲はれた。

「母さん、今泉の小父さんて、どんな人なの？」とやゝ物を思ふやうにかつみは母に聞いた。

「今泉の小父さんだよ、坊は知つてるツて然う云つたぢやないの」。

「だから、どんな人よ。あの髯柔和な小父さん」。

「然うさ、知つてるぢやありませんか。そら先に四國町のお家へ好く被來つたてせう、ね」。

然しかつみには好く思出せなかつた。思出せないと云ふよりも、心に描くその人の顔がクル〳〵動いて纏まらないと云つた方が好いかも知れぬ。

「僕は知つてるよ、そら何時か何か書いて來て家の父さんに叱られた事があつたつねえ、姉さん」。

「あゝ、然うだよ。」
「何時だつたか、そら向島へ行つた時に今泉さんが醉つて、大きな聲で唄を歌つて歩いたぢやないか。ねえ、母さん。」
「あゝ、然うだッたね。」
「そりや面白い人よ、僕大好きだ。今度行つたら大に暴れてやるんだ。」と昴は逸氣になつて居る。
かつみは兄の話を聞きながら、初めの内は一々目で相圖してそれを母親へ確めるやうにして居たが、餘り兄が逸氣になるのを見て、少しは口惜しいやうな氣持もせずには居られなかつた。
「知つてるわよ、昴さん、坊だつてチャンと知つてるわよ。」
「ぢやどんな人。」
「背のむじやくく生いた人だよ、そして脊の高かい。坊が、おんぶしたことがあるから好く知つてるわよ。」
「ぢや目鏡を掛けてる？」
「掛けて居る。」
「どんな、母さんのやうな金縁の目鏡？かつみさん。」
「えゝ、金縁よ。」
「嘘、嘘、かつみさんは知つて居ないんだ。金縁ぢやないや。」
「知つてるわよ、本當に。」

「だッて、金縁の目鏡ぢやないよ、ありや鐵なんだよ。」

「ぢや、鐵。」

「矢張り知つてないんだ。」

小見はこんな事を云ひ爭つて居る間に、母親は固くキチンと腰掛けた膝の上に、信玄袋から表裝の美しい小説を出して讀んで居る。この頃は會社の方の用が忙がしいので、歸つて來てもあれほど好きな小説を讀んで居る閑暇もないのであつた。

向側の田舍の人は手持不沙汰に煙草ばかりやたらにふかして居た。そして、赤味の筋張つた目を上げては無遠慮にジロ〳〵母親を見て居る。

かつみはその目付が氣になつて〳〵耐らなかつた。

四

今泉の小父さんは昨夜から小田原へ行つて居なかつた。少し斜視に見える若かい嫁さんが手をかつみに出したけれど、かつみはその方へ行かなかつた。かつみはまだ小さい時から何方かと云へば男の人の手に抱かれて遊んだ。母の傍へ小さく坐つて、初めての家の内を見て居る。

「是非一度あがるやうにッて、始終然う申されて居るんですけれど、田舍に馴れますとツイ億劫になり

ましで。」

「然うて御座いますとも、もう私なぞもこんな身體になつてから漸々料類廻りが出來るやうになりました。」

「それに酒をいたゞきますものですから、何うしても食物も女中まかせにばかりも出來ませんので。」

「同じことですよ、私なぞも本當にお酒では弱らされましたよ。」

「先生の御酒もお強かつたと聞いて居りました。」

「強いと申すより好きだッたんでせうよ。もう朝で好し、晝で好しと云ふんですから耐りません。病氣前なぞは日に一升いくらと頂いたことがあります。」

「たゞ好い事には、宅ではどんな事があつても、晝間御酒を頂いたことは御座いません。その代り、夜はもう大抵十二時一時なんて御座いますよ。」

斯う云ふ話が茶の間で取り代されるうち、かつみは母の腰骨を離れず目の隅から内の中を見て居た。昴は書生の太田と最う友達になつて、二階へ上つたり下りたり家の中を駈擦り廻つて居る。

「母さん、二階から見ると直ぐ下は海濱なんだよ。」

「大きな松原があるよ、川も向ふの方に流れてるよ。」

昴は一度〳〵息を窘ませては話しに駈下りて來る。母に亂暴を叱かられても、そんな事は耳にも留まらないと云ふ風であつた。

「かつみさんもお二階から海を見て被行い。お船が幾艘も浮んで居ますよ。」と嫁さんは愛措らしく云ふ。

「おや、お前お二階へ行つて御覧、小父さんのお部屋だからお悪戯をしちや不可ませんですよ。」

と、母親も云ふ。

「いや、母さんも來なければ。」

かつみは上目に母の顔を見ながら離れなかつた。

田舍とは思ふが、茶の間にも電燈があつた。水蜜桃を盛つて出した西洋皿も水竹色にキラ〳〵光つて東京のものと然う變つてゐるとは思はれなかつた。

暫くして、かつみは母親に連れられて二階の手摺から外の景色を眺めた。雨がシト〳〵降つて居た。緣側の片方は廣く煙つた海。また他の片方からは屋根ばかり大きな、草葺の村の家が雨の中に縦いて居る。大抵蔀簾を軒にかゝげて、家の中は腐れたやうに暗かつた。

その家並越しに廣々とした蒼い野がひろがつて居る。鳥が飛んで行つても見えなくなる、ズッと向ふの野境は矢張り蒼い山々に取り卷かれて、その雨にけぶる襞々には白い雲が去來して居る。

かつみはこゝへ來て初めて遠くと云ふものを知つたやうに思つた。山々には黒い蒼味と黄色い蒼味が縞を織つて居て、その黒いのは蜜柑の畠、その黄ばんだのは草の山と敎へられた。

夜になつて、使をやつて、初めて今泉は小田原から歸りて來た。入り口から賑かな、元氣の好い聲を聞かせた。ことに、かつみには挨拶より先に手を出して好く來た〳〵と喜んで居た。

かつみは直ぐこの人のことを思ひ出した。父が平塚の病院で亡くなつた時、この人は當分暫く泊つて居て、家の事を色々働いて居たのを思ひ出した。出されるまゝにその人の手には縋り付くことが出來た。たゞ、これほど賑かな人にも似合はず、家の人、特にもその嫁さんに向ふ時の聲も顔も險しさと云つたら無つた。一度答へた返事を故と意地惡るく問返したり、物を云ひ付けるにもなるべくその方は見向かないやうにして云つた。

嫁さんも今までとは違つて、今泉の前にはオド〳〵して口も利けなかつた。その晩、自分等が二階へ寢てから聞いて居ると、酒を飲みながら何かブツ〳〵口小言を云つて居る。「顔も見たくない」「だから家に居るのがいやになるんだ」と斯う云つた聲が途切れ〳〵に聞えて來た。

かつみは妙に胸を冷却されるやうな氣持がした。

五

翌日は大きな河を見に行つた、又波際の冷たい濡砂の上も歩いた。潮先がサラ〳〵と流れ寄ると、かつみは白い泡に驚いて叫びながら逃げた。

長い木橋は荷馬車が通る毎にグラ〳〵と搖れ動いた。朽ち腐れた欄干にもたれて河を見下すと、日にきらめく砂利の中を淺い水が澄んで流れた。河端の田圃に腰を泥まぶれにしながら、小さな蟹を幾つも捕つた。それを赤白の源平てくゝり付け、燒砂の飛ぶ長い田舍町を歩るかせた。

家まで歸るうちに、生き殘つた蟹は二つしか無つた。嫁さんは家を出ると顏まで若々しくなつて、かつみと手を曳き合ひながら娘らしくふざけて居た。青い風に向いて髮の毛を吹かれながら、讃美歌のやうな唱歌も唄つて居た。

「かつみさん、ユックリ泊つて被在いよ。母さんが居なくッても好いてせう。私一所に遊びませう」。

松原の涼しい影から海を見詰めながら、顏をうつむけて寂しさうに斯う云つた。今まで人の前にはしやいで居た人とは見えぬほど、急に老けて顏容(かほだち)までくすびて見えた。

かつみはなんと無くこの人を氣の毒には思つた。然し妙にこの人の側へ寄られるのがいやなやうな氣がした。

「かつみさん、田舍は面白くない？え、田舍は面白くないてせう」。

と煩さく聞いて、まだ此方が何んとも答へもしないのに、

「本當に田舍はいやね、東京が好いわ。私も東京へ歸りたい」。と疾ましげにこんな事も云つた。

「貴方、東京」。

「えゝ、東京よ」。

「だらば、東京へ歸つたら好いぢやありませんか、今泉さんへ然う云つて」

「駄目よ、今泉さんはね、外の人の云ふことなら何んでも聞くけれども、私の云ふことだけは聞いてくれないんですツて」。

斯う云つてホッと深かい溜息を吐くのであつた。

かつみは日に幾度と云ふこと無く濱へと出た。麥藁を波に投げて、神樣ころがしと云ふ遊びもした。又、砂地に堤を築いて波投げと云ふ遊びもした。今泉の小父さんはその裸體な大きな身體に海水帽を被つて、遊んで居る自分等を守りして居た。

寂しからうと云つて、今泉は村の小兒をかつみの友達に賴んで來た。然し、妙に重ぼッたい發音の、そしてギクシャクした馴れない姿付を見ると、一緒に遊ぶと云ふ氣にはなれなかつた。

一緒に遊んで居る二階からツッと降りて來て、萎れながら、

「小父さん、あの子を歸して」。と賴む時もあつた。

そして、兄の昴の後ばかり追驅けて居るのだが、昴はもう村の漁士の子や近所に避暑に來て居る小兒どもとスッカリ友達になつて、女の妹など顧みて居る遑がなかつた。目ばかり光らせて、終日海邊にばかり出て遊んで居た。

「昴さん、昴さん。」

斯う泣き聲になつて追駈けるかつみの甲高かい聲が好く聞かれた。

母親は二階でも階下でも、風の通る涼しい所にうづくまつて、始終本ばかり讀み耽つて居た。

濱へ落つる日は强かつた。物と云ふ物に影はなく、總てキラ〳〵と光つた。

かつみはその日の色を東京よりは痛いやうに思つた。物を透さぬ光線はチク〳〵と眞直に降りそゝいで、形の輪廓がクル〳〵とくるめくやうであつた。

二階には風が來る。然し、直ちに自然の懷から發生されて來る新鮮なる風は、そゞろ歩きに涼み臺に、都會の中で吹き通るのとは違ふやうだ。野を見ても、山を見ても、單純な色彩が深潭の色をなすが如く深かく重つて居る。

かつみは何んと意識するでも無いながらに、妙に自然の深かさと重さに胸を壓しられるやうな氣がした。

「田舍の風は虫齒に好くないわ。」

或る時、偶とこんなことを云ひ出して人々を笑はせた。

かつみにしては、眞面目に云つたことが、人に正直に受入れないのを見て、何んとなく物足りなかつた。

小さな顔をひねつて考へてゐた。

六

三日目に母親は昴とかつみとを置いて東京へもどつた。丁度この日で、商店の休暇が過ぎるのであつた。

「おかげ様で、ホントに生のびるやうでした。又暑苦しい思ひをしなければなりません」と寂しく挨拶して、夕方の汽車で歸つて行つた。

昴は兎に角、かつみを心配して、今泉も再三念を押して見たが、かつみは大丈夫一人で殘られると云張つた。西岡の伯母さんのところへ行つて三晩も泊つたことがあると云つた。

「お母さんが居なくッて、後で泣かない。本當、かつみさん、本當に」

血色の悪るい今泉の妻は不安さうに何度も念を押して、

「本當に然うなら好いけれど、——歸るッても然う急には歸れませんよ。好いこと、それでも」

「好いわよ、本當に泊つてるわ」

斯う云ひ張つて殘つた。

その晩は何時になく今泉も酒を一緒に飲んで、目かくし遊びをしたり、お供びの相手になつたりして

家内中賑かに笑つて夜を深かした。特にかつみは尺度を杖にして、年寄の身振りて家中歩るき廻つた時には、皆目から涙を出して笑つた。

「お父さんの子だよ、全く、思ひ付きがザラの小兒ぢやない」

今泉も腹をかゝへて可笑しがつた。面白い〳〵て何時よりは深かく酒を過ぐしたやうであつた。

「かつみさんは最うお家の子だよ、歸らうたッて東京へは歸さないよ」と軟かに撓ふ身體を自分の傍へ引寄せて玩具にして遊んで居る。

「その代り、東京はお正月のお家にするの。好いてせう。てないと、お母さんばかり一人て年取つてお婆さんになるから」

「旨い事を云つた」

額がテラ〳〵酒に光かる今泉は、むつましさうにその妻と顔を見合はせて吹き出して了つた。

翌日、かつみは人より早やく目を覺ました。夏の朝の眩しい日の光の底に、最う近寄つて來た秋の心持を流れさせて見えるやうな日であつた。

かつみは淨手しない顔を冷かな白い日にさらして、縁先の糸瓜棚にザワ付いて朝の風の過ぎるのを見て居た。風の路がハツキリ知れるやうに、莖をはびこらした青葉の間をくゞり抜けて、その葉裏が白々

と動いて見えた。

白いエプロンを胸から掛けた今泉の妻が臺所から出て來た。ションボリして紺青色に澄んだ空を見上げて居るかつみの肩へ手を置いた。

「お母さんが戀しくなつたんぢやないこと、え、かつみさん。」

「いゝえ。」とかつみは踵てクルリと廻つてそこを離れた。そして、街道の松並木が立ち覆さつて居る茶の間の窓際へ來て又外を眺めて居た。ひぐらし蟬の朝の蟬が乾いた土へ滲み入るやうに、ヂヤユと耳の底に細く響き出した。

何う云ふものか、その日一日のかつみのはしやぎやうと云つたら無つた。故と行儀の惡るい姿をして皆をいやがらせたり、妙に氣むづかしい事を云つて兄の昴をいぢめたりした。

それに少し腸の工合を損じたと見えて、二度ばかり着物を汚したりした。

「何うしたんでせう、全く妙だわ。」と今泉の妻は不審さうにそれを眺めて居た。

「何有、小兒にはそんな日も偶にやあるもんだ。」

今泉は斯う云つて笑つて見て居た。それでも家へ歸りたいと云ふのではない。唯々、人の世話を掛けたいばかりに跳ね廻はるとしか思はれないほど、家中を無闇に飛び廻つて居る。

晩に、酒の時。かつみは何んと思つたか、傍にあつた蠅叩きを取つて、力まかせに今泉の頭を後から

撲つた。

「馬鹿！」

斯う云つて叫んで遁げた。そして、ひつくり返るほど笑つた。その笑ひ方が妙に神經的で、十やそこらの小兒が可笑しさうに笑ふ笑ひ方とは見えなかつた。

今泉は不審さうに、その小兒の行體を眺めて居た。

次の日、東京の母親からかつみへ宛てて小包が來た。中には大きな芝口の金ツバとお人形さんのゴム製の自轉車乘りとが入つて居た。他に今泉への酒の肴として、壜詰のうにや到來ものと見える唐墨とか入つて居た。

「そら、御約束のお人形さん。」

斯う云つて今泉の妻に出して見せられた時、かつみは妙に虚しいやうな沈んだ目付きてそれを受取つた。

その日は一日海で遊んだ。今泉の妻はかつみを喜ばせたいばかりに、小娘のやうにはしやぎ廻つて、隨分道化けた眞似もして見せた。

かつみは初めの間こそ、それを見て面白さうにキヤツ／＼笑つて居たが、煩さく撫で廻はす撫愛と愛撫につかれ果てゝ、終にはその傍に居るのさへ煩さゝうに見えた。

自分だけ密つとそこを離れて廢船の砂地に立つて山の方を眺めて居た。

暑かつた日は箱根連山の頂きに沈んで、山の色は樣々の凝つた色に染められて居た。そして、淺い雨がシト／＼降つてゞも居さうに思はれる山の間から、白い煙が雲にもまぎれず立ちのぼつた。かつみは何故かしら、遠い、遠いと云ふ感が深かく胸に彫り付けられて、その腫ぼツたい目から涙がはふり落ちるやうに思はれた。

「かつみさん、何うしたの。」と斯う云はれて、何氣なくニッコリしたが、それは自分でも氣の付く苦しい笑ひ方であつた。

陸の風は松並木を鳴らしてサラ／＼と鳴つた。海は靜かにその波音をゆだやめて、今日一日の疲れなき眠りに急いで居た。

茅屋根のまばらにつゞいた一本路の漁村は高い松の木の間に靜かに暮れて、さびれて行くのであつた。

（完）

本號に發表する筈であつた**田山花袋氏**の創作は同氏に止み難い差支が有つた爲、更に六月號に於て**約百枚の長篇**を寄せらるべく、同じく永井荷風氏からは特に書翰があつて延期を申込まれた。從つて來る五月號には

正宗白鳥氏

中村星湖氏

の二氏が執筆される事になつた。

◎本號に限り特價金四拾錢郵稅金參錢五厘

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　京橋元數寄屋町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋西紺屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

◎壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢

以上郵稅共

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年三月廿九日印刷納本
明治四十四年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

紳士の胸には時計飾られ
淑女の指には指輪光れり

紳士といふ紳士に懷中時計を用ゐ給はぬはなく、淑女といふ淑女に寶石入指輪を嵌め給はぬ方ぞなし。

時計と指輪と何處より御求め遊ばさるべきや。

三越は最も信用を重んじ、嶄新なる時計と流行せる指輪、ブローチ、ピン、金盃銀盃其他の貴金屬類を最も廉價に販賣す。

信用ある三越より信用ある品々御求め下されたし。

時計及指輪御注文案内は御一報次第進呈

東京駿河町

三越吳服店

（振替貯金口座東京三〇〇番）